

山屋敷平遺跡 上平遺跡

－上名久井地区畑地帯総合整備事業に伴う遺跡発掘調査報告－

2008年3月

青森県教育委員会



南区全景



第7号豎穴住居跡



十和田a火山灰検出状況（第2号豎穴住居跡）



第1号豎穴住居跡



カマド検出状況（第1号豎穴住居跡）

山屋敷平遺跡



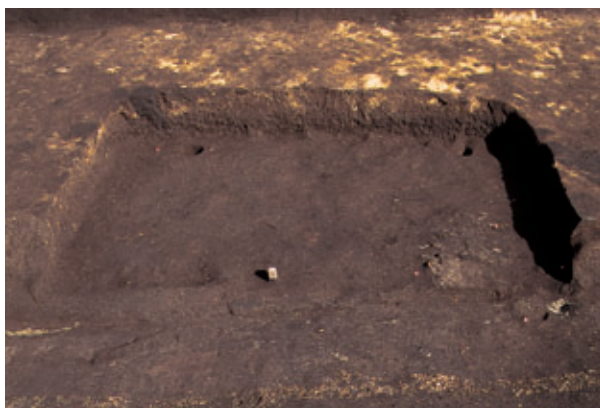
調査区全景



基本層序



第1号粘土埋納遺構内土層断面



第1号竖穴住居跡



第2号粘土埋納遺構内土層断面

上平遺跡

序

青森県埋蔵文化財調査センターでは、平成18年度に上名久井地区畑地帯総合整備事業予定地内に所在する南部町山屋敷平遺跡と上平遺跡の発掘調査を実施しました。

両遺跡は、岩手県境に近い名久井岳の北東山麓にあります。山屋敷平遺跡は、縄文時代早期と古代の集落跡で、調査の結果、縄文時代と奈良時代の竪穴住居跡などが検出されました。上平遺跡は、縄文時代と古代の集落跡で、調査の結果、縄文時代後期を主体とした遺物や平安時代の竪穴住居跡などが検出されました。これらは、今後の集落遺跡研究等において、貴重な資料となり得るものです。

本報告書は、平成18年度山屋敷平・上平遺跡発掘調査事業の調査成果をまとめたものですが、この成果が広く文化財の保護と研究に活用され、地域社会の歴史・文化への普及活動に資することを期待します。

最後になりましたが、発掘調査の実施と報告書作成にあたり御指導御協力を賜りました関係各位に対し、厚く感謝申し上げます。

平成20年3月

青森県埋蔵文化財調査センター

所長 末永五郎

例 言

- 1 本報告書は、青森県埋蔵文化財調査センターが平成18年度に実施した上名久井地区畑地帯総合整備事業に伴う南部町山屋敷平遺跡と上平遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 山屋敷平遺跡は、青森県三戸郡南部町大字高瀬字山屋敷平23-1外、上平遺跡は、三戸郡南部町大字平字上平50-1外に所在する。
- 3 山屋敷平遺跡の青森県遺跡番号は61060、上平遺跡の青森県遺跡番号は61061である。
- 4 両遺跡の調査期間は、以下のとおりである。

発掘調査期間 平成18年8月22日～11月2日
整理作業期間 平成19年4月1日～平成20年3月31日
- 5 本報告書は、青森県埋蔵文化財調査センターが編集し、青森県教育委員会が作成した。執筆は、青森県埋蔵文化財調査センター 佐藤文化財保護主査、岡本文化財保護主事、大平文化財保護主査が担当した。第1・5章は佐藤が執筆し、これ以外は文末に執筆者名を記載した。依頼原稿については、文頭に記した。
- 6 発掘調査及び整理作業・報告書作成の経費は、調査を委託した青森県農林水産部農村整備課が負担した。
- 7 本報告書に掲載した地形図（遺跡位置図）は、旧 名川町（現 南部町）発行の25,000分の1地形図「管内図」を複写・加工したものである。青森県全図は、国土地理院発行数値地図50mメッシュのデータに基づき「カシミール3D ver. 8.6で作成したものである。
- 8 資料の分析、鑑定については、下記の方に委託した。（敬称略）

石器の石質鑑定	八戸中央高校教諭	佐々木辰雄
火山灰分析	国立大学法人 弘前大学 理工学部教授	柴 正敏
土師器の胎土分析	山梨考古学研究所	河西 学
放射性炭素年代測定	株式会社 加速器分析研究所	
炭化木材樹種同定	株式会社 パリノ・サーヴェイ	
- 9 遺構・遺物の表現は原則として次の基準・様式に拠った。なお主たる遺物の分類及び凡例についての詳細は、第1章第5節に記載してある。
 - (1) 挿図の縮尺は、図ごとにスケールを付した。遺構は、1/30・1/60、遺物は、剥片石器・土製品・石製品1/2、土器・土師器・須恵器1/3、礫石器1/3・1/4を基本としている。
 - (2) 公共座標は世界測地系に基づき、図中の方位は座標北を表す。
 - (3) 堆積土の色及び土器の色については『新版標準土色帳』（小山正忠・竹原秀雄 1993）を用いた。堆積土中の混入物の大きさについては適宜形状と大きさを記した。混入物の状態については、主たる次のものを記載している。「斑状」斑点状。「濃集」極度に集中する。
 - (4) 竪穴住居跡の主軸方向は、住居跡の中心と炉を結んだ住居跡の長軸の方向とし、北からどれくらい傾いているかを示す。表記例) N-115°-E：北から東に115度の位置
 - (5) 竪穴住居跡の床面積は、残存する床部分の壁溝を除いて計測した値である。
 - (6) ピット番号は、調査時の番号をそのまま用いている。ピットの深さは、床面から計測した。

(7) 本稿で使用した遺構の略号は、S I = 竪穴住居跡・竪穴建物跡、S K = 土坑、S N = 焼土遺構、S R = 土器埋設遺構である。

(8) 遺物番号は、図版ごとに通し番号を付した(図版番号-遺物番号)。本文中・観察表・写真図版もこれに対応している。

10 写真図版の遺物写真の縮尺は、石器25-1 1/4、土器・石器1/3、土製品・石製品・鉄関連遺物・古銭1/2である。

11 引用・参考文献は巻末にまとめて示した。

12 発掘調査及び報告書作成における出土品・実測図・写真等は、現在、青森県埋蔵文化財調査センターで保管している。

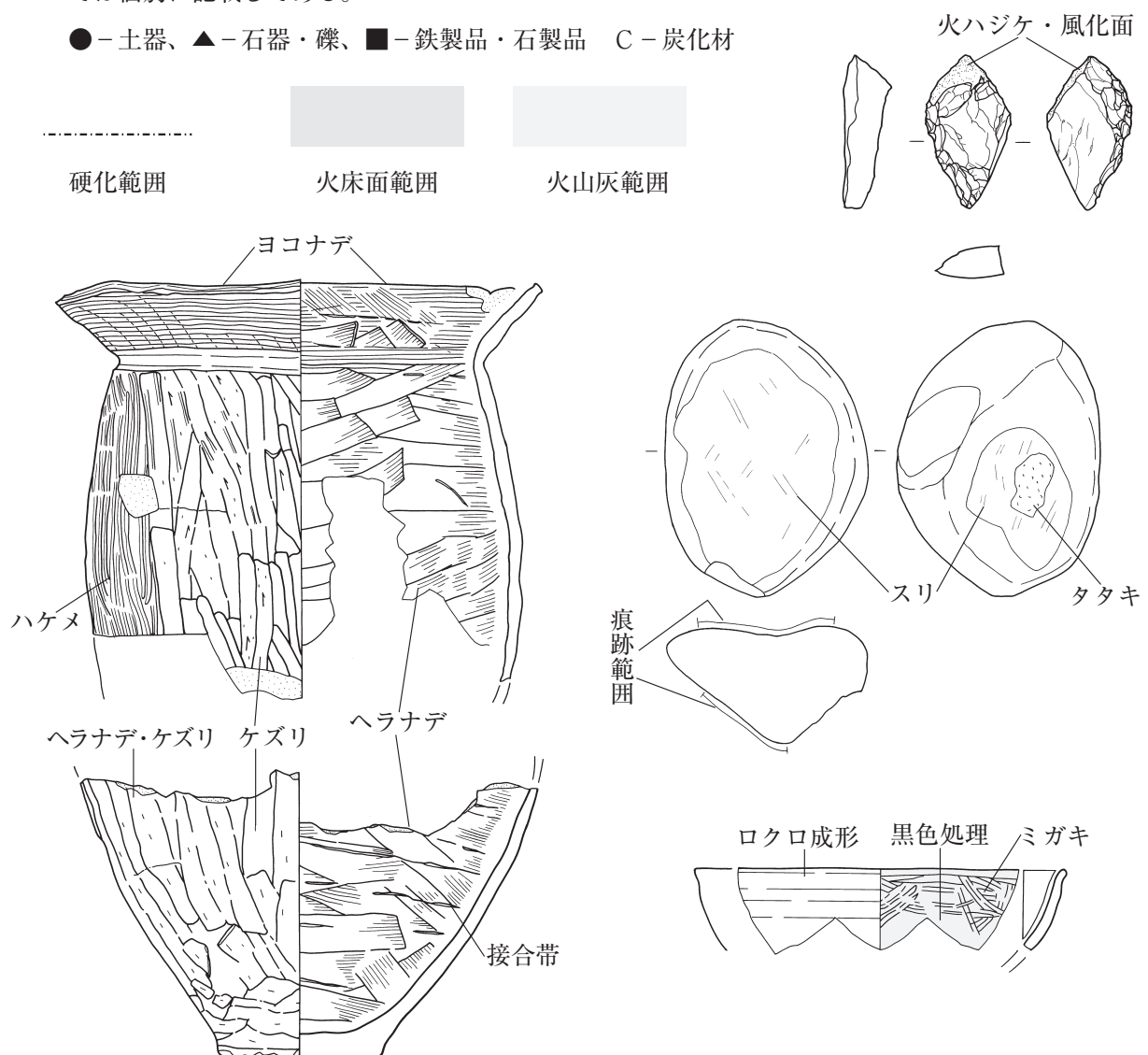
13 発掘調査の実施及び報告書作成にあたり、下記の方々から御協力・御指導を頂いた。

春日信興、永井 治、水無勝人、野田尚志、中村貞雄、高森正博、東 牧人

14 観察表中の矢印(→)は旧→新を表す。

15 図中で用いたスクリーン・記号・実測図の表現方法は以下のとおりである。これ以外については個別に記載してある。

●-土器、▲-石器・礫、■-鉄製品・石製品 C-炭化材

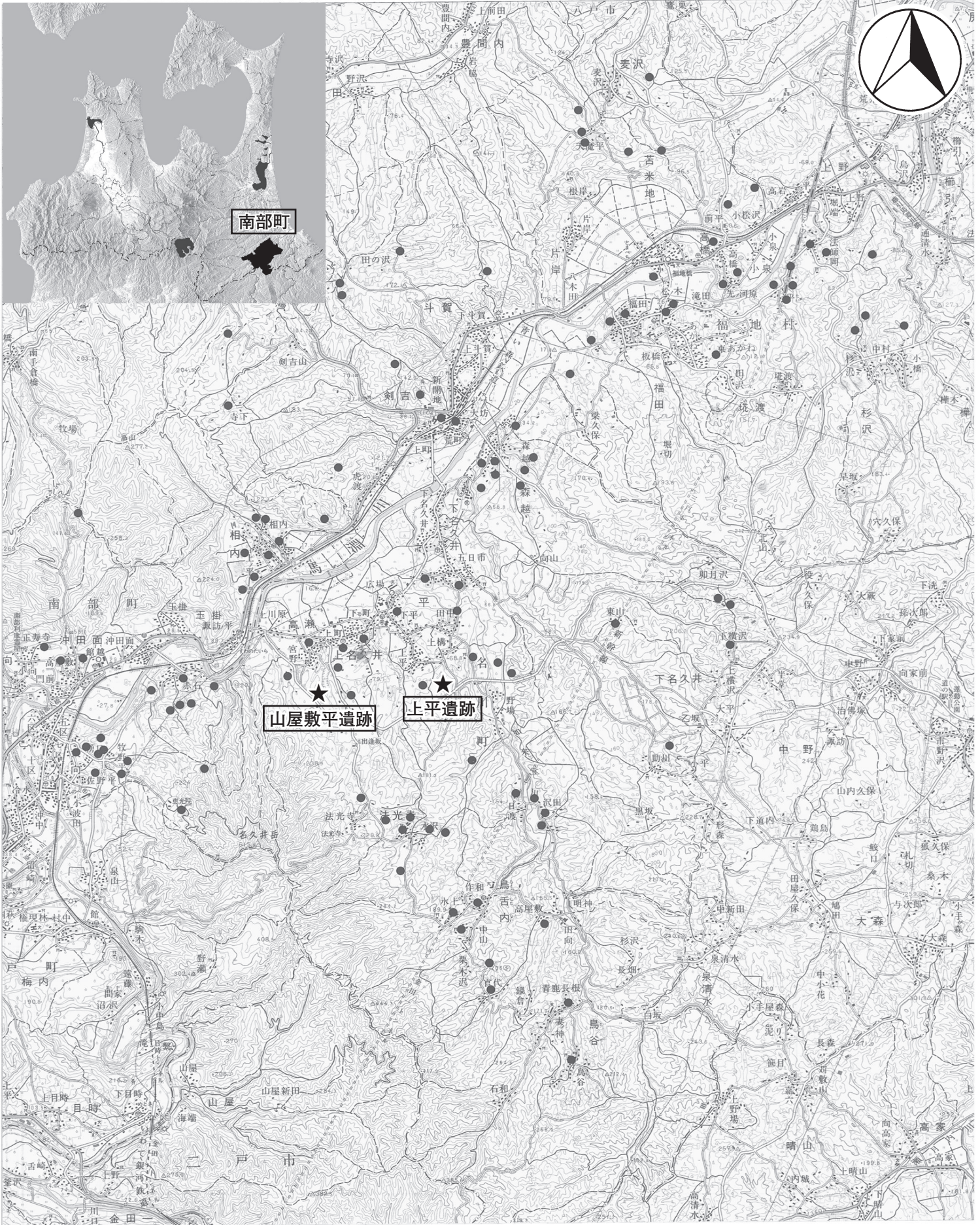


目 次

序	
例言	
目次	
図版・写真目次	
第1章 調査概要	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査要項	1
第3節 発掘作業・整理作業の経過	2
第4節 遺跡周辺の地形と地質	4
第5節 遺物の分類	6
第2章 山屋敷平遺跡の遺構と出土遺物	7
第1節 基本層序	7
第2節 調査方法	8
第3節 検出遺構と出土遺物	12
1 竪穴住居跡・竪穴建物跡	12
2 土坑	34
3 遺構外出土遺物	35
第3章 上平遺跡の遺構と出土遺物	38
第1節 基本層序	38
第2節 調査方法	39
第3節 検出遺構と出土遺物	43
1 竪穴住居跡	43
2 粘土埋納遺構	46
3 焼土遺構	48
第4節 遺構外出土遺物	49
1 縄文時代・弥生時代の遺物	49
2 古代以降の遺物	58
第4章 理化学的分析	65
第1節 放射性炭素年代測定	65
第2節 山屋敷平・上平遺跡出土の火山灰について	70
第3節 山屋敷平遺跡・上平遺跡から出土した炭化材の樹種	71
第4節 南部町山屋敷平遺跡出土土師器の胎土分析	77
第5章 総括	85
引用・参考文献	91
遺物観察表	92
写真図版	101
報告書抄録	122

図版・写真目次

図1	遺跡位置	
図2	周辺の地形面分類	5
図3	山屋敷平遺跡の基本層序	7
図4	山屋敷平遺跡の調査区域	9
図5	山屋敷平遺跡の遺構配置(全体・北区)	10
図6	山屋敷平遺跡の遺構配置(南区)	11
図7	第7号竪穴住居跡	13
図8	第7号竪穴住居跡出土遺物	14
図9	第1号竪穴住居跡(1)	16
図10	第1号竪穴住居跡(2)	17
図11	第1号竪穴住居跡出土遺物(1)	18
図12	第1号竪穴住居跡出土遺物(2)	19
図13	第2号竪穴住居跡(1)	21
図14	第2号竪穴住居跡・出土遺物(2)	22
図15	第3号竪穴住居跡(1)	24
図16	第3号竪穴住居跡・出土遺物(2)	25
図17	第4号竪穴住居跡(1)	26
図18	第4号竪穴住居跡(2)	27
図19	第4号竪穴住居跡出土遺物	28
図20	第5号竪穴住居跡(1)	30
図21	第5号竪穴住居跡・出土遺物(2)	31
図22	第6号竪穴建物跡・出土遺物	33
図23	土坑	34
図24	遺構外出土遺物(1)	36
図25	遺構外出土遺物(2)	37
図26	上平遺跡の基本層序	38
図27	上平遺跡の周辺地形	40
図28	上平遺跡の調査区域	41
図29	上平遺跡の遺構配置	42
図30	第1号竪穴住居跡	44
図31	第1号竪穴住居跡出土遺物	45
図32	第1・2号粘土埋納遺構・第1号焼土遺構	47
図33	第1号粘土埋納遺構出土遺物	48
図34	遺構外出土土器(1)	52
図35	遺構外出土土器(2)	53
図36	遺構外出土土器(3)	54
図37	遺構外出土土器(4)	55
図38	遺構外出土土器(5)	56
図39	遺構外出土土器(6)・土製品	57
図40	遺構外出土石器(1)	59
図41	遺構外出土石器(2)	60
図42	遺構外出土石器(3)	61
図43	遺構外出土土師器(1)	63
図44	遺構外出土土師器(2)・須恵器・鉄関連遺物・古銭	64
図45	放射性炭素年代測定グラフ	69
図46	山屋敷平遺跡の炭化材(1)	74
図47	山屋敷平遺跡の炭化材(2)	75
図48	上平遺跡の炭化材	76
図49	土器実測図	78
図50	土器薄片の顕微鏡写真	84
図51	山屋敷平遺跡出土土師器	86
図52	小札の名称と各遺跡から出土した小札	88
山屋敷平		
写真1	調査区・基本層序	101
写真2	第7号竪穴住居跡	102
写真3	第1号竪穴住居跡(1)	103
写真4	第1号竪穴住居跡(2)・第2号竪穴住居跡(1)	104
写真5	第2号竪穴住居跡(2)	105
写真6	第3号竪穴住居跡	106
写真7	第4号竪穴住居跡	107
写真8	第5号竪穴住居跡	108
写真9	第6号竪穴建物跡・土坑	109
写真10	第7・1号竪穴住居跡出土遺物(1)	110
写真11	第1号竪穴住居跡出土遺物(2)	111
写真12	第2～5号竪穴住居跡、第6号竪穴建物跡出土遺物	112
写真13	遺構外出土遺物	113
上平遺跡		
写真14	調査区・基本層序・作業風景	114
写真15	第1号竪穴住居跡	115
写真16	粘土埋納遺構・焼土遺構・遺物出土状況	116
写真17	第1号竪穴住居跡・第1号粘土埋納遺構出土遺物	117
写真18	遺構外出土土器(1)	118
写真19	遺構外出土土器(2)	119
写真20	遺構外出土土器(3)、遺構外出土製品・石器	120
写真21	遺構外出土土師器・須恵器・鉄関連遺物・古銭	121



国土地理院発行 1:50000 三戸から転載(平成17年2月1日発行)

0 S=1/75,000 4km

図1 遺跡位置

第1章 調査概要

第1節 調査に至る経過

青森県農林水産部農村整備課の上名久井地区畑地帯総合整備事業予定地内に所在する埋蔵文化財の取扱いについては、平成16年度から当該事業を担当する三戸地方農林水産事務所水利防災課（現三戸地域県民局地域農林水産部水利防災課）と青森県教育庁文化財保護課が協議を開始し、同年度から文化財保護課が青森県遺跡詳細分布調査事業の中で遺跡範囲確認調査を進めた。確認調査の結果、本発掘調査の範囲が確定した遺跡については、青森県埋蔵文化財調査センターが順次発掘調査を実施することになり、平成17年度に農道第10号建設に係る館向遺跡の調査を行い、平成18年度には農道第5号建設に係る大久保平遺跡の調査を開始した。ところが、大久保平遺跡の用地買収や立木の移植等が予定通り進まず、調査対象区域の一部約1,500㎡の発掘調査が平成19年度以降へ先送りされることになった。このため、平成18年7～8月に文化財保護課が農道12号建設予定地の山屋敷平遺跡と農道16号建設予定地の上平遺跡の確認調査を実施し、その結果を踏まえて同年8～10月に埋蔵文化財調査センターが山屋敷平・上平遺跡の発掘調査を行うことになった。

第2節 調査要項

1 調査目的

上名久井地区畑地帯総合整備事業の実施に先立ち、当該地区に所在する山屋敷平遺跡及び上平遺跡の発掘調査を行い、その記録を保存して、地域社会の文化財の活用に資する。

2 発掘調査期間 平成18年8月22日から同年11月2日まで

3 遺跡名及び所在地 山屋敷平遺跡(青森県遺跡番号61060)

三戸郡南部町大字高瀬字山屋敷平23-1外

上平遺跡(青森県遺跡番号61061)

三戸郡南部町大字平字上平50-1外

4 調査予定面積 900㎡ (山屋敷平遺跡)

1,300㎡ (上平遺跡)

5 調査委託者 青森県農林水産部農村整備課

6 調査受託者 青森県教育委員会

7 調査担当機関 青森県埋蔵文化財調査センター

8 調査体制

調査指導員 市川 金丸 元青森県考古学会会長(考古学)

調査員 松山 力 八戸市文化財審議委員(地質学)

調査担当者 青森県埋蔵文化財調査センター

所長 白鳥 隆昭(現 青森県立郷土館館長)

次長	三浦 圭介（平成19年3月退職）
総務GL	櫻庭 孝雄
調査第二GL	工藤 大
文化財保護主査	坂本 真弓
文化財保護主事	岡本 洋
調査補助員	關 尊文（平成19年3月退職）・西本 結美 山脇 健一（平成18年12月退職）・前田 沙樹

第3節 発掘作業・整理作業の経過

発掘作業

平成18年度の当該事業に係わる発掘調査は、農道5号建設に伴う大久保平遺跡発掘調査を行う計画であった。4月25日から6月9日まで発掘調査を行った後、一旦調査を終了し、8月中旬から10月下旬まで再び発掘調査を行う予定であった。これは、6月と7月はさくらんぼの収穫時期と重なり、地権者等や周辺地権者が頻繁に現農道を使用するための措置である。

しかし、当初調査予定面積の2,500㎡のうち、約1,500㎡は土地買収が進展しておらず、発掘調査を行えない状況であった。

このため、7月上旬に事業者側と協議を行い、8月中旬からの発掘調査を行う代替地として、整備事業に係わる山屋敷平遺跡（農道12号）や上平遺跡（農道16号）の発掘調査を先行して行う案が浮上した。これに伴い、両遺跡の確認調査が行われることとなった。

7月27日から8月3日にかけて、青森県文化財保護課による確認調査が行われ、山屋敷平遺跡（農道12号）の調査対象面積2,400㎡のうち、900㎡が本発掘調査が必要とされた。また、上平遺跡（農道16号）の調査対象面積3,600㎡のうち、最低1,300㎡の本発掘調査が必要とされた。上平遺跡については、時間がなかったため全体の確認調査には至らなかった。しかし、本発掘調査を行うことには変わりないため、これを行いながら確認調査を並行して行い、最終的な発掘調査面積を算出することになった。

これを踏まえて、8月9日に現地で事業者側と協議した結果、8月22日から山屋敷平遺跡（農道12号）の本発掘調査を行い、山屋敷平遺跡の発掘調査をすべて終了してから、大久保平遺跡の発掘調査を開始することにした。

8月22日には山屋敷平遺跡の発掘調査を開始し、南側調査区から竪穴住居跡を数軒確認した。調査は農道の右側と左側をわけて行うため、とくに竪穴住居跡など規模の大きい遺構は二回にわけて精査を行うことになった。

北側調査区では、現道部分の調査は必要なかったが、一部、農道を迂回させて調査を行った。調査区にかかってさくらんぼの上からビニールをかける小屋の骨組みが残存していたが、とくに調査に支障はなかった。また農薬を埋めた痕が見つかり、刺激臭がしたため作業員に作業を中断させて、重機で掘削した部分もあった。

9月6日には南側調査区全体の写真撮影を行った。撮影を行った左側の遺構検出状況が良かったため、高所作業車を使用した全体撮影は1回限りとした。この後、撮影を行った左側を埋め戻し、農道

として車両が通行できるように整地した後、右側の調査を行った。S I 1・2・4・5、S K 1などほとんどの遺構が右側に延伸していた。

9月13日からは、作業員数名で、7月末の確認調査で中途になっていた上平遺跡の確認調査を開始した。

9月15日に事業者側から、今年度中に大久保平遺跡の発掘調査を再開する見通しがたたないため、残りの調査期間を上平遺跡の本発掘調査に充てて欲しい旨の依頼があった。このため10月から上平遺跡の本発掘調査が開始できるよう準備を進めることになった。

9月29日には、上平遺跡近辺に、事務所および作業員休憩プレハブを移転した。しかし、上平遺跡の調査区まで徒歩で往復するには時間がかかるため、ワンボックスバンを2台借りて、職員2名で作業員・補助員を調査区付近まで送迎した。

10月3日から発掘調査を開始し、第Ⅱ層中で遺物の分布を確認した。また、第Ⅲ層面で竪穴住居跡を確認した。また、先行して行った確認調査の結果、本発掘調査必要面積は、当初と変更なしの1,300㎡となった。

10月26日には、高所作業車を使用して、調査区全体の写真撮影を行った。

当初の発掘調査予定は10月27日までであったが、上平遺跡が10月から開始したこともあり、11月2日までの1週間、調査を延長し、上平遺跡の発掘調査を終了することになった。11月2日には、器材・遺物等を当センターに運搬し、すべての調査を終了した。

整理作業

遺構の整理は次の手順で行った。平成18年度の発掘調査では、遺構実測の大部分は光波トランシットを用いたトータルステーションによる測量で行った。ただし、細かい実測図は遣り方測量で作成したため、発掘調査終了後、室内でデジタルトレース作業を行って、当該年度内に多くの遺構図面をデジタル化した。遺構図の修正は、株式会社C u b i cの「遺構実測支援システム」を使用し行った。

遺物の整理は次の手順で行った。出土遺物の洗浄、乾燥、注記は平成18年度から行い、その作業は平成19年3月までに完了した。4月からは、出土別の数量・重量計測作業、注記の確認を行った上で、各遺構・各出土区単位で土器の接合作業を行った。ある程度、接合が進んだ遺物に関しては、さらにその周辺の土器との接合を行い、できる限り、復元ができるように努めた。5月からはこれらの遺物に石膏をいれ、形を整える作業を行った。6月には、報告書に掲載する土器を選別し、7月には拓本取りを行い、8月には土器の断面実測を行った。11月には、実測図の修正作業を行い、12月にはトレースを終了した。1月には図版作成を行い、2月14日に報告書の入札を行った。

このほか、7月には両遺跡から出土した炭化材の樹種同定を株式会社パリノ・サーヴェイに依頼した。8月には、火山灰分析や胎土分析を依頼した。

第4節 遺跡周辺の地形と地質

地形（図2）

本遺跡周辺の地形については、当センターから既刊（青森県埋文センター 2007）の佐々木辰雄氏による論述に詳しいため、ここではそれらを引用して概略を記す。

青森県南部地方の西には、南北に奥羽山脈が連なり、南の岩手県との県境には、北上山地の北端となる階上岳や名久井岳（標高615m）がそびえている。奥羽山脈の東側、そして北上山地の北にあたるこの地域には、三本木原台地が広がっている。奥羽山脈や北上山地に源を發して太平洋に注ぐ大小の河川により侵食を受け、これらの河川沿いには河岸段丘がみられる。

山屋敷平・上平遺跡は、馬淵川右岸沿いに發達するいくつかの河岸段丘面のひとつの面上にある。この段丘面の南西は急斜面に境される山地となり、北東側には比較的なだらかな丘陵地や台地が広がっている。この段丘面は、南西を名久井岳の南南東から北北西急斜面で遮られおり、南東の丘陵から馬淵川に沿って次第に高度を下げる段丘面のひとつである。河岸段丘は馬淵川の右岸にその連続的な發達がみられ、左岸では貧弱である。

この地域の段丘面は、水野、堀田（1996）により、次のように分類、対比されている。

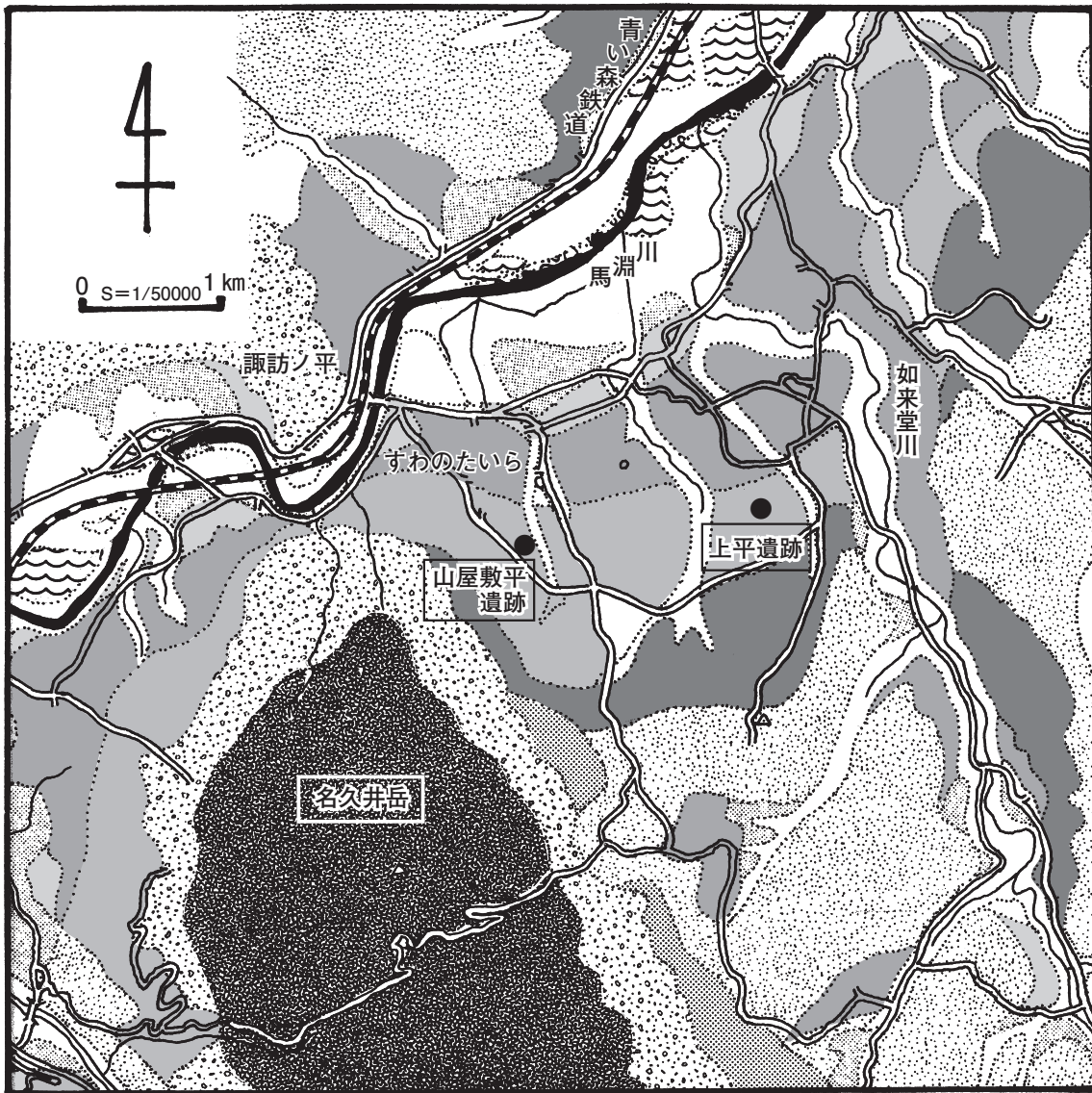
水野、堀田（1996）	宮内（1985）	松山（1983）
高位面（Ⅰ面）	GtⅠ _A	
	GtⅠ _B	
中位面（Ⅱ面）	GtⅡ _A	七百面
	GtⅡ _B	天狗岱面の白銀平面
	GtⅡ _C	天狗岱面の野場面
	GtⅡ _D	高館面
		高館面
	根城面	根城面
低位面（Ⅲ面）	GtⅢ	

山屋敷平・上平遺跡のある面は中位面の GtⅡ_B 面である。上平遺跡は上位面のとほぼ境界に位置する。この段丘面は、500m から1.5km の幅で、下流から連続して馬淵川の右岸に良く發達しているが、諏訪ノ平の狭窄部で一旦断ち切られるかたちになる。また、下位・上位の面とも比較的落差のある段丘涯で接し、標高は80m ～ 120m で緩やかである。

山屋敷平遺跡は、南西から北東に向かって形成された大小の沢と沢に囲まれた舌状台地に位置する。北側調査区は、平安時代の竪穴住居跡が舌状台地の側縁辺に並び、南側調査区は別な舌状台地の突端に立地する。これらの沢は遺跡の北側で大きく一つになり、馬淵川に注ぐ支流となる。

上平遺跡は図27のとおり、如来堂川に流れ込む谷筋の一つで、東から西に向かって流れる沢に沿ったの北側斜面に位置する。沢は調査区の最東部を起点とし、最西部付近で合流し北西方向に向かって流れる。

今回、両遺跡の發掘に伴う深掘では、八戸火山灰層の二次堆積層までを確認できた。



水野・堀田 (1996) を簡略化

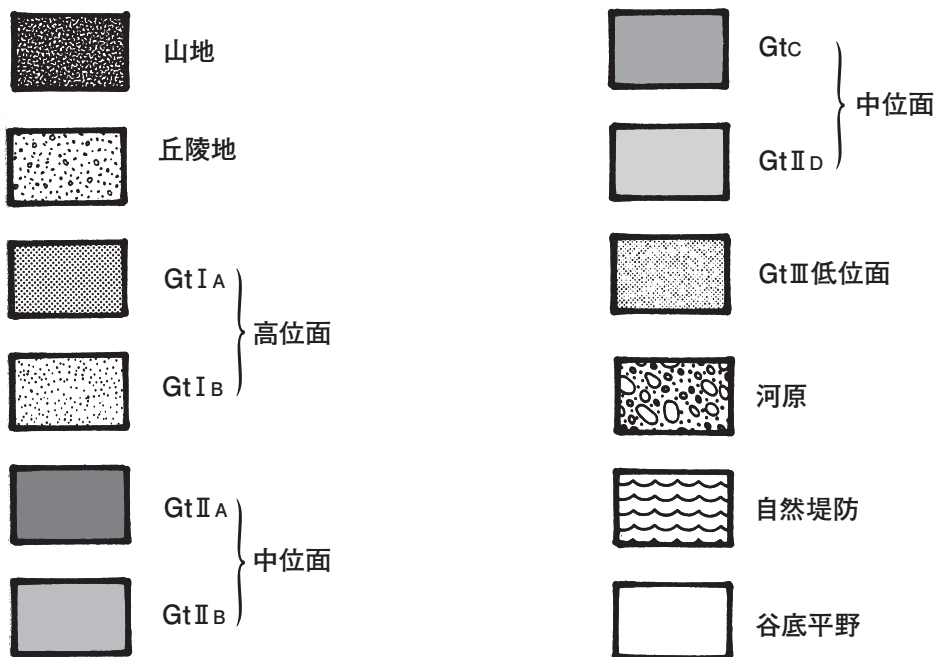


図2 周辺の地形面分類

第5節 遺物の分類

1 縄文時代・弥生時代

土器 以下の各時期に大別し、判別できるものは型式名や細別時期を記載した。

縄文時代

早期土器－物見台・鳥木沢式・赤御堂式等。器種は深鉢形等。

前期土器－円筒下層d1式、円筒下層式等。器種は深鉢形等。

中期土器－円筒上層式、榎林式、大木10式併行型式等。器種は深鉢形等。

後期土器－十腰内第Ⅰ群、十腰内第Ⅱ群等。器種は壺形、鉢形、深鉢形等。

晩期土器－大洞BC式、大洞C1式、大洞A式等。器種は壺形、鉢形、深鉢形等。

弥生時代

前期土器－馬場野Ⅱ式。器種は壺形。

石器

剥片石器

石匙、二次調整のある剥片、微小剥離痕のある剥片、剥片の4器種に大別している。

石匙－縦形、横形の2種類に分類される。

二次調整のある剥片（削器・搔器）－調整加工が施されているが、定形石器に該当しないもの。
定形石器の破損品を含む。

微小剥離痕のある剥片－剥片の縁辺に、調整加工以外の剥離が連続的にみられる剥片。

剥片－調整加工、微小剥離がなく、最大幅・厚が1cmより大きいもの。

礫石器

擦り石・敲击石・凹石の類、石皿・台石の類は、形態だけでは時代を判別できないので、砥石以外すべて縄文時代の礫石器として取り扱った。出土状態等から確実に古代の礫石器と判断できるものはなかった。

磨製石斧－転用品等も含める。

擦石類－擦り石・敲击石・くぼみ石の類。剥離痕のある礫等も含める。

石皿類－石皿・台石の類。

打ち欠きのある礫

土製品 キノコ形土製品

2 古代以降

土器

土師器－器種は坏、甗、甕等。甕は球胴甕・長胴甕がある。

須恵器－器種は大型甕。

礫石器 砥石

土製品・石製品 石製紡錘車 不明土製品

鉄関連遺物 小札 刀子－刃部 器種不明 鉄滓

古銭 寛永通宝

第2章 山屋敷平遺跡の遺構と出土遺物

第1節 基本層序

I層は黒褐色土（10YR2/3）の耕作土である。十和田b軽石をまばらに含む。

II層は黒色土（10YR1.7/1）で、十和田b軽石のほか、中振浮石粒・南部浮石粒1%を含む。

III層は暗褐色土（10YR3/4）で、上部は黒褐色土である。全体に中振浮石粒10～20%混入する。

IV層は黄橙色の中振浮石層（10YR8/6）で黒褐色土に黄橙色・白色の中振浮石が濃集する。

V層は黒色土（10YR2/1）で、下部は暗褐色色に漸移し、南部浮石粒の密度も大きくなる。

VI層は暗褐色土（10YR3/4）で、南部浮石粒が全体に5%混入する。

VII層は、黄褐色の南部浮石層（10YR5/6）で、径が5～50mmで黒褐色土が若干混入する。下部は白味が増す。

VIII層は、暗褐色土（10YR3/4）で、白色浮石が5%混入する。

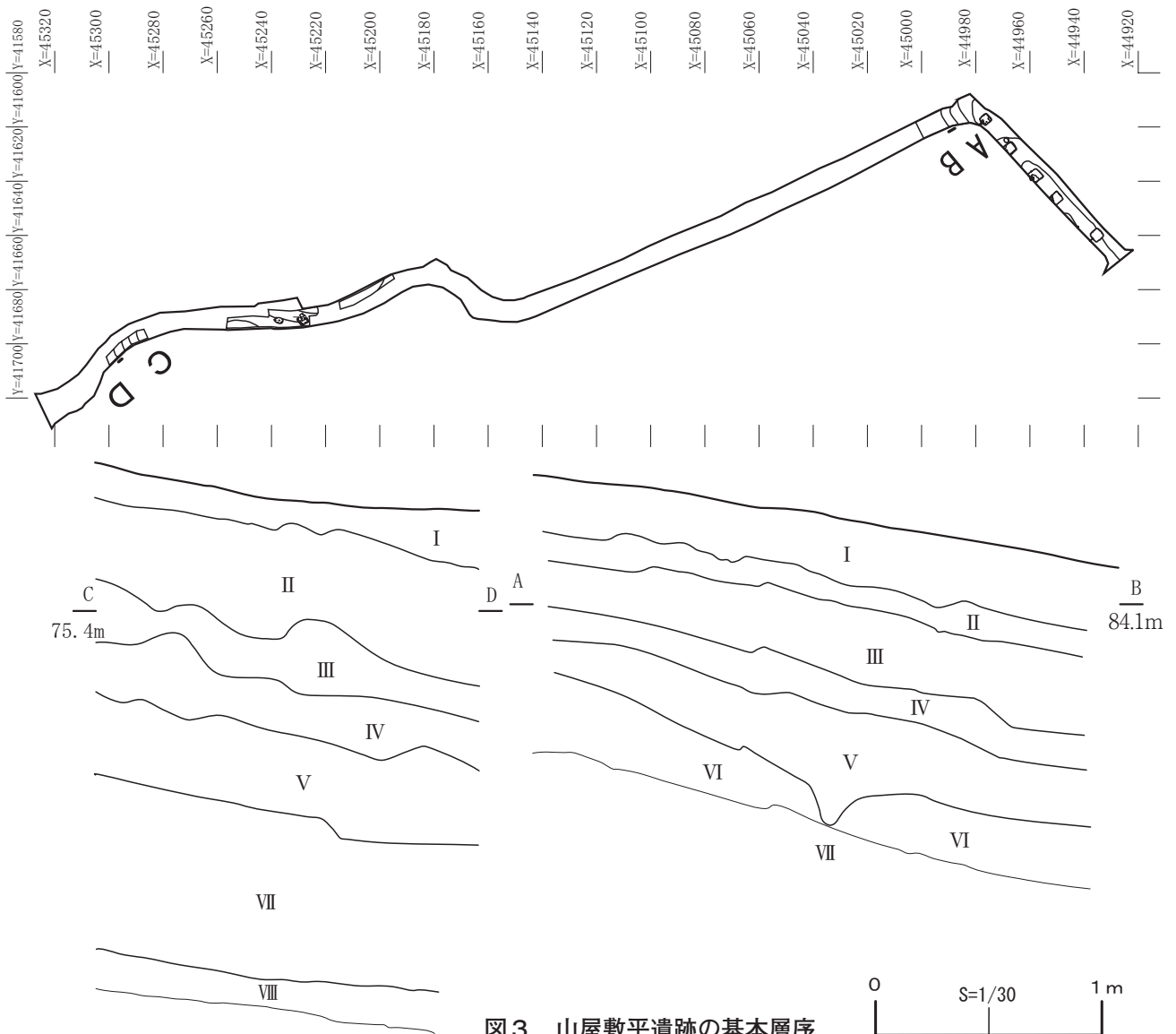


図3 山屋敷平遺跡の基本層序

第2節 調査方法

粗掘り作業は、砂利などを含む表土、盛土、排土移動、軽石層の除去などは重機で行った。これ以外の遺物散布が認められる範囲は人力による作業を行った。調査区は南側と北側に分かれており、それぞれ南側調査区、北側調査区と呼称した。グリッド設定については、調査区の範囲が細長く、ほぼ等高線に沿って農道がつくられているため道路の幅杭を基準に地形に沿った形で設定した。南側調査区は、No.0 + 3.30 L (X = 44,930・Y = 41,628) と No.2 L (X = 44,954・Y = 41,655) を直線で結んだ線を基準とし、南側のNo.0 + 3.30 L を「G - 1」とし北に向かって5 mごとに数字を増やす。調査区北端は「G - 15」となる。中央杭を挟んで西側をL、東側をRとした。グリッドの呼称としては「G - 1 (L)」のようになる。北側調査区のグリッド設定は、No.17 + 10 L (X = 45,228・Y = 41,606) と B C. 6 L (X = 45,240・Y = 41,606) を直線で結んだ線を基準とし、東側のNo.17 + 10 L を G B - 1 とし、西に向かって5 mごとに数字を増やす。(図5・6) また、当初設定した調査区が東側に伸びたために「G B - 1」を基準とし、東側を「G C - 1」とした。(図5・6)

調査区は、南北に延びる埋没谷に面した多くの舌状台地の一つに立地しており、その台地の縁辺で遺構が検出された。縄文時代の竪穴住居跡1軒、奈良時代の竪穴住居跡5軒、近世の竪穴建物跡1軒、土坑2基である。

工事用図面が世界測地系を元に作成されているため、世界測地系を基準にしている。標高は遺跡周辺にある測量基準点から、調査区内に移設した。

遺構確認は随時行い、調査区単位で、発見順に遺構名を付した。遺構名称は、遺構種別と番号を付した(例：S I 8 = 第8号竪穴住居跡)。

実測図の作成は、平面図は、株式会社アイシン精機「遺構実測支援システム」を用いてトータルステーションによる測量で行った。炬などの細かい平面図(おもに1/10)は簡易遣り方測量を行った。断面図は1/20で実測を行った。

遺構内・遺構外遺物ともグリッド・層位を明記して取り上げた。遺構内遺物は遺構堆積土の層位毎に、遺構外遺物は基本層序に依って取り上げている。この場合、遺構内遺物は遺構毎に1から番号を用い、遺構外遺物は1から通し番号を用いた。遺物は土器(P)・石器(S)・その他(C)と三種類に大別し、それぞれ1から番号を用いた。

調査に当たっては、土層の堆積状況を観察するため適宜セクションベルトを設定し、土層注記は『標準土色帖』を用いた。土層の名称は、基本層序については表土から下位にローマ数字を、遺構内堆積土については上位から下位に算用数字を付すことを原則とした。

写真撮影は適宜行うこととし、35mmカラーリバーサル、35mmモノクロームの各フィルムおよびデジタルカメラを使用した。必要に応じて6×7中判カメラを用いた。(佐藤)

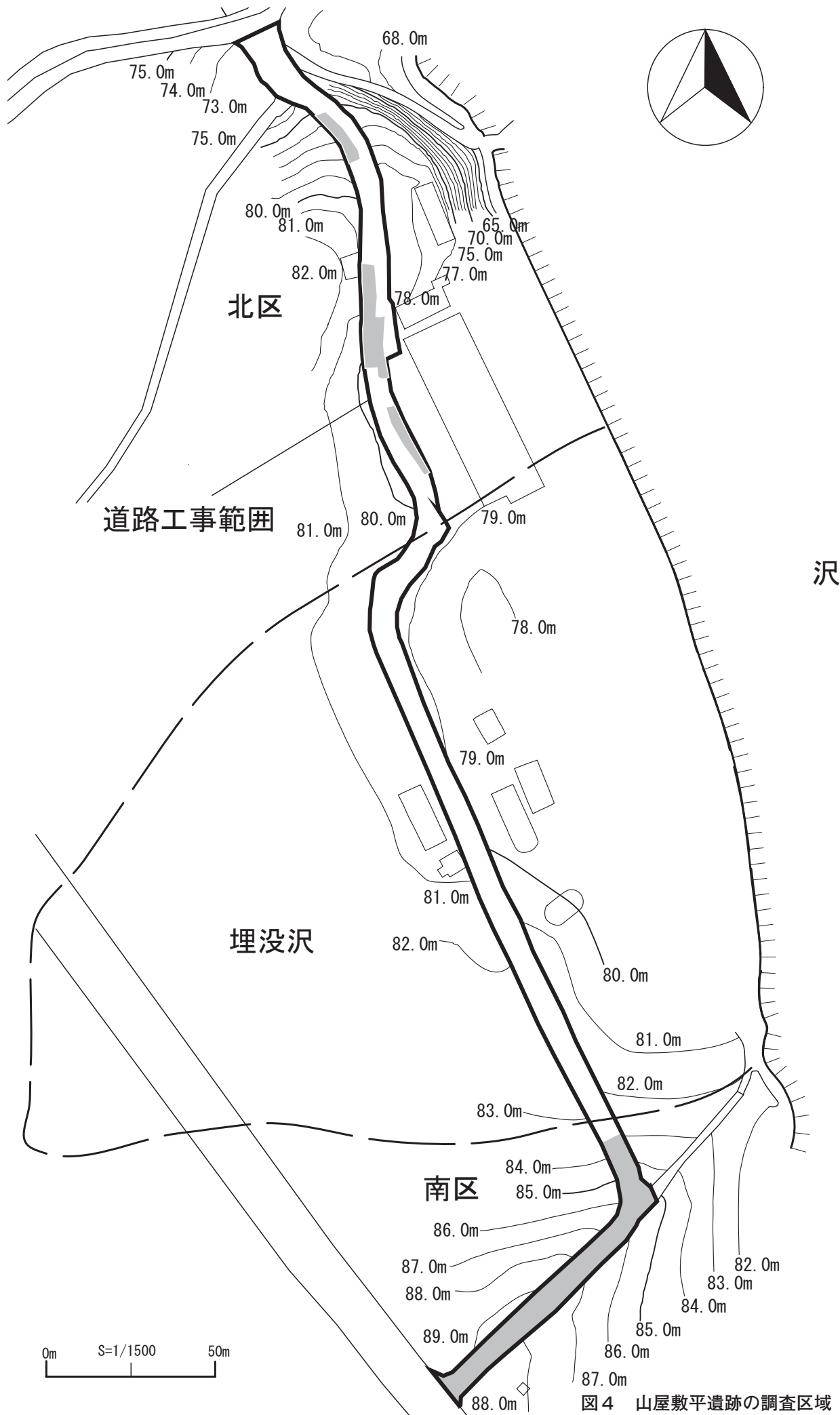


図4 山屋敷平遺跡の調査区域

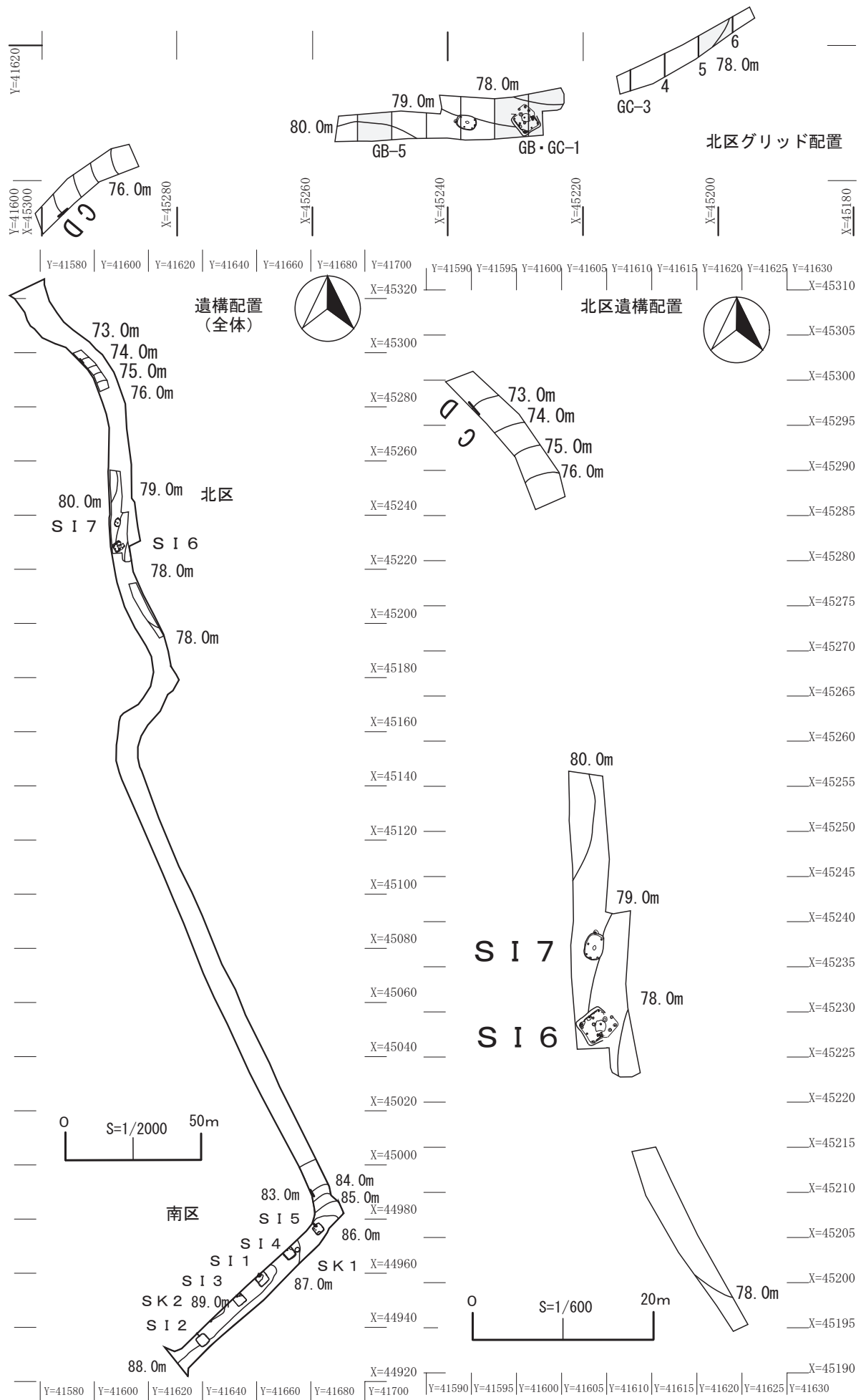


図5 山屋敷平遺跡の遺構配置 (全体・北区)

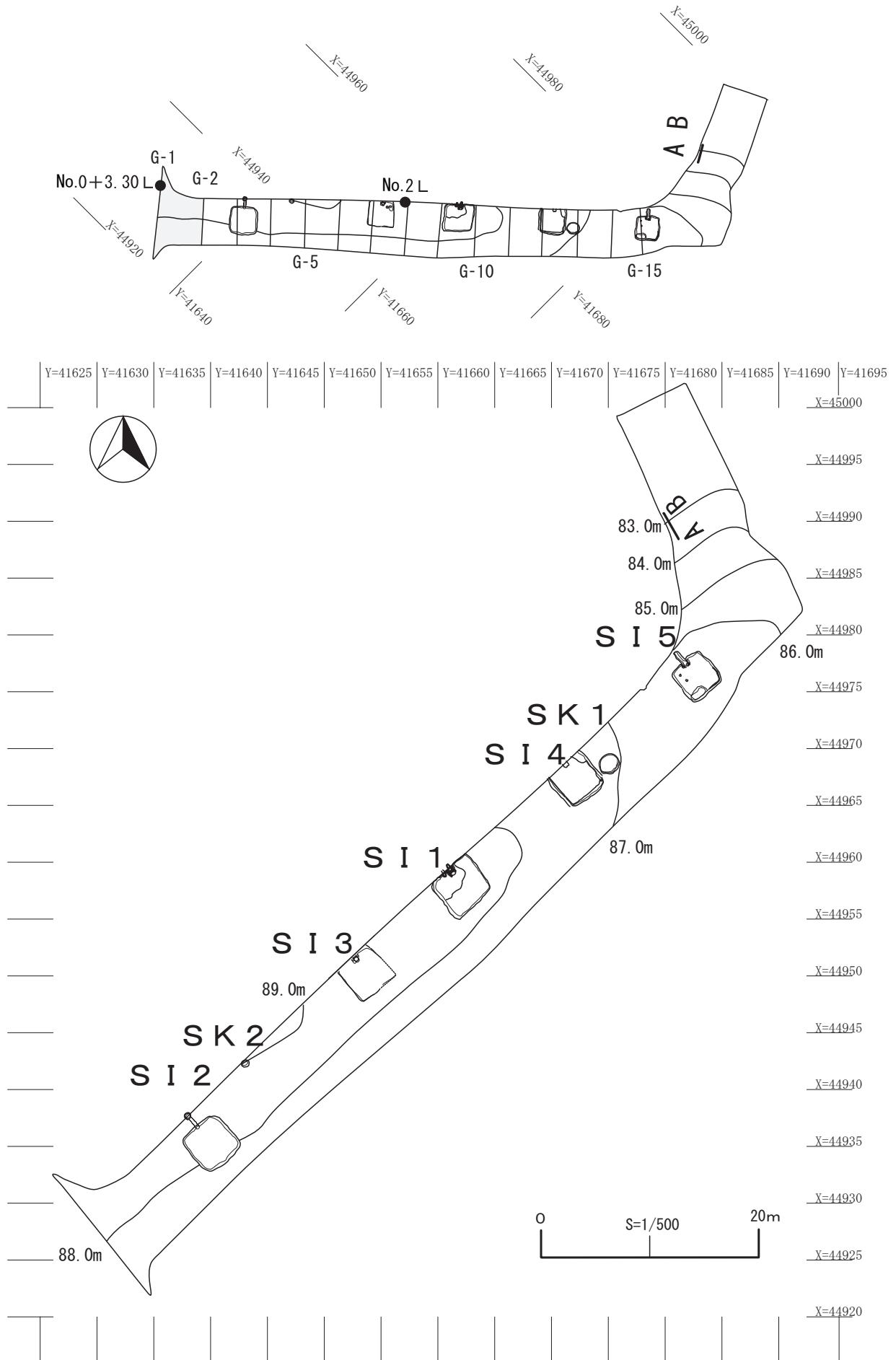


図6 山屋敷平遺跡の遺構配置 (南区)

第3節 検出遺構と出土遺物

1 竪穴住居跡（縄文時代）

第7号竪穴住居跡（SI-7、図7、遺物図8）

[位置・確認] 北側調査区のGB-2・3付近に位置し、標高79m前後の斜面地にかけて立地する。Ⅶ層上面で検出した。東側が不明瞭である。

[平面形・規模] 平面形は隅丸長方形と考えられる。主軸方向はN-76°-Eで、規模は長軸2.97m、短軸2.06m、残存する床面積は4.2㎡である。

[壁・床面] 壁の立ち上がりは緩やかで、西壁8cm、南壁10cm、北壁17cmである。床面はⅦ層面を床面とし、凹凸がみられるものの、全体的に堅緻である。住居跡東側では斜面と同様に若干東に傾斜している。貼床はみられない。

[柱穴] 床面でピット5個、北壁の壁に接して1個検出した。いずれもピット堆積土には、黒色土と南部浮石が混合しており、堆積土上部から底面まではほぼ同じ性質の土が堆積している。床面からのピットの深さは16～35cmである。ピットは概ね北壁側（ピット1・2）と南壁側（ピット3～5）に集中しており、これらが柱穴となる可能性が高い。ピット1の北側は掘り方の立ち上がりが緩やかであり、柱の抜き取りの可能性もある。ピットの深さは、Pit1:68cm、Pit2:34cm、Pit3:20cm、Pit4:28cm、Pit5:28cm、Pit6:28cmである。

[炉] 住居跡中央で地床炉が検出された。平面形は楕円形で、規模は長軸53cm、短軸35cm、深さ3～5cmである。焼土範囲や炭化物などは検出されなかったが、この範囲がとくに堅緻であったこと、やや窪んで検出されたこと、位置関係から地床炉であったと判断した。

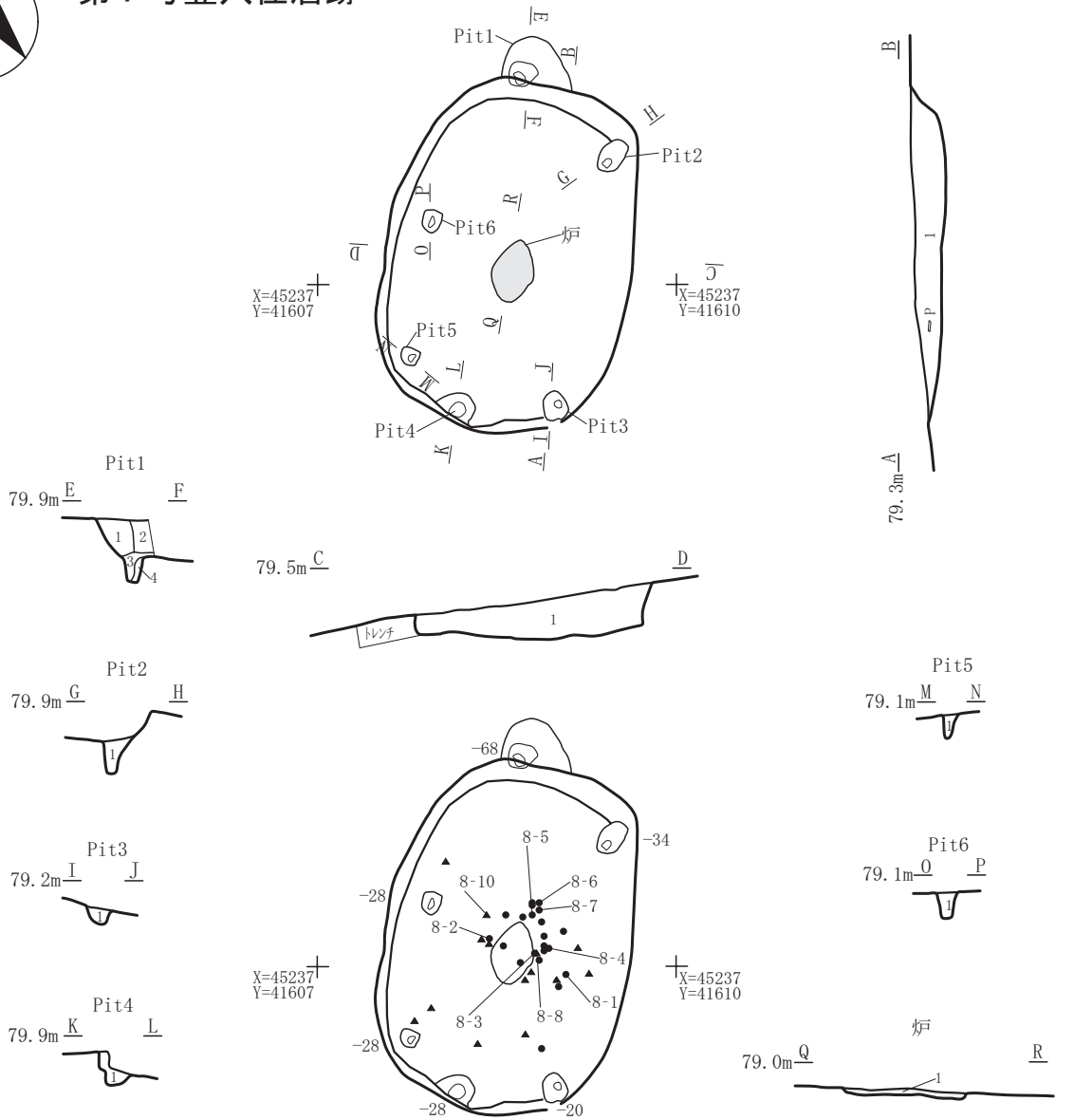
[堆積土] 黒色土と南部浮石が混合した単層の堆積土である。いずれの壁際でもとくに南部浮石が流れ込んだような堆積状況がみられなかったため、廃絶後の堆積に要した時間は比較的短時間であったと考えられる。

[出土遺物] 縄文土器が遺構全体で66点、430.9g出土した。すべて破片資料で、堆積土1層から出土した。表裏縄文が多く、焼成が軟質である。口縁部は2点出土し（8-1・2）、別個体と考えられる。8-2は横位回転施文と平行に縄端押圧させている。縄文原体は0段多条の単節で、表裏とも同様である。8-7の底部付近はやや厚手で丸みを帯びる。このほか剥片類では、1層中から総数14点、23.3g出土した。内訳は石匙1点、微小剥離痕のある剥片1点、剥片12点が出土した。頁岩22.0g、石英安山岩1.3gである。この内、石匙と微小剥離痕のある剥片の各1点を図示した。8は縦長石匙で、表面が全面加工、裏面が摘み部と一側縁に押圧剥離が加えられている。側面には使用痕跡がみられる。9は、縦長剥片の一側縁に使用による微小剥離痕がみられる。礫石器は、堆積土中からの擦石類1点が出土した。

[時期] 堆積土出土遺物から、縄文時代早期後葉の赤御堂式期と考えられる。 (佐藤)



第7号竖穴住居跡

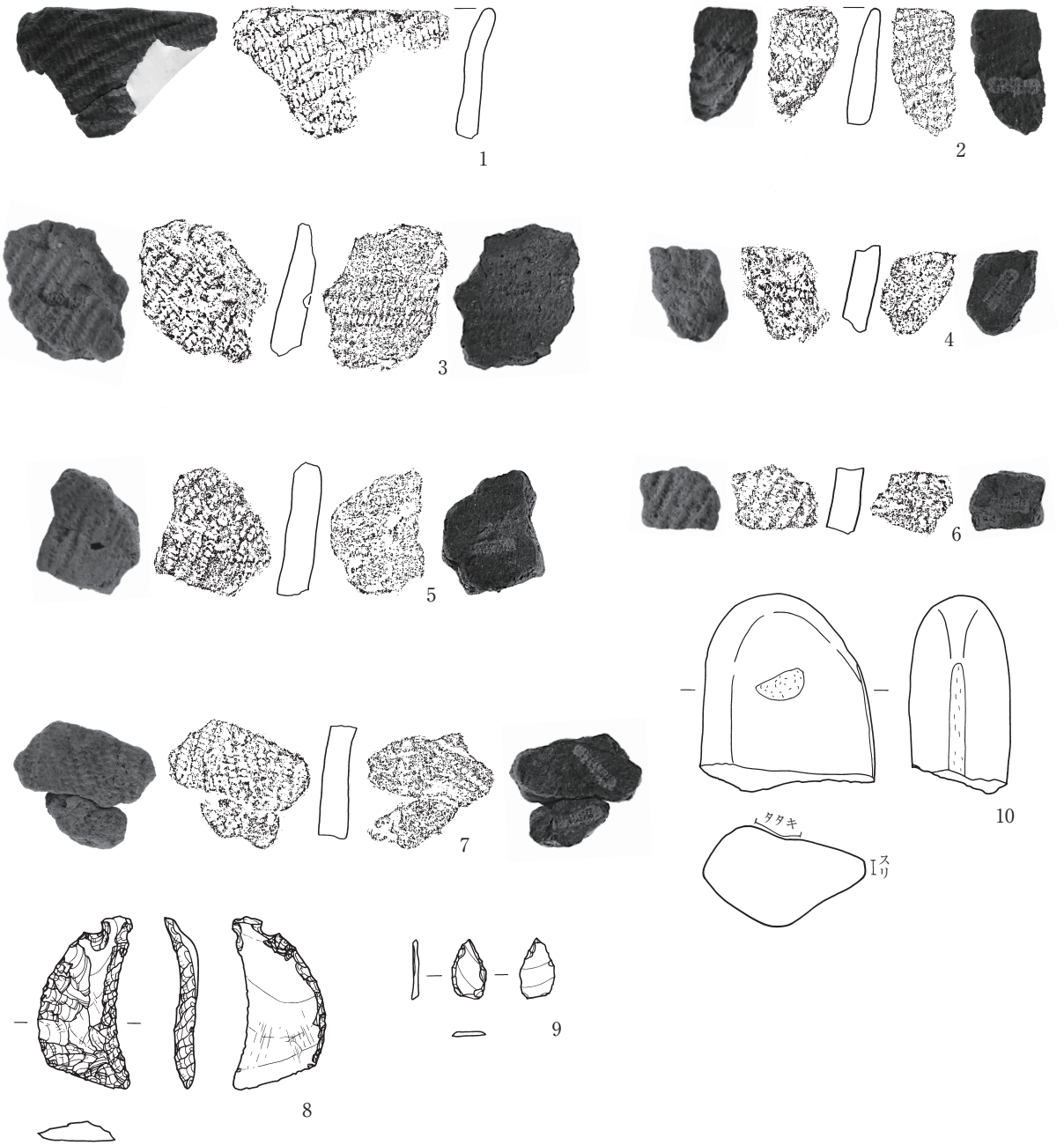


第7号竖穴住居跡堆積土

1層	黒褐色土	10YR3/2 南部浮石粒 (φ5~20mm) 40%との混合土。炭化物粒 (φ3~5mm) 1%混入。
Pit1 1層	暗褐色土	10YR3/3 南部浮石粒 (φ5~20mm) 15%混入。層左側ほど割合が多い。
2層	暗褐色土	10YR3/3 南部浮石粒 (φ5~10mm) 10%混入。
3層	黒褐色土	10YR3/2 南部浮石粒 (φ5~10mm) 7%混入。
4層	暗褐色土	10YR3/3 南部浮石粒 (φ5~10mm) 25%混入。
Pit2 1層	黒褐色土	10YR3/2 南部浮石粒 (φ3~20mm) 10%混入。層上面ほど割合が多い。
Pit3 1層	黒褐色土	10YR3/2 南部浮石粒 (φ5~10mm) 10%混入。
Pit4 1層	黒褐色土	10YR3/2 南部浮石粒 (φ5~20mm) 15%混入。
Pit5 1層	黒褐色土	10YR3/2 南部浮石粒 (φ3~10mm) 7%混入。
Pit6 1層	黒褐色土	10YR3/2 南部浮石粒 (φ3~10mm) 10%混入。層左側ほど割合が多い。
炉 1層	明赤褐色土	5YR5/8 南部浮石層。層上面に10YR3/4暗褐色土10%、炭化物粒 (φ1~2mm) 1%以下混入。



図7 第7号竖穴住居跡



0 S=1/2 8・9 5cm

0 S=1/3 10cm

図8 第7号竪穴住居跡出土遺物

1 竪穴住居跡（古代）

第1号竪穴住居跡（SI-1、図9・10、遺物図11・12）

[位置・確認] 南側調査区のG-9・10付近に位置し、標高88.5m前後の平坦地に立地する。VI～VIII層上面で方形に広がる黒色土を確認した。カマドの煙道部及び煙出部は調査区外に延びるため検出できなかった。南東部分は2回目の遺構確認で検出した。

[平面形・規模] 平面形は方形で、主軸方向はN-54°-Wである。規模は、南東壁4.20m、南西壁3.97m、北西壁4.36m、北東壁3.77m、床面積は14.3㎡である。

[壁・床面] 壁は床面からほぼ垂直に立ち上がり、確認面からの壁高は、南東壁21cm、南西側34cm、北西壁27cm、北東壁17cmである。床面は、ほぼ全体を深さ10～30cm程掘り込み、そこに褐色土と黒色土の混合土を埋め戻し、床を構築している。床面は、やや起伏がある。とくに硬化した部分が南西壁と北西壁に囲まれた空間で南西壁の長さ1.9m、北西壁の長さ2.8mの範囲でひろがっている。カマドの周辺がとくに顕著である。

[柱穴] 検出されなかった。

[カマド] 北西壁の中央に地下式カマドが1基、その西側でこれよりも古い時期の地下式カマドが1基検出された。中央のカマドでは、火床面・両袖・支脚・煙道部の一部が検出された。カマド袖は左袖が長さ60cm、最大幅18cm、右袖が長さ56cm、最大幅25cmである。火床面は支脚の手前部分及び両袖の内側にひろがっている。その範囲は長軸43cm、短軸37cm、被熱の深さは3～5cmである。カマド袖は、住居跡床面に浅く穴を掘った後、厚板状にした白色粘土（KPS-1・2）を芯材として置き、この粘土に土をかぶせて成形し袖としている。厚板状の芯材は、左袖で長さ14cm、高さ9cm、幅9cm、右袖で長さ18cm、高さ18cm、幅7cmになる。これらはいずれも被熱により赤く変色し、中心部分のみがわずかに白くなっている。両芯材ともカマド袖の先端付近に据えられている。支脚は2つ掛けで、2点とも長胴甕の胴部下半～底部の部位を倒立させて火床面においている。古い時期のカマドでは、カマドの掘り方及び煙道部の一部を検出した。カマドの掘り方は壁に接して半円状で長さ37cm、幅25cmである。この内部から折り重なった状態で土器が出土した。また、煙道部は床面から、ほぼ同じ高さで掘りこまれている。煙道部は竪穴住居跡の壁が崩落して堆積しており、堆積土4層がこれに相当すると思われる。煙道部の直径は21cmで、煙出部に向かってやや下側に傾斜している。

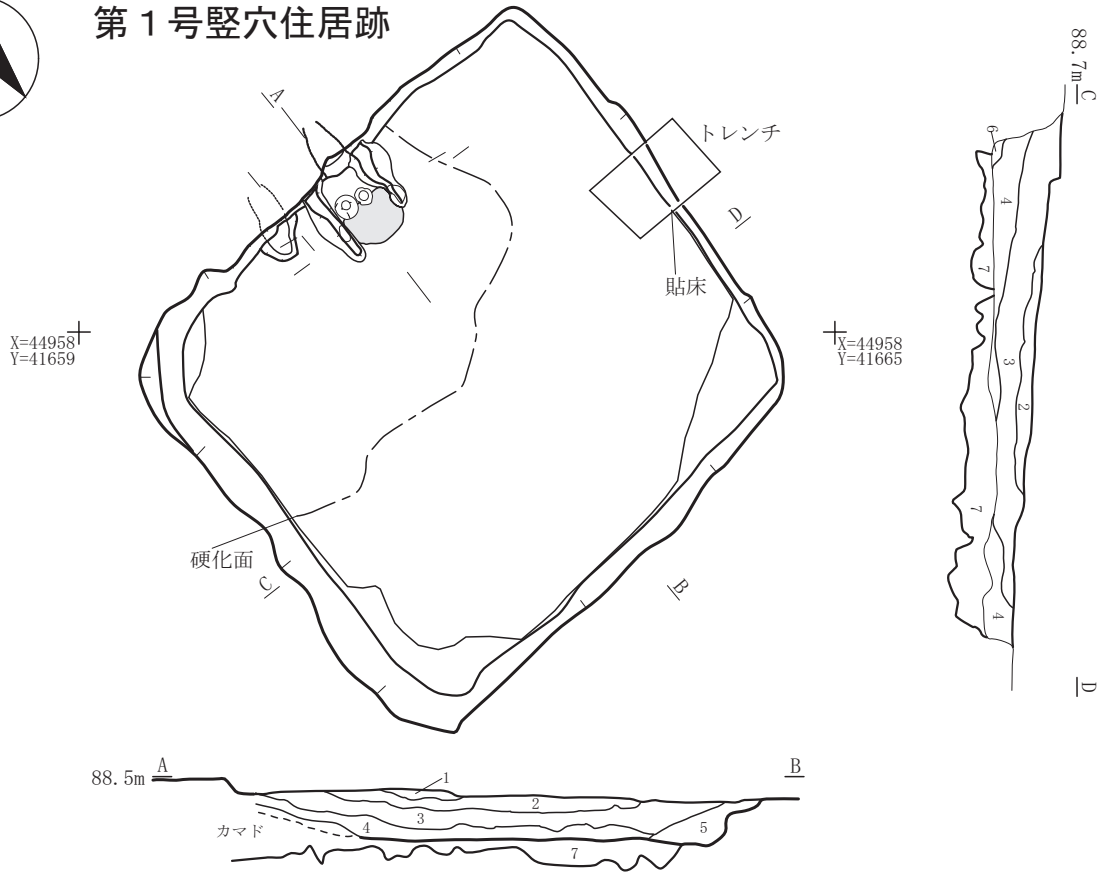
[堆積土] 確認面のほぼ中央で円形に広がった火山灰範囲（2層）を検出した。その規模は、長軸3m、短軸2.44m、厚さは最大で13cmである。上部は白色、下部は灰黄褐色であった。火山灰サンプル2点を分析し、十和田a火山灰の結果を得た（第4章第2節；火山灰1～3）。検出面は草木痕の攪乱により凹凸がある。床面付近の堆積層（4層）は焼土や炭化粒を多く混入する層である。このことから4層は住居跡の廃絶に伴う堆積、1～3層は自然堆積と考えられる。

[炭化材] 4層及び床面直上から炭化材が出土した。7点について樹種同定を行い、すべてコナラ属コナラ亜属コナラ節という結果を得た（第4章第3節）。また、床面直上から出土した炭化材（C-3）について放射性炭素年代測定を行ったところ、奈良時代中頃に相当するという結果を得た（第4章第1節）。

[出土遺物] 土師器が遺構全体で269点、5488.6g出土した。甕の復元個体が多い。4層から最も多く出土し、次いで3層、貼床と続く。床面・床面直上やカマドからも出土している。また、復元土器



第1号竖穴住居跡



第1号竖穴住居跡堆積土

1層	黒色土	10YR2/1	2.5Y5/2暗灰黄色土が多量に混入。南部浮石粒(φ1~2mm)3%混入。
2層	にぶい黄色土	2.5Y6/3	火山灰層。下部は灰白色土。
3層	黒色土	10YR2/1	南部浮石粒(φ5~10mm)7%。ややしまりなし。
4層	黒褐色土	10YR2/3	焼土・炭化物を多く含む。
5層	黒褐色土	10YR2/2	中振浮石粒3%、南部浮石粒(φ1~5mm)1%混入。
6層	黒色土	10YR2/1	黄褐色土粒10%含む。
7層	褐色土	10YR4/6	10YR2/1黒色土(南部浮石粒(φ2~5mm)を含む)と2.5YR6/4にぶい橙色土が斑状に混入。

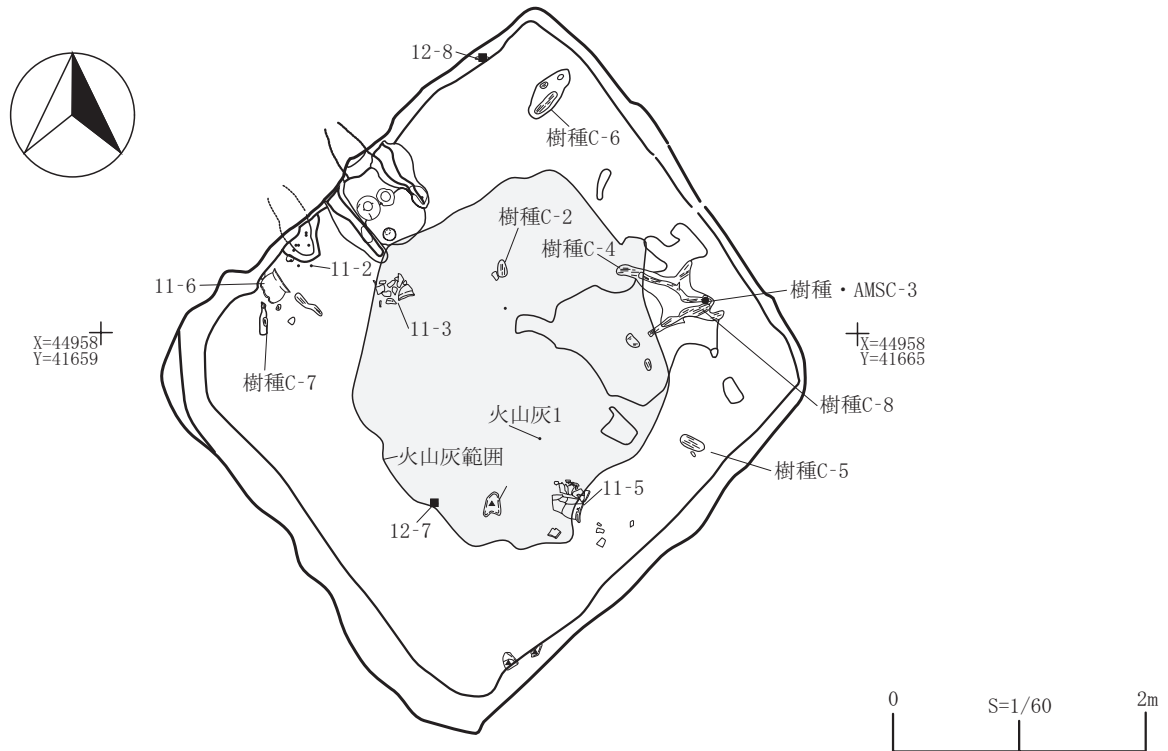


図9 第1号竖穴住居跡(1)

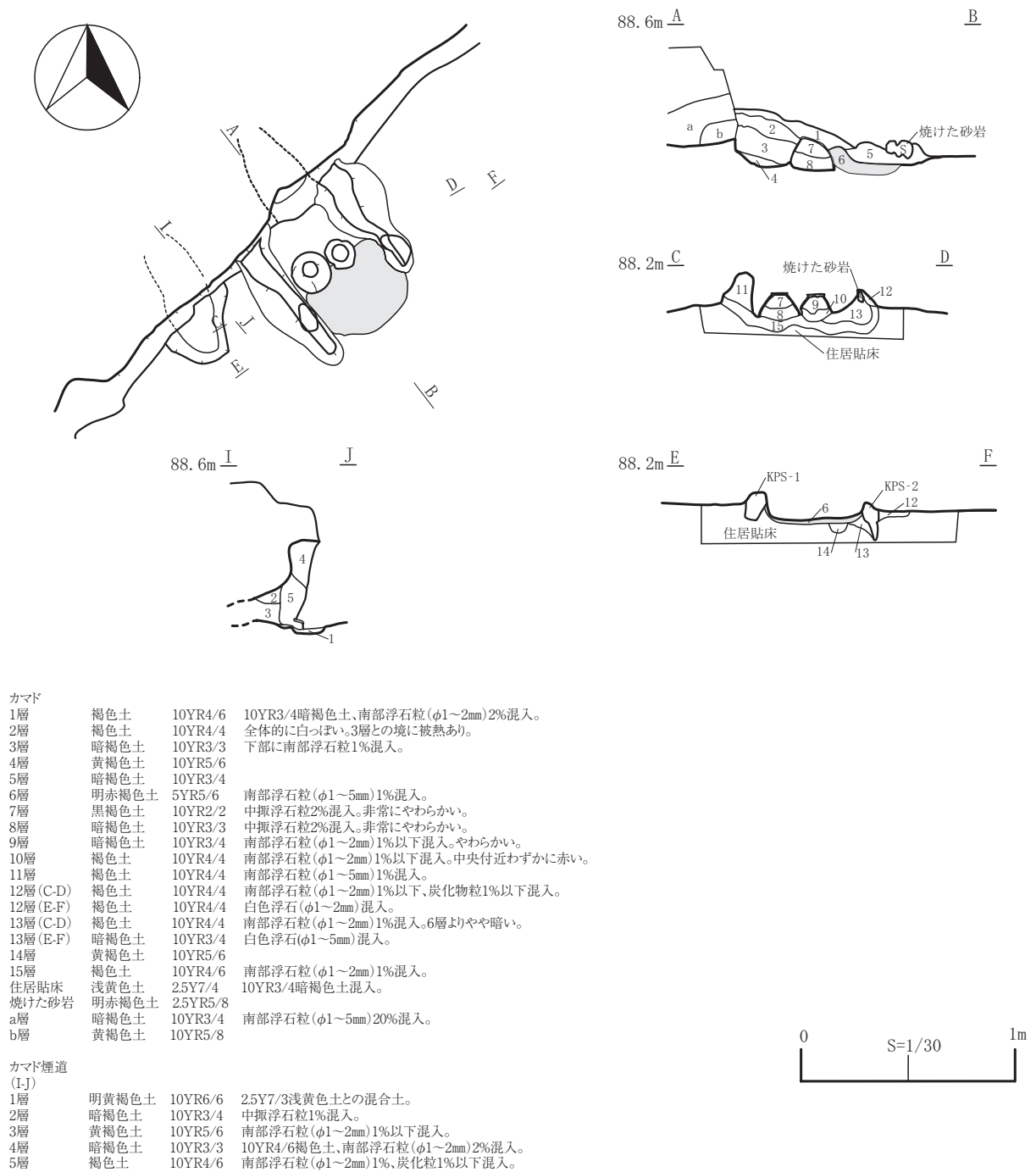


図10 第1号竪穴住居跡(2)

のうち11-2~7の6点について胎土分析を行った(第4章第4節)。坏は、口端部が窄まる形状で、胴部に弱い段がつく。内外面ともミガキ調整される。甕は口縁部がいずれも外側に大きく外反する。口端部は、口端部が丸味を帯びるもの(12-1・2)、口端部が上部に摘み出され窄まるもの(11-3)、口端部が平坦状のもの(11-2・4~7)がある。頸部に沈線状の段がつくもの(11-3・4・6・7、12-1)もあり、ヘラ状工具で横位に調整を行っている。胴部は外面ヘラケズリのもの(11-2~7)が多い。11-2は幅の狭い工具を密に使用している。この他、外面ハケメのもの(11-7)がある。11-6はハケメの後にケズリ調整を行っている。内面はヘラナデのものがほとんどであるが、ハケメのもの(12-1・2)もある。甕の底外面はいずれもケズリが行われている。

鉄製品が床面から2点出土した。12-7は端部が折り曲げられた形状で、用途は不明である。12-

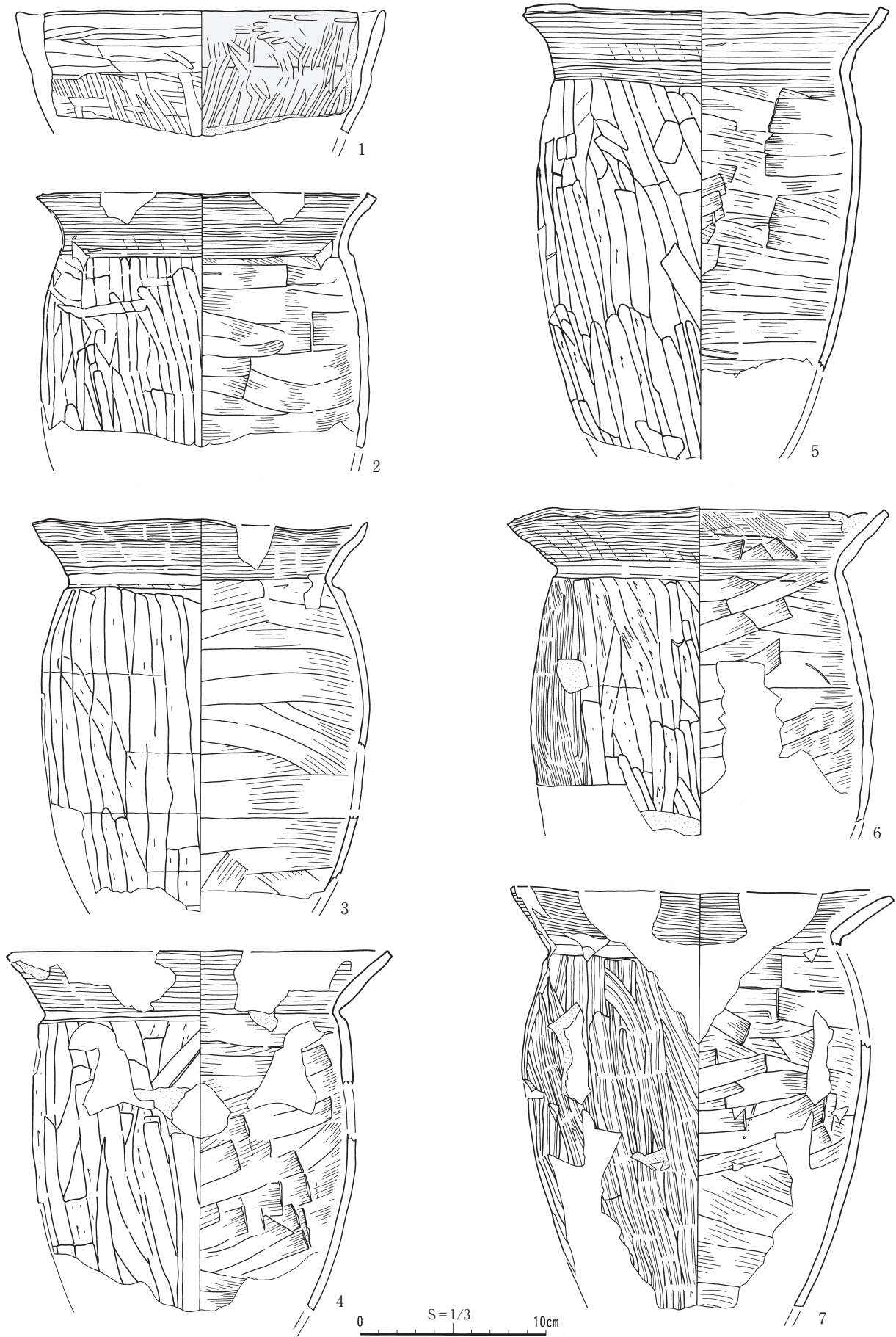


图11 第1号竖穴住居跡出土遺物(1)

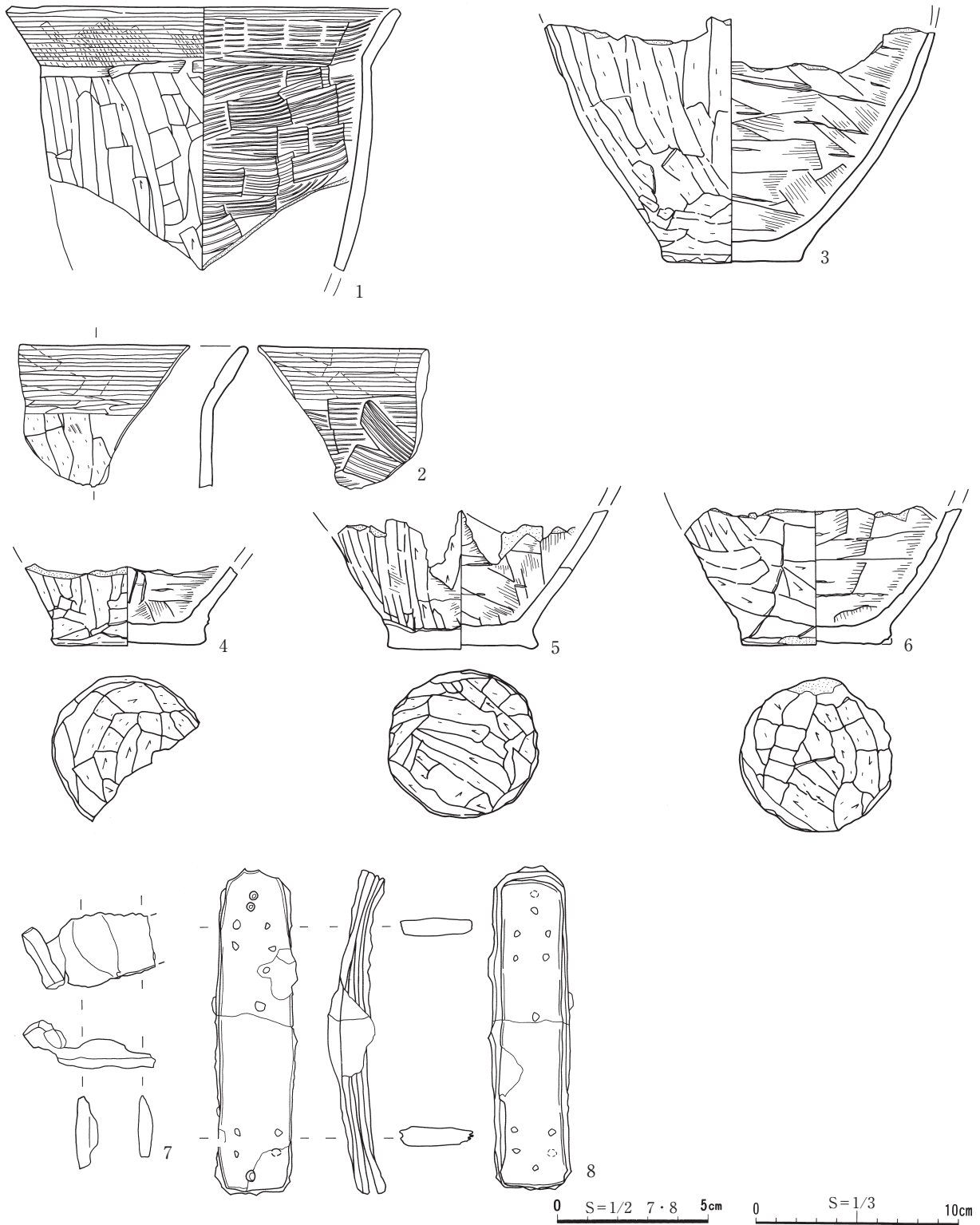


図12 第1号竪穴住居跡出土遺物(2)

8は4～5枚の鉄板が折り重なった小札である。ほぼ長方形で側面はややカーブする形状である。上端に2列の穿孔、その直下に4点の穿孔らしい痕跡がみられる。下端にも4点の穿孔と端部中央に1点の穿孔がみられる。このほか図示していないが、頁岩の剥片1点(0.4g)が1層中から出土した。
 [時期] 床面・床直出土遺物や堆積土出土遺物から、奈良時代と考えられる。(佐藤)

第2号竪穴住居跡 (SI - 2、図13・14、遺物図14)

[位置・確認] G-2・3グリッドに位置し、Ⅲ層面で黒色土の落込みを確認した。標高は88mで、馬の背状の丘陵のほぼ頂部に立地する。東半部は現道付け替えの後、2回目の遺構確認で検出した。

[平面形・規模] 北西・南東・南西の各壁3.7m、北東壁3.5mで、最大幅は東西(南西-北東)4.1m、南北(北西-南東)4.2mの隅丸方形を呈する。主軸方位はN-40°-W、床面積は12.8㎡である。

[壁・床面] 壁は外傾して立ち上がり、残りのよい部分での高さは約60cmである。掘り方はⅦ層まで掘り込まれており、南部浮石を含む黒褐色土で貼床が施されている。貼床範囲は、カマド周辺を除くほぼ全面で、平坦に整えられている。また、カマド周辺を除くほぼ全面が硬化している。

[周溝] 確認されなかった。

[柱穴] 5基のピットを検出したが、規模や配置にばらつきがあり、支柱穴とするにはためらいを覚える。本住居のような小型住居では柱穴が確認できないものも多く、本住居跡のピットも機能は不明と言わざるを得ない。なお、ピット覆土は貼床と同色系の土だったため、プランの確認は床面を少し掘り下げて行った。堆積土は床面に比べてやや軟質である。各ピットの規模を、長径×短径×深さで示す。Pit1:40×25×18cm、Pit2:27×21×12cm、Pit3:55×34×22cm、Pit4:28×25×8cm、Pit5:24×22×16cm。

[カマド] 北西壁中央に1基、地下式の煙道をもつカマドが設置されている。カマド本体は住居廃絶時の破壊が著しく、構築材の白色粘土が床面にひろがっていた。カマドが作られた部分は、掘り方掘削時に掘り残されており、使用時も床面の他の部分よりやや高くなっていたようである。袖部は間隔が40cmで、両側とも壁際から50cmほどがわずかに残存している。主体は粘土で構築されたようだが、芯材には安山岩が用いられ、火床面の両脇に埋め込まれていた。前庭部でも安山岩片が出土している。火床面は直径20cmの円形で、Ⅶ層が直に被熱している。火床面から煙道にかけて、ほぼ平坦に接続し、壁外の約1mの位置に煙出しがある。

[堆積土] 6層に分けられた。黒色ないし黒褐色土を主体とする1~5層は、廃絶後の自然堆積によるもので、6層は貼床である。2層では火山灰の堆積がみられ、上部はにぶい黄色、下部は土質がやや粗く、灰黄褐色であった。また、火山灰サンプル3点を分析し、十和田a火山灰の結果を得た。なお、床面および堆積土下層では焼土や炭化材が検出されているため、本住居は焼失家屋と考えられる。

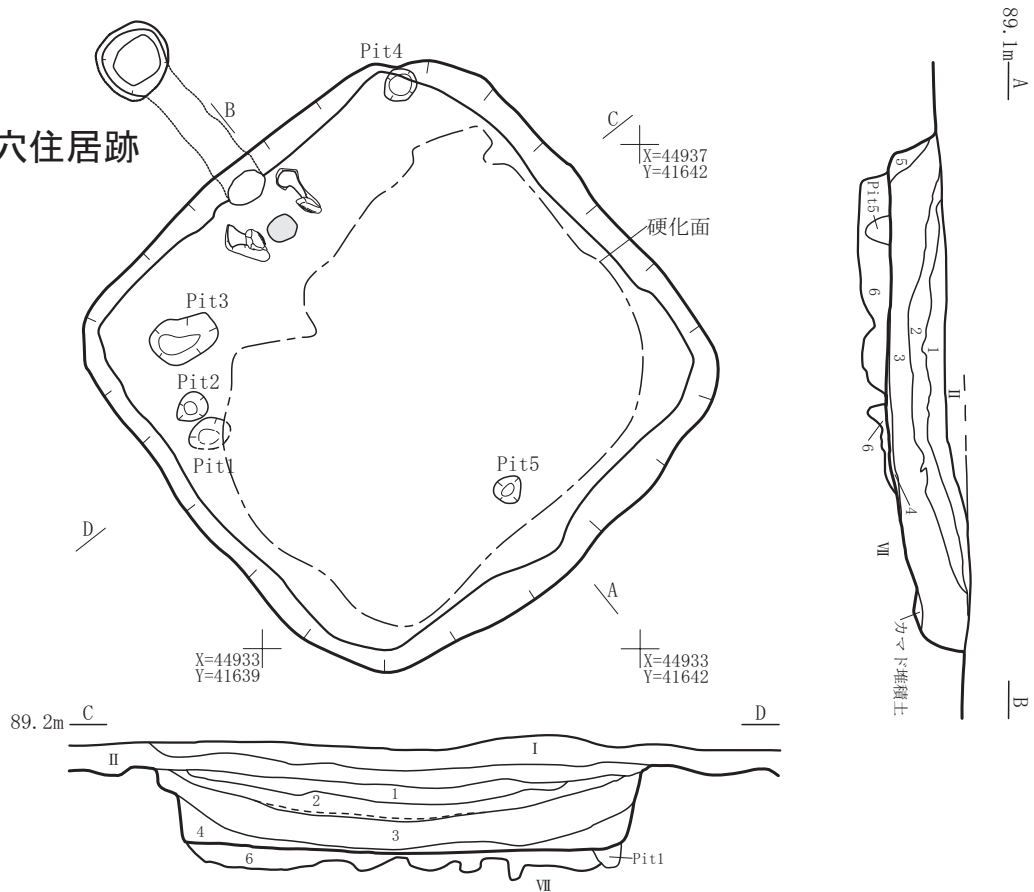
[炭化材] 主に住居跡東半部の壁寄り出土しており、中央に向かって放射状の配置を示す。C-3・4は外側から内側に倒れこんだように、壁際が高くなった状態で出土している。太さ10cm未満のものが多く、屋根材の一部であろうか。これらのうち、11点について樹種同定を行い、すべてコナラ属コナラ亜属コナラ節という結果を得た(第4章第3節)。

[出土遺物] 土師器が40点、748.3g出土した。3層から出土した甌が大半を占め、他はすべて破片資料で、掘り方やカマド煙道から数点出土している。南東壁の近くで一個体の甌が潰れた状態で出土した(14-1)。底がふさがれていないタイプで、外面は粗いミガキ、内面は板状工具により調整される。甌は胎土分析を行った(第4章第4節)。14-2は敲石である。確認面で鉄滓が1点出土した(14-3)。凹凸が大きい形状で、椀形鉄滓の一部の可能性もある。また、床面および堆積土中で、加工痕のない黒曜石の小片が出土した。産地同定はしておらず、由来不明である。

[時期] 出土した土師器の様相から、奈良時代(8世紀)の住居跡と考えられる。(岡本)



第2号竖穴住居跡



第2号竖穴住居跡堆積土

1層	黒色土	10YR2/1	10YR4/1 褐灰色火山灰を含む。
2層	にぶい黄色土	2.5Y6/4	火山灰層。下部に2.5Y7/2 灰黄色土を含む。やや粗い。
3層	黒色土	10YR2/1	南部浮石粒3%混入。パミスを含む。
4層	黒褐色土	10YR3/2	中振浮石粒3%、南部浮石粒1%混入。
5層	黒褐色土	10YR3/2	南部浮石粒 (φ5~20mm) 20%混入。
6層	黒褐色土	10YR2/2	中振浮石粒10%、10YR3/3 暗褐色土混入。
Pit1			
1層	黒褐色土	10YR2/2	南部浮石粒 (φ1~20mm) 10%、中振浮石粒5%混入。
Pit5			
1層	暗褐色土	10YR3/3	南部浮石粒 (φ5~20mm) 30%混入。

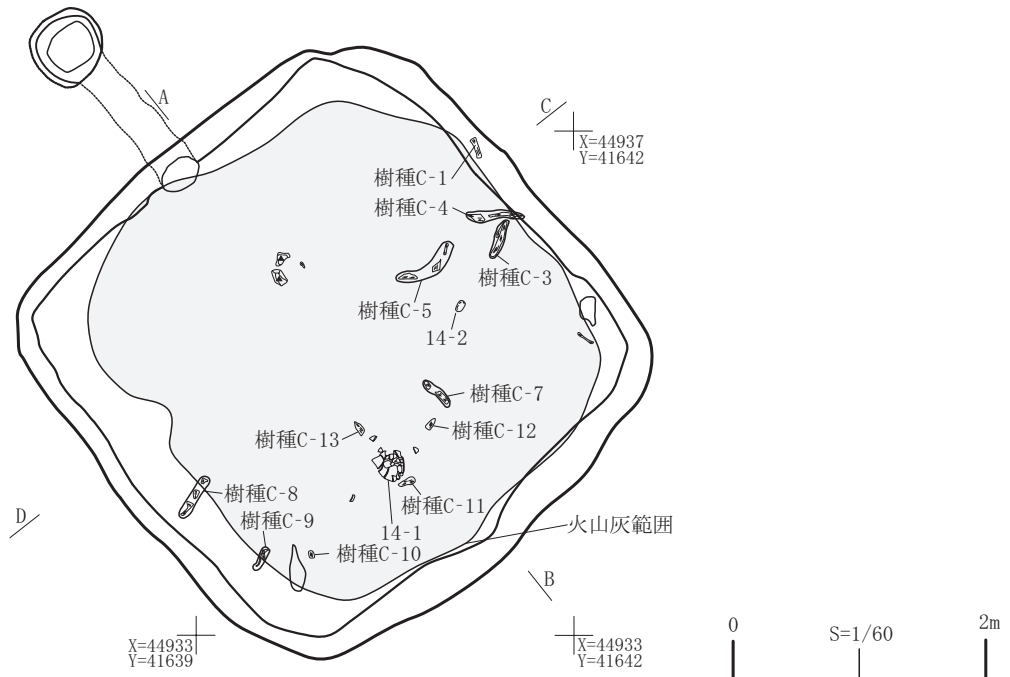


図13 第2号竖穴住居跡 (1)

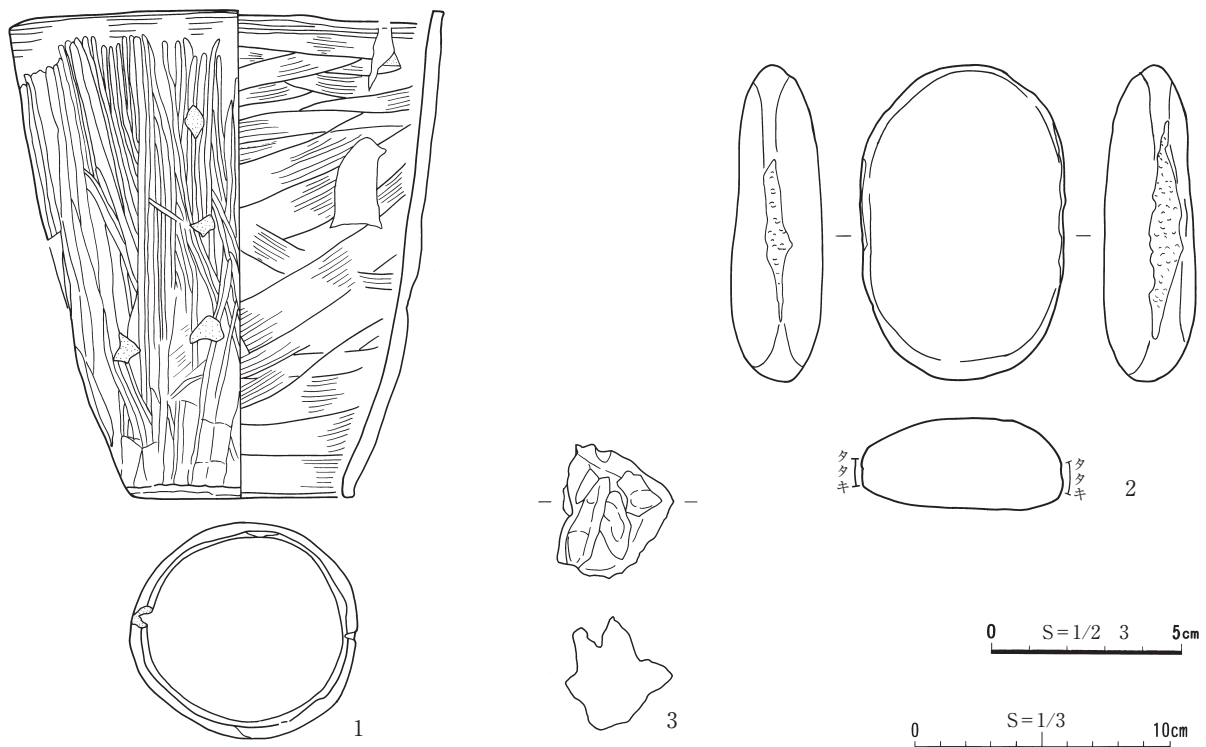
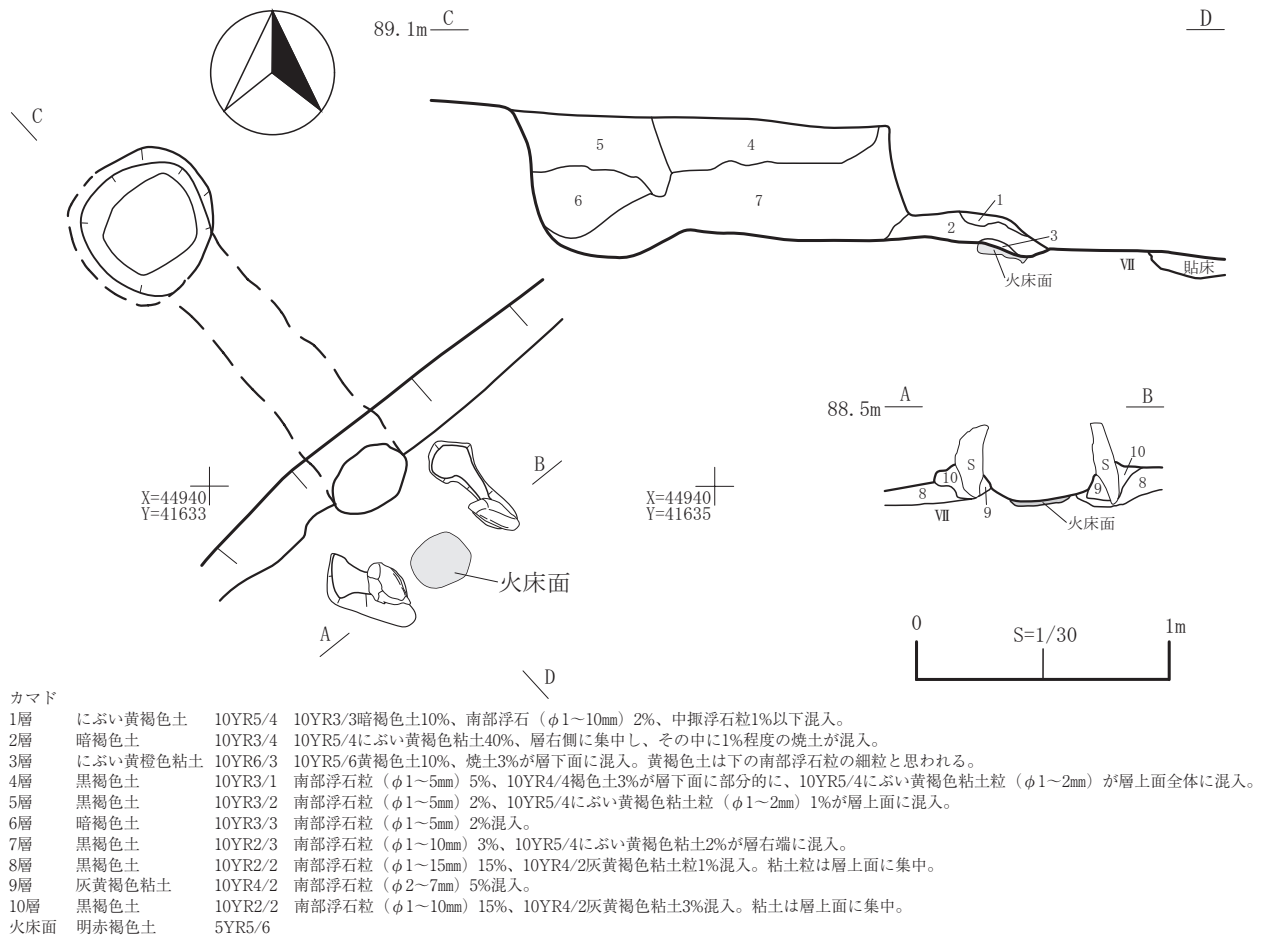


図14 第2号竪穴住居跡・出土遺物(2)

第3号竪穴住居跡 (SI - 3、図15・16、遺物図16)

[位置・確認] G - 6・7グリッドに位置する。表土直下のⅥ層黄褐色ローム面で、褐色土の方形プランとその中に目玉状の灰白色火山灰を確認した。標高は88mで、馬の背状の丘陵のほぼ頂部に立地する。

[平面形・規模] 南西壁は3.6mであるが、その他の壁は未検出あるいは果樹栽培に伴う攪乱により破壊が著しい。全体として東西(南西-北東)3.8m、南北(北西-南東)3.6mの隅丸方形を呈するものと考えられ、主軸方位はN-36°-W、推定される床面積は12.8㎡である。

[壁・床面] 壁はほぼ垂直に立ち上がり、残りのよい部分で高さ30cmが残存する。床面は平坦で、中央付近には広く貼床が施されており、一部はⅥ層のロームを床面としている。カマド周辺を含めた北西壁付近では、幅1m程の帯状に硬化面が形成されている。

[周溝] 確認されなかった。

[柱穴] 他の小型住居と同様、主柱穴はもたない。床下でピット・土坑各1基を検出している。ピットは直径40cm、深さは18cmである。土坑は80×55cmの不整形で、深さは14cmである。ともにⅥ層中で掘り終わっており、機能は不明である。凹凸がやや大きい掘り方の窪みである可能性も捨てきれない。

[カマド] 北西壁中央に1基設置されている。煙道部は調査区外に伸びているため、構造は分からない。両袖の間隔は35cmで、高さは10cm程度残存する。袖はロームによって作られているが、土質の違いから、地山削り出しによるものではないと思われる。燃烧部は床面よりやや窪んでおり、直径40cmほどの火床面がある。火床面の奥壁寄りには、底部が残存する土師器甕が支脚として伏せられていた。

[堆積土] 5層に分けられた。1層は灰白色火山灰層で、上部ににぶい黄色火山灰を含む。2層は黒褐色土で、1・2層は自然堆積によるものとみてよい。3層はレンズ状の堆積、4層は壁際の初期堆積の様相を示すものの、ローム主体の黄褐色土であり、人為的な埋め戻しを受けた可能性も否定できない。5層は貼床で、これもⅧ層のロームを主体とする。1層の火山灰は、分析の結果十和田a火山灰と同定された(第4章第2節;火山灰7)。なお、堆積土下層では焼土や炭化材が検出されているため、本住居は焼失家屋と考えられる。

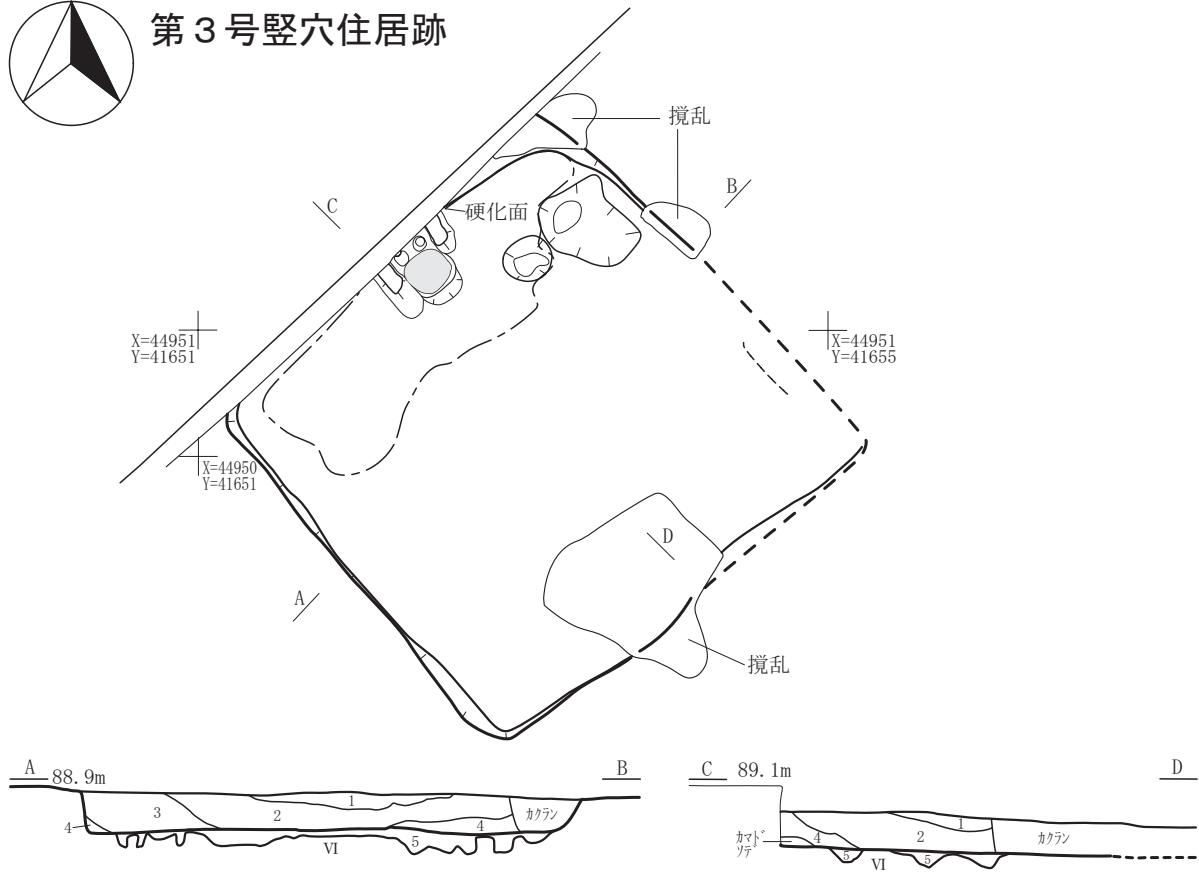
[炭化材] 床面中央と、南西壁に寄った部分の堆積土中で十数点の炭化材を検出した。遺存状態はあまり良好ではなく、小さなものが多い。このうち1点(C-1)の樹種同定を行い、コナラ属コナラ亜属コナラ節という結果を得た(第4章第3節)。

[出土遺物] 土師器が8点、602.8g出土した。カマド内で支脚として使われていた土師器の外は、少量の土師器片が出土したのみである。16-1・2は長胴甕、16-3は球胴甕の底部である。2・3は重ねられていた。1は胴部上半以上を欠き、外面は板状工具によるナデで調整されている。2は底部付近のみが残存しており、外面はハケメで調整されている。3は底部の作りが薄く、やや広がって立ち上がることから球胴甕と考えられる。外面はケズリの後粗いミガキ調整が施されている。

[時期] 出土した土師器の様相から、奈良時代(8世紀)の住居跡と考えられる。(岡本)



第3号竖穴住居跡



第3号竖穴住居跡堆積土

- | | | | |
|----|---------|---------|---|
| 1層 | 灰白色土 | 2.5Y8/2 | 火山灰層。全体に10YR4/1褐色土と上部に斑状に2.5Y6/3にぶい黄色火山灰を含む。 |
| 2層 | 黒褐色土 | 10YR3/1 | 南部浮石粒(φ5~20mm)10%、炭化物小片3%混入。 |
| 3層 | にぶい黄褐色土 | 10YR4/3 | 10YR4/1褐色土との混合土。南部浮石粒(φ5~10mm)5%含む。よくしまっている。 |
| 4層 | にぶい黄褐色土 | 10YR4/3 | |
| 5層 | にぶい黄褐色土 | 10YR5/4 | 10YR3/4暗褐色土30%と南部浮石粒(φ1~10mm)3%の混合土。炭化物粒(φ1~3mm)1%が層左側上面に混入。貼床。 |

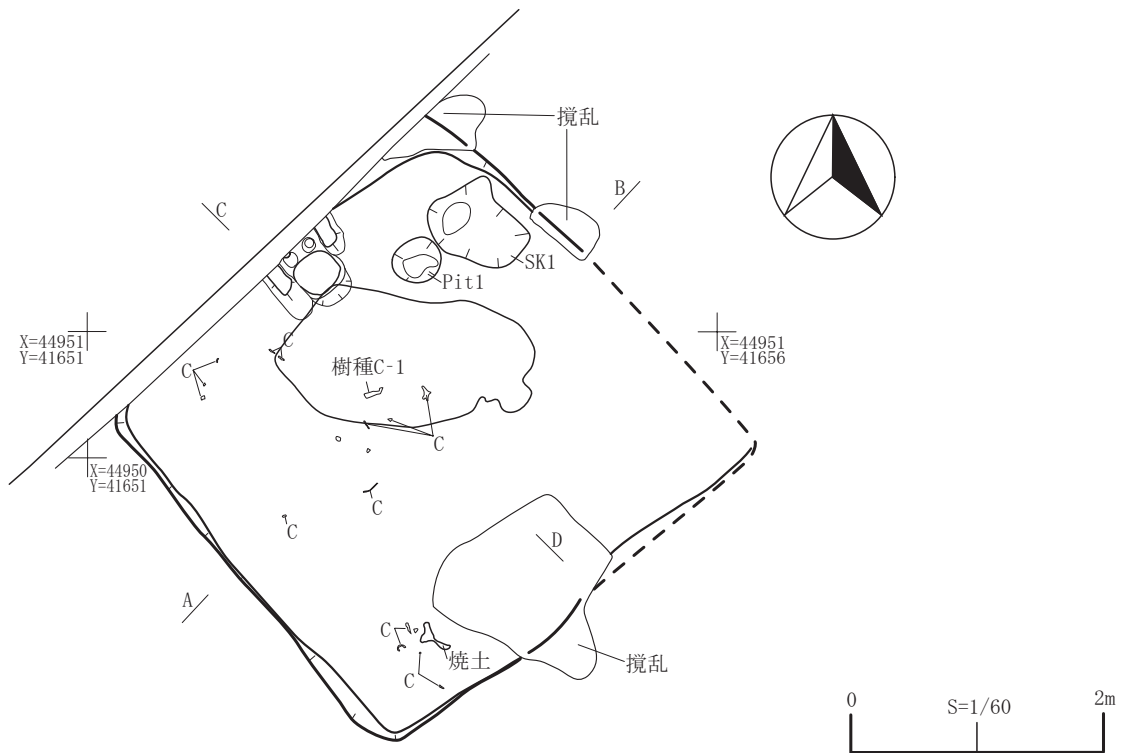


図15 第3号竖穴住居跡 (1)

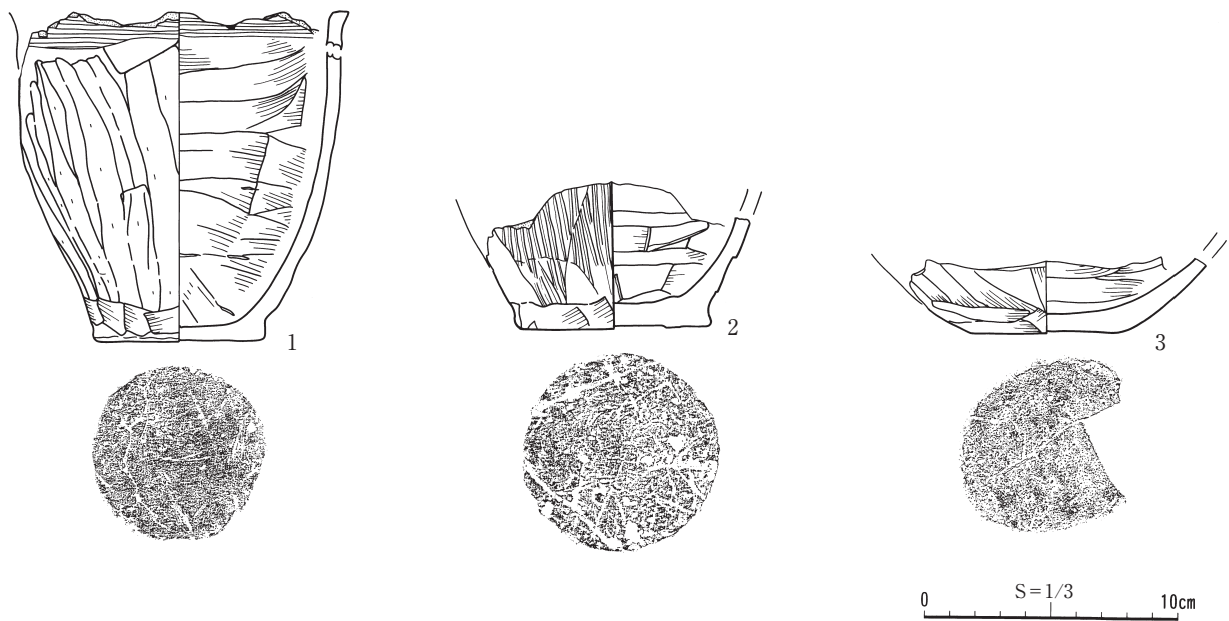
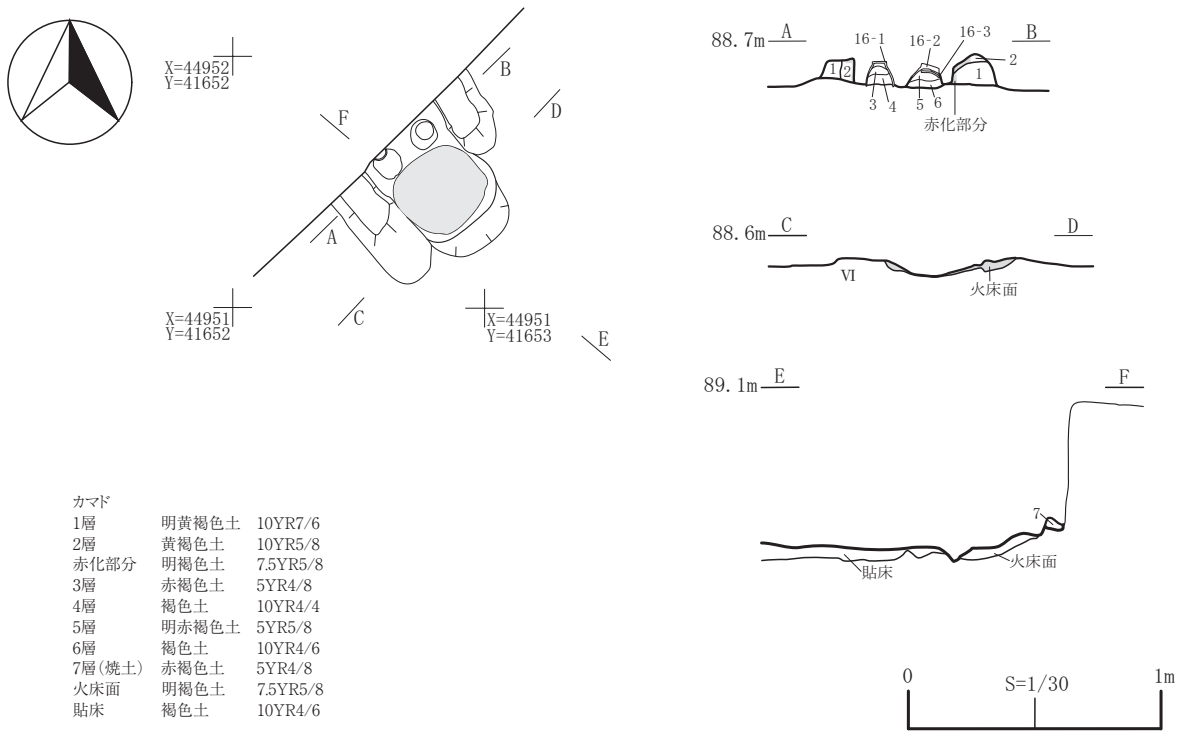


図16 第3号竖穴住居跡・出土遺物(2)

第4号竪穴住居跡 (SI - 4、図17・18、遺物図19)

[位置・確認] 南側調査区のG-11・12付近に位置し、標高87m前後の平坦地に立地する。北西壁が調査区外に延びるため検出されなかった。南東壁付近は2回目の遺構確認で検出された。

[平面形・規模] 平面形は方形で、規模は、南東壁3.95m、南西壁3.54m、北東壁3.65mである。主軸方向は、N-51°-W、残存する床面積は12㎡である。

[壁・床面] 壁は床面からほぼ垂直に立ち上がり、確認面からの壁高は、南東壁で44cm、南西側で41cm、北東壁で39cmである。床の構築には、まず、北東壁の北隅付近を除く住居内部を全体に20cm掘り込み、再度土を入れて床面がほぼ水平になるようにする。その後、南東壁付近、カマド付近、カマドの左側などを深さ30cmほど掘り込み再度埋め戻しを行っている。床面にはやや起伏がみられる。

[柱穴] 南東壁と北東壁の隅でピット1個を検出した。Pit 1は平面形が方形で、一辺約14cm、深さ約8cmである。内部には白色粘土が充填されており、同じようなピットは他に検出されていないことから、粘土の保管のために掘りこまれたピットと考えられる。

[カマド] 住居跡中央から火床面が検出された。平面形は方形で、調査区境界までの長さ43cm、幅46

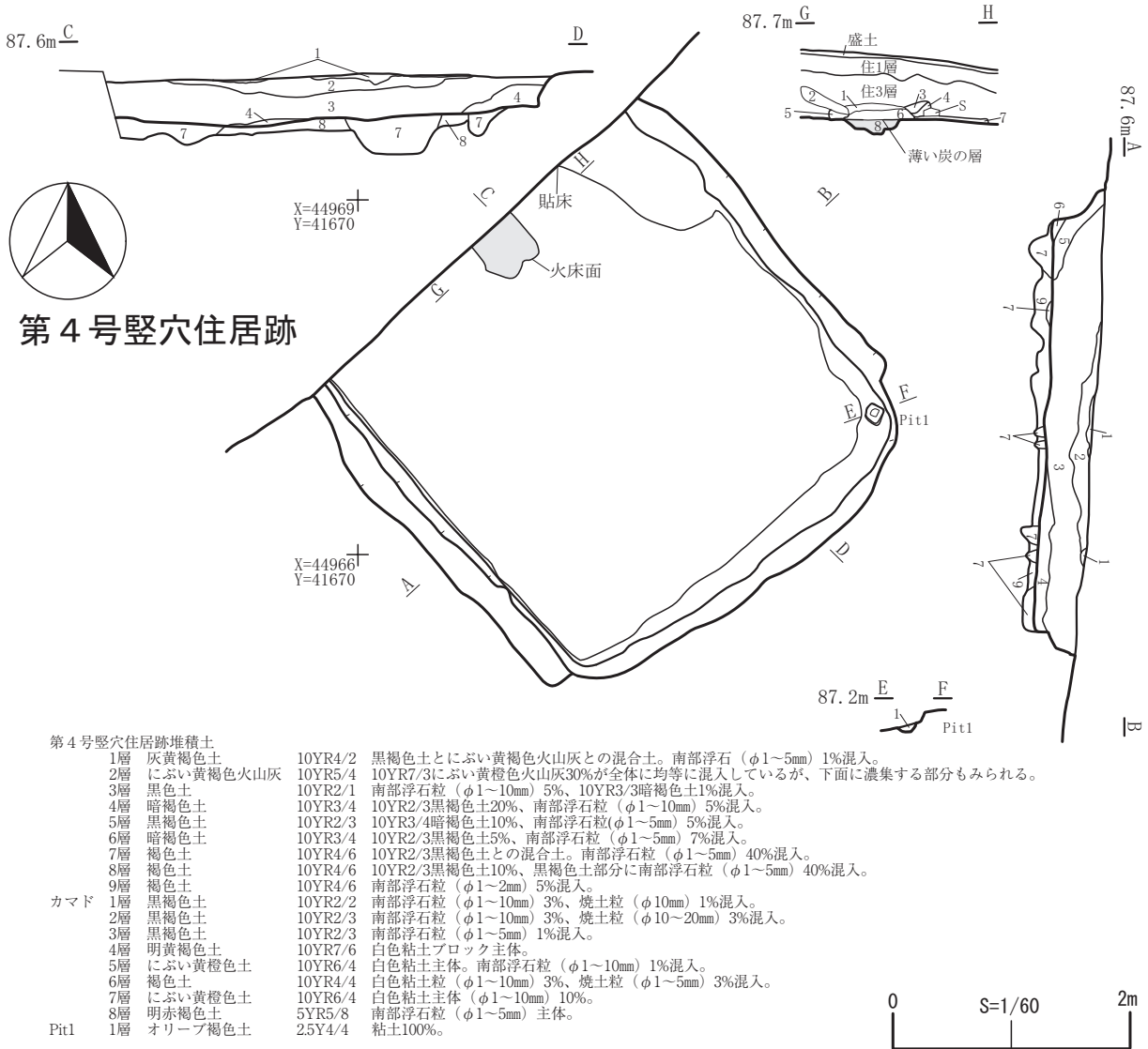


図17 第4号竪穴住居跡 (1)

cm、被熱の深さは最大13cmである。土層観察で、カマドの堆積土と火床面の層理面には薄く炭が広がり堆積しているのが確認された。また、火床面の両側には粘土、火床面の右側には礫等が床面に接して確認された

[堆積土] 黒色土主体で、9層に分層した。7～9層は床面構築時の堆積土で、1～6層はほぼ自然堆積の様相である。2層の火山灰は、分析の結果十和田a火山灰と同定された（第4章第2節；火山灰8）。

[炭化材] 床面から炭化材が出土した。3点の樹種同定を行い、すべてコナラ属コナラ亜属コナラ節という結果を得た（第4章第3節）。

[出土遺物] 土師器が85点、1939.2g出土した。3層からの出土が最も多く6割を占める。ついで、床面・4層・確認面・カマド付近の順で出土した。19-1は内外面ミガキ調整が行われる。19-2は小型甕で、口縁部にヘラ状工具浅く斜位の文様らしきものをつけられる。19-3は長胴甕で、外面弱いケズリ、内面ヘラナデ調整である。19-5の外面はケズリの後ミガキ調整を行っている。19-6は球胴甕で内外面ハケメのあと外面のみケズリ調整を行う。19-7は内外面・底外面ともヘラナデ調整で、外面の一部にケズリの痕跡がみられる。底外面は刺突の痕跡がみられる。19-8は被熱し、破損した土製品で元の一部は方形状であると推測される。一部沈線（もしくは段）がみられる。19-9は凝灰岩の紡錘車で、半分欠損している。穿孔の状態は、一方が広く、他方が狭い。両側から穿孔したものと思われる。復元土器のうち19-2・3の2点について胎土分析を行った（第4章第4節）。

[時期] 床面・床直出土遺物や堆積土出土遺物から、奈良時代と考えられる。（佐藤）

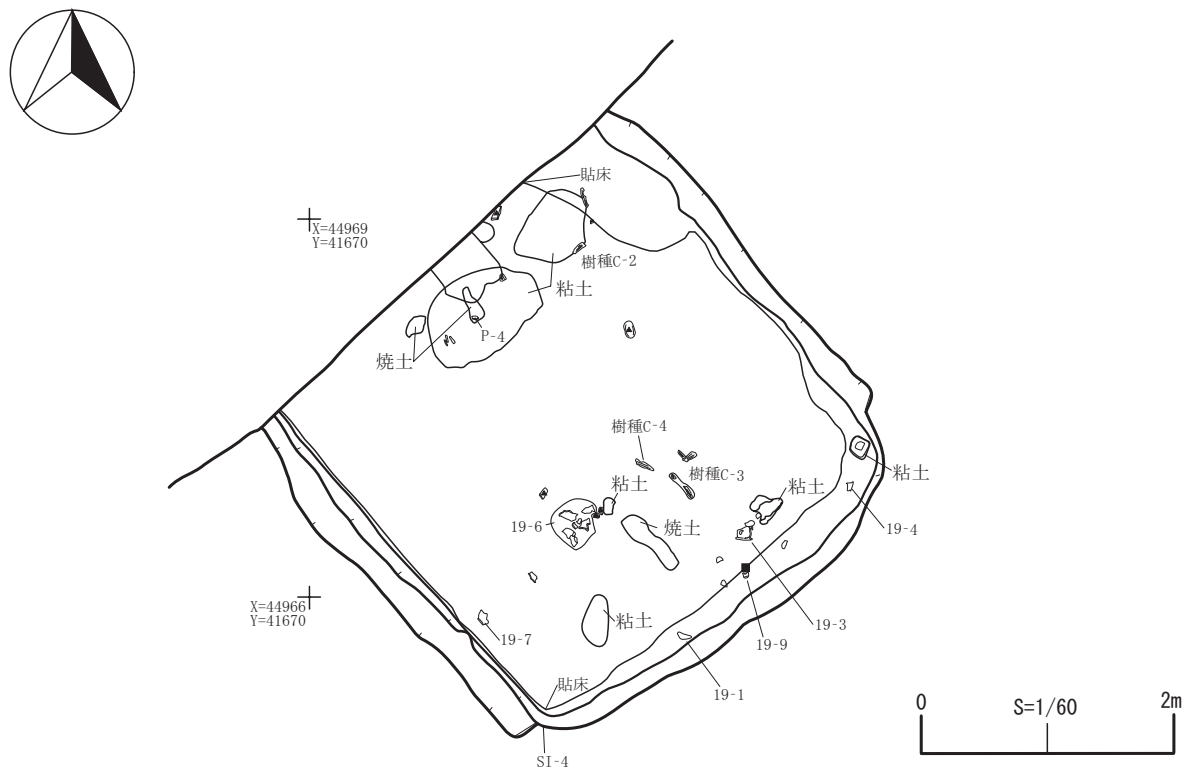


図18 第4号竪穴住居跡（2）

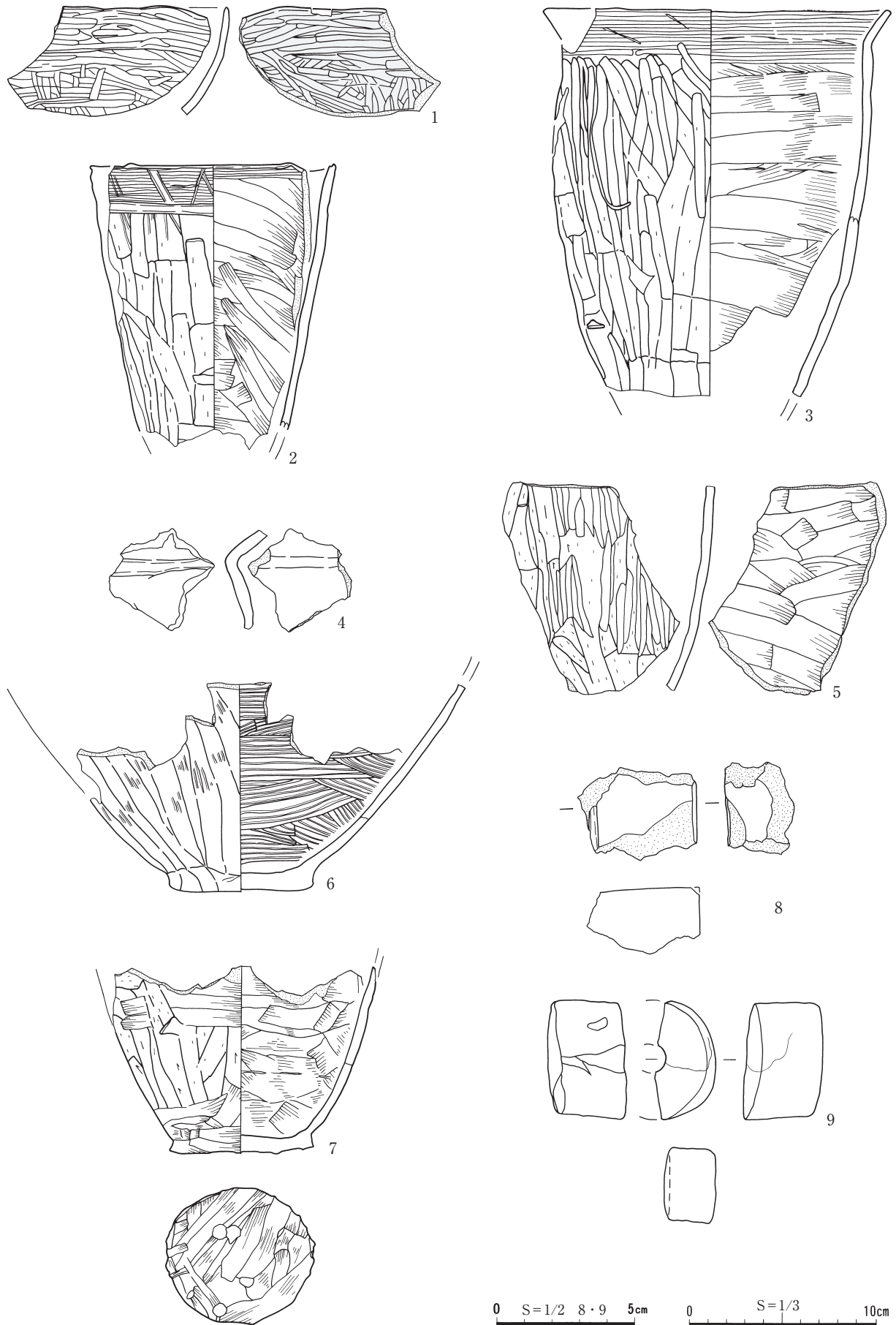


图19 第4号竖穴住居跡出土遺物

第5号竪穴住居跡 (SI - 5、図20・21、遺物図21)

[位置・確認] 南側調査区のG-14・15付近に位置し、標高86m前後の平坦地に立地する。住居跡の南東側半分は2回目の遺構確認で検出された。

[平面形・規模] 平面形は方形で、規模は、南東壁3.52m、南西壁3.41m、北西壁3.24m、北東壁3.46mである。主軸方向は、N-49°-W、床面積は8㎡である。

[壁・床面] 壁は床面からほぼ垂直に立ち上がり、確認面からの壁高は、南東壁で25cm、南西側で30cm、北西壁で21cm、北東壁で18cmである。床の構築には、まず、住居内部を全体に30cmほど掘り込み、再度土を入れて床面がほぼ水平になるようにする。とくに中央付近、カマドの右側などを40cm程深く掘り込み再度埋め戻しを行っている。床面にはやや起伏がみられる。

[周溝] 住居跡南東壁及び北東壁にかけてL字形に周溝を検出した。長さは2.52m、幅5～14cm、深さ5～52cmである。

[柱穴] 南西壁に平行してピット2個とカマド左袖脇でピット1個を検出した。ピットの深さは、Pit1:17cm、Pit2:16cm、Pit3:9cmである。

[カマド] 北西壁の中央でカマドが1基検出された。カマドは煙道部の上部が削平されているため、地下式か半地下式か不明だが、煙道部が煙出部に向かって徐々に傾斜しているため、地下式カマドの可能性が高い。カマド袖は左袖が長さ52cm、最大幅20cm、右袖が長さ44cm、最大幅32cmである。火床面は右袖の内側に偏ってひろがっている。その範囲は径25cmほどで、被熱の深さは3cmである。カマド袖は、住居床面に浅く穴を掘った後、厚板状にした白色粘土(KS-2・3)を芯材として置き、この粘土に土をかぶせて成形し袖としている。右袖先端には礫1点を置いて芯材にしている。厚板状の芯材は、左袖で長さ14cm、高さ16cm、幅12cm、右袖で長さ10cm、高さ25cm、幅5cmになる。これらはいずれも被熱により赤く変色し、両芯材ともカマド袖の先端付近に据えられている。火床面の被熱の深さが比較的浅いのは、被熱した部分をカマド外へ掻き出したためと思われる。また、左袖に接して浅い掘り込み(Pit3)が検出されたが、これは、カマドの掘り方と思われる。煙道部は火床面から、ほぼ同じ高さで掘り込まれている。煙道・煙出部の長さは1.17m、幅50cmで、底面は起伏がほとんどない。煙出部に向かってやや下側に傾斜している。

[堆積土] 確認面の中央で径2m前後、深さ20cmほど堆積する火山灰範囲を検出した。2層中の火山灰は白色の細かい粒子で、分析の結果十和田a火山灰と同定された(第4章第2節;火山灰9)。住居跡の堆積土はこの火山灰層を含む1～3層はほぼ自然堆積の様相である。4・5層中には焼土塊や炭化物が多く含まれる。

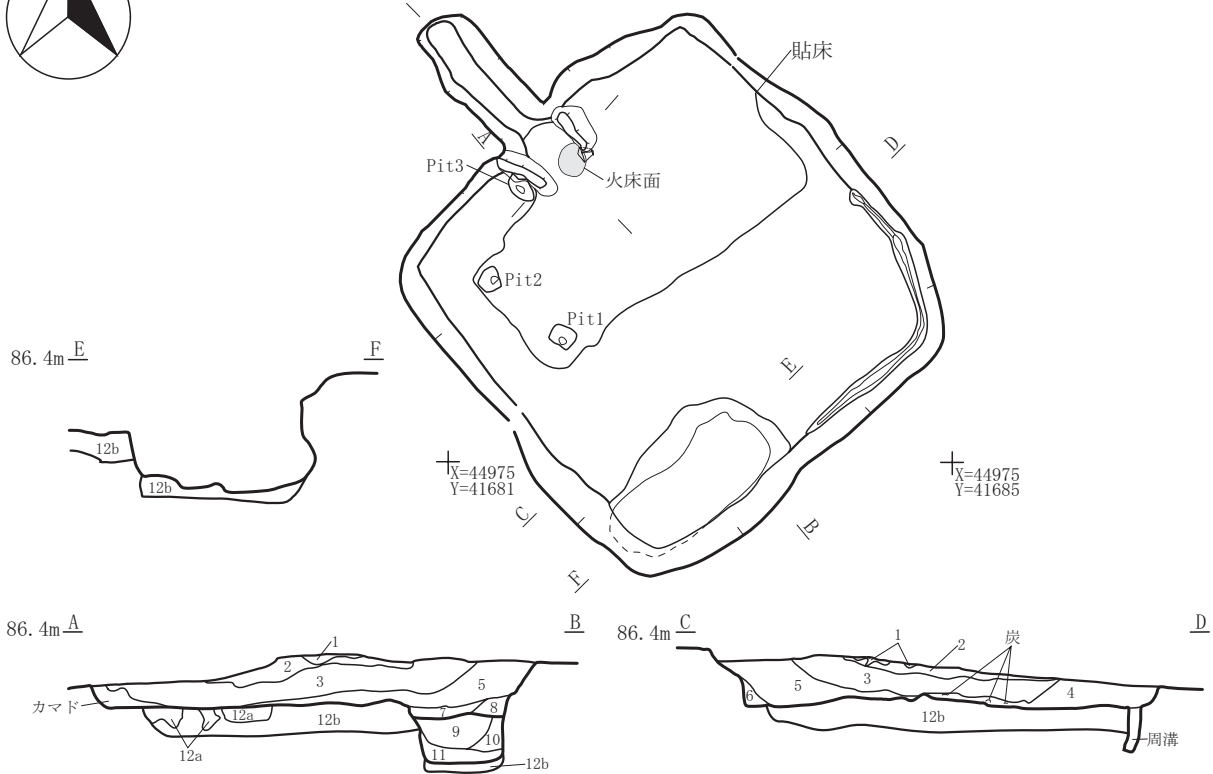
[その他] 南東壁と南西壁の隅にこれらの壁に沿って作られた床下土坑が検出された。床下土坑は平面形が隅丸長方形で、規模は長軸1.43m、短軸85cm、床面からの深さ46cmである。堆積土は黒褐色土が主体である。堆積土の上部には、炭化物や焼土が混入した堆積土(7・8層)、床下土坑の壁は住居南西壁よりもややオーバーハングし、壁には凹凸が多い。底面にも凹凸があり、住居南西壁方向に向かって傾斜している。

[炭化材] 住居跡南側の床面から4～5層堆積土で炭化材が検出された。炭化材は放射状に検出されており、上部には焼土塊の範囲も検出されている。このうち10点の樹種同定を行い、ほとんどがコナラ属コナラ亜属コナラ節という結果を得た(第4章第3節)。また、4～5層中から出土した炭化材(C



第5号竖穴住居跡

$\begin{matrix} \text{+} \\ \text{X}=44979 \\ \text{Y}=41681 \end{matrix}$
 $\begin{matrix} \text{+} \\ \text{X}=44979 \\ \text{Y}=41682 \end{matrix}$



第5号竖穴住居跡堆積土

1層	黒色土	10YR2/1	白色浮石 (φ1~2mm) 3%混入。
2層	灰白色土	2.5Y8/2	2.5Y7/4浅黄色土 (上層)。層状堆積がみられる。
3層	黒色土	10YR2/1	南部浮石粒 (φ2~5mm) 20%、白色浮石 (φ1~2mm) 3%、2層の灰白色土が一部混入。
4層	黒褐色土	10YR2/3	南部浮石粒 (φ1~5mm) 25%、白色浮石 (φ1~2mm) 3%混入。
5層	黒褐色土	10YR2/3	南部浮石粒 (φ1~5mm) 5% (下層は7%)。しまりなし。4層と5層は同層の可能性あり。
6層	黄褐色浮石	10YR5/6	南部浮石粒 (φ1~5mm) 主体の10YR2/1黒色土との混合土。
7層	黒褐色土	10YR2/2	南部浮石粒 (φ2~5mm) 4%、炭化物粒1%混入。焼土がわずかに含まれる。
8層	黒色土	10YR2/1	南部浮石粒 (φ1~2mm) 1%。しまりなし。
9層	黒褐色土	10YR2/2	南部浮石粒 (φ1~5mm) 3%、炭化物粒・片 (φ1~5mm) 2%、白色浮石 (φ1~10mm) 1%混入。
10層	黒色土	10YR2/1	南部浮石粒 (φ1~5mm) 10%混入。
11層	褐色土	10YR4/6	南部浮石粒 (φ1~2mm) 1%、10YR2/1黒色土が少量混入。しまりなし。
12a層	褐色土	10YR4/6	10YR2/1黒色土の中に南部浮石粒 (φ2~5mm) 20%と炭化物粒1%以下が混じった層が中間部に混入。
			上部に10YR5/8黄褐色土、南部浮石粒 (φ2~5mm) 2%の層が8cm程混入。しまりあり。
12b層	黒色土	10YR2/1	南部浮石 (φ2~10mm) との混合土。10YR4/6褐色土が混入。
周溝	黒色土	10YR2/1	南部浮石粒 (φ3~10mm) 20%混入。もろい。

$\begin{matrix} \text{+} \\ \text{X}=44979 \\ \text{Y}=41681 \end{matrix}$
 $\begin{matrix} \text{+} \\ \text{X}=44979 \\ \text{Y}=41682 \end{matrix}$

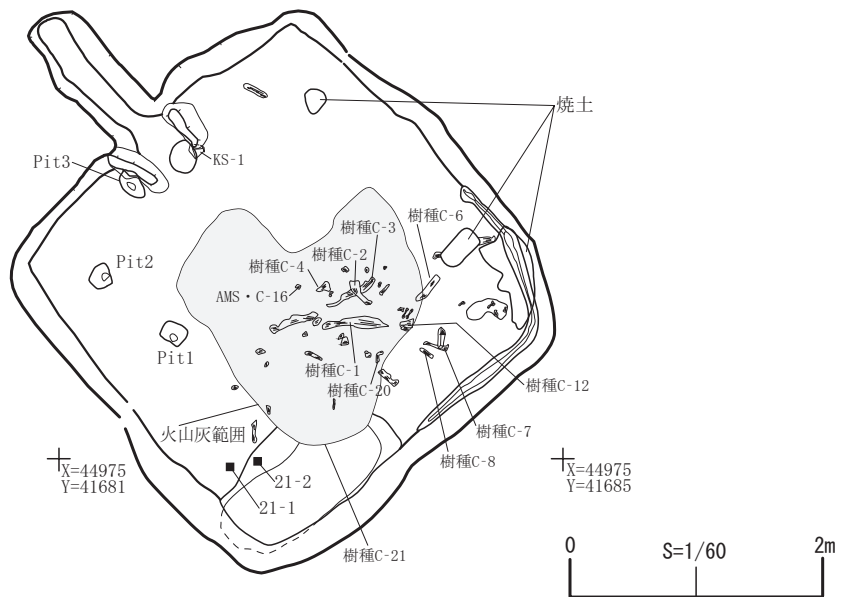


図20 第5号竖穴住居跡 (1)

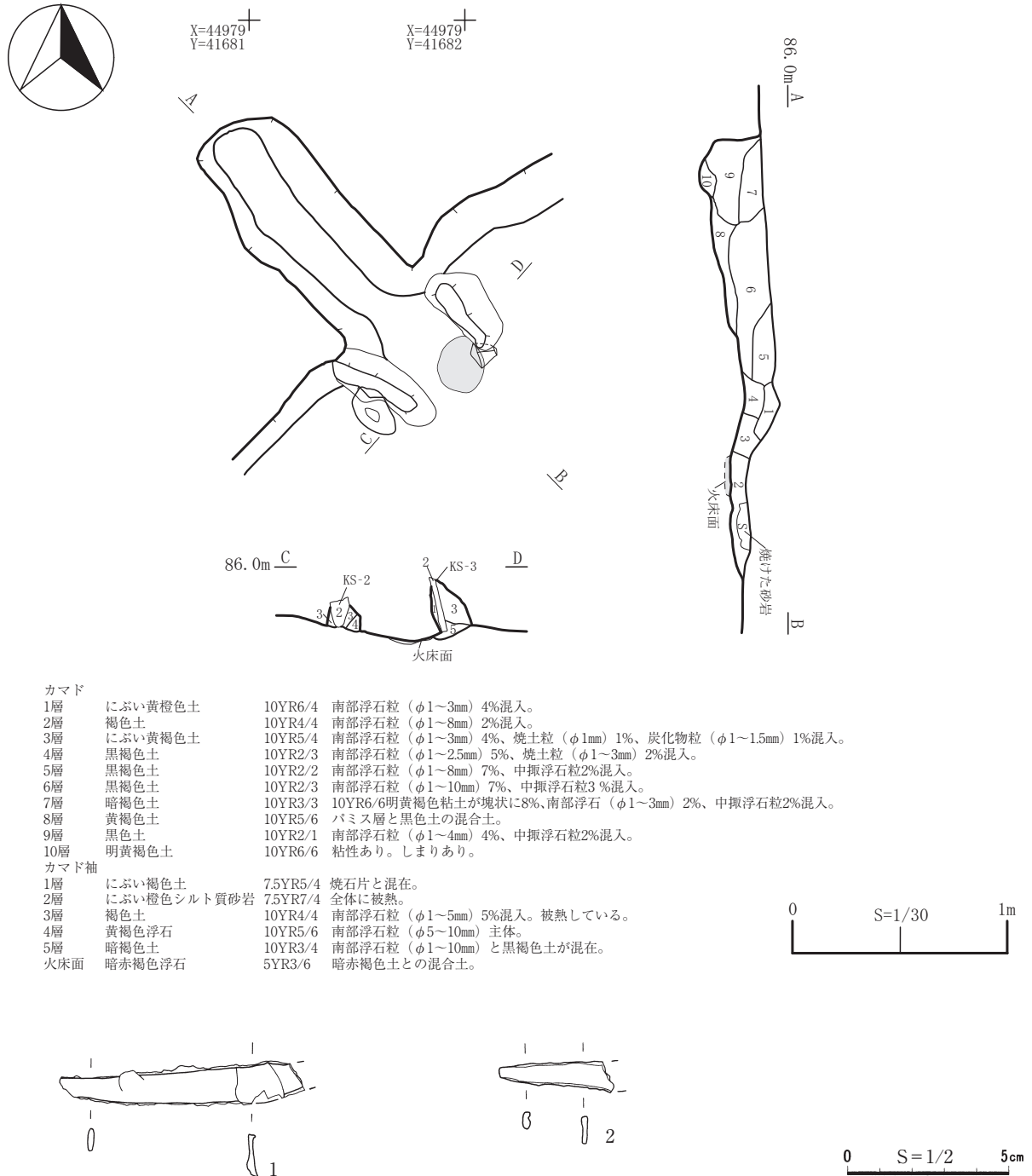


図21 第5号竪穴住居跡・出土遺物 (2)

-16) について放射性炭素年代測定を行ったところ、平安時代前期頃までに相当するという結果を得た (第4章第1節)。

[出土遺物] 鉄製品が床面から2点出土した。いずれも刀子の刃部で、切先に向かってなだらかに幅が狭くなる。

[時期] 炭素年代の結果から、奈良~平安時代と考えられる。 (佐藤)

第6号竪穴建物跡 (SI - 6、図22、遺物図22)

[位置・確認] 北側調査区のGB-1・GC-1グリッドに位置し、斜面地に立地する。Ⅲ層上面で検出した。東側は2回目の遺構確認で検出した。

[平面形・規模] 平面形は方形で北東壁が張り出す形と思われる。規模は、南東壁4m、南西壁3.24m、北西壁3.4mである。主軸方向は、N-37°-E、床面積は7.8㎡である。

[壁・床面] 壁は床面からほぼ垂直に立ち上がる。壁高は南東壁21cm、南西壁29cm、北西壁46cm、北東壁18cmである。Ⅵ層をそのまま床にしており、とくに住居跡中央部では径1.3mの不整形の硬化面が形成される。

[周溝] 北西壁全体、南東壁の一部で周溝を検出した。北西壁では、Pit 1とPit 2、Pit 2とPit 3の間で検出され、規模はそれぞれ長さ73cm、幅8cm、長さ98cm、幅6～17cmである。深さはいずれも5cm程である。南東壁ではPit 4・11の間で検出した。長さ99cm、幅11～23cm、深さ17cmである。

[柱穴] 床面で13個のピットを検出した。壁柱穴と考えられるピットが住居跡壁に3基または4基ずつ配される。南東壁Pit 4・11・14・13、南西壁Pit 1・5・4、北西壁Pit 1・2・3、北東壁Pit 3・12・13が、壁柱穴になると考えられる。柱穴の間隔は張り出し部分で80cm、ほかは1～1.3mの間隔で、1.2m程度が多い。柱穴の掘り方は円形が主体で、ピットの堆積土は上部に黒褐色土主体の層が堆積し、下部は南部浮石粒を多く含む堆積層である。Pit 1・2はピットの周辺に浅い掘り込みが検出されており、柱を抜き取った痕跡と考えられる。また、北西壁Pit 2と南東壁Pit 11は各ピットの周辺にはピットが掘りこまれており、柱の建替えや補助柱の可能性が考えられる。床面中央付近ではPit 8・9が検出された。Pit 8は平面規模や配置から南西壁のPit 5と対応すると思われる。Pit 9は北西壁のPit 2やPit 7と対応すると思われる。ピットの深さは、Pit1: 49cm、Pit2: 68cm、Pit3: 60cm、Pit4: 70cm、Pit5: 50cm、Pit7: 54cm、Pit8: 6cm、Pit9: 18cm、Pit10: 20cm、Pit11: 57cm、Pit12: 30cm、Pit13: 42cmである。Pit14: 44cmである。

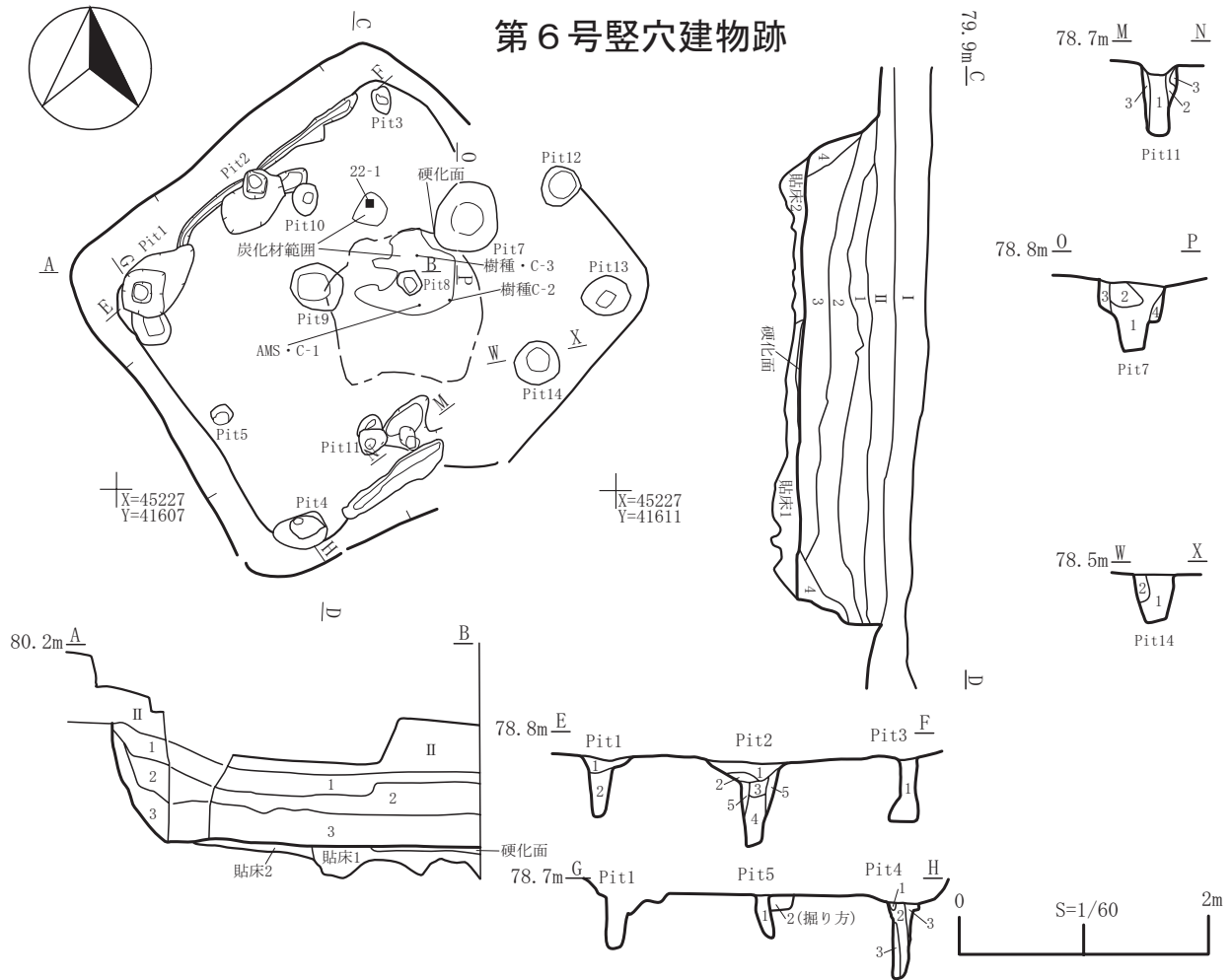
[炉] 検出されなかった。

[堆積土] 黒色土を主体とした堆積土がみられ、自然堆積と思われる。堆積土下部では上部に比べて南部浮石粒が若干多く混入する。

[炭化材] 床面中央の硬化面直上でPit 8の周辺を中心に炭化物の範囲が検出された。長軸78cm、短軸68cmの不整形な円形を呈し、薄く堆積している。炭化材は土壌化しており、形状を捉えられなかった。この中で、3点について樹種同定を行い、クリ・ネムノキ・マツ属複雑管束亜属という結果を得た(第4章第3節)。また、床面から出土した炭化材(C1)について放射性炭素年代測定を行ったところ、室町時代後半～江戸時代初期頃までに相当するという結果を得た(第4章第1節)。

[出土遺物] 堆積土中から縄文土器片が1点、5.8g出土した。このほか鉄製品が床面から1点出土した。非常に細長い形状で若干ねじれ気味である。断面形は方形状で、用途は不明である。

[時期] 放射性炭素年代測定から、17世紀初頭と考えられる。(佐藤)



第6号竖穴建物跡堆積土

1層	黒褐色土	10YR3/1	中振浮石粒2%、南部浮石粒(φ1~4mm)1%、十和田b浮石粒(φ1~6mm)混入。しまりあり。非常にかたい。
II層	黒色土	10YR2/1	十和田b浮石粒(φ1~3mm)3%、中振浮石粒1%。しまりあり。非常にかたい。
1層	黒色土	10YR1.7/1	中振浮石粒2%、南部浮石粒(φ1~5mm)2%混入。
2層	黒褐色土	10YR2/2	南部浮石粒(φ1~6mm)7%、中振浮石粒3%混入。
3層	黒色土	10YR2/1	南部浮石粒(φ1~6mm)3%、中振浮石粒2%混入。
4層	黒色土	10YR2/1	中振浮石粒1%混入。
貼床1	黒褐色土	10YR2/2	黒色土と南部浮石(主体)と中振浮石の混合土。
貼床2	暗褐色土	10YR3/3	南部浮石(主体)との混合土。貼床1に比べ全体的に明るい。
硬化面	黒色土	10YR2/1	南部浮石粒(φ1~8mm)4%、中振浮石粒3%混入。

Pit1	1層	黒色土	10YR1.7/1	中振浮石粒1%以下混入。
	2層	黒色土	10YR2/1	中振浮石粒1%、南部浮石粒(φ1~3mm)1%混入。
Pit2	1層	黒色土	10YR2/1	南部浮石粒(φ1~6mm)3%混入。
	2層	黒色土	10YR2/1	南部浮石(主体)との混合層。
	3層	黒色土	10YR2/1	南部浮石粒(φ1~4mm)1%混入。
	4層	黒褐色土	10YR2/3	南部浮石粒(φ1~3mm)20%混入。(バミス主体)
	5層	暗褐色土	10YR3/3	中振浮石粒10%、南部浮石粒(φ1~6mm)5%混入。
Pit3	1層	黒色土	10YR2/1	中振浮石粒1%。
Pit4	1層	黒色土	10YR2/1	南部浮石(主体)との混合層。
	2層	黒色土	10YR2/1	中振浮石粒1%、南部浮石粒1%混入。
	3層	黒褐色土	10YR2/2	中振浮石粒7%、南部浮石粒(φ1~4mm)5%混入。
Pit5	1層	黒色土	10YR2/1	南部浮石粒(φ1~3mm)2%混入。
	2層	黒色土	10YR2/1	南部浮石粒(φ1~10mm)10%混入。
Pit7	1層	黒褐色土	10YR2/2	中振浮石粒3%、南部浮石粒(φ1~3mm)3%混入。柱痕か。
	2層	黒褐色土	10YR2/2	南部浮石(主体)との混合土、中振浮石粒3%混入。崩落土か。
	3層	暗褐色土	10YR3/3	南部浮石との混合土。中振浮石粒3%混入。
	4層	黒褐色土	10YR2/2	南部浮石粒(φ1~4mm)10%、中振浮石粒2%混入。3層と近似
Pit11	1層	黒褐色土	10YR2/2	南部浮石(主体)との混合土混入。
	2層	褐色土	10YR4/4	南部浮石層。
	3層	黒色土	10YR2/1	南部浮石粒(φ1~5mm)1%混入。
Pit14	1層	黒色土	10YR2/1	南部浮石粒(φ1~5mm)1%混入。
	2層	黒色土	10YR2/1	南部浮石粒(φ1~10mm)3%混入。しまりあり。崩落土か。

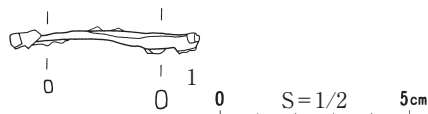


図22 第6号竖穴建物跡・出土遺物

2 土坑

第1号土坑 (SK - 1、図23)

[位置・確認] 標高87mの平坦地、G-12・13に位置する。VI層上面で検出した。

[平面形・規模] 平面形は円形で、径1.85mである。深さは最大61cmである。

[壁・底面] 壁は底面からほぼ垂直に立ち上がる。VII層を底面とし、ほぼ水平である。

[堆積土] 黒褐色土主体で、5層に分層した。南部浮石粒を多く混入する。

[出土遺物] 出土しなかった。

[時期] 時期は不明である。

第2号土坑 (SK - 2、図23)

[位置・確認] 標高89mの平坦地、G-4に位置する。VI層上面で検出した。

[平面形・規模] 平面形は円形で、径69cmである。深さは最大15cmである。

[壁・底面] 壁は底面から緩やかに立ち上がる。VI層を底面とし、ほぼ水平である。

[堆積土] 黒褐色土を主体とする単層で、南部浮石粒を混入する。

[出土遺物] 出土しなかった。

[時期] 時期は不明である。

(佐藤)

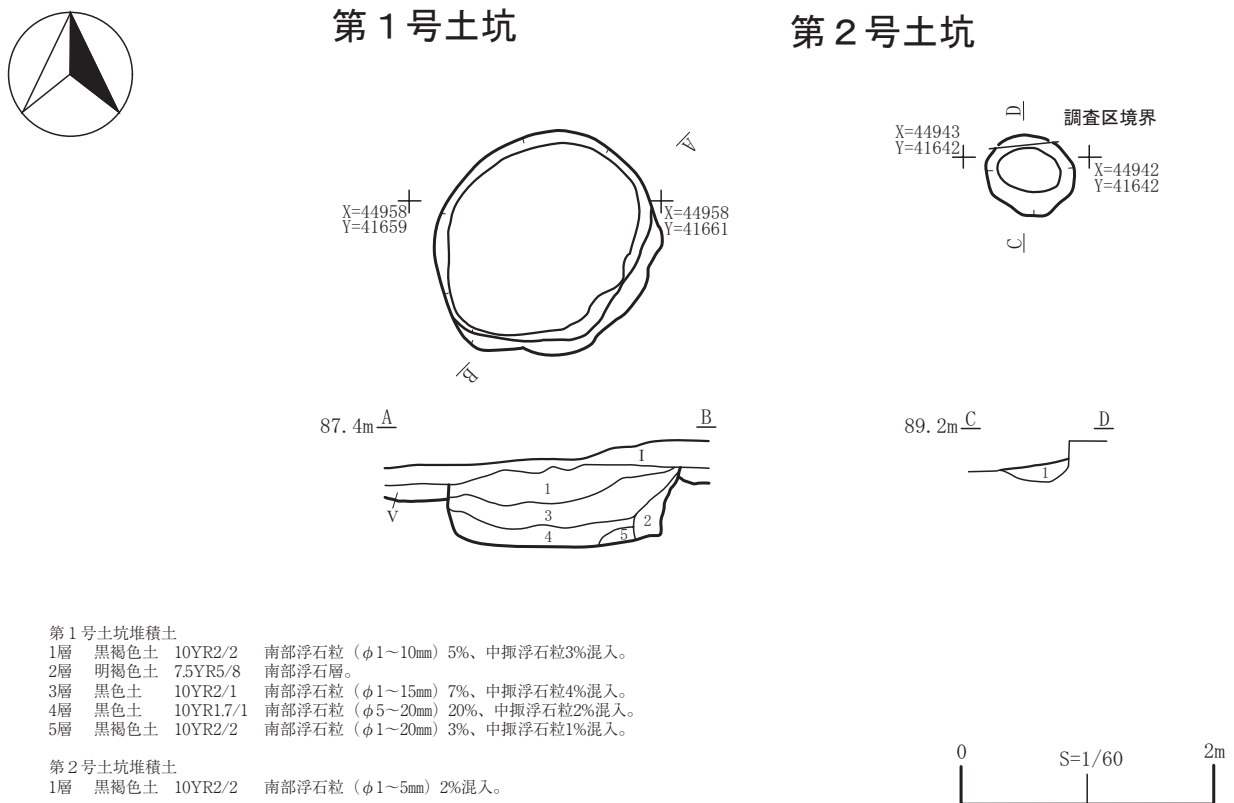


図23 土坑

3 遺構外出土遺物

(1) 縄文土器 (24-1~5)

縄文時代早期～晩期の土器が、43点、382g出土し、この内5点を図示した。中期末葉～後期初頭の土器が主体である。

24-1はやや波状の磨消縄文で、横位の沈線と単節縄文で施文される。24-2は深鉢形土器の胴部で、磨消縄文である。施文は24-1と類似し、同一個体の可能性がある。24-3～5は深鉢形土器の胴部片である。

(2) 石器

剥片石器 (24-6~10)

総数8点、66.7gが出土した。内訳は定形石器1点、二次調整のある剥片3点、使用痕のある剥片1点、剥片3点である。石材は、頁岩41.4g、珪質頁岩8.3g、緑色片岩17gである。

石匙 (24-6) 縦型石匙が1点出土した。握み部が欠損している。片面は全面加工、片面は握み部と刃部の一部に押圧剥離を施すのみである。

二次調整のある剥片 (24-7~9) 7は縦長剥片の両側縁に鈍角度の押圧剥離を施し、搔器のような用途が考えられる。8は、縦長剥片の一侧縁の両面に、9は片面の末端部に、押圧剥離を施す。

微小剥離痕のある剥片 (24-10) 縦長剥片の一侧縁に微小剥離痕がみられる。

礫石器 (24-11~25-5)

礫石器は総計9点出土した。

擦石類は4点出土した。24-11は1点出土し、器面は滑らかである。24-12は球状の磨石で、器面は滑らかである。上面及び側面の一部には敲き痕が見られる。24-13・14は右側面に擦り痕が見られる。

石皿類は2点出土したが、いずれも欠損品である。25-3は上面のみ滑らかであるため、片面利用である。25-4は上面及び下面に擦り痕があるため、両面利用である。また、器面は被熱のため、暗褐色に変色している。

砥石 (25-2・3) は2点出土した。25-2は上面のみ利用しており、上面に溝状の擦り痕が見られる。25-3は両面及び両側面を利用している。

その他として、右端部に打ち欠きがある礫 (25-5) が出土した。両面から加工されているが、用途などは不明である。

(3) 鉄関連遺物

25-6は両端が欠損した長方形の鉄板である。断面は、両側縁が鋭利な形状となる。25-7・8は断面が方形の鉄棒で、同一個体と思われる。紡錘車の軸に使用された可能性がある。25-9・10は鉄滓片で、25-9は凹凸が大きく底部がやや丸みを帯びた形状から、椀形鉄滓の可能性もある。

(礫石器-大平、その他-佐藤)



0 S=1/2 6~10 5cm 0 S=1/3 10cm

図24 遺構外出土遺物 (1)



図25 遺構外出土遺物 (2)

第3章 上平遺跡の遺構と出土遺物

第1節 基本層序

I層は黒褐色土（10YR2/2）の耕作土である。十和田b軽石を2%含む。

II層は黒色土（10YR1.7/1）で、十和田b軽石3%のほか、中振浮石粒1%を含む。しまりがあり、硬化している。遺物含有量が多い。

III層は黒褐色土（10YR3/1）で、下部は暗褐色土である。全体に中振浮石粒7%混入する。

IV層は黄橙色の中振浮石層（10YR8/6）で暗褐色土に黄橙色・白色の中振浮石が濃集する。

V層は黒褐色土（10YR2/2）で、中振浮石粒の7%混入する。早期の遺物が出土する。

VI層は黒褐色土（10YR2/3）で、南部浮石粒の密度が濃くなり全体に40%ほど混入する。粘性もある。

VII層は黄褐色の南部浮石層（10YR5/6）で、径5～30mmで、下部は白っぽくなる。

VIII層は暗褐色土（10YR3/4）で、南部浮石粒が5%混入する。

IX層は暗褐色土（7.5YR3/4）で、白色浮石粒が3%混入する。

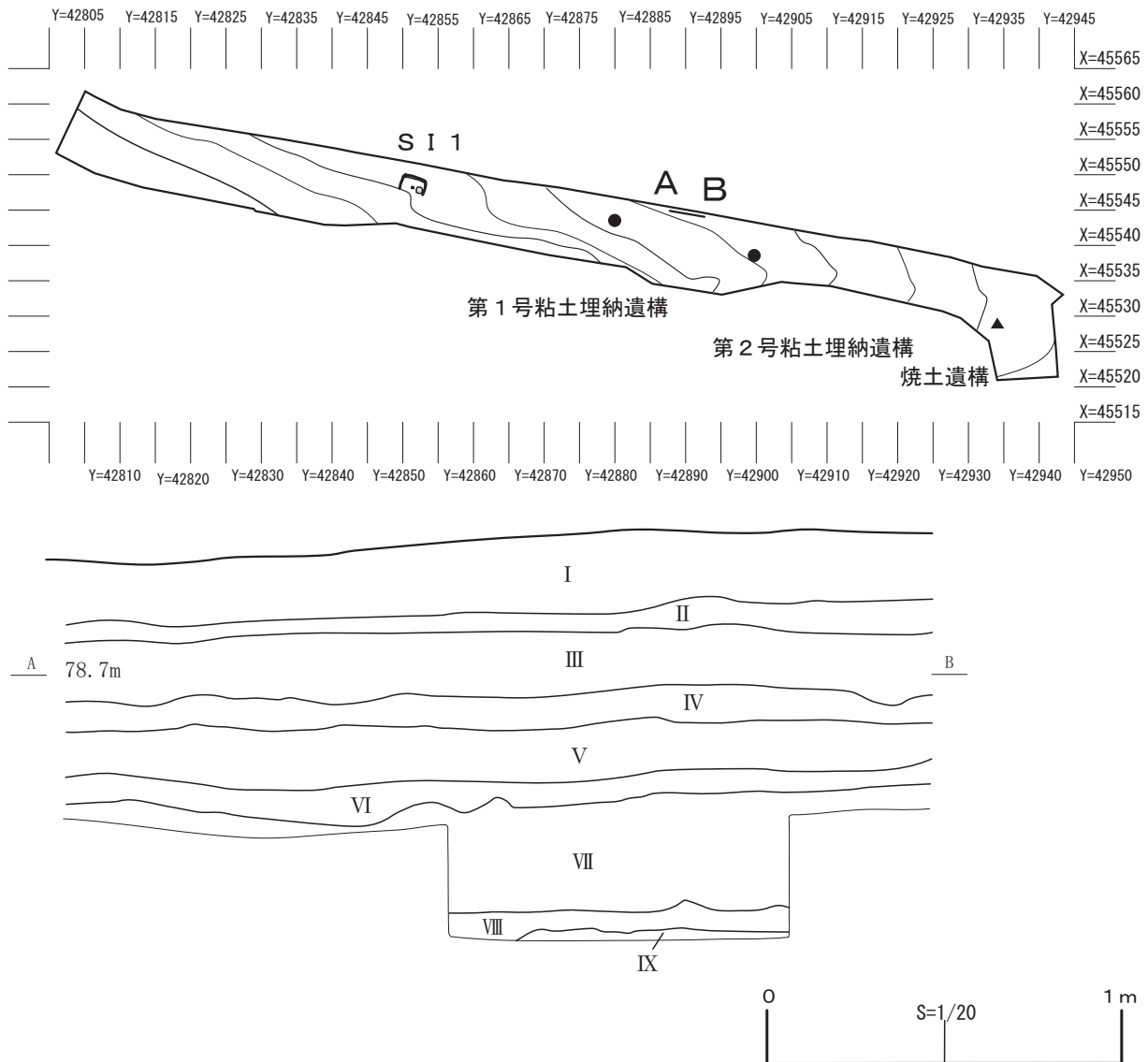


図26 上平遺跡の基本層序

第2節 調査方法

確認作業は人力で掘り上げた部分と重機で掘削した部分がある。粗掘り作業は、砂利などを含む表土、盛土、排土移動の除去などは重機で行い、これ以外の遺物散布が認められる部分では人力作業を行った。グリッド設定については、調査区の範囲が細長く、ほぼ等高線に沿った調査区であるため、道路の幅杭を基準に設定した。No21R4.8 (X = 45,554・Y = 42,837) とNo20R4.4 (X = 45,551・Y = 42,857) を直線で結んだ延長線と、A杭 (X = 45,545・Y = 42,893) からこの線に向かって直交した点をG-11とし、調査区の東に向かって数字を減らし、調査区東端では「G-1」となり、調査区の西に向かって数字を増やし、調査区西端では「G-28」となる。グリッドは5mごとに設定した。中央杭を挟んで北側を「L」、中央付近を「C」、南側を「R」とした。(図29)

工事用図面が世界測地系を元に作成されているため、世界測地系を基準にしている。標高は遺跡周辺にある測量基準点から、調査区内に移設した。

遺構確認は随時行い、調査区単位で、発見順に遺構名を付した。遺構名称は、遺構種別と番号を付した(例：S I 8 = 第8号竪穴住居跡)。

実測図の作成は、平面図は、株式会社アイシン精機「遺構実測支援システム」を用いてトータルステーションによる測量で行った。炉などの細かい平面図(おもに1/10)は簡易遣り方測量を行った。断面図は1/20で実測を行った。

遺構内・遺構外遺物ともグリッド・層位を明記して取り上げた。遺構内遺物は遺構堆積土の層位毎に、遺構外遺物は基本層序に依って取り上げている。この場合、遺構内遺物は遺構毎に1から番号を用い、遺構外遺物は1から通し番号を用いた。遺物は土器(P)・石器(S)・その他(C)と三種類に大別し、それぞれ1から番号を用いた。

調査に当たっては、土層の堆積状況を観察するため適宜セクションベルトを設定し、土層注記は『標準土色帖』を用いた。土層の名称は、基本層序については表土から下位にローマ数字を、遺構内堆積土については上位から下位に算用数字を付すことを原則とした。

写真撮影は適宜行うこととし、35mmカラーリバーサル、35mmモノクロームの各フィルムおよびデジタルカメラを使用した。必要に応じて6×7中判カメラを用いた。(佐藤)

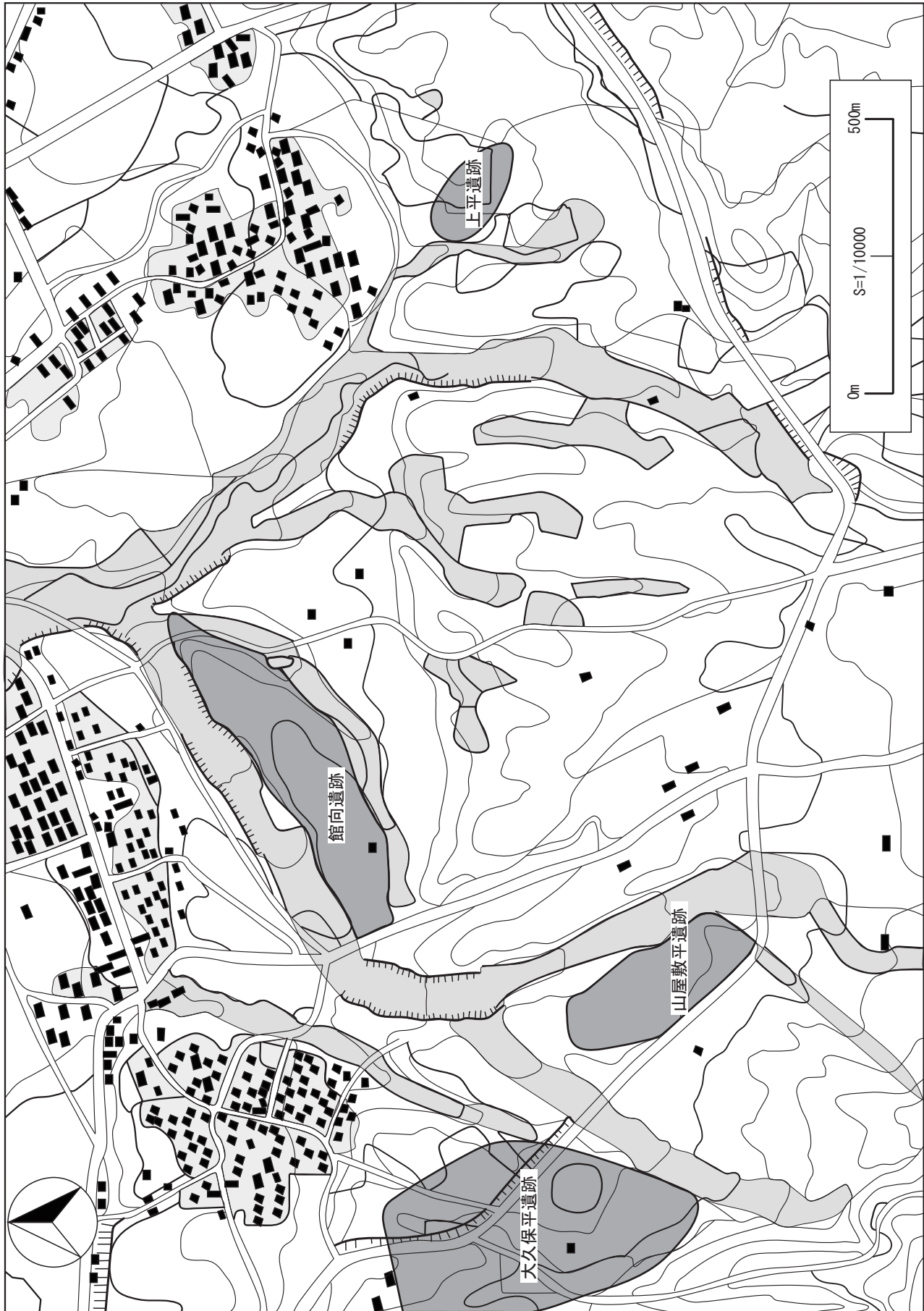


図27 上平遺跡の周辺地形

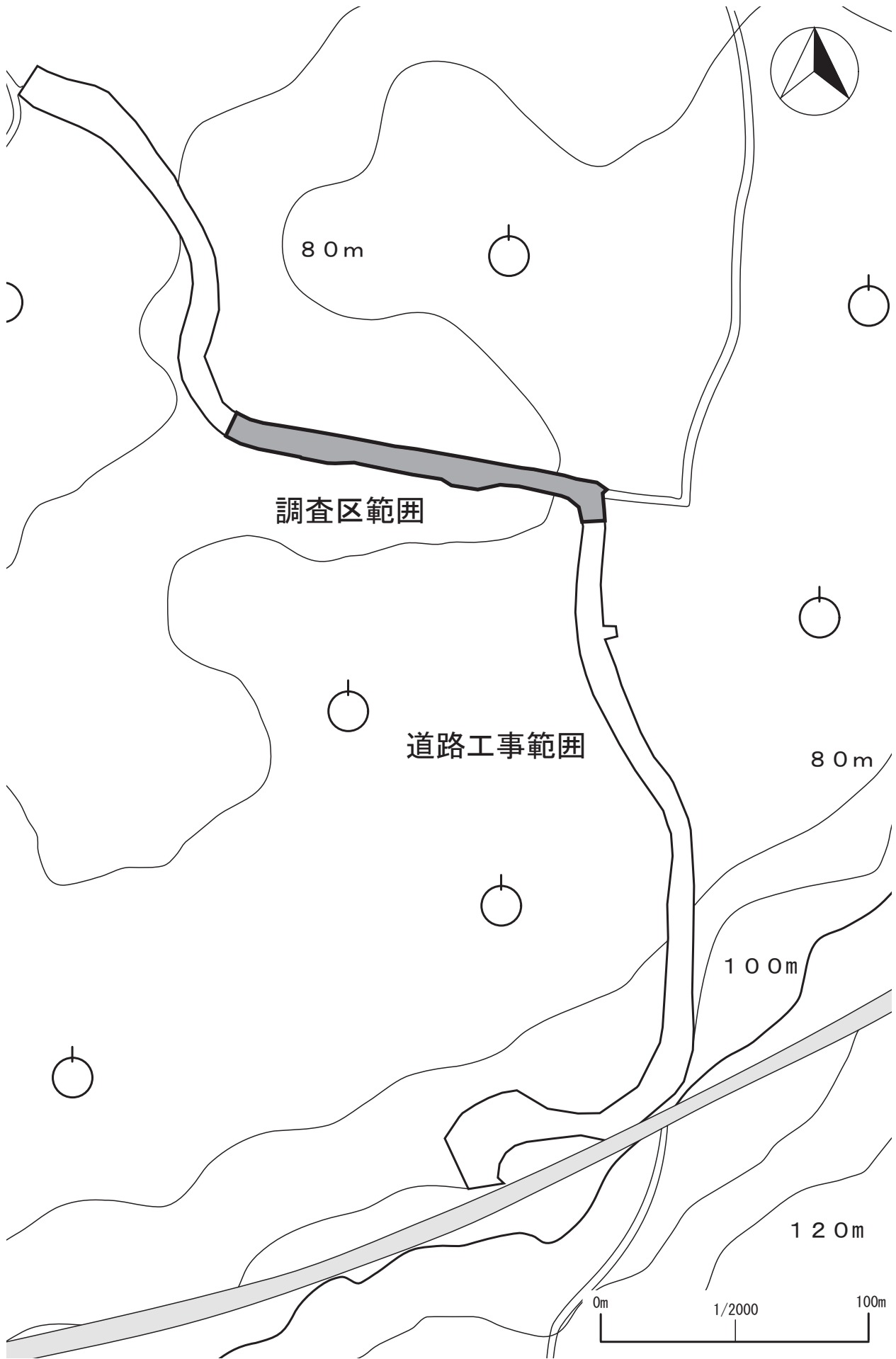


図28 上平遺跡の調査区域

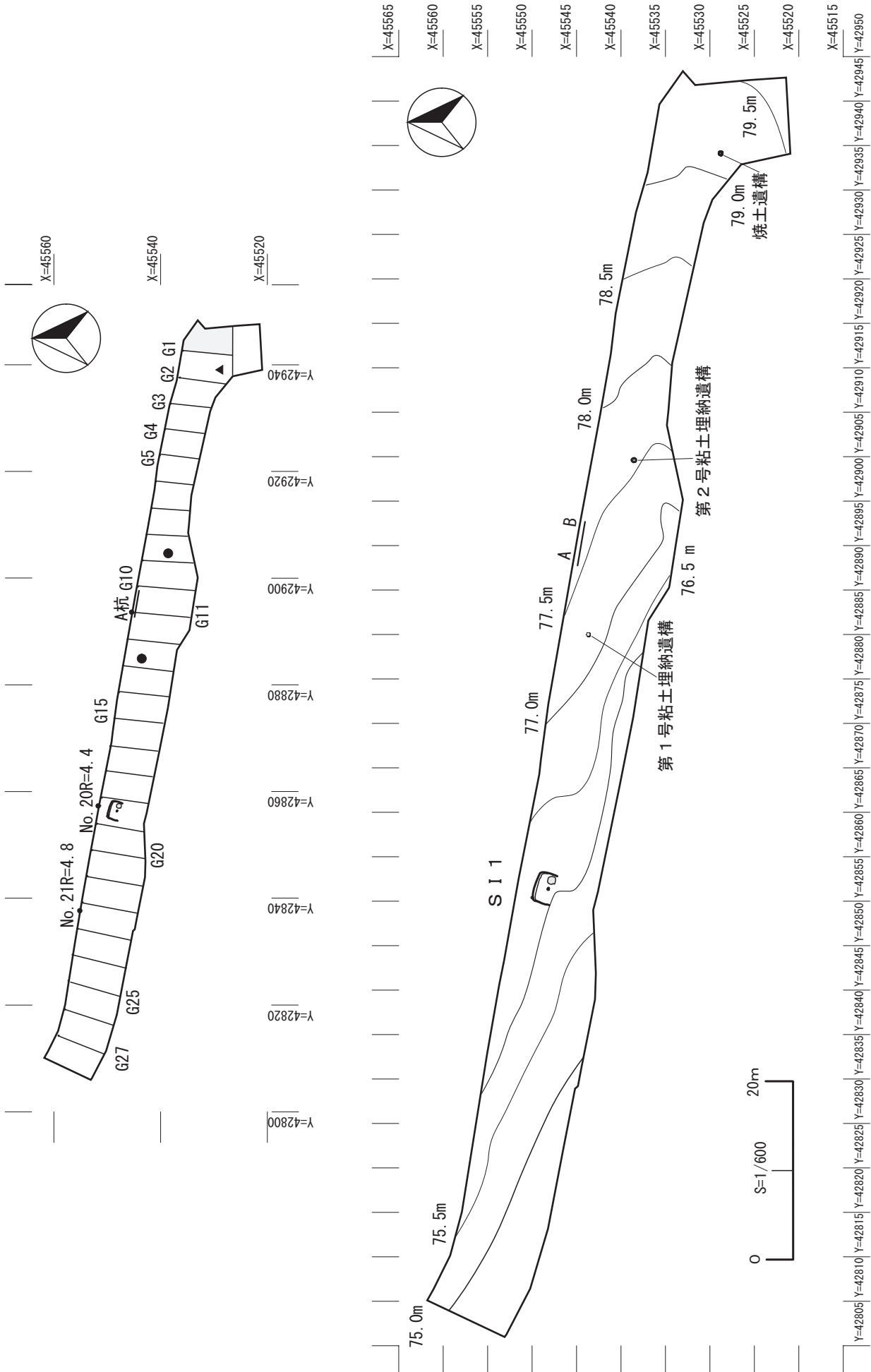


図29 上平遺跡の遺構配置

第3節 検出遺構と出土遺物

1 竪穴住居跡

第1号竪穴住居跡 (SI-1、図30・遺物図31)

[位置・確認] G-19グリッドに位置し、標高76mの傾斜地に立地する。Ⅲ層上面で確認した。傾斜地の南側が削平されており、住居跡の半分が検出されなかった。

[平面形・規模] 残存する平面形は長方形だが、元々推測される平面形は方形または長方形である。残存する東壁1.98m、西壁2.16m、北壁3.48mである。残存する床面積は5.9㎡である。

[壁・床面] 壁は床面から直線的に立ち上がる。確認面からの壁高は東壁28cm、西壁34cm、北壁33cmである。床面は、Ⅲ層とⅣ層の層理面に作られ、貼床や掘り方などはみられない。

[周溝] 東壁から西壁にかけてL字形の周溝を検出した。全体の長さ2.1m、幅5～34cm、深さ4～10cmである。

[柱穴] ピットが1個検出された。西壁と北壁の隅に位置する。Pit 2は北壁の外側で検出され、深さは31cmで、ピット底面は床面とほぼ同じ高さに位置する。堆積土は、黒色土の単層である。

[カマド] カマドは検出されなかったが、住居跡中央の床面で火を焚いた痕跡が検出された。火床面の直下の堆積層は掘り込んだような痕跡がみられ、この床面を何度か掘り返し、土を入れたりして火を焚いたものと考えられる。焼土範囲は円形で、径25cmほどである。掘り方は、平面形が楕円形で、長軸37cm、短軸26cm、深さ8cmである。

[堆積土] 黒褐色土を主体とした堆積土で、壁際ではⅥ層土の流れ込みが観察される。2層上部及び床面直上の火山灰は、分析の結果十和田a火山灰と同定された(第4章第2節;火山灰1・2)。4層中には多くの炭化粒を含み、1～3層は自然堆積層と考えられる。

[その他] 住居跡の東壁に偏って床面から床面直下にかけて火山灰範囲が検出された。この範囲の平面形はほぼ円形で、径99cm、深さは最大3cmである。火山灰は塊状で検出されており、床面では硬化していた。火山灰降下後に、竪穴住居跡床面に何らかの要因で混入したものと思われる。

[炭化材] 床面直上から出土した2点について樹種同定を行い、クマシデ属イヌシデ節・カエデ属という結果を得た(第4章第3節)。また、床面直上から出土した炭化材(C-1)について放射性炭素年代測定を行ったところ、平安時代中頃に相当するという結果を得た(第4章第1節)。

[出土遺物] 土師器・縄文土器は合計220点、5181.6g出土した。このうち土師器は、56点、700.2g、縄文土器は、164点、4481.4gの出土である。土師器は1・2層中から最も多く出土した。土師器は坏・甕が出土し、全体的に焼成が堅緻な破片資料である。坏は、ロクロ成形で、内面を黒色処理の後、ミガキを施しているものが多い(31-1～4)。底外面を持つ坏は31-6のみであり、回転糸切りの手法が用いられる。甕は、小型甕(31-7・10)と中型または大型の甕(31-8・9)の破片が出土している。小型甕(31-7・10)は、胴部がほぼ直線的に立ち上がる。器厚が厚く、内面が黒色処理されている。31-8・9は甕の口縁部で、ヘラナデやヨコナデが施される。31-8は頸部付近にケズリの痕跡がみられる。31-9は、成形時についたハケメの痕跡がみられる。縄文土器も堆積土中から出土した。縄文時代前期末葉(31-11～16)・中期後葉(31-17)・後期前葉(31-18～20)・後期(31-21～24)の土器が出土した。31-11～16の土器は、円筒下層d1式土器の深鉢の同一個体で、口

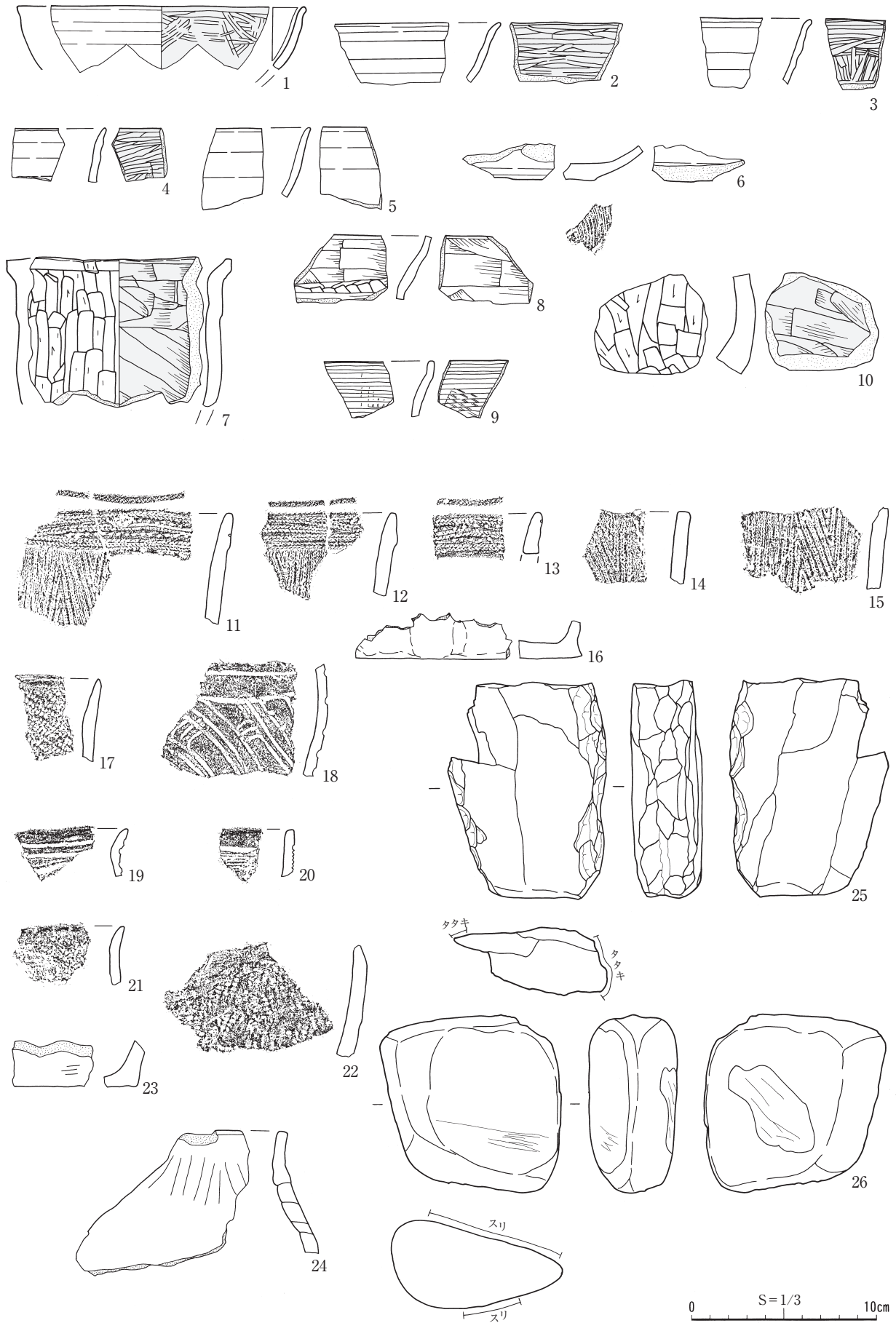


図31 第1号竪穴住居跡出土遺物

2 粘土埋納遺構

第1号粘土埋納遺構（SR-1、図32、遺物図33）

[位置・確認] G-13グリッドの南西向き緩斜面に位置し、標高は77.5mである。Ⅲ層中で埋設された土器の上部を確認した。埋設土器として調査したが、後述のように粘土埋納を目的とした遺構と考えられるため、呼称を変更する。

[規模・土器埋設状況] 確認面では、破損した土器が平らに並んでいるように見えたが、隣り合う破片が互いに接合するため、土器埋設後に何らかの事情で破損したものと考えている。また、周囲に硬化面やピットはなく、屋外に設置されたものと考えられる。土器は、直径約35cmの掘り方内にはほぼ正位で埋設されていた。

[堆積土] 掘り方の堆積土は黒色土である。土器内の堆積土は4層に分けられた。土器内部のほとんどは灰白色粘土で充填されており、土器と粘土の間には、炭化物を多く含む黒褐色土層がみられた。土器内部が密度の高い粘土で満たされていたことは、本遺構が粘土を埋納するための施設であり、墓としての機能は有していなかったことを示唆する。

[出土遺物] 埋設された土器は、口縁・胴部の一部を欠くものの、全面縄文施文の土器が一個体であり、ほぼ完形に復元された。重量は2,755.7gである。口縁部に最大径があり、外反気味に開いている。頸部でわずかにくびれ、胴部下半に膨らみをもつ。LR縄文が横位に施されている。縄文は節がつぶれ気味で、0段多条の可能性が高い。内外面にススが付着し、外面胴部下半は被熱により赤化している。本来は日常の煮炊きに使用された土器であり、特に欠損のないまま埋設土器に転用された状況が窺える。掘り方堆積土や土器内の堆積土には、別個体の土器や、その他の遺物は含んでいない。

[時期] 埋設された土器の帰属時期から、縄文時代後期初頭と考えられる。なお、第2号粘土埋納遺構との関連は不明である。

第2号粘土埋納遺構（SX-1、図32）

[位置・確認] G-9グリッドの南西向き緩斜面に位置し、標高は78mである。Ⅲ層中で灰白色粘土の円形プランを確認した。

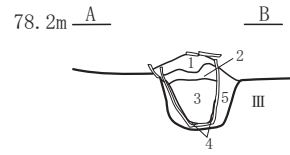
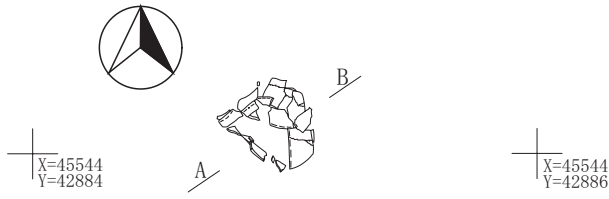
[平面形・規模] 開口部は60×50cmの楕円形、深さは20cmである。

[堆積土] 2層に分けられ、上部は黒褐色土を含む灰白色粘土、下部は黒褐色土である。粘土は人為的に充填されたものであろう。

[出土遺物] 出土しなかった。

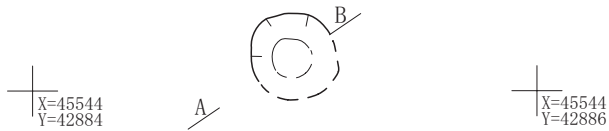
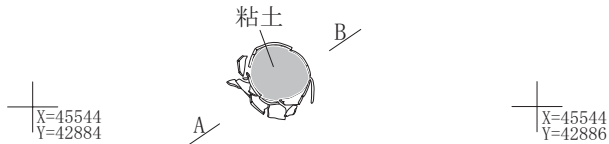
[時期] 帰属時期は不明である。同一グリッドでは縄文土器・土師器の出土がみられるため、縄文時代と古代のどちらかの所産と考えられる。第1号粘土埋納遺構との関連は不明であるが、近接した箇所にも営まれた類似遺構であることから、同一時期の可能性も考えられる。

第1号粘土埋納遺構



第1号粘土埋納遺構堆積土

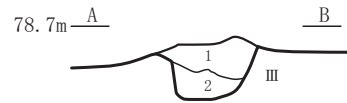
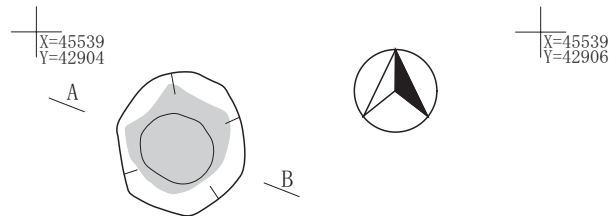
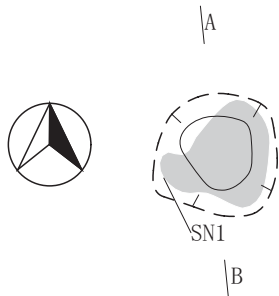
- 1層 黒色土 10YR2/1 中振浮石粒5%、白色浮石粒(φ1~3mm)1%混入。
- 2層 灰白色土 10YR7/1 粘土層。黒色土7%混入。
- 3層 灰白色土 10YR7/1 粘土層。
- 4層 黒褐色土 10YR2/3 炭または炭状の土が土器内面に付着。
- 5層 黒色土 10YR2/1 中振浮石粒3%混入。粘性あり(シルト質)。
- Ⅲ層 黒褐色土 10YR2/2 中振浮石粒7%混入。(砂質っぽい)



X=45530
Y=42939

第2号粘土埋納遺構

第1号焼土遺構



第2号粘土埋納遺構堆積土

- 1層 灰白色粘土 10YR7/1 黒褐色土15%混入。
- 2層 黒褐色土 10YR2/2 中振浮石粒2%混入。しまりなし。
- Ⅲ層 黒褐色土 10YR2/2 中振浮石粒1%以下混入。

X=45528
Y=42939



第1号焼土遺構堆積土

- 1層 黒色土 10YR1.7/1 5YR5/8明赤褐色焼土(φ5~10mm)1%、炭化物粒(φ10~15mm)1%混入。I層に相当(しまりなし)。
- 2層 明赤褐色土 5YR5/8 Ⅲ層が被熱している。焼土はまだらにあり、直上もしくは焼土内に炭化物(小枝状、長さ3cm以下)が10%混入。
- 3層 黒色土 10YR2/1 炭が腐ったような粘質土。葉の燃えかすのようなものがあり、低温で比較的新しいものか。

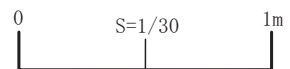


図32 第1・2号粘土埋納遺構・第1号焼土遺構

3 焼土遺構

第1号焼土遺構 (SN-1 図32)

[位置・確認] G-2グリッドの西向き緩斜面に位置し、標高は79mである。Ⅱ層掘り下げ中に確認した。

[平面形・規模] 焼土は、最大径40cmの不整形に広がっている。下部に直径50cm、ごく浅い皿状の掘り方を伴う。

[堆積土] 3層に分けられた。1・3層は黒色土、2層は焼土である。いずれもしまりのない土質で、3層には十分に炭化していない植物の葉のようなものを含んでいる。

[出土遺物] 加工痕のない角閃石の小片が1点出土している。

[時期] 帰属時期は不明であるが、堆積土の状況から、それほど古い遺構ではない可能性が高い。

(岡本)

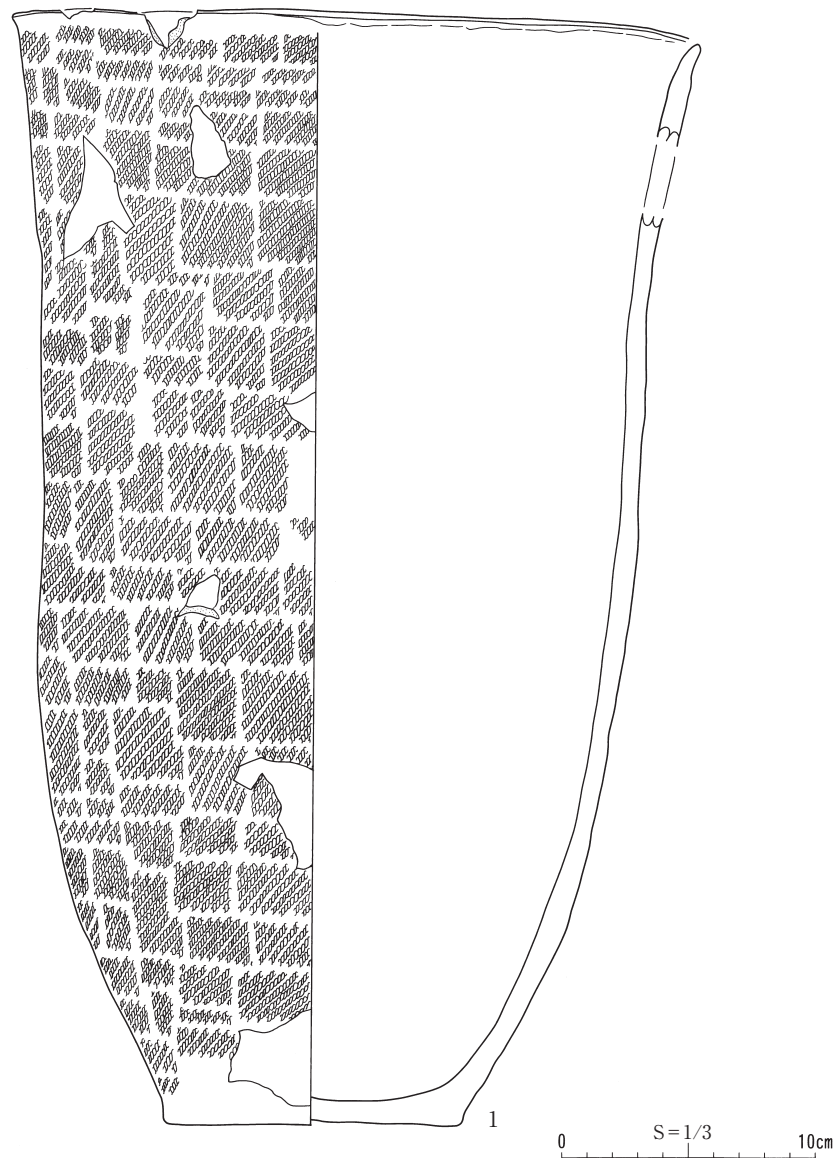


図33 第1号粘土埋納遺構出土遺物

第4節 遺構外出土遺物

1 縄文時代・弥生時代の遺物

(1) 縄文土器

縄文時代早期～晩期の土器が、1,423点、19,702.4g出土した。とくにG-16～19の第Ⅱ層中で、後期前葉の土器がまとまって出土した。早期・前期・中期・晩期の土器はごく少量である。

早期土器 (34-1～6)

貝殻腹縁圧痕文を施文した土器の一群で、早期中葉と思われる。1～3は口縁部で、1・2には平坦な口端には斜めに刺突が施される。口縁から胴部で使用された施文具とは異なり、薄手のものを使用されている可能性が高い。内外面ともにぶい赤褐色を呈し、焼成がやや軟質なもの(1～5)、堅緻なもの(6)がある。

前期土器 (34-7～15)

縄文原体や絡条体を口縁部に側面圧痕し、胴部で縦位・横位回転した深鉢形土器で、円筒下層d1式もしくは円筒下層式に相当すると思われる。7～9は口縁部に縄文原体を側面圧痕した土器で、9は単軸絡条体で施文している。7・8の口端部には刻目が加えられている。口縁部と胴部の境界には文様帯区画がみられ、7・8・13は、粘土をやや厚く貼付けている。このほか、刺突文を施文するものもあり、8・9などがみられる。10は文様帯境界と胴部に結束回転文を施文する。11・12は単軸絡条体第1A類(木目状撚糸文)を縦位に施文した円筒下層式の深鉢形土器である。

中期土器 (34-16～23・35-1～12)

中期後半、中期末～後期初頭に位置づけられる土器群である。34-16は、地文縄文に沈線で方形状に施文しており、大木10式併行型式の深鉢形土器である。34-17は、磨消縄文を施文した大木10式併行型式の深鉢形土器である。34-18は折り返し口縁で、口縁及び胴部に地文縄文が施文され、どちらかといえば後期初頭の深鉢形である。34-19～23は地文縄文のみの口縁部の土器である。34-19は緩やかな波状口縁である。地文縄文を縦位に施文する深鉢形土器は、34-19～21、横位に施文する土器が22・23である。34-20は口端部が丸味を帯び、接合帯が外面からも観察できる。34-21は口縁部にナデが施される。

35-1～9は地文縄文のみ施文された深鉢形土器の胴部である。35-1～8は縄文原体を縦位及び斜位に施文し、35-9は横位に施文する。35-1～3は同一個体で、丁度、胴部下半から上半へ屈曲する部位にあたる。この特徴から中期末のものと思われる。35-5～8は内面にも工具によるナデやミガキがみられ、外面から接合帯が観察されるものもある。35-8は復節縄文を斜位に施文し、焼成は堅緻で内外面ともにぶい黄橙色を呈しており、中期後半の深鉢形土器と思われる。35-9は、太さの異なる紐を撚り合わせた原体である。

35-10～12は、地文縄文のみ施文された深鉢形土器の底部である。35-10・11は、底面からやや外傾して立ち上がり、35-12は、底面からほぼ直線的に立ち上がる。形状から、35-10・11は中期後半～後期初頭、35-12は円筒上層式土器と思われる。

後期土器 (36-1～15、37-1～34、38-1～33)

後期前葉の十腰内第Ⅰ群土器が主体を占め、このほか後期中葉の十腰内第Ⅱ群土器が見られる。主

体を占めるのが深鉢形土器で、鉢・壺類はほとんど出土していない。

36-1～23は、沈線と縄文原体を回転施文して文様施文を行う深鉢形土器の一群で、十腰内第I群土器である。36-1～3、36-4～7は同一個体である。36-1～3は、六波状口縁と思われる深鉢形土器で、胴部下半は無文である。磨消縄文で、口縁部には長楕円形状の沈線文が横位に施文され、胴部上半には渦巻き状の文様が施される。36-4～7は、波状の折り返し状の口縁で、波頂部にS字状沈線が三条施文される。磨消縄文で、無節縄文が回転施文される。口縁部には長楕円形状の沈線文が横位に施文され、その間に逆三角形文が施される。36-8・10は口縁部に楕円形状の文様が施文される。34-9は、口縁部は比較的厚手で、34-4よりも直線的な文様施文が見られる。34-11は横位・斜位の直線的な沈線文様である。36-12は、胴部片で、36-1～3と同一個体の可能性がある。

36-13～15、37-1～28は、沈線のみで文様施文を行う深鉢形土器の一群で、十腰内第I群土器である。36-13～15、37-1～4、37-11・12、37-15・16、37-19～21は同一個体である。36-13～15、37-1～13は明瞭な沈線のみが施文されている土器群である。36-13～15は、波状口縁の深鉢形土器で、口縁部が肥厚し、胴部下半が無文である。四条の沈線を一単位として文様を施文している。波頂部直下の口縁部には渦巻き状文とここから延びる横位の沈線が施文される。胴部は弧状を呈した文様が施される。37-1～4は、波状の折り返し状口縁で、口縁部がやや肥厚する。口縁部には二条の横位沈線が施文され、胴部は、波頂部直下に垂下した縦位の沈線と斜位の三条の沈線を主体とした文様構成である。37-5・6は、やや小型の深鉢形で、口縁部に横位沈線と長楕円形状の沈線で文様が構成される。37-5は波頂部に粘土粒による突起があり、沈線で縁取りされる。器面全体が丁寧に磨かれている。37-7～12は、二条の沈線を一単位として横位に施文されている。37-10は沈線の施文方法が粗雑で、器面の調整も粗い。37-7～9・11・12は、器面全体が丁寧に磨かれている。37-13は口縁部直下に施文される水滴形をした文様構成と考えられる。37-14～28は、ハケメ状沈線が施文される土器群である。太い沈線で文様施文された区画内に細かいハケメ状沈線を施す。文様構成は他の土器群と大きな違いはなく、口縁部に横位沈線や楕円形状の文様を施文する。37-14～17がこれらの文様で構成されている。37-15は波頂部の口端に粘土紐を貼り付け、楕円形状にしている。37-17は口縁が肥厚し、沈線の文様施文は粗雑であるが、内外面とも器面が丁寧に磨かれている。37-18は、胴部の屈曲部分に文様帯区画として横位沈線が施され、下半が無文になる。37-19～21は小型の深鉢形土器で、ハケメ状沈線のほかに刺突文が施文される。37-23は波状口縁で、方形状に文様施文される。37-24～28は、横位に沈線が施される。太い沈線とハケメ状沈線の双方が施文されているもの(37-24～26)、ハケメ状沈線のみ施文される小型の深鉢形土器(37-27・28)などがある。

37-29～32は、後期前葉に相当する深鉢形土器の口縁で、37-29は波状口縁で、単節縄文を側面圧痕する。37-30は折り返し状口縁、37-31は無文である。37-32は、口端部が平坦でやや肥厚する器形で、胴部に単軸絡条体が施文される。

37-33・34は、後期前葉に相当する深鉢形土器の胴部である。37-33は無文で、器面全体が丁寧に磨かれている。37-34は胴部に単軸絡条体が施文され、底部付近は無文である。

38-1～11は、後期前葉に相当する深鉢形土器の底部である。胴部は38-5に単節縄文が施文されるほかはすべて無文である。全体に器面が磨かれている。底外面は簾状文がみられる38-3・10、

網代痕がみられる37-9のみで、他の土器は無文である。38-9は底部の内面に未穿孔の痕跡があり、再利用するためにつけられた可能性がある。

38-12～22は、十腰内第Ⅰ群土器の鉢形・浅鉢形・壺形土器などである。38-12・13は、同一個体の鉢形土器で口縁部付近が横位沈線、胴部が円形文などで文様構成される。38-14はやや内湾する鉢形土器で、横位にハケメ状沈線が施される。38-15は浅鉢形で、口縁部がやや肥厚し、横位沈線が施される。38-16は壺形で、口縁部付近に円形文・楕円形文、胴部に弧状文が施文される。38-17～20は鉢形や浅鉢形土器の台部及び底部である。38-17・18は台部が文様施文され、17は単節縄文と横位沈線、18は楕円形状の沈線が施される。38-19・20は浅鉢形土器の底部で、底外面は高台状に作られる。38-21・22は無文の台部で、内外面とも丁寧に磨かれている。

38-23～28は横位平行の縄文帯が重層するような磨消縄文を特徴とする十腰内第Ⅱ群の深鉢形土器で、口縁部は比較的平坦状である。38-23は波状口縁で、口縁形状に沿って沈線が施文される。38-24の縄文帯は縦位に弧状の沈線で区切られている。38-25は波状口縁で、口端部に刻み目等が施文されていなかったため、この群に含めた。36-26～28は磨消縄文で、横位沈線で縄文帯が狭くなっている。

38-30～33は、地文縄文のみを施文する土器群で、胎土や焼成から後期中葉の深鉢形土器に相当するものである。縄文原体は横回転で口端部が平坦である。38-29は口端部が肥厚し、山形状の口縁を持つ土器である。38-30は口端部が三角形状で内面に傾斜している。38-32は内面の口縁部に粘土帯が貼り付けられ、平坦状である。

晩期土器 (39-1～15)

39-2は、口縁部に羊歯状文らしい沈線が施文された大洞BC式の鉢形土器、39-3は三叉文に近いような文様の沈線が施文され、頸部に連続刻目文が施文された大洞BC式の壺形土器である。39-4は口縁～口頸部にかけて連続刻目状文、胴部に羊歯状文が施文された鉢形土器、39-1・5・6は口縁部に連続刻目状文が施文された晩期前半の深鉢形土器、39-7は胴部に雲形文が施文された大洞C1式の浅鉢形土器、39-8は口縁部に平行した横位沈線文や工字文が施文された大洞A式の鉢形土器である。39-9・10は、口端部に連続刻目が施される鉢形土器である。39-11は磨消縄文で平行横位沈線文が施文され、無文帯と縄文帯が交互にみられる。39-12は胴部に縄文原体が施文され、底部付近は無文である。39-13は壺形土器の口縁部から口頸部での口頸部が無文帯の壺形で、内外面の口縁部、頸部に平行沈線が施される晩期後半の土器である。39-14は台部で、平行横位沈線が施文され、台部周囲に小突起が貼り付けられており、大洞A'式である。39-15は晩期後半の縄文が縦走する深鉢形土器の底部である。

(2) 弥生土器 (39-16～18)

同一個体の壺形土器で、いずれも肩部付近が出土している。肩部上半に二条一単位で文様が施文される。弥生前期後半のものと思われる。

(3) 土製品 (39-20)

キノコ形土製品で、1点出土した。笠と石突の根元部分が残存している。笠は手づくねで円形状に成形した後、扁平な石突部分を笠と接合したものである。縄文時代後期前葉頃と思われる。

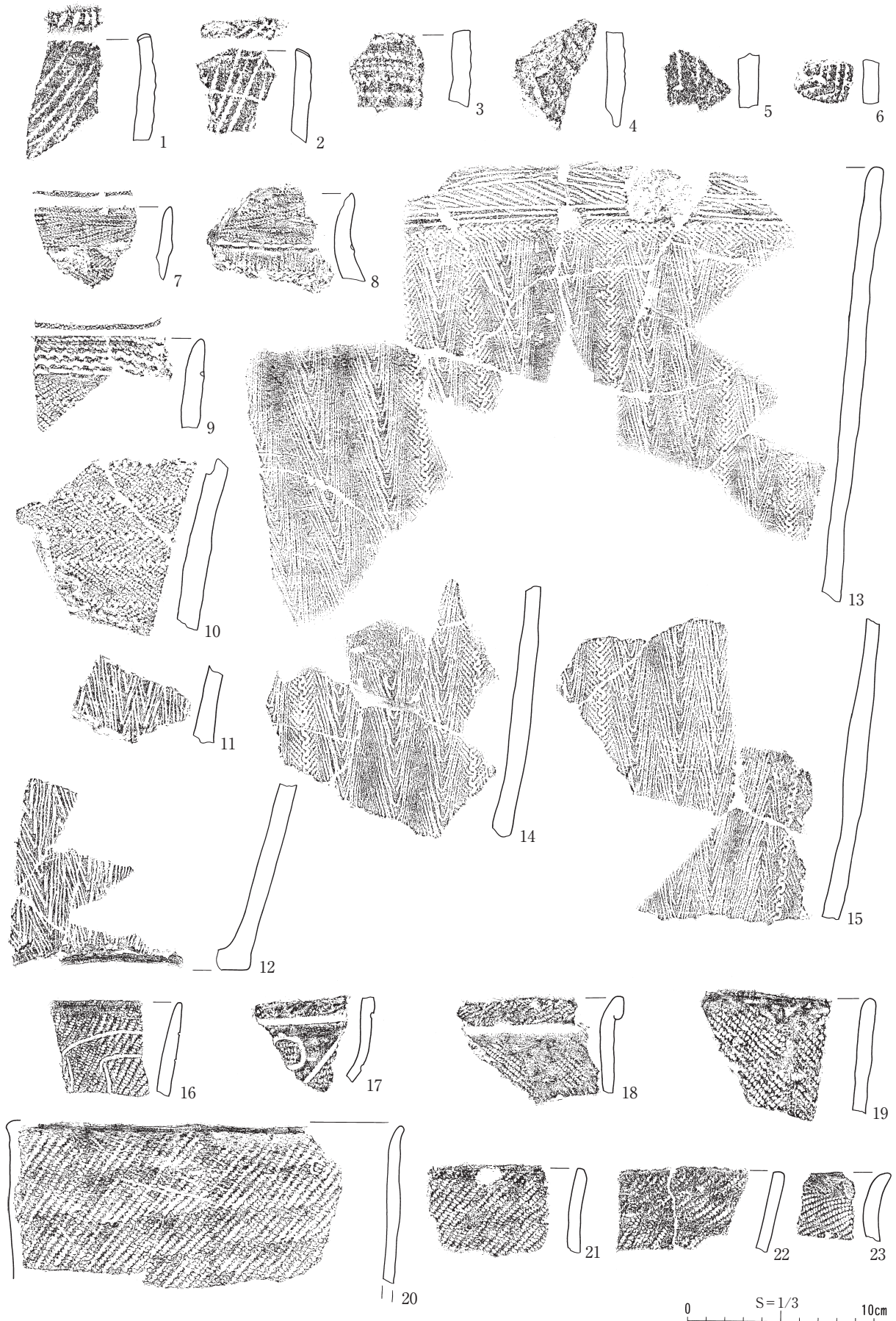


图34 遺構外出土土器 (1)

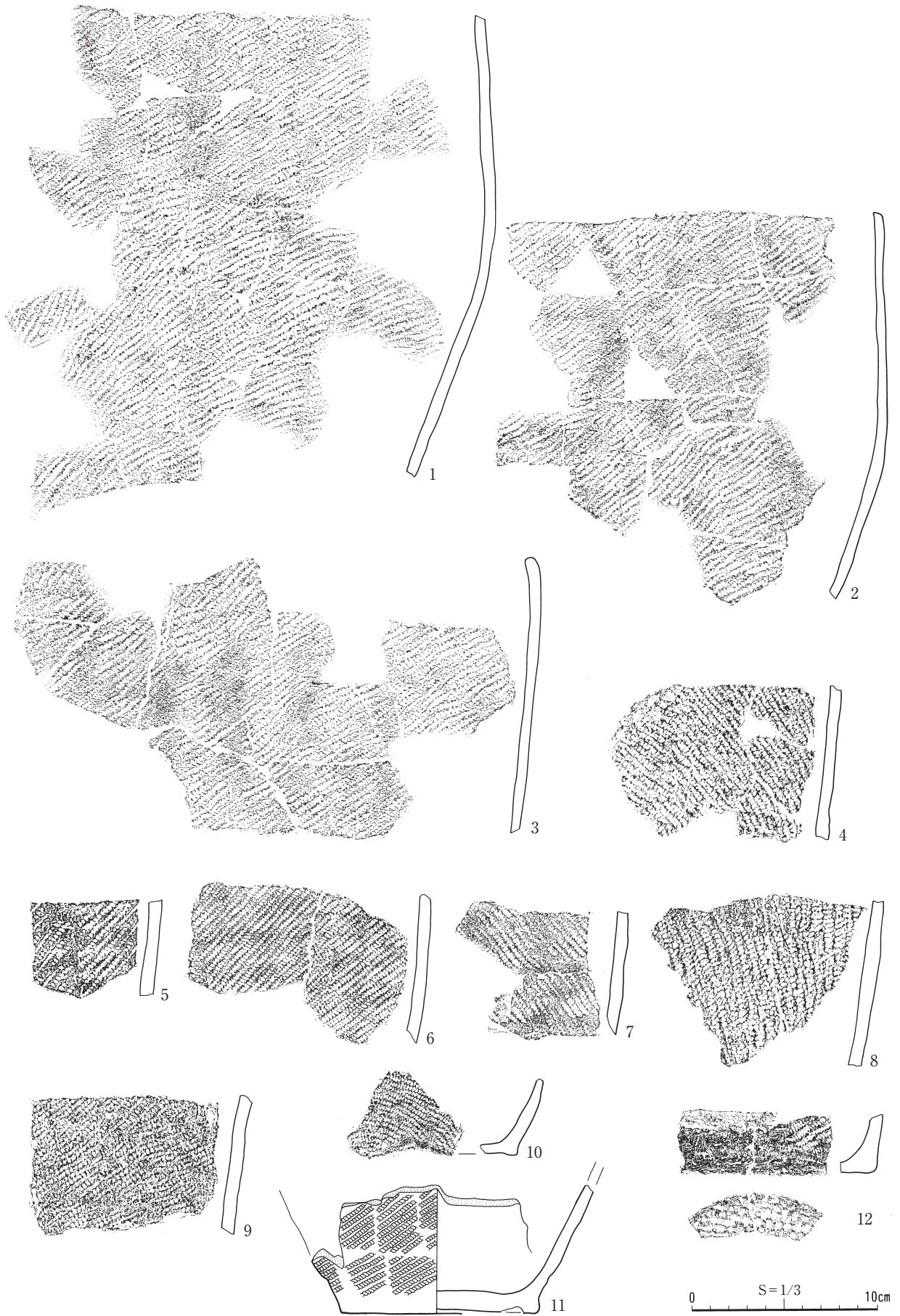


図35 遺構外出土土器 (2)

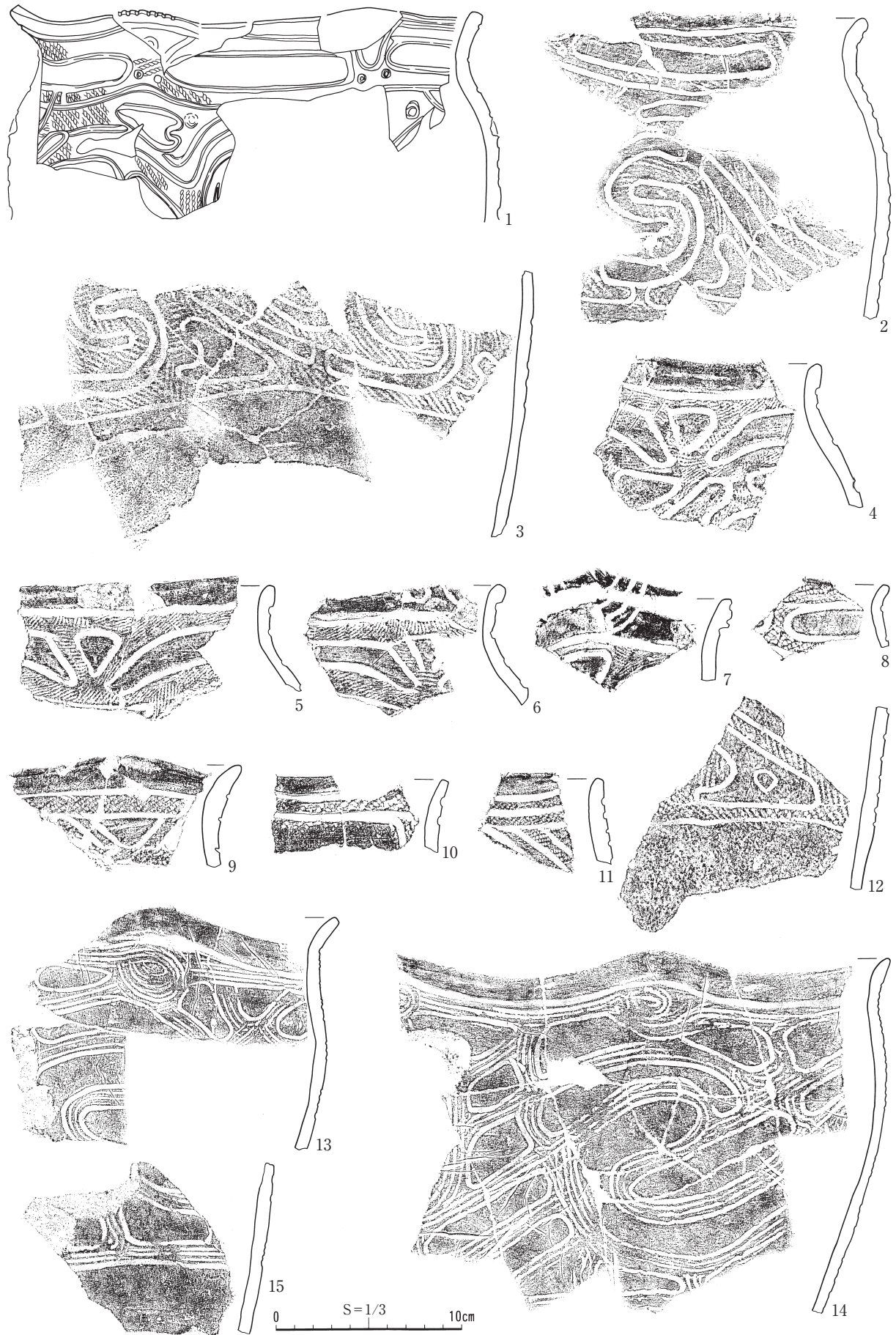
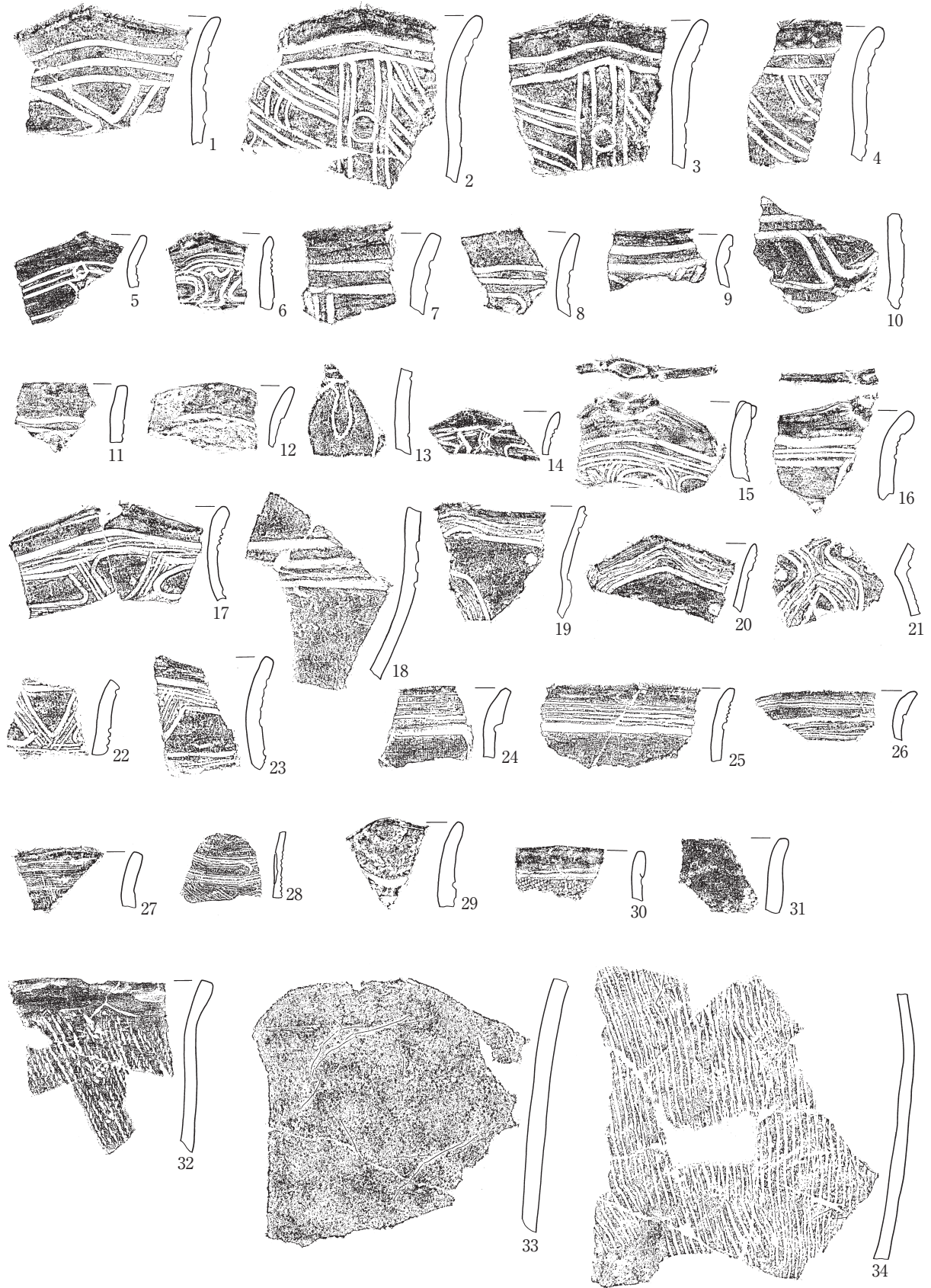


图36 遺構外出土土器 (3)



0 S=1/3 10cm

図37 遺構外出土土器 (4)

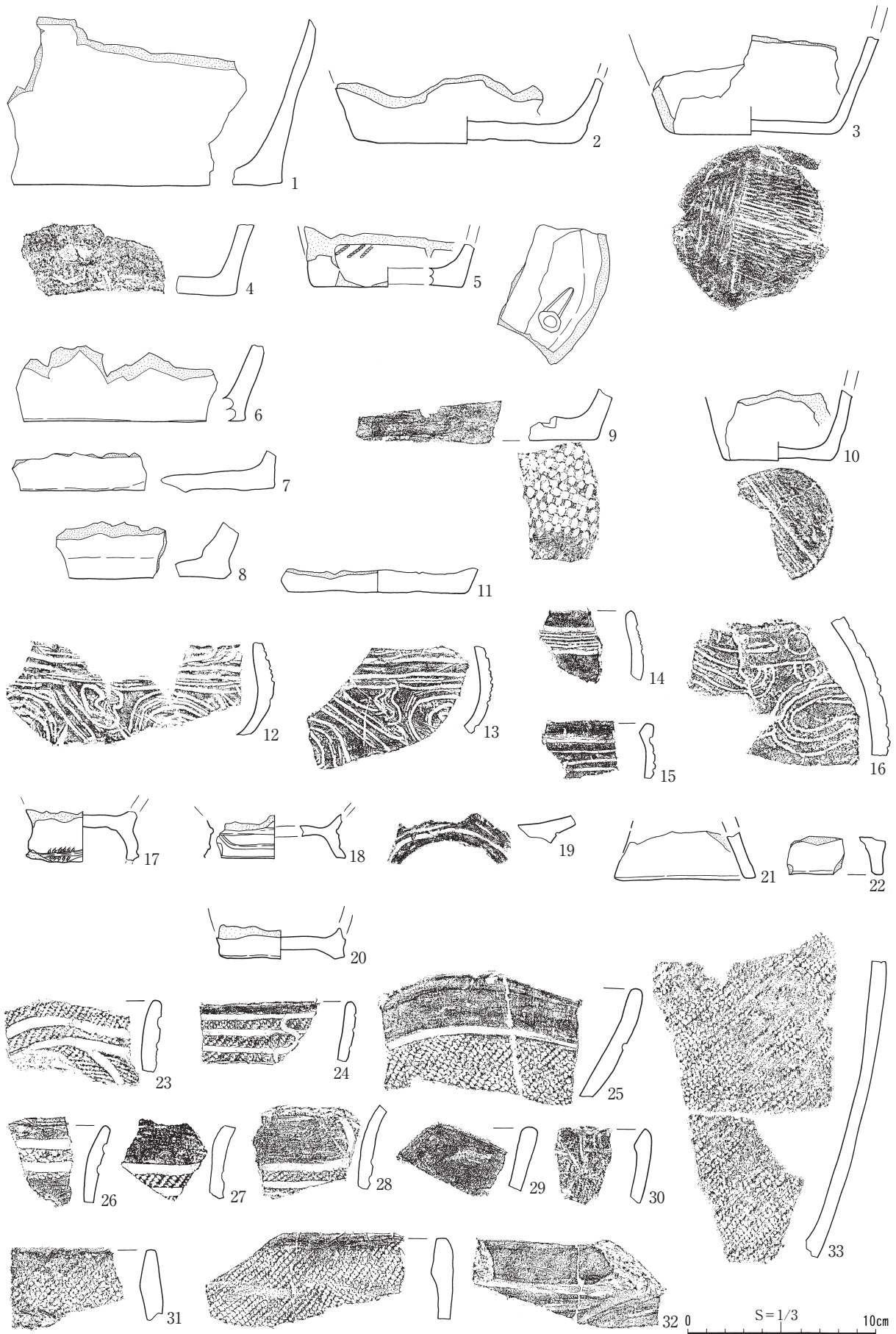


图38 遺構外出土土器 (5)



0 S=1/2 20 5cm 0 S=1/3 10cm

図39 遺構外出土土器 (6)・土製品

(4) 石器

剥片石器 (40-1 ~ 3)

総数14点出土し、内訳は定形石器が1点、使用痕のある剥片1点、石製品の可能性がある剥片1点、剥片11点である。石材は頁岩103.5g、チャート36gである。剥片11点以外はすべて図示した。

石匙 (40-1) 横型石匙が1点出土した。刃部の両端が欠損している。刃部及び摘み部の両面に押圧剥離を施す。

微小剥離痕のある剥片 (40-2) 縦長剥片の左側面に微小剥離痕がみられる。

石製品の可能性がある剥片 (40-3) 石製品の一部と思われる。剣部分に両側縁から押圧剥離を施し、断面形状が扁平な三角形になるよう成形し、裏面にも微小剥離痕を加えている。

礫石器 (40-4 ~ 42-5)

礫石器は総計19点出土した。

磨製石斧 (40-4) は1点出土した。基部が欠損しているが、細長い形状で丁寧に整形されている。

擦石類は15点出土した。40-5 ~ 9、41-2 ~ 6は上面に敲き痕がある。40-8、41-5は強い敲打痕が見られる。40-9は器面が全体的に滑らかである。41-7・8、42-1は右側面に擦り痕がある。42-2は全体的に被熱しており、赤褐色に変色している。42-4は上面中央部が窪み、凹面は滑らかである。下面もいくぶん窪んでおり、凹面は滑らかであるものの、中央部には敲打痕がある。

石皿類は2点出土している。42-3・5は欠損品で、上面が滑らかである。

2 古代以降の遺物

(1) 土師器 (43-1 ~ 26、44-1 ~ 10)

土師器は1,740点、14,138.6g出土した。ほとんどが、破片資料である。43-1 ~ 11は坏で、施文方法からいくつかの種類がみられる。外面にミガキを施し、内面を黒色処理しミガキを施したもの (43-3 ~ 5・7 ~ 9)、ロクロ成形後に内面を黒色処理しミガキを施したもの (43-6・10・11) に分かれる。43-10・11の底外面は回転糸切りである。ケズリで成形したものは、外面の調整がケズリのもの (43-1・2)、外面の調整にミガキが行われるもの (43-3 ~ 5、7 ~ 9) がある。器形には、口縁部直下が段状になるもの (43-1 ~ 6)、直線的なもの (43-7 ~ 9) がある。とくに形状が分かる43-1・2は丸底状を呈し、底外面はケズリやミガキで調整されている。43-12は高坏の小型台部である。

43-13 ~ 26、44-1 ~ 10は甕で、口縁部は内外面ともナデ調整、胴部は外面がケズリ、内面がナデ調整が主体である。43-13 ~ 26は中・大型甕の口縁部である。外面にヨコナデ調整、内面ヘラナデ調整が多い (43-18・20 ~ 23)。内面調整にヨコナデとヘラナデを行っているもの (43-15・16)、内面調整がヨコナデのみのもの (43-17・24・26) もある。43-19は、ヨコナデ調整のあとヘラナデを行っている。43-13・14・25は内面にハケメ状工具を使用している。ハケメ状工具はナデ調整の前に使用されているものと思われ、43-13 ~ 16・22の外面にその痕跡が残存する。口縁部形状は、口頸部から外反するもので、口端部でその形状が異なる。口端部で窄まり三角形の断面形となるもの (43-13 ~ 19)、口端部が丸味を帯びるもの (43-20)、口端部が上部に摘み出されているもの (43-



図40 遺構外出土石器 (1)



図41 遺構外出土石器 (2)

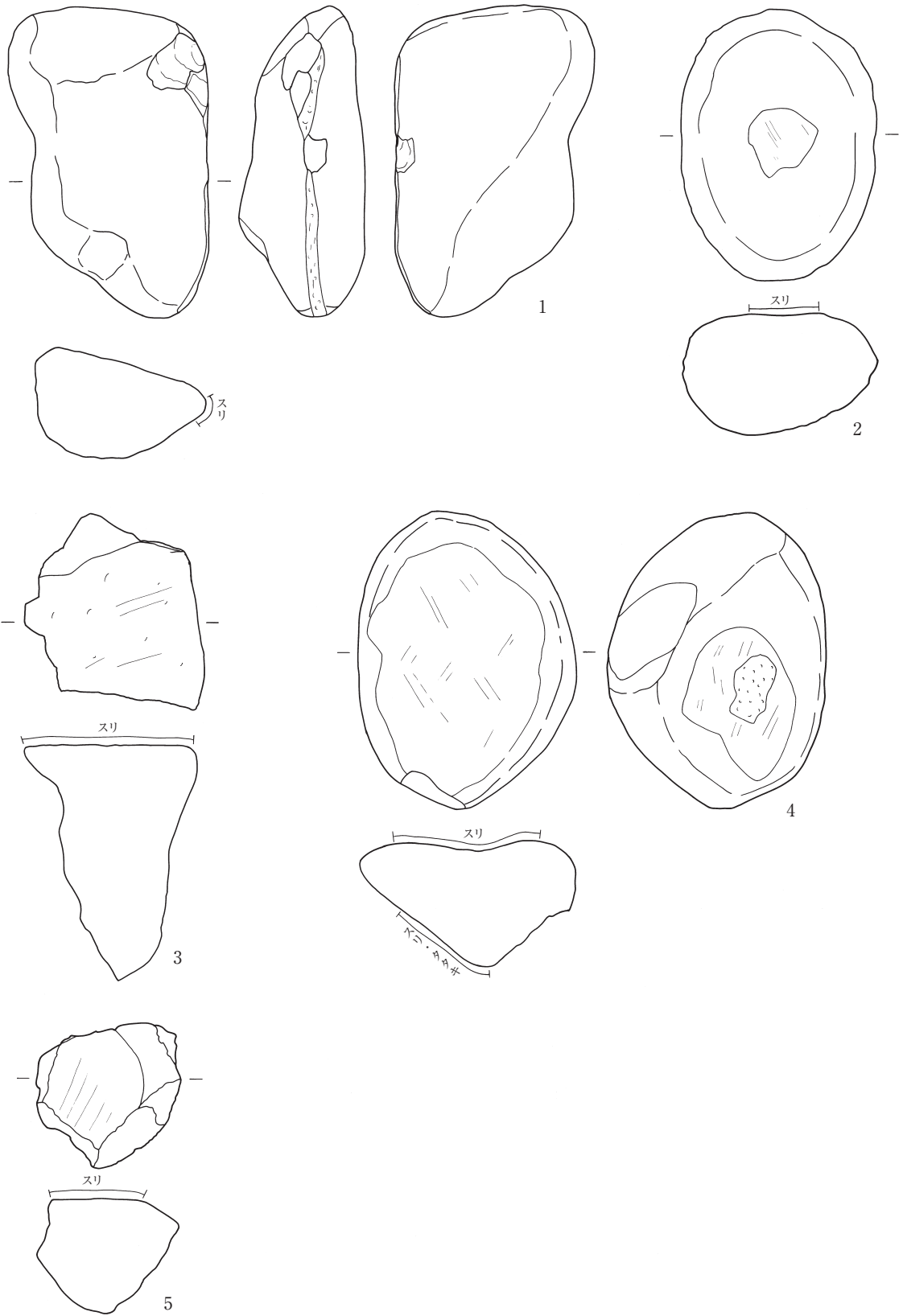


図42 遺構外出土石器 (3)

21・22・25)、口端部が平坦状のもの(43-20・23・24・26)がある。

44-1は小型甕で、底部から口縁部まで外傾して括れもなく立ち上がる。口端部は外側に摘み出される。44-2～5は中・大型甕の胴部である。この甕については胎土分析を行った(第4章第1節)。

44-2は沈線状の段を持ち、丸味を帯びた器形である。44-3は内外面ともハケメ状工具を使用している。44-4は頸部付近に二条の横位沈線を施文する。

44-6～10は中・大型甕の底部である。44-6は外面ミガキ、44-7～10は外面ケズリの技法を用いる。44-7・8・10は底外面ケズリ、44-9は木葉痕がつく。

(2) 須恵器(44-11～14)

須恵器の大甕片が7点出土し、この内4点を図示した。44-11は肩～頸部、他は胴部片である。外面には自然釉がかかり、内面はロクロ成形のほかはとくに調整されていない。

(3) 鉄製品(44-15～18)

4点出土し、うち2点は同一個体である。15は厚さがほぼ一定で、両端がわずかに薄くなっている。器種は不明である。16は断面形が長方形で徐々に細くなっている。楔の一部のような形状である。17・18は紡錘車の軸のような形状である。比較的直線的に延び、断面形は方形状である。

(4) 古銭(44-19)

近世の寛永通寶が1点出土した。

(礫石器-大平・その他-佐藤)

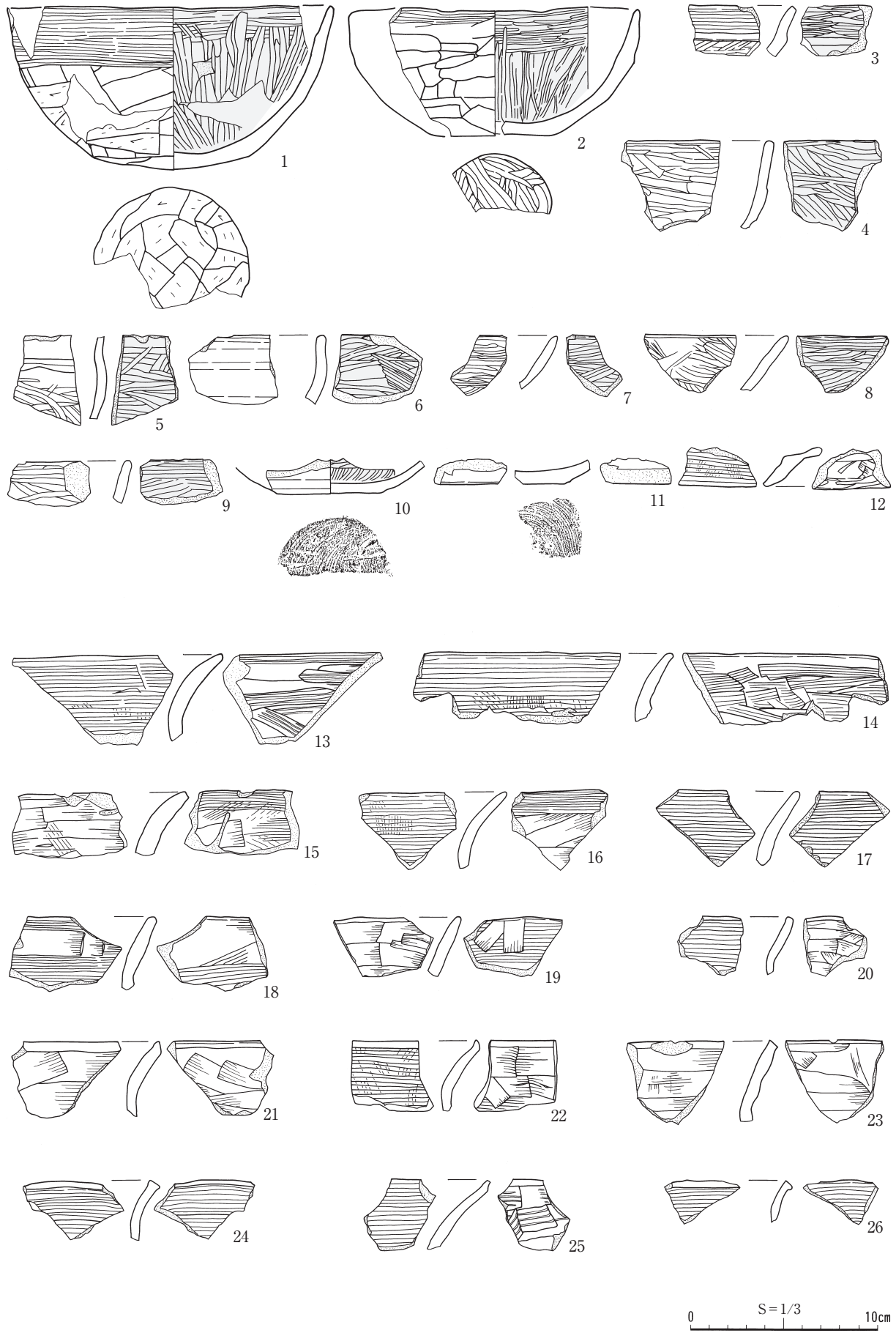


図43 遺構外出土土師器（1）

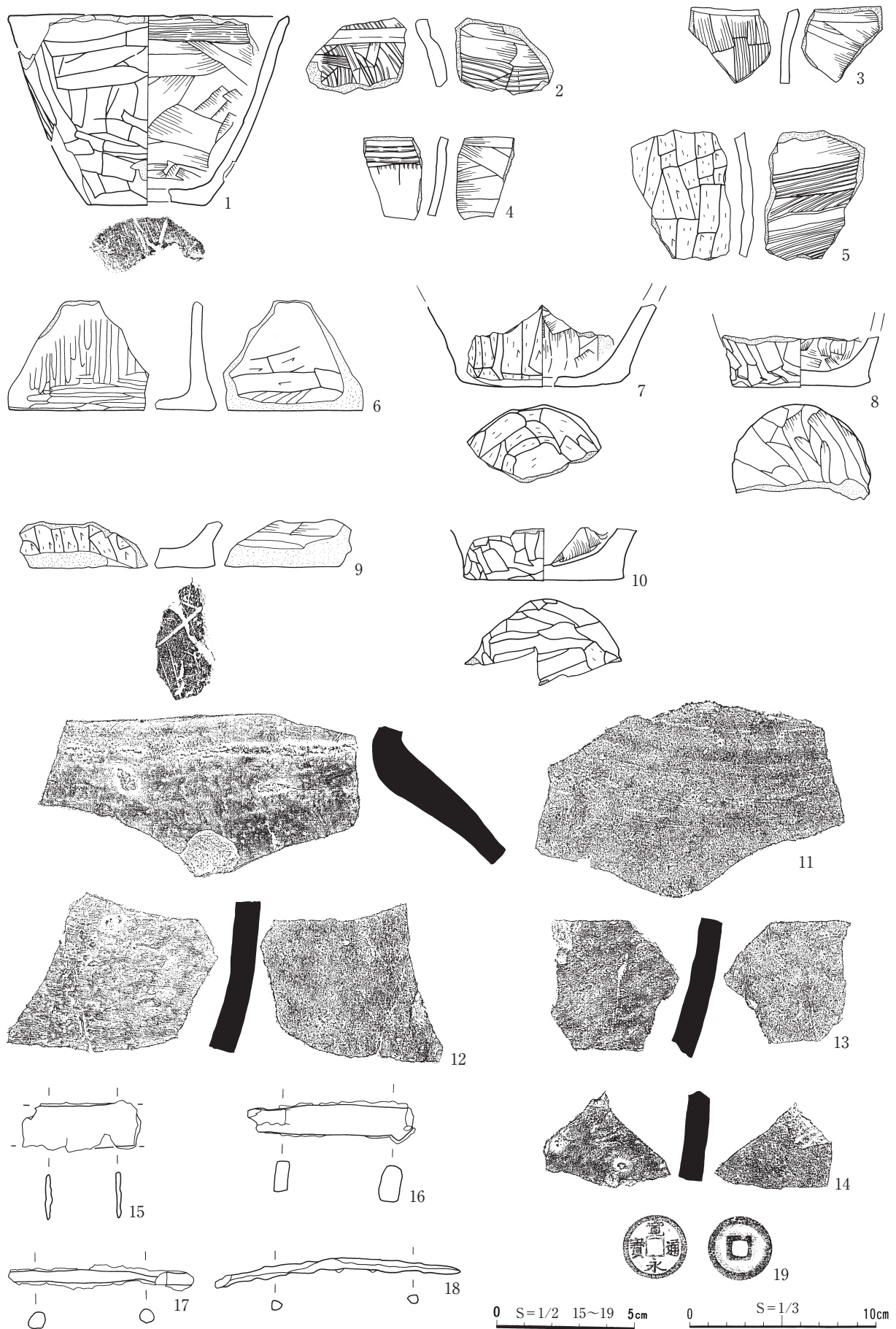


図44 遺構外出土土師器 (2)・須恵器・鉄関連遺物・古銭

第4章 理化学的分析

第1節 放射性炭素年代測定

株) 加速器分析研究所

(1) 遺跡の位置

山屋敷平遺跡は、青森県南部町大字高瀬字山屋敷平（北緯40° 24′ 22″、東経141° 19′ 13″）に所在する。上平遺跡は同町大字平字上平（北緯40° 24′ 39″、東経141° 20′ 14″）

(2) 遺跡の立地 両遺跡とも名久井山麓から延びる舌状台地上に立地する。

(3) 測定の意義 遺構の年代を確定し、集落の継続期間を明らかにしたい。

(4) 測定対象試料

測定対象試料は、山屋敷平遺跡第1号竪穴住居跡床面直上から出土した木炭（06YAMAYAT -1 : IAAA -61955）、第5号竪穴住居跡埋土4～5層から出土した木炭（06YAMAYAT -2 : IAAA -61956）である。住居跡はTo-a火山灰（AD950年前後）に覆われている。このほか、第6号竪穴建物跡床面から出土した住居構築材と考えられる炭化材（06YAMAYAT -3 : IAAA -70624）、上平遺跡の第1号竪穴住居跡から出土した住居構築材と考えられる炭化材（06KAMITAIR -1 : IAAA -70625）である。試料は採取後、アルミホイルに包み、ビニール袋に入れて保管された。

(5) 化学処理工程

- 1) メス・ピンセットを使い、根・土等の表面的な不純物を取り除く。最外年輪に最も近い部分をピックアップした。
- 2) AAA (Acid Alkali Acid) 処理。酸処理、アルカリ処理、酸処理により内面的な不純物を取り除く。最初の酸処理では1Nの塩酸（80℃）を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では0.001～1Nの水酸化ナトリウム水溶液（80℃）を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では1Nの塩酸（80℃）を用いて数時間処理した後、超純水で中性になるまで希釈し、90℃で乾燥する。
- 3) 試料を酸化銅1gと共に石英管に詰め、真空下で封じ切り、500℃で30分、850℃で2時間加熱する。
- 4) 液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用し、真空ラインで二酸化炭素（CO₂）を精製する。
- 5) 精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出（還元）し、グラファイトを作製する。
- 6) グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、加速器に装着し測定する。

(6) 測定方法

測定機器は、3MV タンデム加速器をベースとした¹⁴C - AMS 専用装置 (NEC Pelletron 9SDH - 2) を使用する。134個の試料が装填できる。測定では、米国国立標準局 (NIST) から提供されたシュウ酸(HOx II)を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。また、加速器により¹³C/¹²Cの測定も同時に行う。

(7) 算出方法

- 1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用した。
- 2) BP年代値は、過去において大気中の炭素14濃度が一定であったと仮定して測定された、1950年を基準年として遡る放射性炭素年代である。
- 3) 付記した誤差は、次のように算出した。
複数回の測定値について、 χ^2 検定を行い測定値が1つの母集団とみなせる場合には測定値の統計誤差から求めた値を用い、みなせない場合には標準誤差を用いる。
- 4) $\delta^{13}\text{C}$ の値は、通常は質量分析計を用いて測定するが、AMS測定の場合に同時に測定される $\delta^{13}\text{C}$ の値を用いることもある。
 $\delta^{13}\text{C}$ 補正をしない場合の同位体比および年代値も参考に掲載する。

同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差 (‰; パーミル) で表した。

$$d^{14}\text{C} = [({}^{14}\text{A}_S - {}^{14}\text{A}_R) / {}^{14}\text{A}_R] \times 1000 \quad (1)$$

$$d^{13}\text{C} = [({}^{13}\text{A}_S - {}^{13}\text{A}_{\text{PDB}}) / {}^{13}\text{A}_{\text{PDB}}] \times 1000 \quad (2)$$

ここで、 ${}^{14}\text{A}_S$: 試料炭素の¹⁴C濃度: (¹⁴C/¹²C)_S または (¹⁴C/¹³C)_S

${}^{14}\text{A}_R$: 標準現代炭素の¹⁴C濃度: (¹⁴C/¹²C)_R または (¹⁴C/¹³C)_R

$\delta^{13}\text{C}$ は、質量分析計を用いて試料炭素の¹³C濃度 (${}^{13}\text{A}_S = {}^{13}\text{C}/{}^{12}\text{C}$) を測定し、PDB (白亜紀のペレムナイト (矢石) 類の化石) の値を基準として、それからのずれを計算した。但し、加速器により測定中に同時に¹³C/¹²Cを測定し、標準試料の測定値との比較から算出した $\delta^{13}\text{C}$ を用いることもある。この場合には表中に〔加速器〕と注記する。

また、 $\Delta^{14}\text{C}$ は、試料炭素が $\delta^{13}\text{C} = -25.0$ (‰) であるとしたときの¹⁴C濃度 (${}^{14}\text{A}_N$) に換算した上で計算した値である。(1) 式の¹⁴C濃度を、 $\delta^{13}\text{C}$ の測定値をもとに次式のように換算する。

$${}^{14}\text{A}_N = {}^{14}\text{A}_S \times (0.975 / (1 + \delta^{13}\text{C} / 1000))^2 \quad ({}^{14}\text{A}_S \text{として} {}^{14}\text{C}/{}^{12}\text{C} \text{を使用するとき})$$

または

$$= {}^{14}\text{A}_S \times (0.975 / (1 + \delta^{13}\text{C} / 1000)) \quad ({}^{14}\text{A}_S \text{として} {}^{14}\text{C}/{}^{13}\text{C} \text{を使用するとき})$$

$$\Delta^{14}\text{C} = [({}^{14}\text{A}_N - {}^{14}\text{A}_R) / {}^{14}\text{A}_R] \times 1000 \text{ (‰)}$$

貝殻などの海洋が炭素起源となっている試料については、海洋中の放射性炭素濃度が大気中の炭酸ガス中の濃度と異なるため、同位体補正のみを行った年代値は実際の年代との差が大きくなる。多くの

場合、同位体補正をしない $\delta^{14}\text{C}$ に相当する BP 年代値が比較的良好でその貝と同一時代のものと考えられる木片や木炭などの年代値と一致する。

^{14}C 濃度の現代炭素に対する割合のもう一つの表記として、pMC (percent Modern Carbon) がよく使われており、 $\Delta^{14}\text{C}$ との関係は次のようになる。

$$\Delta^{14}\text{C} = (\text{pMC} / 100 - 1) \times 1000 (\text{‰})$$

$$\text{pMC} = \Delta^{14}\text{C} / 10 + 100 (\text{‰})$$

国際的な取り決めにより、この $\Delta^{14}\text{C}$ あるいは pMC により、放射性炭素年代 (Conventional Radiocarbon Age; yrBP) が次のように計算される。

$$T = -8033 \times \ln [(\Delta^{14}\text{C} / 1000) + 1]$$

$$= -8033 \times \ln (\text{pMC} / 100)$$

5) ^{14}C 年代値と誤差は、1桁目を四捨五入して10年単位で表示される。

6) 較正暦年代の計算では、IntCal04データベース (Reimer et al 2004) を使い、OxCalv3.10較正プログラム (Bronk Ramsey1995 Bronk Ramsey 2001 Bronk Ramsey, van der Plicht and Weninger2001) を使用した。

(8) 測定結果

1号住居跡床面直上から出土した木炭 (06YAMAYAT -1 : IAAA -61955) は、 $1330 \pm 30\text{yrBP}$ の ^{14}C 年代である (表1)。暦年較正年代 (2σ) では640AD ~ 730AD (74.6%)・740AD ~ 770AD (20.8%) であり、飛鳥時代中頃から奈良時代中頃に相当する。5号住居跡埋土4~5層から出土した木炭 (06YAMAYAT -2 : IAAA -61956) は $1220 \pm 30\text{yrBP}$ の ^{14}C 年代である。暦年較正年代 (2σ) では690AD ~ 750AD (23.8%)・760AD ~ 890AD (71.6%) であり、飛鳥時代末から平安時代前期前半に相当する。住居跡は To - a 火山灰 (AD950年前後) に覆われており、層序とも整合する。化学処理および測定内容、炭素含有量などに問題は無く、妥当な年代であると考えられる。

第6号竪穴建物跡床面から出土した炭化材 (06YAMAYAT -3 : IAAA -70624) は、 $330 \pm 30\text{yrBP}$ の ^{14}C 年代である。上平遺跡の第1号竪穴住居跡から出土した炭化材 (06KAMITAIRA -1 : IAAA -70625) は、 $1110 \pm 30\text{yrBP}$ の ^{14}C 年代である。暦年較正年代 ($1\sigma = 68.2\%$) は06YAMAYAT -3が1490AD ~ 1530AD (20.9%)・1550AD ~ 1640AD (47.3%) であり、室町時代後半から江戸時代初頭に相当する。また、06KAMITAIR -1が895AD ~ 925AD (28.0%)・935AD ~ 980AD (40.2%) であり、平安時代中頃に相当する。化学処理および測定内容、炭素含有量などに問題は無く、妥当な年代であると考えられる。

参考文献

Stuiver, M. and Polash, H.A. (1977) Discussion: Reporting of ^{14}C data. *Radiocarbon*, 19:355-363

Bronk Ramsey C. (1995) Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy: the OxCal Program, *Radiocarbon*, 37 (2) 425-430

Bronk Ramsey C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal, *Radiocarbon*, 43 (2A) 355 – 363

Bronk Ramsey C., J. van der Plicht and B. Weninger (2001) 'Wiggle Matching' *radiocarbon* dates, *Radiocarbon*, 43 (2A) 381 – 389

Reimer et al. (2004) IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0 – 26cal kyr BP. *Radiocarbon* 46, 1029 – 1058

試料番号	IAA Code No.	前処理方法	試料状態	処理前試料量	回収炭素量	燃焼量	精製炭素量	$\delta^{13}\text{C}(\text{‰})$ 〔加速器〕	Libby Age (yrBP)	(yrBP・丸め込みなし)	暦年校正 1 σ (yrcalBP)	暦年校正 2 σ (yrcalBP)
06YAMAYAT-1	IAAA-61955	AAA処理	乾燥	49.27mg	27.67mg	4.72mg	3.17mg	-26.69 ± 0.56	1330 ± 30	1326 ± 31	650AD – 700AD (55.0%) 740AD – 770AD (13.2%)	640AD – 730AD (74.6%) 740AD – 770AD (20.8%)
06YAMAYAT-2	IAAA-61956	AAA処理	乾燥	53.53mg	25.44mg	4.77mg	3.16mg	-26.98 ± 0.57	1220 ± 30	1223 ± 31	720AD – 740AD (9.6%) 770AD – 870AD (58.6%)	690AD – 750AD (23.8%) 760AD – 890AD (71.6%)

試料番号	IAA Code No.	前処理方法	試料状態	処理前試料量	回収炭素量	燃焼量	精製炭素量	$\delta^{13}\text{C}(\text{‰})$ 〔加速器〕	Libby Age (yrBP)	(yrBP・丸め込みなし)	暦年校正 1 σ (yrcalBP)	暦年校正 2 σ (yrcalBP)
No.06YAMAYAT-3	IAAA-70624	AAA処理	乾燥	44.7mg	33.18mg	4.59mg	3.21mg	-26.03 ± 0.84	330 ± 30	333 ± 28	1490AD – 1530AD (20.9%) 1550AD – 1640AD (47.3%)	1470AD – 1650AD (95.4%)
No.06KAMITAIR-1	IAAA-70625	AAA処理	乾燥	47.96mg	13.41mg	4.74mg	2.97mg	-27.16 ± 0.70	1110 ± 30	1107 ± 28	895AD – 925AD (28.0%) 935AD – 980AD (40.2%)	880AD – 1020AD (95.4%)

IAA CodeNo.	試料	BP年代および炭素の同位体比
IAAA-70624 #1809	試料採取場所：青森県三戸郡南部町大字高瀬 字山屋敷平山屋敷平遺跡 試料形態：木炭 試料名(番号)：06YAMAYAT-3	LibbyAge(yrBP) : 330 ± 30 $\delta^{13}\text{C}(\text{‰})$ 、(加速器) = -26.03 ± 0.84 $\Delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -40.6 ± 3.5 pMC(%) = 95.94 ± 0.35
	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	$\delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -42.7 ± 3.0 pMC(%) = 95.73 ± 0.30 Age(yrBP) : 350 ± 30
IAAA-70625 #1810	試料採取場所：青森県三戸郡南部町大字平 字上平上平遺跡 試料形態：木炭 試料名(番号)：06KAMITAIR-1	LibbyAge(yrBP) : 1,110 ± 30 $\delta^{13}\text{C}(\text{‰})$ 、(加速器) = -27.16 ± 0.70 $\Delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -128.8 ± 3.1 pMC(%) = 87.12 ± 0.31
	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	$\delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -132.6 ± 2.8 pMC(%) = 86.74 ± 0.28 Age(yrBP) : 1,140 ± 30

試料名	遺跡名	出土地	層位	番号
06YAMAYAT-1	山屋敷平遺跡	第1号竪穴住居跡	床面直上	C-3
06YAMAYAT-2	山屋敷平遺跡	第5号竪穴住居跡	4～5層	C-16
06YAMAYAT-3	山屋敷平遺跡	第6号竪穴建物跡	床面直上	C-1
06KAMITAIR-1	上平遺跡	第1号竪穴住居跡	床面火山灰範囲	C-1

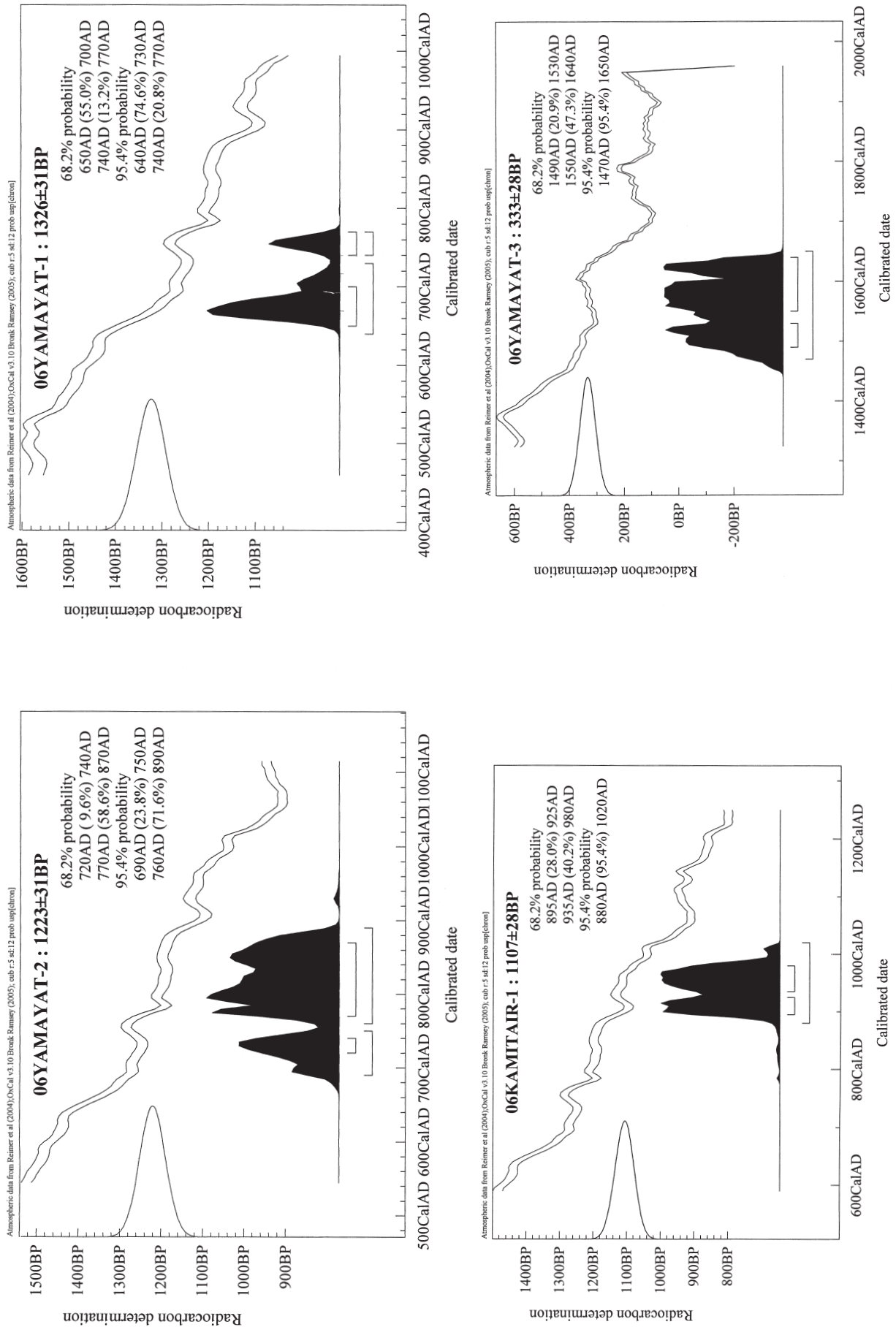


図45 放射性炭素年代測定グラフ

第2節 山屋敷平・上平遺跡出土の火山灰について

弘前大学・理工学部・地球環境学科
柴 正敏

南部町山屋敷平遺跡及び上平遺跡より採集された、火山灰サンプル11試料（上平遺跡2試料、山屋敷遺跡9試料）について、以下の観察を行った。

これら試料について、超音波洗浄器を用いて水洗し、粘土鉱物など数マイクロメートル以下の粒子を除去した後、偏光顕微鏡を用いて、火山ガラスの有無、火山ガラスが存在する場合にはその形態、構成鉱物の種類を観察・記載した。その結果を表1及び2に示した。火山ガラスは、その形態、屈折率、化学組成、共存鉱物などにより給源火山を推定することができる（町田・新井、2003）。

(1) 山屋敷平遺跡

ガラスの形態及び構成鉱物（表1）により、試料1～9は、十和田aテフラ起源のガラスよりなる。これら試料は、軽石型の火山ガラスを主とし、褐色ガラス（オブシディアン）を含む。斑晶鉱物は、斜長石、石英、斜方輝石、単斜輝石及び鉄鉱である。径0.5～1.5mmの軽石粒子を含む。

(2) 上平遺跡

ガラスの形態及び共存鉱物（表2）により、試料1及び2は、十和田aテフラ起源のガラスよりなる。これら試料は、軽石型の火山ガラスを主とし、褐色ガラス（オブシディアン）を含む。斑晶鉱物は、斜長石、石英、斜方輝石、単斜輝石及び鉄鉱である。径0.5～1.5mmの軽石粒子を含む。

(参考文献)

青木かおり・町田 洋（2006）、日本に分布する第四紀後期広域テフラの主元素組成— K_2O - TiO_2 図によるテフラの識別。地質調査研究報告、第57巻、第7/8号、239-258。

Machida, H. (1999). Quaternary widespread tephra catalog in and around Japan: Recent progress. 第四紀研究、第38巻、194-201。

町田 洋・新井房夫（2003）、新編火山灰アトラス—日本列島とその周辺—。東京大学出版会、pp.336。

柴 正敏・重松直樹・佐々木 実（2000）、青森県内に分布する広域テフラに含まれる火山ガラスの化学組成（1）。弘前大学理工学部研究報告、第1巻、第1号、11-19。

柴 正敏・中道哲郎・佐々木 実（2001）、十和田火山、降下軽石の化学組成変化—宇樽部の一露頭を例として—。弘前大学理工学部研究報告、第4巻、第1号、11-17。

表1 山屋敷平遺跡火山灰

試料No	採取場所	層位	構成鉱物及び火山ガラス	火山灰の帰属	備考	特記事項
1	第1号竪穴住居跡	-	ガラス(pm>bw)、褐色ガラス、斜長石、石英、斜方輝石、単斜輝石、鉄鉱	To-a	軽石粒子(0.5~1.0mm)	No.1火山灰1
2	第1号竪穴住居跡	2層上部	ガラス(pm>bw)、褐色ガラス、斜長石、石英、斜方輝石、単斜輝石、鉄鉱	To-a	軽石粒子(0.5~1.5mm)	No.2(白)火山灰2
3	第1号竪穴住居跡	2層下部	ガラス(pm>bw)、褐色ガラス、斜長石、石英、斜方輝石、単斜輝石、鉄鉱	To-a	軽石粒子(~0.5mm)	No.3(黄)火山灰3
4	第2号竪穴住居跡	-	ガラス(pm>bw)、褐色ガラス、斜長石、石英、斜方輝石、単斜輝石、鉄鉱	To-a	軽石粒子(~0.5mm)	火山灰4
5	第2号竪穴住居跡	2層上部	ガラス(pm>bw)、褐色ガラス、斜長石、石英、斜方輝石、単斜輝石、鉄鉱	To-a	軽石粒子(0.5~1.0mm)	火山灰5
6	第2号竪穴住居跡	2層下部	ガラス(pm>bw)、褐色ガラス、斜長石、石英、斜方輝石、単斜輝石、鉄鉱	To-a	軽石粒子(0.5~1.0mm)	火山灰6
7	第3号竪穴住居跡	1層	ガラス(pm>bw)、褐色ガラス、斜長石、石英、斜方輝石、単斜輝石、鉄鉱	To-a	軽石粒子(0.5~1.2mm)	火山灰7
8	第4号竪穴住居跡	2層	ガラス(pm>bw)、褐色ガラス、斜長石、石英、斜方輝石、単斜輝石、鉄鉱	To-a	軽石粒子(0.5~1.0mm)	火山灰8
9	第5号竪穴住居跡	2層	ガラス(pm>bw)、褐色ガラス、斜長石、石英、斜方輝石、単斜輝石、鉄鉱	To-a	軽石粒子(0.5~1.2mm)	火山灰9

pm:軽石型、bw:バブルウォール型、>:より多い、To-a:十和田aテフラ

表2 上平遺跡火山灰

試料No	採取場所	層位	構成鉱物	火山灰の帰属	備考	特記事項
1	第1号竪穴住居跡 G-19	床面直上	ガラス(pm>bw)、褐色ガラス、斜長石、石英、斜方輝石、単斜輝石、鉄鉱	To-a	軽石粒子(0.5~2.0mm)、プラントオパール	火山灰1
2	第1号竪穴住居跡 G-19	2層上部	ガラス(pm>bw)、褐色ガラス、斜長石、石英、斜方輝石、単斜輝石、鉄鉱	To-a	軽石粒子(0.5~1.5mm)	火山灰2

pm:軽石型、bw:バブルウォール型、>:より多い、To-a:十和田aテフラ

第3節 山屋敷平遺跡・上平遺跡から出土した炭化材の樹種

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

山屋敷平遺跡と上平遺跡は、共に名久井岳北東麓の台地上に位置する。上平遺跡は、馬淵川に合流する小支谷の北側（右岸）に位置し、平安時代の竪穴住居跡や縄文時代後期の粘土埋納遺構、焼土遺構が検出されている。山屋敷平遺跡は、上平遺跡の西側に約2km離れた台地上に位置し、縄文時代早期後葉の竪穴住居跡、奈良時代の竪穴住居跡、そのほか竪穴建物跡、土坑が検出されている。

今回の分析調査では、山屋敷平遺跡および上平遺跡の竪穴住居跡・竪穴建物跡から出土した炭化材を対象として樹種同定を実施する。

1. 試料 試料は、山屋敷平遺跡のSI-1～SI-6の床面等から出土した炭化材35点と、上平遺跡のSI-1から出土した炭化材2点の合計37点である。

2. 分析方法 湿っている試料については、自然乾燥させる。各炭化材の木口（横断面）・柀目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の配列等の特徴を観察し、現生標本と比較して種類を同定する。

なお、広葉樹の同定の際には、独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースを活用して該当種の検索を行う。また、同定の根拠となる顕微鏡下での木材組織の特徴等については、島地・伊東(1982)、Wheeler 他(1998)を参考にする。各樹種の木材組織の配列の特徴については、林(1991)、伊東(1995,1996,1997,1998,1999)も参考にする。

3. 結果 樹種同定結果を表1に示す。山屋敷平遺跡の炭化材は、針葉樹1種類（マツ属複維管束亜属）と広葉樹4種類（コナラ属コナラ亜属コナラ節・クリ・ネムノキ・タラノキ）に同定された。なお、通し番号45は、道管が認められることから広葉樹であるが、保存状態が悪く、道管配列等が観察できなかったため、種類の同定はできなかった。また、通し番号49にはマツ属複維管束亜属とクリの2種類が認められた。一方、上平遺跡の炭化材は、広葉樹2種類（クマシデ属イヌシデ節・カエデ属）に同定された。各種類の解剖学的特徴等を記す。

・マツ属複維管束亜属 (*Pinus subgen. Diploxylon*) マツ科

軸方向組織は仮道管と垂直樹脂道で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや緩やか。垂直樹脂道は晩材部に認められる。放射組織は柔細胞、仮道管、水平樹脂道、エピセリウム細胞で構成される。分野壁孔は窓状となる。放射仮道管内壁には鋸歯状の突起が認められる。放射組織は単列、1-15細胞高。

・クマシデ属イヌシデ節 (*Carpinus subgen. Euarpinus*) カバノキ科

散孔材で、管孔は単独または2-4個が放射方向に複合して配列し、年輪界付近で径を減少させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は対列状～交互状に配列する。放射組織は異性、1-3細胞幅、1-30細胞高のものと集合放射組織とがある。

・コナラ属コナラ亜属コナラ節 (*Quercus subgen. Lepidobalanus sect. Prinus*) ブナ科

環孔材で、孔圏部は1-3列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-20細胞高のものと複合放射組織とがある。

・クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属

環孔材で、孔圏部は3-4列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-15細胞高。

・ネムノキ (*Albizia julibrissin* Durazz.) マメ科ネムノキ属

環孔材で孔圏部は3-5列、孔圏外への移行は緩やかで、晩材部では単独または2-3個が複合して配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、1-3細胞幅、1-30細胞高。柔組織は周囲状で晩材部ではやや翼状となる。

・カエデ属 (*Acer*) カエデ科

散孔材で、管壁は薄く、横断面では角張った楕円形、単独および2-3個が複合して散在し、晩材部へ向かって管径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は対列~交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、1-5細胞幅、1-40細胞高。木口面において木繊維が不規則な紋様をなす。

・キハダ (*Phellodendron amurense* Ruprecht) ミカン科キハダ属

環孔材で、孔圏部は3-5列、孔圏外でやや急激に管径を減じたのち塊状に複合して接線・斜方向に紋様状に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、1-5細胞幅、1-40細胞高。

4. 考察 山屋敷平遺跡の竪穴住居跡および竪穴建物跡から出土した炭化材は、出土状況の詳細は不明であるが、住居構築材などに由来すると考えられている。これらの炭化材には、広葉樹のコナラ節が多く認められ、他に針葉樹の複維管束亜属、広葉樹のクリ、キハダ、ネムノキが認められた。コナラ節とクリの木材は、比較的重硬で強度が高い材質を有しており、クリでは耐朽性も高い。ネムノキはやや軽軟であり、強度や保存性が低い。キハダも軽軟で強度も低いが、耐朽性はクリに次いで高いとされる。複維管束亜属は、針葉樹としては重硬な部類に入り、材の保存性は中庸であるが、水中にある場合には永く持つ。

樹種同定結果を遺構別にみると、SI-1~SI-4では全ての炭化材がコナラ節であり、重硬で強度の高いコナラ節を選択していたことが推定される。SI-5もほとんどがコナラ節であり、SI-1~4と同様の木材利用が推定されるが、遺構内の土坑1から出土した炭化材のみはキハダであった。キハダの強度が低いこと等を考慮すると、コナラ節とは異なる用途に利用された可能性がある。一方、SI-6の炭化材にはクリ、ネムノキ、複維管束亜属が認められ、比較的种类構成が雑多になる傾向がある。また、他の住居跡で多くみられたコナラ節が1点も認められないことから、他の住居跡とは木材利用が異なるSI-6は明確に住居跡とはされておらず、種類構成の違いは遺構の性格・機能等の違いを反映した可能性がある。

山屋敷平遺跡から約2km離れた上平遺跡のSI-1から出土した炭化材は、イヌシデ節とカエデ属であり、いずれも重硬で強度の高い木材が利用されている。なお、山屋敷平遺跡で多く見られたコナラ

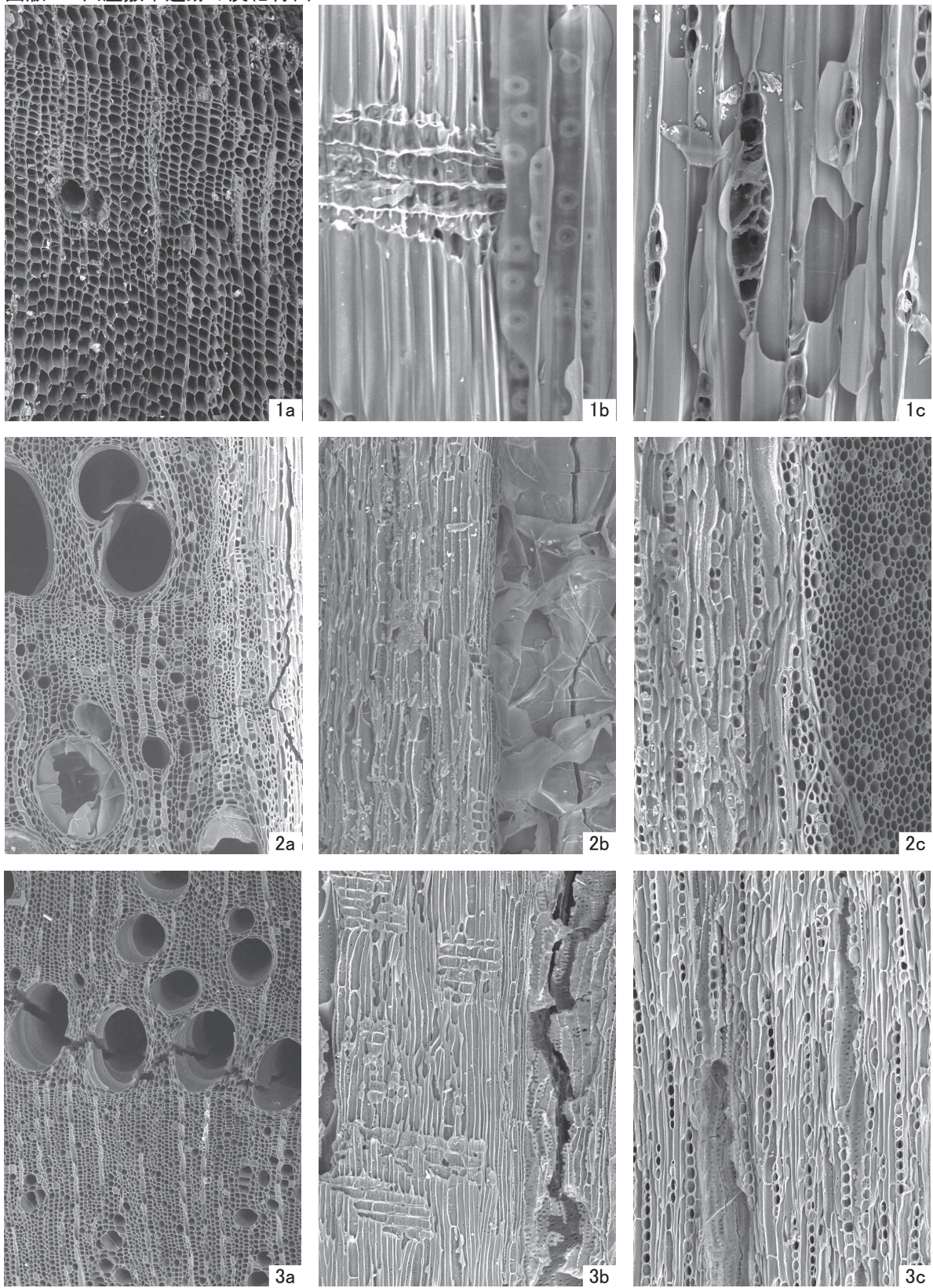
節は、上平遺跡では1点も認められなかったが、今回の同定試料数が少ないため詳細は不明である。

これまで、両遺跡周辺で同時期の住居構築材の樹種について調査した事例はほとんどない。一方、青森県内では、これまでも多くの遺跡で樹種同定を実施しており、コナラ節、クリ、カエデ属、サクラ属、モクレン属、スギ、アスナロなど多くの種類が確認されている。山屋敷平遺跡と上平遺跡で確認された種類のうち、ネムノキを除く6種類が既存の調査例でも確認されている。また、既存の調査例では、和野前山遺跡、相坂遺跡、弥次郎窪遺跡、砂子遺跡、大仏遺跡、牛ヶ沢（4）遺跡など、青森県内でも東部に位置する遺跡でコナラ節が多く利用される傾向がある（嶋倉、1984a,1984b,1990; 植田,2000; パリノ・サーヴェイ株式会社,2000,2004）。山屋敷平遺跡も青森県東部に位置しており、コナラ節の多い結果は既存の調査例とも調和的といえる。

引用文献

- 林 昭三,1991,日本産木材 顕微鏡写真集. 京都大学木質科学研究所.
- 伊東 隆夫,1995,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ. 木材研究・資料,31, 京都大学木質科学研究所,81-181.
- 伊東 隆夫,1996,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ. 木材研究・資料,32, 京都大学木質科学研究所,66-176.
- 伊東 隆夫,1997,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ. 木材研究・資料,33, 京都大学木質科学研究所,83-201.
- 伊東 隆夫,1998,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ. 木材研究・資料,34, 京都大学木質科学研究所,30-166.
- 伊東 隆夫,1999,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ. 木材研究・資料,35, 京都大学木質科学研究所,47-216.
- パリノ・サーヴェイ株式会社,2000,大仏遺跡から出土した木材・種実の種類.「八戸市埋蔵文化財調査報告書第84集 人首沢遺跡・毛合清水（3）遺跡・大仏遺跡」,八戸市教育委員会,263-269.
- パリノ・サーヴェイ株式会社,2004,牛ヶ沢（4）遺跡出土炭化材の樹種.「八戸市埋蔵文化財調査報告書第104集 牛ヶ沢（4）遺跡Ⅲ」,八戸市教育委員会,245-249.
- Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E. (編),2006,針葉樹材の識別 IAWA による光学顕微鏡の特徴リスト.伊東 隆夫・藤井 智之・佐野 雄三・安部 久・内海 泰弘（日本語版監修）,海青社,70p. [Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E. (2004) *IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification*].
- 島地 謙・伊東 隆夫,1982,図説木材組織. 地球社,176p.
- 嶋倉 巳三郎,1984a,和野前山遺跡から出土した炭化材の樹種.「青森県埋蔵文化財調査報告書第82集 和野前山遺跡調査報告書」,青森県教育委員会・青森県埋蔵文化財調査センター,318.
- 嶋倉 巳三郎,1984b,明戸・相坂遺跡出土炭化植物質.「和田市埋蔵文化財発掘調査報告書第3集 明戸遺跡発掘調査報告書」,十和田市教育委員会,85-86.
- 嶋倉 巳三郎,1990,弥次郎窪遺跡から出土した炭化材の樹種.「青森県埋蔵文化財調査報告書128集 弥次郎窪遺跡」,青森県教育委員会・青森県埋蔵文化財調査センター,159-160.
- 植田 弥生,2000,青森県南郷村砂子遺跡出土炭化材の樹種同定.「青森県埋蔵文化財調査報告書第280集 砂子遺跡」,青森県埋蔵文化財調査センター・青森県教育委員会,304-306.
- Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E. (編),1998,広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡の特徴リスト.伊東 隆夫・藤井 智之・佐伯 浩（日本語版監修）,海青社,122p. [Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E. (1989) *IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification*]

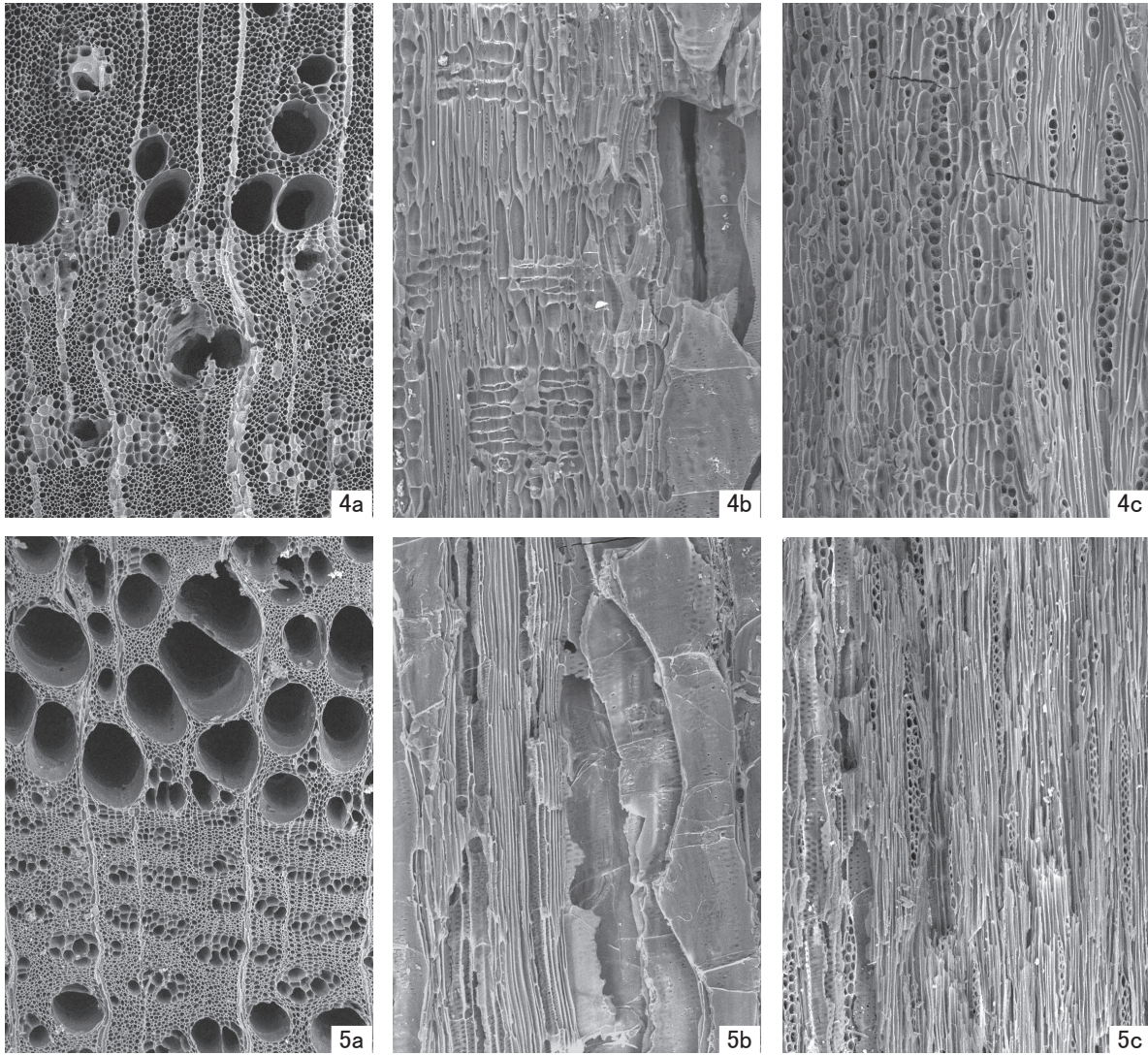
図版46 山屋敷平遺跡の炭化材(1)



1. マツ属複維管束亜属(通し番号49)
 2. コナラ属コナラ亜属コナラ節(通し番号27)
 3. クリ(通し番号47)
- a: 木口, b: 柱目, c: 板目

100 μ m:1-3a
 100 μ m:2-3b,c
 100 μ m:1b,1c

図版47 山屋敷平遺跡の炭化材(2)



4. ネムノキ(通し番号48)

5. キハダ(通し番号46)

a: 木口, b: 柁目, c: 板目

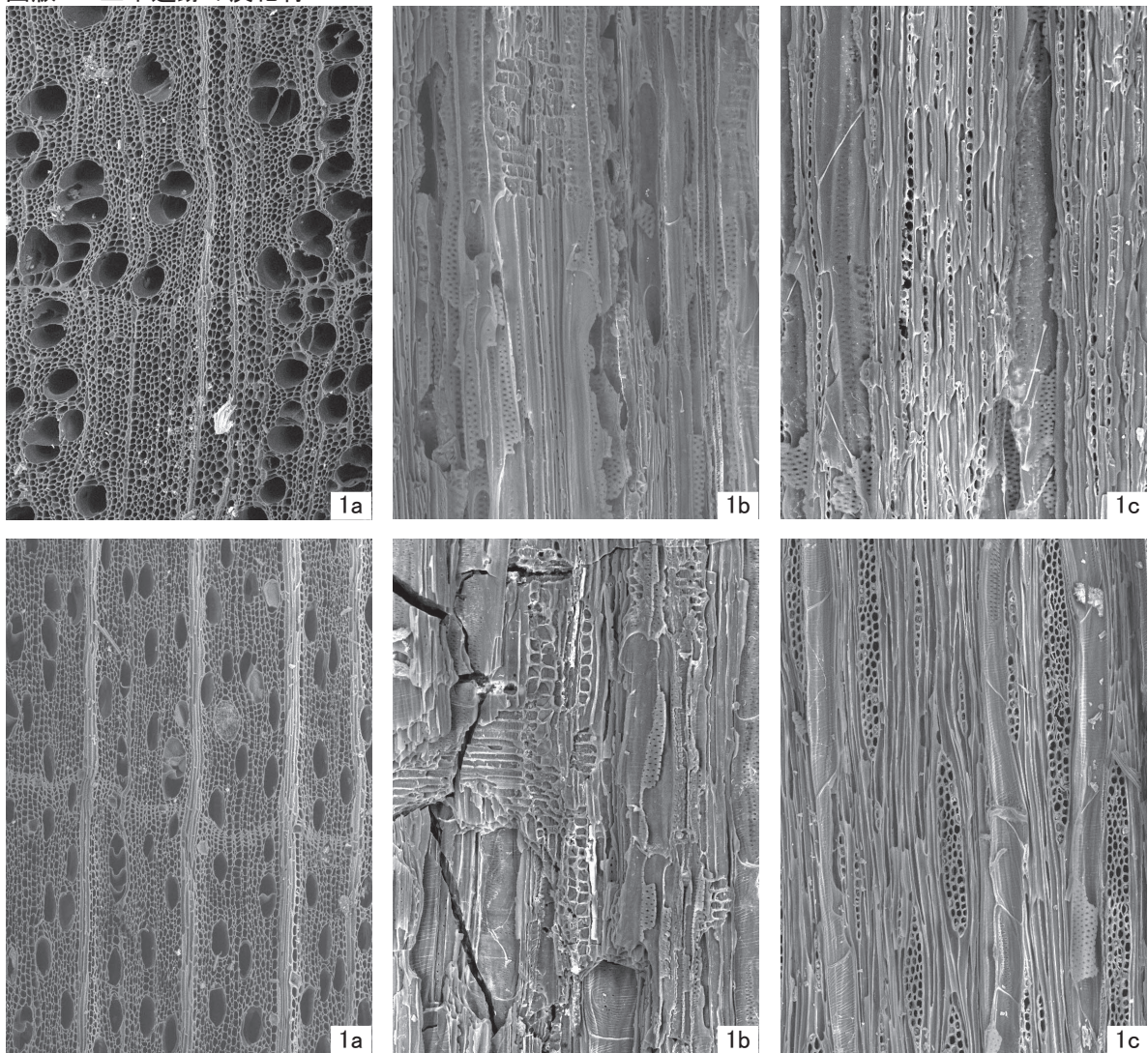
100 μm:a

100 μm:b,c

表1. 樹種同定結果

遺跡名	通し番号	遺構名	台帳番号	層位	樹種
山屋敷平	2	SI-1	C2	4層	コナラ属コナラ亜属コナラ節
山屋敷平	3	SI-1	C3	床直上	コナラ属コナラ亜属コナラ節
山屋敷平	4	SI-1	C4	4層	コナラ属コナラ亜属コナラ節
山屋敷平	5	SI-1	C5	4層	コナラ属コナラ亜属コナラ節
山屋敷平	6	SI-1	C6	4層	コナラ属コナラ亜属コナラ節
山屋敷平	7	SI-1	C7	4層	コナラ属コナラ亜属コナラ節
山屋敷平	8	SI-1	C8	床直上	コナラ属コナラ亜属コナラ節
山屋敷平	9	SI-2	C1	床面	コナラ属コナラ亜属コナラ節
山屋敷平	10	SI-2	C3	3層	コナラ属コナラ亜属コナラ節
山屋敷平	11	SI-2	C4	3層	コナラ属コナラ亜属コナラ節
山屋敷平	12	SI-2	C5	3層	コナラ属コナラ亜属コナラ節
山屋敷平	14	SI-2	C7	3層	コナラ属コナラ亜属コナラ節
山屋敷平	15	SI-2	C8	3層	コナラ属コナラ亜属コナラ節
山屋敷平	16	SI-2	C9	3層	コナラ属コナラ亜属コナラ節
山屋敷平	17	SI-2	C10	床面	コナラ属コナラ亜属コナラ節
山屋敷平	18	SI-2	C11	床面	コナラ属コナラ亜属コナラ節
山屋敷平	19	SI-2	C12	床面	コナラ属コナラ亜属コナラ節
山屋敷平	20	SI-2	C13	床面	コナラ属コナラ亜属コナラ節
山屋敷平	21	SI-3	C1	3層	コナラ属コナラ亜属コナラ節

図版48 上平遺跡の炭化材



1. クマシデ属イヌシデ節(上平1)
 2. カエデ属(上平2)
 a: 木口, b: 柀目, c: 板目

100 μm:a
 100 μm:b,c

表1. 樹種同定結果

遺跡名	通し番号	遺構名	台帳番号	層位	樹種
山屋敷平	23	SI-4	C2	床面	コナラ属コナラ亜属コナラ節
山屋敷平	24	SI-4	C3	床面	コナラ属コナラ亜属コナラ節
山屋敷平	25	SI-4	C4	床面	コナラ属コナラ亜属コナラ節
山屋敷平	27	SI-5	C1	4-5層	コナラ属コナラ亜属コナラ節
山屋敷平	28	SI-5	C2	4-5層	コナラ属コナラ亜属コナラ節
山屋敷平	29	SI-5	C3	4-5層	コナラ属コナラ亜属コナラ節
山屋敷平	30	SI-5	C4	4-5層	コナラ属コナラ亜属コナラ節
山屋敷平	31	SI-5	C6	4-5層	コナラ属コナラ亜属コナラ節
山屋敷平	32	SI-5	C7	4-5層	コナラ属コナラ亜属コナラ節
山屋敷平	33	SI-5	C8	4-5層	コナラ属コナラ亜属コナラ節
山屋敷平	37	SI-5	C12	4-5層	コナラ属コナラ亜属コナラ節
山屋敷平	45	SI-5	C20	4-5層	広葉樹
山屋敷平	46	SI-5内土坑1	C21	9層	キハダ
山屋敷平	47	SI-6	C1	床	クリ
山屋敷平	48	SI-6	C2	床	ネムノキ
山屋敷平	49	SI-6	C3	床	マツ属複維管束亜属 クリ
上平	上平1	SI-1	C-1	床面直上	クマシデ属イヌシデ節
上平	上平2	SI-1	炭	2層貼床	カエデ属

第4節 南部町山屋敷平遺跡出土土師器の胎土分析

山梨文化財研究所 河西 学

はじめに

山屋敷平遺跡・上平遺跡は、馬淵川右岸の名久井岳北東麓に広がる台地上に位置する遺跡である。両遺跡ともに縄文時代と奈良～平安時代の遺構・遺物を伴う。上平遺跡では粘土埋納遺構が検出された。同じ青森県東部地域では、潟野遺跡において奈良時代の土師器甕の胎土分析が行なわれている(河西2006)。潟野遺跡では、ホルンフェルス・デイサイト・花崗岩類・堆積岩・安山岩・変質火山岩類・火山ガラスなど多様な岩石からなる胎土組成が明らかになり、新井田川流域を中心とする八戸周辺地域に複数の原料産地が推定された。今回の両遺跡も潟野遺跡と同時期の土師器が出土していることから、胎土の比較、および表層地質図との比較による土師の産地推定などを目的として胎土分析を行なった。

馬淵川流域の地質

馬淵川最上流域の岩手県葛巻町付近は葛巻-釜石帯の中・古生層が分布し、主として頁岩・砂岩・チャート・火山岩・凝灰岩類・石灰岩などが露出する(『日本の地質2東北地方』1989)一戸-三戸間の馬淵川流域には、新第三紀以降の火山岩類と堆積岩が分布する。名久井岳-傾城峠地域付近には、緑色変質がほとんどみられない傾城峠安山岩部層・名久井安山岩部層などの火山岩が露出する。馬淵川支流の平糠川・安比川・熊原川などの上流には、高堂山・稲庭岳・高倉山・御月山などの鮮新世火山および、七時雨火山・八幡平火山などの第四紀火山が分布する。また第四紀火山の基盤には、鮮新世～更新世前期に噴出した主としてデイサイト質からなる玉川溶結凝灰岩類が分布している。七時雨火山は安山岩～デイサイト質、八幡平火山は玄武岩～安山岩を噴出している。南部町北西には、十和田火山・八甲田火山などの第四紀火山があり、これらの火山起源の火山噴出物が東側台地を厚く覆っている。

分析試料

分析試料は、第1表、第1図に示す10点である。内訳は、山屋敷平遺跡の竪穴住居跡から出土した土師器9点と、上平遺跡の遺構外出土土師器1点である(青森県教育委員会2006)。

第1表 試料表

試料番号	整理番号	遺跡名	遺構名	出土層位	器種	部位	時期
No.1	2	山屋敷平	SI-1	3層	甕	胴部	8世紀
No.2	1	山屋敷平	SI-1	3・4層	甕	胴部	8世紀
No.3	8	山屋敷平	SI-1	4層	甕	胴部	8世紀
No.4	4	山屋敷平	SI-1	4層	甕	胴部	8世紀
No.5	7	山屋敷平	SI-1	4層	甕	胴部	8世紀
No.6	13	山屋敷平	SI-1	貼床・カマド	甕	頸部	8世紀
No.7	19	山屋敷平	SI-2	3層	甕	口縁部	8世紀
No.8	23	山屋敷平	SI-4	3層	甕	口縁部	8世紀
No.9	2-2	山屋敷平	SI-4	3層	甕	口縁部	8世紀
No.10	281-2	上平	G-14(遺構外)	II層	鉢	口縁部	8世紀?

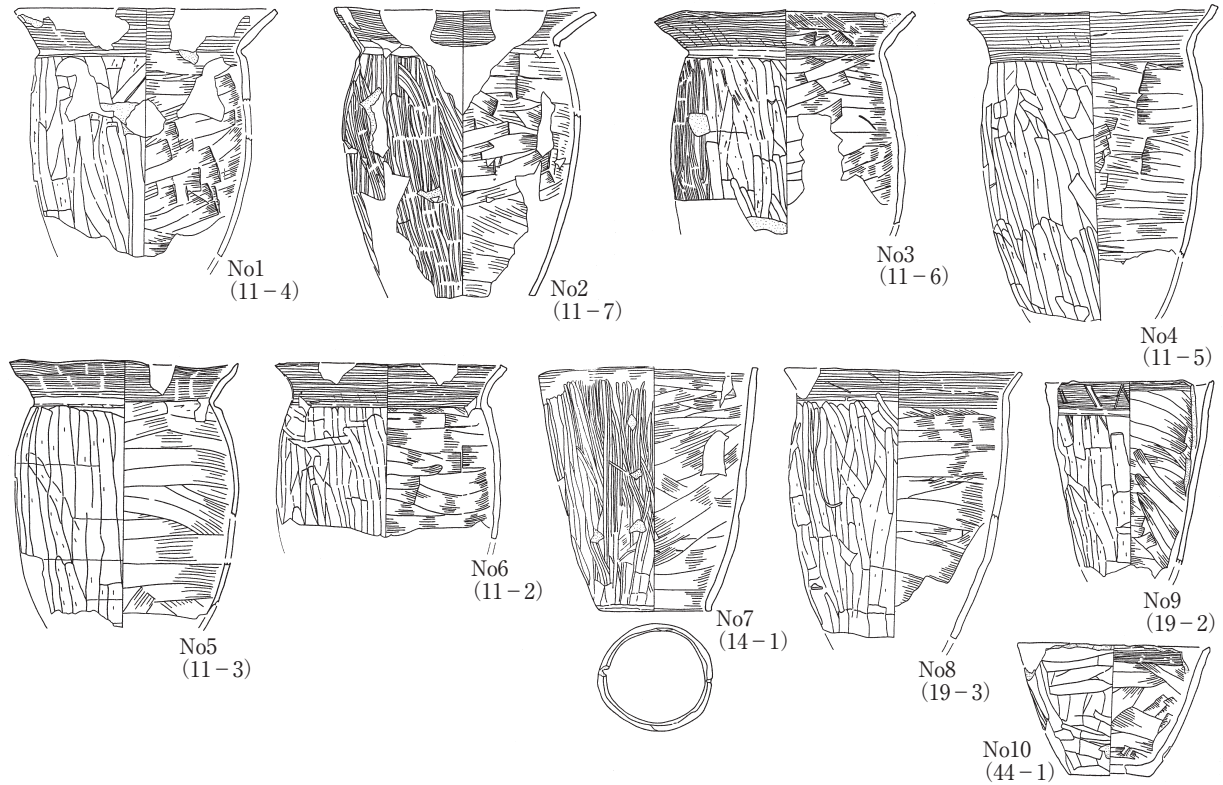
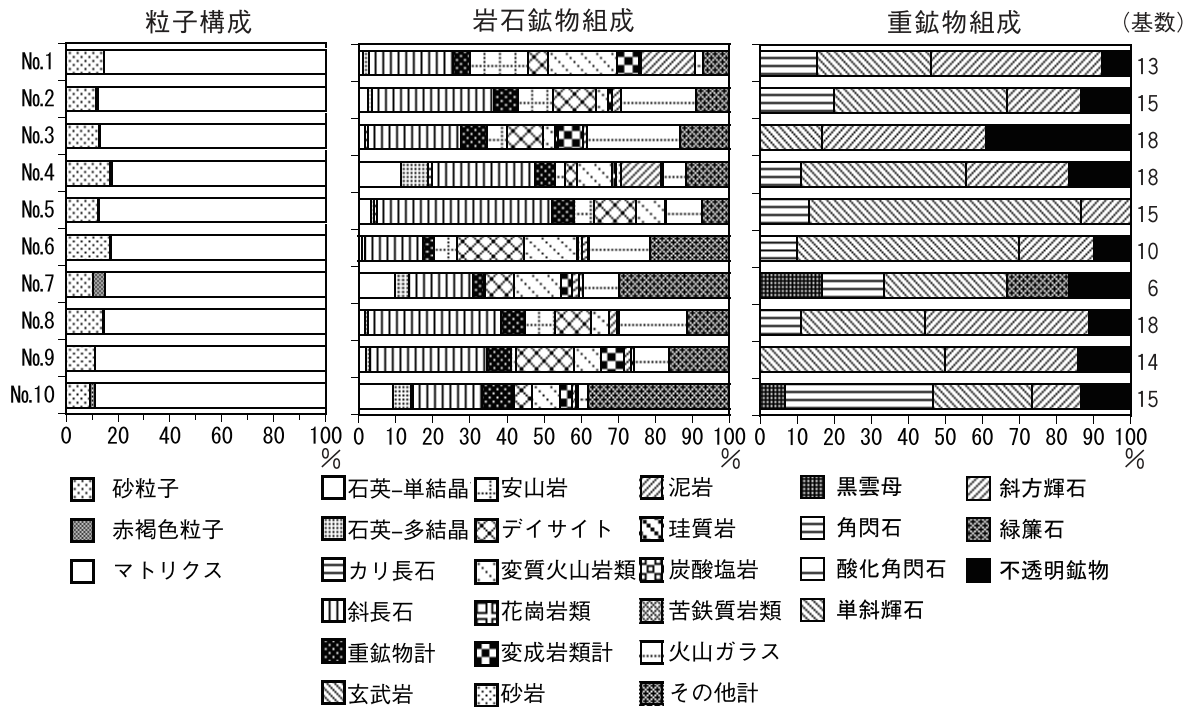


図49 土器実測図

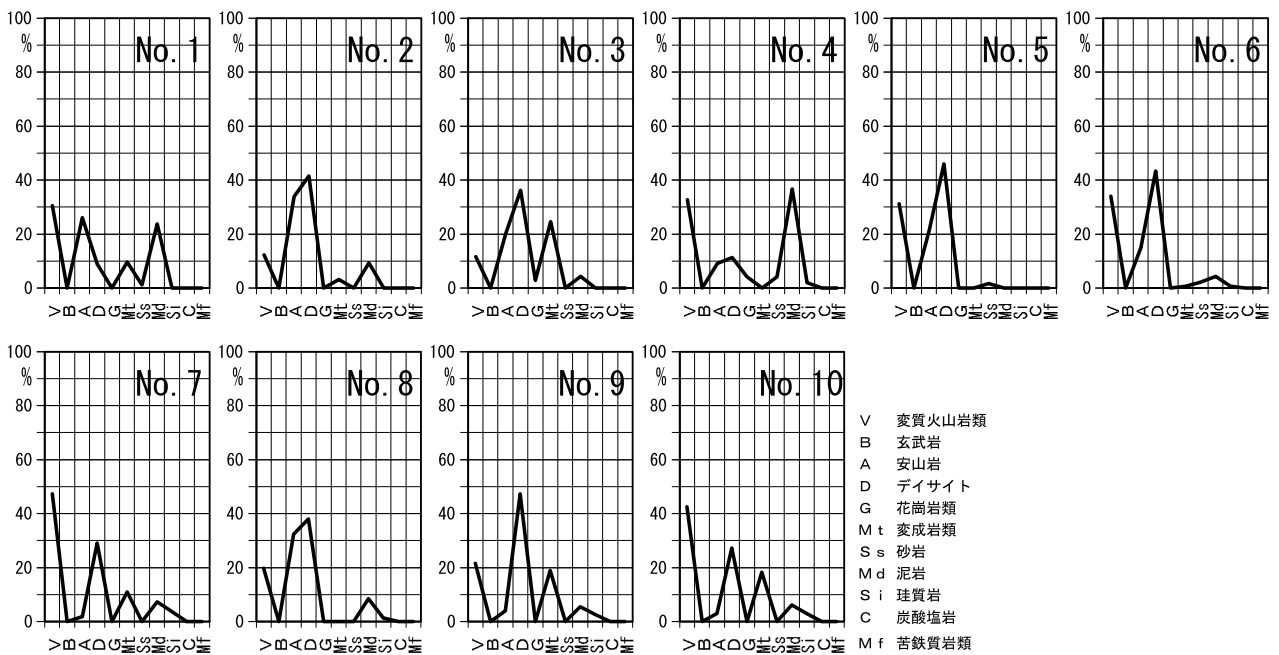
第2表 土器胎土中の岩石鉱物 (数字はポイント数を、+は計数以外の検出を示す)

試料番号	No.1	No.2	No.3	No.4	No.5	No.6	No.7	No.8	No.9	No.10
石英-単結晶	3	6	4	38	8	3	20	5	2	16
石英-β型									2	1
石英-多結晶	5	2		25	2	3	8	2	3	9
カリ長石			2	3	2					1
斜長石	66	77	64	93	116	52	35	101	70	35
黒雲母							1			1
角閃石	2	3	+	2	2	1	1	2		6
酸化角閃石	+									
単斜輝石	4	7	3	8	11	6	2	6	7	4
斜方輝石	6	3	8	5	2	2		8	5	2
緑簾石							1			
不透明鉱物	1	2	7	3		1	1	2	2	2
玄武岩										
安山岩	46	22	14	9	13	21	1	23	3	1
デイサイト	16	27	25	11	28	61	16	27	35	9
変質火山岩類	54	8	8	28	19	48	26	14	16	14
凝灰岩				4						
花崗岩類			2	4			+			
ホルンフェルス	17	2	17			1	6		14	6
他の変成岩類										
砂岩	2			4	1	3				
泥岩	42	6	3	36		6	4	6	4	2
珪質岩				2		1	2	1	2	1
炭酸塩岩										
苦鉄質岩類										
火山ガラス-無色	5	46	61	21	24	55	18	52	21	5
火山ガラス-褐色	1	1	3				2			
変質岩石	5	3	11	18	5	20	20	4	6	6
変質鉱物	10	13	21	5	1	18	21	8	13	16
泥質ブロック	6	5	2	16	12	34	20	20	17	49
赤褐色粒子		10	6	16	7	6	96	10	2	34
マトリクス	1709	1757	1739	1649	1747	1658	1699	1709	1776	1780
合計	2000	2000	2000	2000	2000	2000	2000	2000	2000	2000
石英波動消光	+	+	+	+		+	+	+	+	+
石英消滲		+		++		+	+	+	+	
石英融食				+						
マイクロン-サイト					+					
安山岩の斑晶鉱物	opx, opx	opx	opx		cpx		cpx			
デイサイトの斑晶鉱物		ho		opq		q		ho		
変質火山岩類岩質	AD, D	AD, D	AD, D	AD, D	AD, D	AD, D	AD, D	AD, D	AD, D	AD, D
火山ガラス形態	C, F	B, F	F>>B, C	B, F	C, E, F	E, F	C, F	F>>B, E	B, F	B, F
植物珪酸体	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
植物遺存体					+			+	+	+
珪藻	?	+								
放散虫							+			
骨針化石	+	+		+	+	+	+	+		

鉱物: bi 黒雲母, ho 角閃石, cpx 単斜輝石, opx 斜方輝石, opq 不透明鉱物, q: 石英
 変質火山岩類: AD 安山岩質~デイサイト質, D デイサイト質
 火山ガラス形態: A 泡壁型平板状, A' 泡壁型Y字状, B 塊状, C 中間型, D 中間型管状, E 軽石型繊維状,
 F 軽石型スポンジ状



第2図 土器胎土の岩石鉱物組成



第3図 岩石組成折れ線グラフ

第3表 折れ線グラフによる土器分類

分類	折れ線グラフの特徴		試料番号
V-a類	変質火山岩類の第1ピーク	安山岩の第2ピーク	1
V-d類		デイサイトの第2ピーク	7, 10
D-v類	デイサイトの第1ピーク	変質火山岩類の第2ピーク	5, 6, 9
D-a類		安山岩の第2ピーク	2, 8
D-mt類		変成岩類の第2ピーク	3
MD-v類	泥岩の第1ピーク	変質火山岩類の第2ピーク	4

分析方法

分析試料は、以下の方法で薄片を作製した。土器を切断機で4×2.5cm程度の大きさに切断し、残りの試料は保存した。土器片をエポキシ樹脂を含浸させて補強し、土器の鉛直断面切片（厚さ3mm）を切断し、岩石薄片と同じ要領で薄片を作製した。さらにフッ化水素酸蒸気でエッチングし、コバルチ亜硝酸ナトリウム飽和溶液に浸してカリ長石を黄色に染色しプレパラートとした。以下の方法で岩石鉱物成分のモード分析を行なった。偏光顕微鏡下において、ポイントカウンタを用い、ステージの移動ピッチを薄片長辺方向に0.3mm、短辺方向に0.4mmとし、各薄片で2,000ポイントを計測した。計数対象は、粒径0.05mm以上の岩石鉱物粒子、およびこれより細粒のマトリクス（「粘土」）部分とし、植物珪酸体はすべてマトリクスに含めた。

分析結果

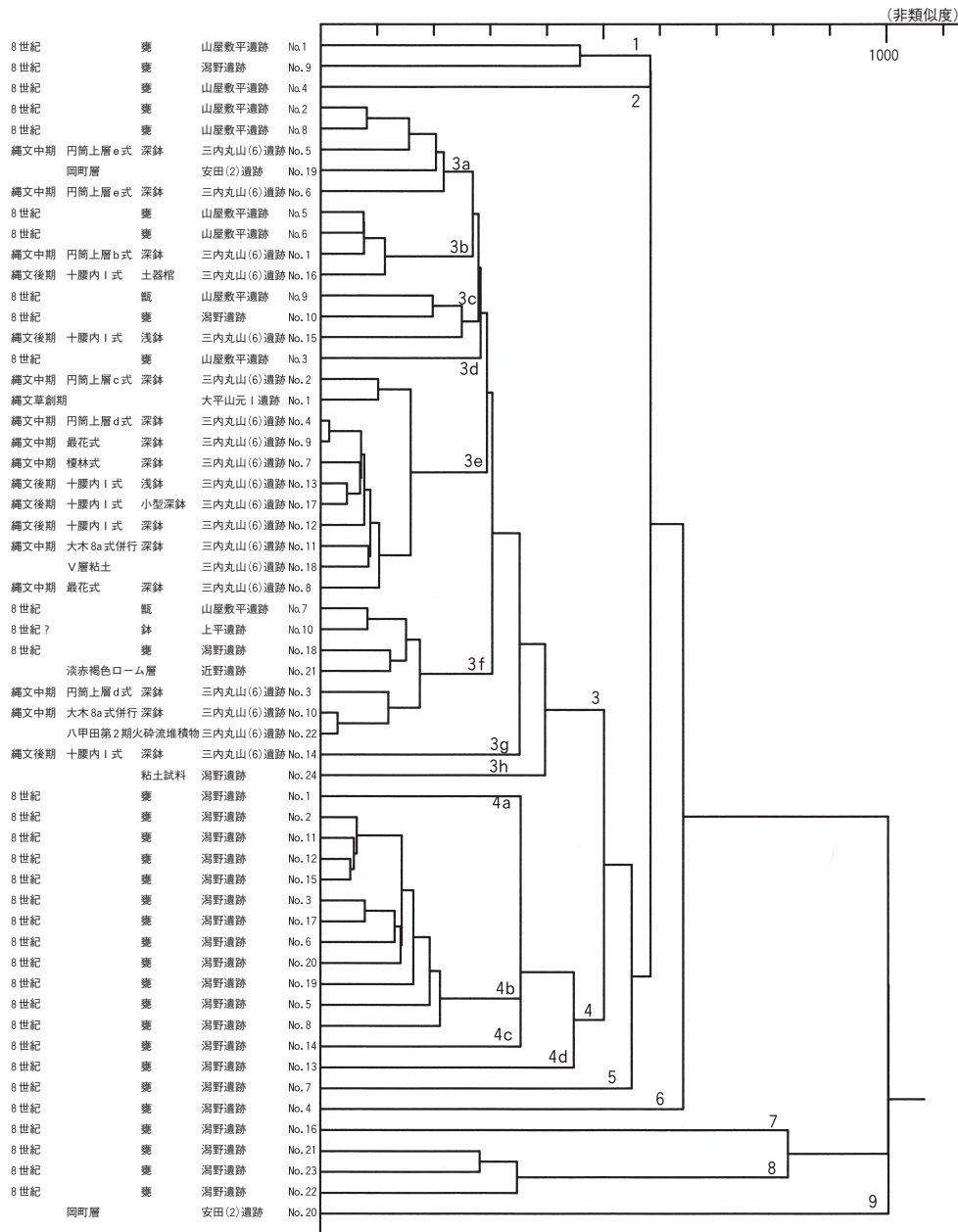
分析結果を第2表に示す。試料全体の砂粒子・赤褐色粒子・マトリクスの割合（粒子構成）、および砂粒子の岩石鉱物組成および重鉱物組成を第2図に示す。重鉱物組成では右側に基数を表示した。変質火山岩類（凝灰岩を含める）・玄武岩・安山岩・デイサイト（1）（含流紋岩）・花崗岩類・変成岩類（含ホルンフェルス）・砂岩・泥岩・珪質岩（含チャート）・炭酸塩岩（含石灰岩）・苦鉄質岩類のポイント総数を基数とし、各岩石の構成比を示した岩石組成折れ線グラフを第3図に示す。折れ線グラフのピークに基づいて土器を便宜的に分類した（第3表）。クラスター分析の樹形図を第4図に示す。クラスター分析は、折れ線グラフと同様の11種の岩石データを用いて行なった。クラスター分析での非類似度は、ユークリッド平方距離を用い、最短距離法によって算出した。第4図は、本遺跡試料のほか、青森県内の潟野遺跡、三内丸山（6）遺跡・太平山元I遺跡の胎土分析結果（河西,1999,2002,2006）と比較したもので、便宜的に1～9の番号をクラスターに付し、クラスター3,4ではアルファベットでさらに細分した。

両遺跡試料の胎土組成の特徴として火山岩が多いことがあげられる。主体となる岩石によって大別し、以下に特徴を述べる

(1) 変質火山岩類が多い土器（Nos.1,7,10）

No.1は、粒子構成に占める砂粒子の割合（含砂率）が15%であり、赤褐色粒子は計数されなかった。岩石鉱物組成では、斜長石・変質火山岩類・安山岩・泥岩が多く、デイサイト・変成岩類・火山ガラスなどを伴う。変成岩類はほとんどホルンフェルスから構成される。ホルンフェルスは、堆積岩・塩基性岩を原岩とする。火山ガラスは、無色と褐色とが含まれるが、後者は土器の被熱により無色のガラスが変化した可能性がある。重鉱物組成では、単斜輝石・斜方輝石・角閃石から主として構成され、不透明鉱物を伴う。No.1は、第3表でV-a類に、第4図では潟野遺跡 No.9とともにクラスター1を構成する。

Nos.7,10は、含砂率が9～10%であり、赤褐色粒子はNo.7で5%と多い。No.7は、胎土全体に赤褐色で鉄分に富む印象がある。Nos.7,10の岩石鉱物組成では、泥質ブロック・変質岩石・変質鉱物などからなる「その他」が多試料よりも多い。さらに石英・斜長石・変質火山岩類・デイサイトが多く、火山ガラス・変成岩類・泥岩などを伴う。重鉱物組成では、黒雲母・角閃石・単斜輝石・不透明鉱物から構成される点で共通し、他試料とは区別される。Nos.7,10は、第3表でV-d類に、第4図では潟野遺跡 No.18や三内丸山（6）遺跡 Nos.3,10,22とともにクラスター3fを構成する。



第4図 土器のクラスター分析樹形図

(2) デイサイトが多い土器 (Nos.2, 3, 5, 6, 8, 9)

Nos.2, 3, 5, 6, 8, 9は、含砂率が11 ~ 17%を示し、赤色粒子は極めて少ない。

Nos.2, 8は、きわめて類似しており、岩石鉱物組成では、斜長石・火山ガラスが多く、デイサイト > 安山岩 > 変質火山岩類 > 泥岩の組成を示す。火山ガラスは、ほとんど無色で、スポンジ状の軽石型が主体で繊維状軽石型や塊状の火山ガラスを伴う。重鉱物組成は、単斜輝石・斜方輝石・角閃石から主として構成され、不透明鉱物を伴う。Nos.2,8は、第3表でD - a類に、第4図では三内丸山 (6) 遺跡 Nos.5, 6とともにクラスター 3aを構成する。

No.3は、岩石鉱物組成において、斜長石・火山ガラスが多く、デイサイト > 変成岩類 > 安山岩 > 変質火山岩類の組成を示す。火山ガラスは、ほとんど無色で、発泡のよいスポンジ状の軽石型が主体で中間型の火山ガラスを伴う。重鉱物組成は、単斜輝石・斜方輝石・不透明鉱物から構成される。No.3は、第3表でD - m t類に、第4図では単独でクラスター 3dを構成する。

Nos.5, 6は、岩石鉱物組成では、斜長石・デイサイト・変質火山岩類・火山ガラスが多く、安山岩を伴う。火山ガラスは、無色で、スポンジ状の軽石型や繊維状軽石型などの火山ガラスからなる。一部の火山ガラスの周縁部は、部分的に溶融している。重鉱物組成は、単斜輝石・斜方輝石・角閃石から主として構成され、不透明鉱物を伴う。Nos.5, 6は、第3表でD-v類に、第4図では三内丸山(6)遺跡 Nos.1, 16とともにクラスター 3bを構成する。

No.9は、岩石鉱物組成において、斜長石・デイサイトが多く、変質火山岩類・変成岩類・火山ガラスを伴う。デイサイトには凝灰岩質のものも含めた。変成岩類は泥質ホルンフェルスからなる。重鉱物組成は、単斜輝石・斜方輝石・不透明鉱物から構成される。No.9は、第3表でD-v類に、第4図では潟野遺跡 No.10や三内丸山(6)遺跡 No.15とともにクラスター 3cを構成する。

(3) 泥岩が多い土器 (No.4)

No.4は、含砂率が17%と多く、赤褐色粒子はきわめてわずかである。

岩石鉱物組成では、斜長石・石英が多く、岩石としては泥岩・変質火山岩類(凝灰岩も含む)が多く、火山ガラス・デイサイト・安山岩などを伴う。石英の含有率は全試料中最大で、単結晶・多結晶とも検出される。重鉱物組成では、単斜輝石・斜方輝石から主として構成され、角閃石・不透明鉱物を伴う。No.1は、第3表ではMD-v類に、第4図において単独でクラスター 2を構成する。

考察

以上の分析結果から山屋敷平遺跡・上平遺跡の土器胎土は、デイサイト・安山岩・変質火山岩類・火山ガラスなどの火山岩、および泥岩によって特徴づけられることがわかる。これらの岩石は、前述の馬淵川流域地質と関連性が高いものである。さらに骨針化石・放散虫、および珪藻(?)破片がわずかに検出されたが、これらの微化石の存在は、馬淵川流域に分布する第三系の海成層との関連性を推定させる。軽石型を主とする火山ガラスは、多くは無色であるが、一部は比熱によって淡褐色化し、一部には周縁部が部分溶融している粒子も観察された。これらの火山ガラスは、潟野遺跡の土器胎土中の火山ガラス、あるいは八戸火山灰層中の火山ガラスとも形態的には類似性が認められる。以上のことから、山屋敷平・上平遺跡の土器胎土組成は、馬淵川流域地質を反映した地域性を示していると考えられる。以下に他遺跡と比較してみる。

山屋敷平遺跡・上平遺跡の土器胎土は、第4図クラスター 1, 2, 3に分布し、これらのクラスターに含まれる三内丸山(6)遺跡の土器との類似性が認められる。三内丸山(6)遺跡は地理的には遠距離にあるが、周辺に八甲田(田代平)溶結凝灰岩、および降下テフラなどが広く分布する点で共通する。三内丸山(6)遺跡の土器は、石英・斜長石・単斜輝石・斜方輝石などを伴うデイサイトが主体である。ただし、これらデイサイト・石英などの割合が高い三内丸山(6)遺跡の胎土組成の傾向は、山屋敷平・上平遺跡の胎土組成とやや異なるため、個体ごとに類似性が極めて高いというほどではない。これは、それぞれの胎土組成が、各遺の立地する青森市と馬淵川流域との地域差を反映しているためと考えられる。

これに対し、潟野遺跡の土器は、デイサイトを含むが、ホルンフェルスからなる変成岩類、花崗岩類・堆積岩・安山岩・変質火山岩・火山ガラスなど多様な岩石から構成される。とくに、ホルンフェルス・花崗岩類・堆積岩の含有率は、山屋敷平遺跡・上平遺跡の土器胎土の特徴と異なる。潟野遺跡

土器のこれらの特徴は、新井田川流域の地質的特徴を反映していると推定された。潟野遺跡土器の主体は、第4図クラスター4, 5, 6, 7, 8などに集中し、三内丸山(6)遺跡・山屋敷平遺跡・上平遺跡の土器胎土との類似性が乏しい傾向が顕著である。ただし潟野遺跡 Nos.9, 10, 18は、山屋敷平遺跡・上平遺跡などとの類似性が認められる。

このように山屋敷平・上平遺跡の土器胎土組成は、三内丸山(6)遺跡や潟野遺跡と区別される特徴をもつことがわかる。

馬淵川と新井田川両流域に位置する遺跡の胎土組成の比較から、奈良時代8世紀ごろの土師器においては、地域性のある土器原料すなわち地元の原料を用いた土器製作が各地域で行なわれていたと考えられる。各遺跡の胎土組成には多様性が認められることから、各流域の中でも複数の地点での土器の原料産地があった可能性が推定される。このことは各流域の中にあっても複数の地点で土器が製作されていたことを示唆する。各遺跡で出土した土器は、地域内での土器の移動の結果として存在する。したがって例えば潟野遺跡 Nos.9, 10, 18などの土器は、新井田川流域の特徴を顕著に示す他の潟野遺跡出土土器よりも、山屋敷平・上平遺跡の土器との類似性が高いことから、馬淵川流域から移動してきたものである可能性も想定されうる。

同時期の土器を出土する複数遺跡の胎土分析から、より広範囲における土器製作のあり方が見えはじめてきた。今後のデータの蓄積によって、土器型式における地域性と土器胎土の地域性との関係が解明されることを望む。

おわりに

山屋敷平・上平遺跡の奈良時代8世紀土器を分析した結果、デイサイト・安山岩・変質火山岩類・火山ガラスなどの火山岩、および泥岩によって胎土組成が特徴づけられた。複数の原料産地の存在が推定される。潟野遺跡や三内丸山(6)遺跡、あるいは表層地質などとの比較から、山屋敷平・上平遺跡の土器は馬淵川流域の地域性を反映した胎土であることが推定された。青森県東部の奈良時代の土器作りでは、地元の原料を用いた土器製作が各地域で行なわれていたと考えられる。

註

(1) デイサイト～流紋岩質の珪長質火山岩をここでは総称してデイサイトと呼ぶ。

文献

青森県(1996)『土地分類基本調査5万分の1三戸・一戸国土調査』

青森県教育委員会(2006)『南部町大久保平遺跡外発掘調査概要－上名久井地区畑地帯総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査－』

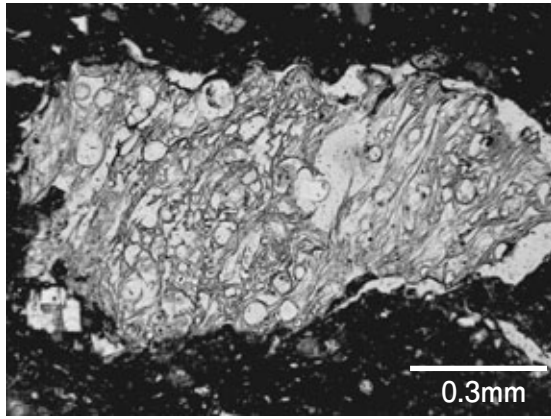
青森県教育委員会(2004)『平成16年度八戸市潟野遺跡発掘調査概要－八戸南環状道路建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査－』。

河西学(1999)大平山元I遺跡出土縄文草創期土器胎土の岩石鉱物組成。『大平山元I遺跡の考古学調査』、大平山元I遺跡発掘調査団、130-132。

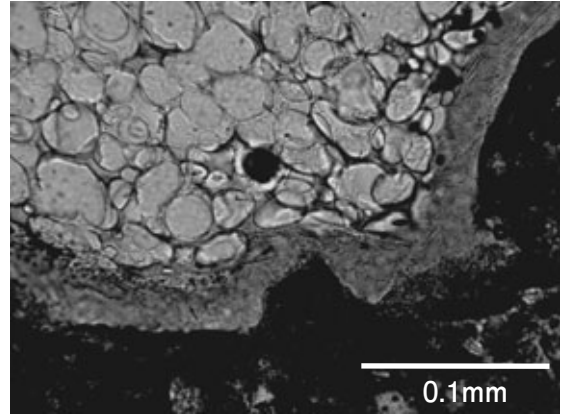
河西学(2002)三内丸山(6)遺跡出土縄文土器の胎土分析。『三内丸山(6)遺跡IV』(第2分冊分析・写真編)、青森県埋蔵文化財調査報告書、第327集、30-39。

河西学(2006)潟野遺跡出土奈良時代土師器胎土の胎土分析。『潟野遺跡』、青森県文化財調査報告書、第412集、185-195。

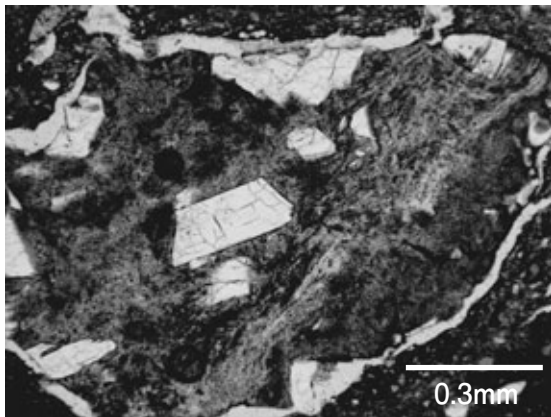
日本の地質『東北地方』編集委員会編(1989)『日本の地質2東北地方』。共立出版、338p



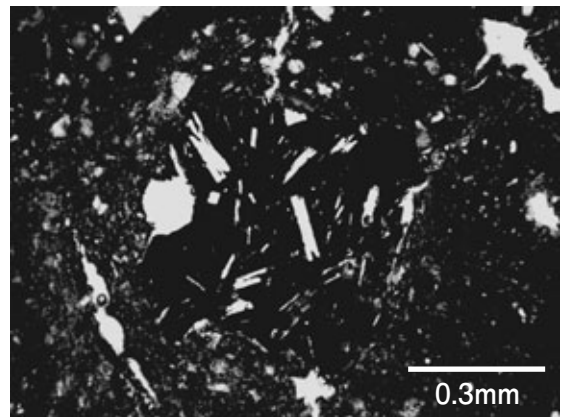
1 火山ガラス(軽石型F型)(山屋敷平No. 2) 下方ポーラだけ



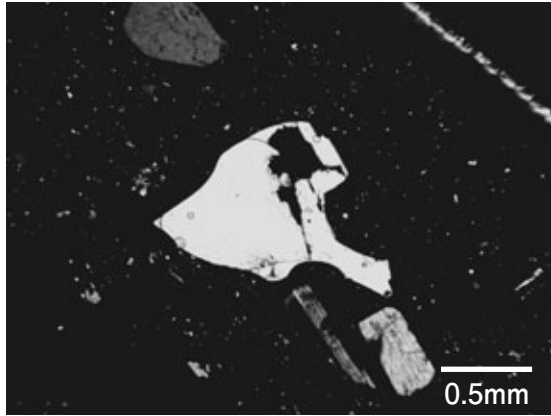
2 部分溶融した火山ガラス(山屋敷平No. 2) 下方ポーラだけ



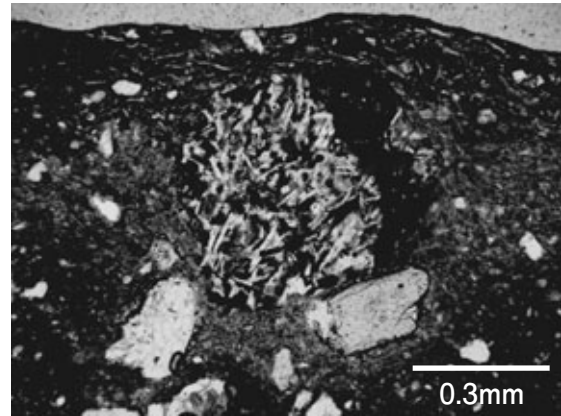
3 デイサイト(山屋敷平No. 2) 下方ポーラだけ



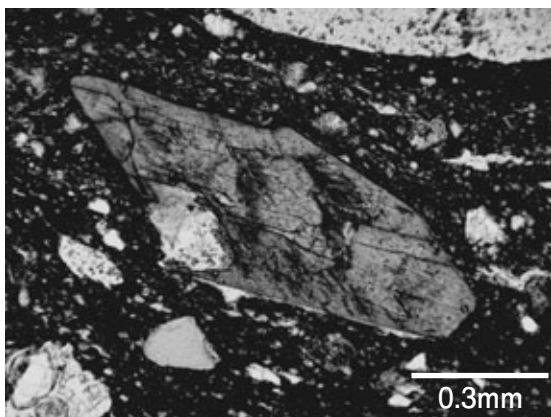
4 安山岩(山屋敷平No. 2) 下方ポーラだけ



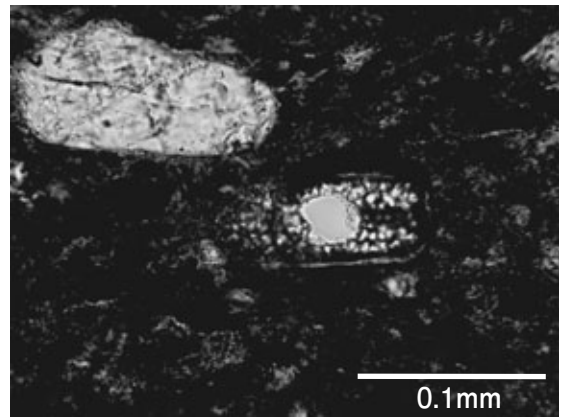
5 融食石英(山屋敷平No. 4) 直交ポーラ



6 変質火山岩類(山屋敷平No. 1) 下方ポーラだけ



7 角閃石(山屋敷平No. 4) 下方ポーラだけ



8 骨針化石(山屋敷平No. 7) 下方ポーラだけ

図50 土器薄片の顕微鏡写真

第5章 総括

第1節 山屋敷平遺跡

奈良時代

南区では5軒の竪穴住居跡が検出された。ここでは、土師器の坏・甕・甗などの器種が出土した。S I 1以外の竪穴住居跡は出土遺物が非常に断片的で一括性に乏しく、時期を特定するのは難しいと思われる。器種別にこれらの土器を概観してみる。

土師器

坏 完形のもの出土していない。非ロクロ製で、内外面ともミガキ調整、内面のみ黒色処理を行っている。口縁部から底部の形状をみると、11-1は胴部の内外面に弱い段をもつ器形、19-1は内面には稜がなく、外面の稜も微かに認められる程度である。

甕（長胴甕） 完形のもの出土していない。口縁部がくの字に屈曲し、頸部には沈線状の段が巡るもの（11-3・4・6・7、12-1）、口縁部と頸部がほとんど屈曲しないもの（19-2）がみられる。口端部は工具等により平坦または沈線状に作出されるものが多い。丸みを帯びるもの（12-1）、口端部が上につまみ出されるもの（11-3）もある。この「受け口状」口縁は宇部3期になると出現することが指摘されており（宇部2002）、宇部4期まで引き続き使用された技法と思われる。口縁部は最終調整が内外面ともヨコナデとなるが、ハケメやケズリの痕跡が残る個体もある。19-2にはごく浅い沈線で鋸歯状に施文される。鋸歯文は7～8世紀前半までの東北北部太平洋側に偏って分布している（宇部2000b）。出土した甕は時期的にかなり後出するものであり、同様の系譜かどうかは疑問が残る。この時期の長胴甕は、頸部には幅の広い沈線状の段が巡り、胴部は外面にケズリ・ハケメ、内面にヘラナデ・ハケメが多用される。胴部の器形は、底部が欠損しているものの上半に最大径が来るものが多いと推測され、ほかに中央に最大径がくるものもある（11-6）。土師器の胎土分析では、馬淵川周辺の素材を用いて土師器を製作しているという結果が示されている。

甕（球胴甕） 底部のみ2点出土した。底外面から立ち上がる部分は台状に突き出している（19-6）。

甗 完形が1点出土した。無底式である。胴部下半に穿孔等は認められなかったが、底外面の対角線上2箇所欠損が確認された。これらの欠損は偶然できたものかどうかは分からないが、使用頻度が高かったためにこの2箇所が欠損した可能性も考慮したい。櫛引遺跡第3号住居跡で出土した甗と同様の形状である（青森県埋文センター1999）。

前述のような器種別の特徴から、宇部4期（8世紀後半）（宇部2000a）に相当すると考えられる。

住居跡ごとの比較

出土数のまとまった坏・甕（長胴甕）を比較する。

坏はS I 1・4で出土した。いずれも外面に弱い段または不明瞭な稜をもち、口縁部が比較的直立する。口端部は上部につまみ出される形状である。内面の稜が消失し、外面の稜も不明瞭となるS I 4出土の坏はより後出の要素がみられる。

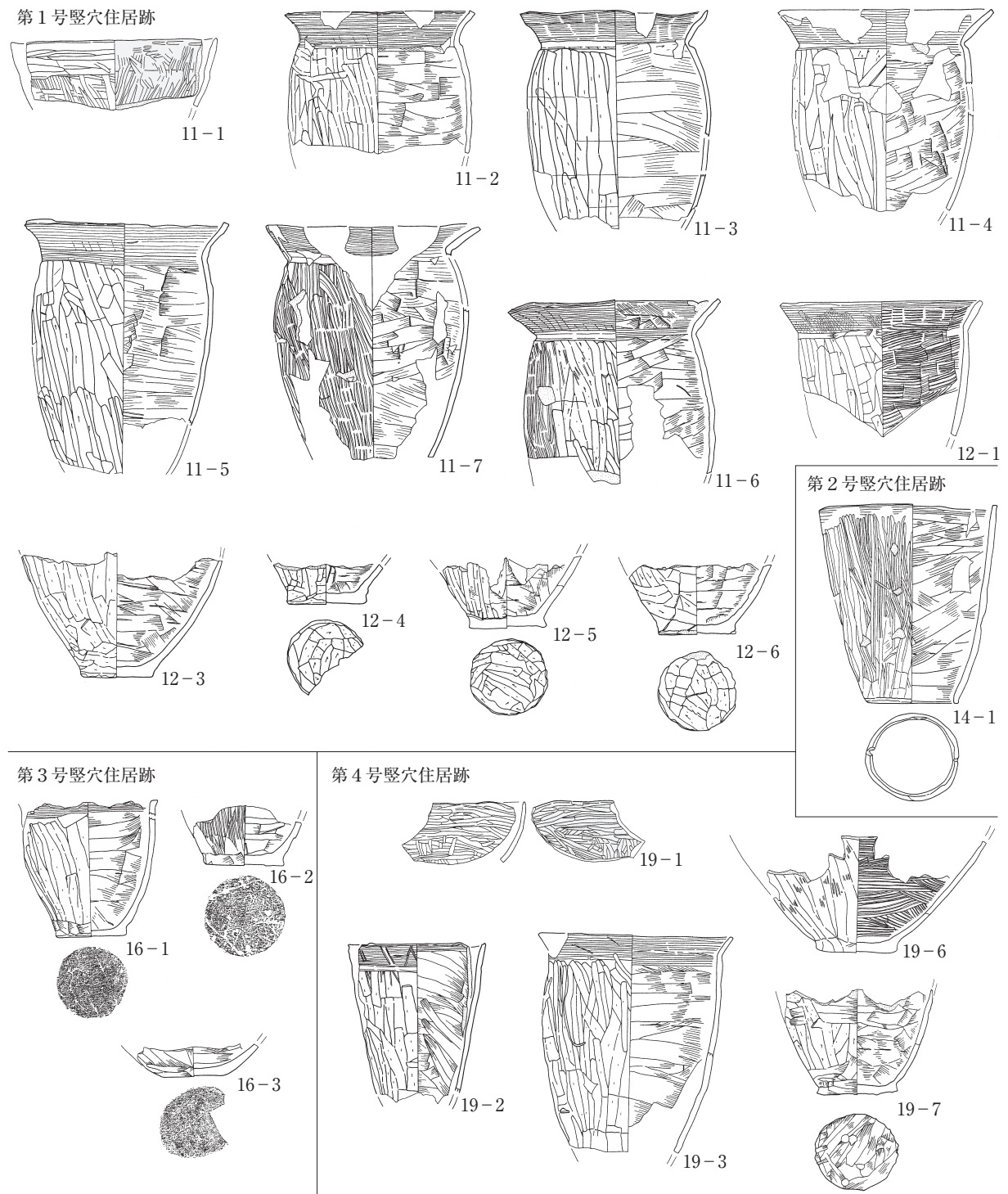


图51 山屋敷平遺跡出土土師器

甕（長胴甕）はS I 1～4で出土した。S I 1では、出土状況から、住居跡構築時の廃棄遺物（7層出土・11-2）、住居跡使用時の遺物（カマド支脚・12-3～6）、住居跡の廃絶に伴う遺物（4層出土11-3・5・6）、住居跡廃絶後から十和田a火山灰降下前までに伴う遺物（3層出土11-1・4・7、12-1）などに分けられる。口縁部の屈曲、胴部上半に最大径、頸部に沈線状の段を伴う、胴部外面の最終調整がヘラケズリを多用するなど出土層位を超えて共通点が多い。S I 3で出土した16-1は頸部に段を持たず、口縁部の屈曲もS I 1に比べると弱い。16-2は胴部外面にハケメで調整している。S I 4では、頸部にほとんど屈曲を持たない19-2と口縁部が屈曲する19-3が出土した。S I 1と比較すると、19-3は口縁部の高さが短くなっている。また、19-2は頸部が屈曲しないものの沈線状が巡り、S I 1の技法と共通する部分もみられる。櫛引遺跡第50号堅穴住居跡では口縁部が屈曲する長胴甕と屈曲しない小型甕が一括資料として出土している（青森県埋文センター1999）。胴部外面はヘラケズリが主体であるが、19-5のように最終調整にミガキを用いるものもある。S I 1と比べて口縁部の屈曲が弱い（S I 3）ことや口縁部が短くなる（S I 4）ことから、S I 1出土甕がより古手の要素をもち、S I 3・4出土甕がより新しい要素をもつものといえる。

土師器の胎土分析から、馬淵川流域の素材を用いたことが指摘されている。

小札

S I 1北西壁のカマド右側壁際の床面で小札（12-8）が出土した。長さ11cm、幅2.7cmの鉄板が4～5枚折り重なった状態である。すべて中央付近から両端が同じ方向にカーブしている。青森県内での奈良時代の小札出土例は根岸（2）遺跡（おいらせ町）の堅穴住居跡から137枚がまとまって出土していることが知られている。ここでは、小札の形態分類も行われている（津野1995）。これによると大きく幅広タイプと幅狭タイプの2種類に分かれ、このほかに札頭・札足の形状、孔の位置など14に分別して示している。

この分類からみると、本遺跡出土12-8の表面及び裏面は、幅広タイプで札頭及び札足が同じ「ゆるやかな円形」である。表面の各孔の配置をみると、小札中央の一行緘孔があり、上位に二穴が認められ、第一綴孔と第二綴孔の中間よりもやや上位に第三綴孔が位置する。下搦孔は一孔で、覆輪孔はない。第一綴孔および第二綴孔は不明瞭だが各四穴あることが分かる。緘孔の直径が3.3cm、綴孔の直径が2.2cmで緘孔のほうが広い。裏面の各孔の配置をみると、ほぼ表面と同じ配置であるが、第一緘孔・第二綴孔の穴が不明瞭である。第三綴孔・第一綴孔・第二綴孔・下搦孔は肉眼でも分かりやすいが、第二綴孔の下右側の穴は穿孔されているのか判然としない。表面と裏面の小札がほぼ同様の形状であることから、折り重なった小札も同じような孔の配置をしているものと推測される。

根岸（2）遺跡出土の小札にも同様の配置を持った小札が1枚出土している（図52）。ただ、本遺跡出土の小札と異なる点は札頭・札足の形状で、根岸（2）遺跡の札頭が方形であるのに対して、本遺跡出土の札頭は「ゆるやかな円形」である。また、札幅にも相違が認められる。根岸（2）遺跡の主体を占める小札は幅狭タイプで「札頭0.8～1.5cm、中間1.6～1.9cm、札足1.6～2.0cm、幅広タイプで札頭1.7～2.0cm、中間1.8～2.0cm、札足1.8～2.1cmである。札頭と札足の幅はほぼ同じくになっている。」（津野1995）。本遺跡出土の表面部分の札頭1.9cm、中間2.5cm、札足2.2cm、裏面部分の札頭2cm、中間2.1cm、札足2cmで、根岸（2）遺跡よりもやや幅広である。

津野氏は古代の小札の幅について7世紀後半から徐々に狭くなっていき、8世紀後葉で最も狭くなるが、8世紀末以降は徐々に幅が広がっていることを指摘した。緘孔についても8世紀後葉以降、第三緘孔が消滅し第二緘孔までとなるとしている。下搦孔は8世紀第3四半期までは一〜三孔確認されているが、鹿の子C遺跡（茨城県・8世紀後葉）では下搦孔がなく消滅化傾向であるとしている（津野1998）。このほか、津野氏は国衙などの遺跡から出土した小札と根岸（2）遺跡出土の小札を比較することによって製作者の性格についても述べている。これによると、根岸（2）遺跡の小札は札頭・札足を円形にするなど、より丁寧な仕上げをおこなっており、大量生産される国衙工房の小札とは異なり蝦夷が製作したものであるとした。確かに根岸（2）遺跡や本遺跡のように竪穴住居跡内から出土するという在り方は、秋田城跡（秋田県）、御所野遺跡21号墳の副葬品（岩手県）、鹿の子C遺跡（茨城県）など地方官衙や権力に関する様相とは異なる。とくに小札が出土した竪穴住居跡は他の竪穴住居跡と比べてもとくに違いが見られず、小札の出土によってただちに「族長」と結びつけることは難しい。本遺跡では他の竪穴住居跡から刀子や鉄滓が出土しており、小札などを製作する工房製作者の集落であった可能性なども考えられる。

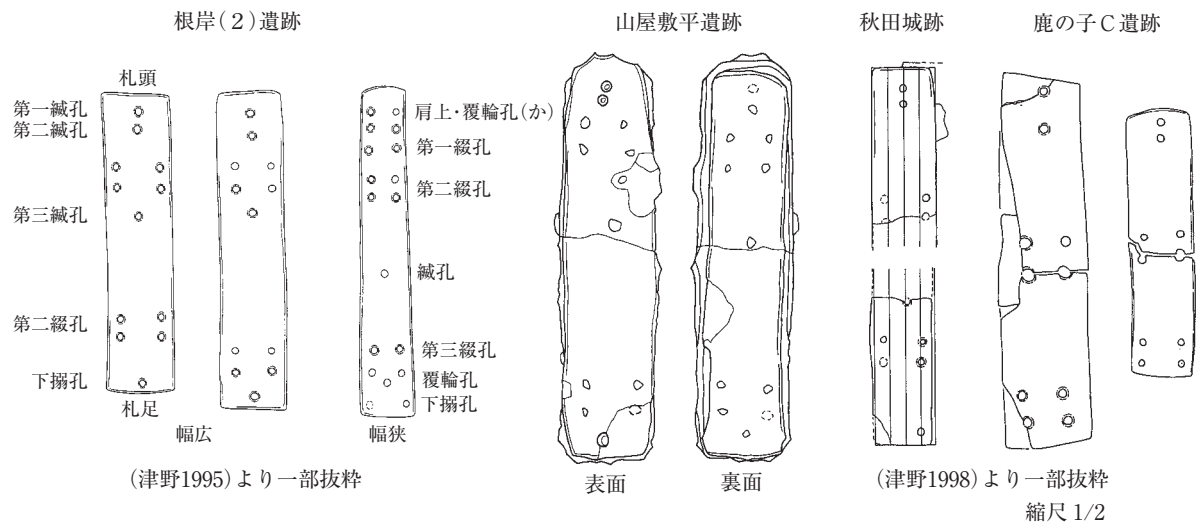
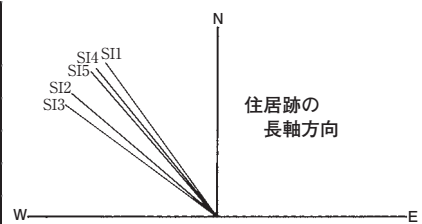


図52 小札の名称と各遺跡から出土した小札

竪穴住居跡

竪穴住居跡は、一辺が3.5m～4.3mの小型住居跡で、主軸方向はN-36°～51°-Wの範囲で収まる。柱穴はほとんどみられず、柱穴配置などは不明である。この時期になると、八戸地域では小型住居化の傾向が進んでおり（宇部2000 a）、ここ馬淵川中流域でも同様の傾向となっている。

	東西 (m)	南北 (m)	床面積	主軸	支脚	袖	カマド
SI1	4.36	3.97	14.3	N-54°-W	竊底部	粘土・土	地下式
SI2	4.1	4.2	12.8	N-40°-W	—	礫・土	地下式
SI3	3.8	3.6	12.8	N-36°-W	竊底部	土	
SI4	3.95	3.65	12	N-51°-W	—	粘土?	
SI5	3.52	3.46	8	N-49°-W	—	粘土・土	(地下式)



カマドは、すべての住居跡で北西壁のほぼ中央から検出された。カマドは天井部や袖部の一部が検出されなかったものの燃焼部・支脚・袖部の大部分が残存していた。カマド周辺に白色粘土の分布が認められるもの（SI4）もある。SI1では、カマド上部の堆積土から被熱した礫が検出されてお

り、天井部に礫を使用したものと思われる。地下式のカマドはS I 1・2である。S I 5で確認されたカマドも煙道部の断面形状から地下式の可能性が高い。袖部は4軒で検出され、地山に類似した土を盛って構築しており、芯材を使用しているものがS I 1・2・5である。白色粘土板を用いているもの（S I 1・5）、礫を用いているもの（S I 2）などがある。カマド支脚は甕の底部を逆さに設置した2ツ掛けのものがS I 1・3で検出された。S I 1では2ツ掛けの支脚は2個体分の甕底部をそれぞれ重ねて支脚としている。

住居内土坑はS I 5で検出され、楕円形状を呈し、住居跡の壁際に沿って袋状の形状である。炭化材の検出状況や床面の状況から、住居跡使用時には埋め戻しが行われ、床面として使用されたものと思われる。この住居内土坑に関しての事例では、住居跡構築時に埋められていた事例と床面上で埋め戻しが確認された事例の2つの異なる例があるため、用途については十分な検証が必要である。なお、この時期の竪穴住居跡が一部検出されたふくべ（3）遺跡では、住居内土坑の設置傾向として、住居跡中央から壁際に偏り一部袋状になることを指摘している（青森県埋文センター 2005）。

粘土埋納ピットはS I 4で検出された。竪穴住居跡南東隅の床面に掘り込まれた小ピット内に白色粘土が埋納されていた。おそらくカマドの補強や土器製作その他の用途のため住居跡内に保存されたものと考えられる。平安時代の隠川（4）遺跡（五所川原市）から検出された竪穴住居跡床面の隅でも白色粘土が床面上から出土している事例がある（青森県埋文センター 1998）。

放射性炭素年代測定の結果から、S I 1の暦年較正年代（ 2σ ）では640AD～730AD（74.6%）で、7世紀前半～8世紀前半の確率が高い。S I 5の暦年較正年代（ 2σ ）では760AD～890AD（71.6%）で、8世紀後半～9世紀後半の可能性が高い。また、火山灰分析によって、竪穴住居跡の上部に堆積した火山灰はすべて十和田a火山灰と同定されている。これら2つの分析結果によって竪穴住居跡が廃棄されたのは少なくとも10世紀前半よりも前となる。

集落

本遺跡の出土遺物や検出遺構について概観したが、出土遺物や放射性炭素年代測定結果からS I 1が相対的に古く、S I 3～5が相対的に新しくなると思われる。S I 2は不明である。これを遺構配置から見ると、山側から低地に向かって竪穴住居跡が構築される傾向がある。本遺跡の周辺の地形を見ると、名久井岳から低地に向かって流れる小谷の影響により、至るところで沢が縦走している。南区はこれらの沢が東西に縦走する幅狭の台地と推測される。このような地形的要因から、山側は比較的広い台地に恵まれ、低地側は徐々に幅の狭くなる台地であったと推測される。とくにS I 5付近は、ほぼ馬の背状になっており、竪穴住居跡の東西側では急に傾斜が大きくなる。この時期の集落跡の特徴の一つとして竪穴住居跡の小型化や山間部への集落跡の拡散が挙げられ、山屋敷平遺跡南区のような狭い台地でも集落跡が営まれるようになったといえる。

第2節 上平遺跡

古代

竪穴住居跡が1軒検出され、このほかに遺構外から土師器片が出土した。

I群

宇部3～4期(8世紀)に相当する。第1号竪穴住居跡出土土師器(31-8・9)、遺構外出土土師器(43-1～5・7～9・12～26、44-1～10)。

遺構外出土椀(43-1・2)は、口縁部外面はヨコナデ、胴部はヘラケズリの調整が行われる。器形は外側にやや開き、43-1は底部がやや丸底風でヘラケズリ、43-2は底部が平底でミガキの調整である。宇部氏は、3期になると坏に口縁ヨコナデ・底部ヘラケズリの増加が認められるとしている(宇部2002)。このほか、胴部に稜が巡る43-3や、内外面ミガキが施される坏(43-4・5・7～9)はこの時期に相当すると思われる。

高坏の台部(43-12)が1点出土しており、ロクロ成形されていないことや、台部が小型であることから、この時期に相当すると思われる。

甕の口縁部(43-13～26)は口縁部が比較的大きく外反する器形で、口端部が「受け口状」になるもの(43-22・25)もあり、この時期に相当すると思われる。頸部が屈曲しない44-1、頸部に沈線が巡る44-2・4もみられる。底外面にはヘラケズリが施される(44-7・8・10)。胴部にミガキが施される44-6はやや古手になると思われる。

土師器の胎土分析(44-1)では、馬淵川周辺の素材を用いて土師器を製作しているという結果が示されている。

II群

10世紀前半に相当する。主な第1号竪穴住居跡出土土師器(31-1～7・10)、遺構外出土土師器43-6・10・11などのロクロ成形の坏が相当する。

坏の特徴により、ロクロ成形の土師器で内面にミガキが施される。内面にミガキ調整が行われないものもみられる(31-5・6、43-11)。口縁部は外傾し、口端部が外側につまみだされる。底外面は回転糸切りで、内面に黒色処理が見られる。小型甕(31-7・10)は、口縁部が短く、大きく外反しない。内面は黒色処理の技法を用いている。

竪穴住居跡

竪穴住居跡は、南側が削平されており、全体の概要は不明であるが、一辺が3.48mの小型住居跡である。少なくとも北側でのカマドは確認できなかった。住居跡中央に被熱した範囲がひろがり、北東側では火山灰に混じって炭化材などが検出されている。このなかの炭化材で放射性炭素年代測定を行ったところ、S I Iの暦年較正年代(1 σ)では935AD～980AD(40.2%)で、10世紀前半～後半の確率が高い。火山灰分析の結果から、床面で検出された火山灰は十和田a火山灰と同定されており、降下後に竪穴住居跡内で生活したものと推測され、10世紀前半以降の時期と思われる。

縄文時代

粘土埋納遺構は白色粘土が土中に埋納されたもので、土器内に1基(第1号粘土埋納遺構)、地面

を掘り込んで直接埋納したもの1基（第2号粘土埋納遺構）が検出された。第1号粘土埋納遺構は、土器型式から縄文時代後期初頭に位置づけられる。第2号粘土埋納遺構のような例は、小牧野遺跡（青森市）でも見つかっている。同様に地面を掘り込みその内部に白色粘土が埋納された粘土埋納遺構で、3基検出されている。出土遺物を伴わないため時期は不明であるが、遺構確認面の状況などから縄文時代後期に相当するものと思われる。このほか田代遺跡（八戸市南郷区）の第1号土器埋設遺構とされた土器内にも白色粘土が検出されており、縄文時代中期末葉～後期初頭とされる。このような粘土埋納遺構は検出例が非常に少なく、頻繁に採掘可能な場所が集落遺跡周辺に存在していた可能性を指摘している。また、粘土と土器の重鉱物組成や蛍光X線分析の結果から、粘土が土器の素地として利用された可能性が考えられるとした（児玉2002）。

遺構は検出されなかったものの、包含層からは縄文時代後期の土器が多く出土しており、他の時期と比べて活発な活動が行われたものと思われる。

引用参考文献

青森県埋文センター 1998 「隠川（4）遺跡・隠川（12）遺跡Ⅰ」青森県教委 青森県埋蔵文化財調査報告書第244集

青森県埋文センター 1999 「櫛引遺跡」青森県教委 青森県埋蔵文化財調査報告書第263集

青森県埋文センター 2000 「岩ノ沢平遺跡」青森県教委 青森県埋蔵文化財調査報告書第287集

青森県埋文センター 2005 「通目木遺跡 ふくべ（3）遺跡 ふくべ（4）遺跡」青森県教委 青森県埋蔵文化財調査報告書第392集

青森県埋文センター 2006 「瀉野遺跡」青森県教委 青森県埋蔵文化財調査報告書第412集

青森県埋文センター 2006 「田代遺跡」青森県教委 青森県埋蔵文化財調査報告書第413集

青森県埋文センター 2007 「館向遺跡」青森県教委 青森県埋蔵文化財調査報告書第425集

宇部則保1997 「酒美平遺跡」八戸市教育委員会 八戸市埋蔵文化財調査報告書第73集

宇部則保2000 a 「馬淵川下流域における古代集落の様相」『考古学の方法』東北大学文学部考古学研究会

宇部則保2000 b 「古代東北地方北部の沈線文のある土師器」『月刊 考古学ジャーナル』No462

宇部則保2002 「東北北部型土師器にみる地域性」『海と考古学とロマン』市川金丸先生古希を祝う会

宇部則保2005 a 「飛鳥時代から平安時代の土師器」『青森県史 資料編 考古3 弥生～古代』

宇部則保2005 b 「八戸地域の6～8世紀の土器編年」古代東北北海道研究会 第5回研究会資料

児玉大成2002 「小牧野遺跡発掘調査報告書Ⅶ」青森市教育委員会 青森市埋蔵文化財調査報告書第60集

児玉大成2006 「小牧野遺跡発掘調査報告書Ⅸ」青森市教育委員会 青森市埋蔵文化財調査報告書第85集

津野 仁1995 「根岸（2）遺跡出土の刀子および挂甲小札について」『根岸（2）遺跡発掘調査報告書』百石町教育委員会 文化財調査報告書第4章

津野 仁1998 「古代古小札の特徴」『兵の時代－古代末期の東国社会－』横浜市歴史博物館

山屋敷平遺跡 土器

図版番号	番号	出土地	層位	P番	時代・型式	器形	部位	文様・調整等	備考(数字cm)
8	1	SI-7	1	P4	縄文早期赤御堂式	深鉢	口縁	0段多条LR横回転	
8	2	SI-7	1	P13	縄文早期赤御堂式	深鉢	口縁	外面 0段多条LR回転→押圧、内面 0段多条LR回転	8-2~7 同一個体
8	3	SI-7	1	P5	縄文早期赤御堂式	深鉢	胴	内外面 0段多条LR回転	8-2~7 同一個体
8	4	SI-7	1	P16	縄文早期赤御堂式	深鉢	胴	内外面 0段多条LR回転	8-2~7 同一個体
8	5	SI-7	1	P6	縄文早期赤御堂式	深鉢	胴	内外面 0段多条LR回転	8-2~7 同一個体
8	6	SI-7	1	P9	縄文早期赤御堂式	深鉢	胴	内外面 0段多条LR回転	8-2~7 同一個体
8	7	SI-7	1	P7	縄文早期赤御堂式	深鉢	胴~底付近	内外面 0段多条LR回転	8-2~7 同一個体
11	1	SI-1	3	-	奈良時代	坏	口縁~胴	外面 ミガキ、内面 ミガキ・黒色処理、段あり	口径19.8、器高(6.7)
11	2	SI-1	貼床7	P14	奈良時代	甕	口縁~胴	外面 口縁ヨコナデ・胴部ヘラケズリ、内面 口縁ヨコナデ・胴部ヘラナデ	口径18.2、器高(13.7)
11	3	SI-1	4	P7	奈良時代	甕	口縁~胴	外面 口縁ヨコナデ・胴部ヘラケズリ、頸部 沈線状段、内面 口縁ヨコナデ・胴部ヘラナデ	口径18.0、器高(21.0)
11	4	SI-1	3	-	奈良時代	甕	口縁~胴	外面 口縁ヨコナデ・胴部ヘラケズリ、頸部 沈線状段、内面 口縁ヨコナデ・胴部ヘラナデ	口径20.8、器高(19.3)
11	5	SI-1	4	P1	奈良時代	甕	口縁~胴	外面 口縁ヨコナデ・胴部ヘラケズリ、内面 口縁ヨコナデ・胴部ヘラナデ	口径19.8、器高(24.1)
11	6	SI-1	4	P8	奈良時代	甕	口縁~胴	外面 口縁ヨコナデ、ハケメ・ケズリの痕跡あり、胴部ヘラケズリ・ハケメ、頸部 浅い沈線状段、内面 口縁ヨコナデ・ヘラナデ、胴部ヘラナデ	口径20.5、器高(17.6)
11	7	SI-1	3	-	奈良時代	甕	口縁~胴	外面 口縁ヨコナデ・胴部ハケメ、頸部 沈線状段、内面 口縁ヨコナデ・胴部ヘラナデ	内面 スス状炭化物付 口径(20.7)、器高(22.1)
12	1	SI-1	3	-	奈良時代	甕	口縁~胴	外面 口縁 ヨコナデ・ハケメの痕跡あり、胴部ヘラケズリ、内面 ハケメ	口径(19.6)、器高(13.0)
12	2	SI-1	3	-	奈良時代	甕	口縁~胴	外面 口縁 ヨコナデ・ハケメ、胴部ヘラケズリ、内面 ハケメ	
12	3	SI-1	-	KP2	奈良時代	甕	胴~底	外面 ヘラケズリ、内面 ヘラナデ・接合帯明瞭	底径6.9、器高(12.1)
12	4	SI-1	-	KP4	奈良時代	甕	胴~底	外面 ヘラケズリ、内面 ヘラナデ、底外面 ヘラケズリ	底径7.6、器高(3.5)
12	5	SI-1	-	KP3	奈良時代	甕	胴~底	外面 ヘラケズリ・一部ナデ、内面 ヘラナデ、底外面 ヘラケズリ	底径7.4、器高(6.9)
12	6	SI-1	-	KP1	奈良時代	甕	胴~底	外面 ヘラケズリ、内面 ヘラナデ、底外面 ヘラケズリ	底径7.4、器高(6.6)
14	1	SI-2	3	P1	奈良時代	甕	口縁~底	外面 口縁ヘラナデ、胴部ミガキ・ケズリの痕跡あり、内面ヘラナデ	口径17.1、底径8.5、器高19.2
16	1	SI-3	カマド	KP1	奈良時代	甕	胴~底	外面 口縁ヨコナデ・胴部ヘラケズリ・ナデ、内面 口縁ヨコナデ・胴部ヘラナデ	底径6.8、器高(13)
16	2	SI-3	カマド	KP2	奈良時代	甕	胴~底	外面 ハケメ、内面 ヘラナデ、底外面 木葉痕?	底径7.7、器高(4.1)
16	3	SI-3	カマド	KP3	奈良時代	甕	胴~底	外面 ヘラナデ、内面 ヘラナデ	底径6.1、器高(2.9)
19	1	SI-4	4	P5	奈良時代	坏	口縁~胴	外面 ミガキ、内面 ミガキ・黒色処理	
19	2	SI-4	3	-	奈良時代	甕	口縁~底	外面 口縁ヨコナデ→ヘラナデ、胴部ヘラケズリ、内面 口縁ヨコナデ 胴部ヘラナデ	口径18.7、器高(21.0)
19	3	SI-4	3	P10	奈良時代	甕	口縁~胴	外面 口縁 ヨコナデ 胴部ヘラケズリ、頸部 沈線一条、内面 口縁ヨコナデ 胴部ヘラナデ	口径(13.2)、器高(15.2)
19	4	SI-4	3	P9	奈良時代	甕	胴	頸部 沈線一条	
19	5	SI-4	3	-	奈良時代	甕	胴	外面 ヘラケズリ・ミガキ、内面 ヘラナデ	
19	6	SI-4	床面	P2	奈良時代	甕	胴~底	外面 ヘラケズリ・ハケメの痕跡あり、内面 ハケメ	底径7.8、器高(10.1)
19	7	SI-4	床面	P1	奈良時代	甕	胴~底	外面 ヘラナデ・ヘラケズリ、内面 ヘラナデ、底外面 ヘラナデ・刺突	底径7.7、器高(10.1)
24	1	GC-2	I	-	縄文中期末~後期初頭	深鉢	口縁	LR横回転→沈線	
24	2	GC-6	IV	-	縄文中期末~後期初頭	深鉢	胴	RLR横・縦回転→沈線	
24	3	GC-5~6	I	-	縄文中期末~後期初頭	深鉢	胴	LR縦回転	
24	4	G-2	III	-	縄文中期末~後期初頭	深鉢	胴	RLR横回転	
24	5	GC-5~6	I	-	縄文中期末~後期初頭	深鉢	胴	RR回転	

剥片石器

図版番号	番号	種別	出土区	グリッド	層位	S番号	長さ(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重さ(g)	石質	備考
8	8	縦型石匙	SI-7	-	I	S-11	53.0	28.0	10.0	7.9	頁岩	周縁加工
8	9	二次調整のある剥片	SI-7	-	I	-	18.0	10.5	2.5	0.5	頁岩	削器。周縁加工。
24	6	縦型石匙	-	GB-2	IV	-	50.5	19.5	7.0	5.7	頁岩	周縁加工
24	7	二次調整のある剥片	-	GC-5~GC-6	I	-	51.5	27.5	13.5	16.4	頁岩	周縁加工。欠損品。
24	8	二次調整のある剥片	-	GB-3	IV	-	44.0	24.5	13.5	10.1	頁岩	削器。欠損品
24	9	二次調整のある剥片	-	GC-5~GC-6	I	-	23.5	17.5	5.5	2.6	珪質頁岩	削器。周縁加工。
24	10	微小剥離痕のある剥片	-	GB-4	I	-	31.0	24.5	8.5	5.7	珪質頁岩	削器。両面一側縁に刃部形成。

礫石器

図版番号	番号	分類	出土区	グリッド	層位	S番号	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	備考
8	10	擦石類	SI-7	-	I	S-1	8.9	7.8	4.5	362.0	砂岩	擦り痕、敲き痕、欠損品
14	2	擦石類	SI-2	-	3	S-3	12.4	8.1	3.6	468.8	安山岩	敲き痕
24	11	擦石類	-	G-2	V	-	5.0	6.0	2.5	115.9	砂岩	欠損品
24	12	擦石類	-	GB-4	IV	-	9.5	8.1	7.1	825.2	安山岩	擦り痕、敲き痕
24	13	擦石類	-	GB-2	V	-	8.0	8.7	4.5	369.7	砂岩	擦り痕、欠損品
24	14	擦石類	-	GB-5	V	-	9.3	6.4	5.1	391.9	安山岩	擦り痕、欠損品
25	1	石皿類	-	GC-5~GC-6	I	-	33.6	20.8	10.4	5420.0	安山岩	擦り痕(摩滅)、欠損品
25	2	砥石	-	GB-2	V	-	7.0	2.8	2.4	48.9	流紋岩	擦り痕、欠損品
25	3	砥石	-	GC-5~GC-6	I	-	6.5	3.2	1.5	49.7	流紋岩	
25	4	石皿類	-	GB-4	IV	-	11.9	7.6	6.9	779.0	安山岩	擦り痕(摩滅)、暗褐色に変色、欠損品
25	5	打ち欠きのある礫	-	GC-5~GC-6	I	-	4.2	3.6	1.1	22.5	片岩	端部を打欠

土製品・石製品

図版番号	番号	出土地	層位	番号	時代・型式	器種	部位	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	備考
19	8	SI-4	確認面	-	奈良時代	不明土製品	-	43	34	23	23.4	二面平坦、一面に沈線
19	9	SI-4	4	土1	奈良時代	石製紡錘車	円盤	48	22	19	13.4	

鉄関連遺物

図版番号	番号	出土地	層位	番号	時代・型式	器種	部位	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	備考
12	7	SI-1	床面	Fe1	奈良時代	器種不明	-	45	24	8	9.4	
12	8	SI-1	床面	Fe2	奈良時代	小札	-	110	27	7	39.6	4~5枚重なる。穴あり。
14	3	SI-2	確認面	-	奈良時代	鉄滓	-	35	29	29	27	
21	1	SI-5	床面	Fe1	奈良時代	刀子	刃	76	13	3	4.7	刃部
21	2	SI-5	床面	Fe2	奈良時代	刀子	刃	36	9	2.5	1.3	刃部
22	1	SI-6	床面	Fe1	江戸時代	器種不明	-	50	5.5	3	1.7	
25	6	G-6	I	-	時期不明	器種不明	-	39	14	3	3.2	
25	7	GB-1	II	-	時期不明	器種不明	-	31	5	3.5	1.6	紡錘車の軸?
25	8	GB-1	II	-	時期不明	器種不明	-	185	5.5	6.5	9.8	紡錘車の軸?
25	9	GC-5~6	I	-	時期不明	鉄滓	-	55	71	23	62.2	椀形鉄滓?
25	10	GC-5~6	I	-	時期不明	鉄滓	-	59	46	24	69.8	

上平遺跡 土器 1

図版 番号	番号	出土地	層位	P番	時代・型式	器形	部位	文様・調整等	備考
31	1	SI-1	1~2	-	平安・土師器	坏	口縁~ 胴	外面ロクロナデ、内面ミガキ・黒色処理	口径(15.6)、器高(3.4)
31	2	SI-1	2	P17	平安・土師器	坏	口縁~ 胴	外面ロクロナデ、内面ミガキ・黒色処理	-
31	3	SI-1	2	P7	平安・土師器	坏	口縁~ 胴	外面ロクロナデ、内面ミガキ・黒色処理	-
31	4	SI-1	1	-	平安・土師器	坏	口縁~ 胴	外面ロクロナデ、内面ミガキ・黒色処理	-
31	5	SI-1	床面	P22	平安・土師器	坏	口縁~ 胴	外面ロクロナデ、内面ロクロナデ	-
31	6	SI-1	2	P19	平安・土師器	坏	胴~底	外面ロクロナデ、内面ロクロナデ、底外面回転糸切	-
31	7	SI-1	3	P20	平安・土師器	甕	口縁~ 胴	外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ・黒色処理	31-10同一、口径12.2、器高(8.0)
31	8	SI-1	1	-	奈良・土師器	甕	口縁	外面ヘラナデ・ケズリ	-
31	9	SI-1	1~2	-	奈良・土師器	甕	口縁	外面ヨコナデ・ハケメの痕跡あり、内面ヨコナデ・ハケメの痕跡あり	-
31	10	SI-1	床面	P30	平安・土師器	甕	胴~底	外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ・黒色処理	31-7同一
31	11	SI-1	1	-	縄文前期円筒下層d1式	深鉢	口縁~ 胴	口端 LR横回転、口縁 R・L押圧、刺突列、胴 単絡1A 類(R・L)縦回転、楕円形状の穿孔あり、内面 ミガキ	31-11~15同一
31	12	SI-1	2	P24	縄文前期円筒下層d1式	深鉢	口縁~ 胴	口端 LR横回転、口縁 R・L押圧、刺突列、胴 単絡1A 類(R・L)縦回転、楕円形状の穿孔あり、内面 ミガキ	31-11~15同一
31	13	SI-1	I	-	縄文前期円筒下層d1式	深鉢	口縁	口端 LR横回転、口縁 R・L押圧、刺突列、穿孔あり、内面 ミガキ	31-11~15同一
31	14	SI-1	II	-	縄文前期円筒下層d1式	深鉢	胴	単絡1A類(R・L)縦回転、穿孔あり、内面 ミガキ	31-11~15同一
31	15	SI-1	II	-	縄文前期円筒下層d1式	深鉢	胴	単絡1A類(R・L)縦回転、内面 ミガキ	31-11~15同一
31	16	SI-1	2	P3	縄文前期円筒下層d1式	深鉢	底	内面 ミガキ	-
31	17	SI-1	1	-	縄文中期末~後期初頭	深鉢	口縁	LR縦回転	-
31	18	SI-1	1	-	縄文後期十腰内I群	深鉢	胴	三条沈線(斜位)、沈線(横位)	-
31	19	SI-1	1~2	-	縄文後期十腰内I群	深鉢	口縁	沈線(横位)	-
31	20	SI-1	2	P18	縄文後期十腰内I群	深鉢	口縁	ハケメ状沈線(横位)	-
31	21	SI-1	1	P6	縄文後期十腰内I群	深鉢	口縁	無文	-
31	22	SI-1	1~2	-	縄文中期末~後期初頭	深鉢	胴	RL縦・斜回転、内面ケズリ	-
31	23	SI-1	1~2	-	縄文後期十腰内I群	深鉢	底	無文	-
31	24	SI-1	2	P3	縄文後期十腰内I群	壺	口縁~ 胴	無文、粘土紐接合帯あり	-
33	1	1号粘土埋納	2	P1	縄文中期末~後期初頭	深鉢	口縁~ 底	LR横回転、接合体あり	内外面スス状炭化物付着 口径27、器高43.9、底径 11.6
34	1	G-14	IV	-	縄文早期中葉鳥木沢式	深鉢	口縁	口端押圧、貝殻腹縁文押圧(斜)	胎土に石英多
34	2	G-9(C)	I~II	-	縄文早期中葉鳥木沢式	深鉢	口縁	口端押圧、貝殻腹縁文押圧(斜)	胎土に石英多
34	3	G-15(C)	V	-	縄文早期中葉鳥木沢式	深鉢	口縁	貝殻腹縁文押圧(横)	-
34	4	G-15(C)	I~II	-	縄文早期中葉鳥木沢式	深鉢	胴	貝殻腹縁文押圧(斜)	-
34	5	G-14	II	-	縄文早期中葉鳥木沢式	深鉢	胴	口端押圧、貝殻腹縁文押圧(縦)	胎土に石英多
34	6	G-9(C)	I~II	-	縄文早期中葉鳥木沢式	深鉢	胴	貝殻腹縁文 斜押圧(縦)	胎土に石英多
34	7	G-12	II	-	縄文前期円筒下層d1式	深鉢	口縁~ 胴	口端 LR斜回転、口縁 LR押圧、胴 結束第1種(LR・RL)横回転	-
34	8	G-12(C)	IV	-	縄文前期円筒下層d1式	深鉢	口縁~ 胴	L押圧、粘土貼付(横)→刺突(斜)、単絡第1類(R)縦回転	-
34	9	G-19	II	-	縄文前期円筒下層d1式	深鉢	口縁~ 胴	小波状、LR押圧・単絡第5類押圧、結束第1種(LR・RL)横回転	34-9・10同一
34	10	G-20	II	-	縄文前期円筒下層	深鉢	胴	結束第1種(LR・RL)横回転	34-9・10同一

土器2

図版 番号	番号	出土地	層位	P番	時代・型式	器形	部位	文様・調整等	備考
34	11	G-13 (C)	I~ II	-	縄文前期円筒下層	深鉢	胴~底	単絡1A類(R・L)縦回転	34-11・12同一
34	12	ハイ土	-	-	縄文前期円筒下層	深鉢	胴	単絡1A類(R・L)縦回転、底外面ミガキ	34-11・12同一
34	13	G-12 (C)	I~ II	-	縄文前期円筒下層d1式	深鉢	口縁~ 胴	口端LR・RL回転、口縁LR押圧、結束第2種(RL・LR)横回転、胴単絡1A類R・L)縦回転、結束第2種(RL・LR)縦回転	34-13~15同一
34	14	G-12 (C)	I~ II	-	縄文前期円筒下層d1式	深鉢	胴	単絡1A類(R・L)縦回転、結束第2種(RL・LR)縦回転	34-13~15同一
34	15	G-12 (C)	I~ II	-	縄文前期円筒下層d1式	深鉢	胴	単絡1A類(R・L)縦回転、結束第2種(RL・LR)縦回転	34-13~15同一
34	16	G-14	II	-	縄文大木10式併行型式	深鉢	口縁	RL多条横回転→沈線	-
34	17	G-20	II	-	縄文大木10式併行型式	深鉢	胴	LR横・斜回転、沈線(円状)	-
34	18	G-11 (C)	I~ II	-	縄文後期初頭	深鉢	口縁	折り返し口縁、口縁LR横回転、胴LR縦回転	-
34	19	G-20	II	-	縄文中期末~後期初頭	深鉢	口縁	LR縦回転	-
34	20	G-16	II下 面	-	縄文中期末~後期初頭	深鉢	口縁	RL多条縦回転	-
34	21	G-16	II	-	縄文中期末~後期初頭	深鉢	口縁	RL多条縦回転	-
34	22	G-17	II	-	縄文中期末~後期初頭	深鉢	口縁	LR横回転	-
34	23	G-14 (C)	I~ II	-	縄文中期末~後期初頭	深鉢	口縁	LR多条横回転	-
35	1	G-16	II	-	縄文中期末	深鉢	胴	RL多条縦回転、内面 ヨコナデ、接合帯痕跡あり	外面 スス状炭化物付着、35-1~3同一
35	2	G-16	II	-	縄文中期末	深鉢	胴	RL多条縦回転、内面 ヨコナデ、接合帯痕跡あり	外面 スス状炭化物付着、35-1~3同一
35	3	G-16	II	-	縄文中期末	深鉢	胴	RL多条縦回転、内面 ヨコナデ、接合帯痕跡あり	外面 スス状炭化物付着、35-1~3同一
35	4	G-16	II	-	縄文中期末~後期初頭	深鉢	胴	LR縦回転	-
35	5	G-3	II	-	縄文中期末~後期初頭	深鉢	胴	RL縦回転、内面ナデ、接合帯痕跡あり	-
35	6	G-17	II	-	縄文中期末~後期初頭	深鉢	胴	RL縦回転	外面 スス状炭化物付着
35	7	G-14	II	-	縄文中期末~後期初頭	深鉢	胴	LR縦回転、内面ナデ、接合帯痕跡あり	-
35	8	G-16	II	-	縄文中期後半	深鉢	胴	RLR斜回転	-
35	9	G-10 (C)	III	-	縄文中期末~後期初頭	深鉢	胴	LR多条横回転	-
35	10	G-15	II	-	縄文中期末~後期初頭	深鉢	胴~底	LR縦回転	-
35	11	G-16	II	-	縄文中期末~後期初頭	深鉢	胴~底	RL多条縦回転	内面 スス状炭化物付着 底径10.4、器高(7.1)
35	12	G-18	II	-	縄文中期円筒上層式	深鉢	胴~底	RL多条縦回転、底外面 網代痕	-
36	1	G-1 (C)	III	-	縄文後期十腰内I群	深鉢	口縁~ 胴	六波状、磨消縄文、沈線(長楕円形)、RL回転	36-1~3同一 口径(25.5)、器高(11.2)
36	2	G-1 (C)	III	-	縄文後期十腰内I群	深鉢	口縁~ 胴	波状、磨消縄文、沈線(長楕円形・渦巻状)、RL回転	36-1~3同一
36	3	G-1 (C)	III	-	縄文後期十腰内I群	深鉢	胴	磨消縄文、沈線(渦巻状)、RL回転、下半無文	36-1~3同一
36	4	G-1 (C)	III	-	縄文後期十腰内I群	深鉢	口縁~ 胴	折り返し状口縁、磨消縄文、沈線(三角形状)→L回転→ミガキ、内面 ヨコナデ	36-4~7同一
36	5	G-1 (C)	II	-	縄文後期十腰内I群	深鉢	口縁	折り返し状口縁、磨消縄文、沈線(三角形状)→L回転→ミガキ、内面 ヨコナデ	36-4~7同一
36	6	G-1 (C)	II	-	縄文後期十腰内I群	深鉢	口縁	折り返し状口縁、磨消縄文、波頂部沈線(渦巻状)、沈線(三角形状)→L回転→ミガキ、内面 ヨコナデ	36-4~7同一
36	7	G-1 (C)	II	-	縄文後期十腰内I群	深鉢	口縁	折り返し状口縁、磨消縄文、波頂部沈線、沈線→L回転→ミガキ、内面 ヨコナデ	36-4~7同一
36	8	G-19	II	-	縄文後期十腰内I群	深鉢	口縁	LR横・斜回転→沈線・ミガキ、内面ヨコミガキ	-
36	9	G-15	カク ラン	-	縄文後期十腰内I群	深鉢	口縁	波状、LR横回転→沈線(三角形状)、ミガキ、内面ヨコミガキ	-
36	10	G-10 (C)	III	-	縄文後期十腰内I群	深鉢	口縁	LR横回転→磨消→沈線(横位・縦位)	-

土器3

図版 番号	番号	出土地	層位	P番	時代・型式	器形	部位	文様・調整等	備考
36	11	G-11 (C)	I~II	-	縄文後期十 腰内I群	深鉢	口縁	LR横回転→三条沈線、内面ヨコナデ	-
36	12	G-1 (C)	III	-	縄文後期十 腰内I群	深鉢	胴	RL横・斜回転→沈線→磨消、下半無文	36-1~3と同一個体の 可能性あり
36	13	G-19	II	-	縄文後期十 腰内I群	深鉢	口縁~ 胴	波状、四条沈線(長楕円形・渦巻状)、内面ヨコミガ キ	外面スス状炭化物付着、 36-13~15と同一
36	14	G-19	II	-	縄文後期十 腰内I群	深鉢	口縁~ 胴	波状、四条沈線(長楕円形・渦巻状)、内面ヨコミガ キ	外面スス状炭化物付着、 36-13~15と同一
36	15	G-19	II	-	縄文後期十 腰内I群	深鉢	胴	四条沈線(長楕円形)、下半無文	36-13~15と同一
37	1	G-12 (C)	I~II	-	縄文後期十 腰内I群	深鉢	口縁	波状、折り返し状口縁、浅い沈線(横位・三角形)	-
37	2	G-19	II	-	縄文後期十 腰内I群	深鉢	口縁	波状、折り返し状口縁、二条・三条沈線(横位・縦位・ 斜位・円形)	37-2~4同一
37	3	G-19	II	-	縄文後期十 腰内I群	深鉢	口縁	波状、折り返し状口縁、二条・三条沈線(横位・斜位)	37-2~4同一
37	4	G-19	II	-	縄文後期十 腰内I群	深鉢	口縁	波状、折り返し状口縁、二条・三条沈線(横位・縦位・ 斜位・円形)	37-2~4同一
37	5	G-18	-	-	縄文後期十 腰内I群	深鉢	口縁	波頂部 突起、沈線(横位・円形・楕円形状)	-
37	6	G-12 (L)	II	-	縄文後期十 腰内I群	深鉢	口縁	波状、二条・三条沈線(横位・楕円形状)→ミガキ	-
37	7	G-10 (C)	II~III	-	縄文後期十 腰内I群	深鉢	口縁	沈線(横位・方形状)	-
37	8	G-1 (C)	II	-	縄文後期十 腰内I群	深鉢	口縁	二条沈線(横位・弧状)	-
37	9	G-19	II	-	縄文後期十 腰内I群	深鉢	口縁	沈線(横位)	-
37	10	G-17	II	-	縄文後期十 腰内I群	深鉢	胴	浅い沈線(楕円形状・横位)	-
37	11	G-1 (L)	II	-	縄文後期十 腰内I群	深鉢	口縁	二条沈線(横位)	-
37	12	G-1 (L)	II	-	縄文後期十 腰内I群	深鉢	口縁	二条沈線(横位)	-
37	13	G-9	II	-	縄文後期十 腰内I群	深鉢	胴	沈線(楕円状)	-
37	14	G-17	II	-	縄文後期十 腰内I群	深鉢	口縁	二条・三条沈線(横位・楕円形状)	-
37	15	G-19	II	-	縄文後期十 腰内I群	深鉢	口縁	波頂部 粘土貼付、ハケメ状沈線(横位・弧状)	37-15・16同一
37	16	G-19	II	-	縄文後期十 腰内I群	深鉢	口縁	波頂部 粘土貼付、ハケメ状沈線(横位)	37-15・16同一
37	17	G-11 (C)	I~II	-	縄文後期十 腰内I群	深鉢	口縁	波状、ハケメ状沈線(横位・三角形・長楕円形)→ミ ガキ、内面ケズリ・ミガキ	-
37	18	G-11 (L)	II	-	縄文後期十 腰内I群	深鉢	胴	三条沈線(横位)、下半 無文	-
37	19	G-10 (C)	III	-	縄文後期十 腰内I群	深鉢	口縁	波状、口縁 ハケメ状沈線(横位)、胴 ハケメ状沈 線(弧状)、刺突、内面 ヨコミガキ	37-19~21同一
37	20	G-10 (C)	I~II	-	縄文後期十 腰内I群	深鉢	口縁	波状、口縁 ハケメ状沈線(横位)、胴 刺突、内面 ヨコミガキ	37-19~21同一
37	21	G-10 (C)	I~II	-	縄文後期十 腰内I群	深鉢	胴	ハケメ状沈線(弧状)、刺突、内面 ヨコミガキ	37-19~21同一
37	22	G-4 (C)	II	-	縄文後期十 腰内I群	深鉢	胴	ハケメ状沈線(三角形)、内面ハケメ状	-
37	23	G-4 (C)	II	-	縄文後期十 腰内I群	深鉢	口縁	ハケメ状沈線(方形)	-
37	24	G-9 (C)	II	-	縄文後期十 腰内I群	深鉢	口縁	口縁 ハケメ状沈線(横位)	-
37	25	G-9 (C)	II	-	縄文後期十 腰内I群	深鉢	口縁	口縁 ハケメ状沈線(横位)、胴 ミガキ	-
37	26	G-19	II	-	縄文後期十 腰内I群	深鉢	口縁	ハケメ状沈線(横位)	縄文
37	27	G-16	II	-	縄文後期十 腰内I群	深鉢	口縁	ハケメ状沈線(横位・縦位)	-
37	28	G-18	-	-	縄文後期十 腰内I群	深鉢	胴	ハケメ状沈線(横位)	-
37	29	G-10 (L)	II	-	縄文後期前 葉	深鉢	口縁	波頂部、LR押圧、沈線、内面ヨコミガキ	-
37	30	G-11 (L)	II	-	縄文後期前 葉	深鉢	口縁	折り返し口縁、LR横回転	-

土器4

図版 番号	番号	出土地	層位	P番	時代・型式	器形	部位	文様・調整等	備考
37	31	G-14 (C)	I~ II	-	縄文後期前 葉	深鉢	口縁	無文	-
37	32	G-14	I	-	縄文後期前 葉	深鉢	口縁	単絡1類(L)縦回転→ミガキ、内面ケズリ	-
37	33	G-1 (C)	II	-	縄文後期前 葉	深鉢	胴	無文、ケズリ→ミガキ	外面 スス状炭化物付 着
37	34	G-12 (C)	I~ II	-	縄文後期前 葉	深鉢	胴	単絡1類(R)縦回転	外面 スス状炭化物付 着
38	1	G-1 (C)	III	-	縄文後期前 葉	深鉢	胴~底	無文、外面・底外面ミガキ	-
38	2	G-9 (L)	III	-	縄文後期前 葉	深鉢	胴~底	無文	底径12.2、器高(3.3)
38	3	G-9 (L)	III	-	縄文後期前 葉	深鉢	胴~底	外面ミガキ、底外面籐状文	底径9.2、器高(5.3)
38	4	G-1 (C)	II	-	縄文後期前 葉	深鉢	胴~底	無文、内外面・底外面ミガキ	-
38	5	G-16	II下 面	-	縄文後期前 葉	深鉢	底	RL斜回転?	底径8.0、器高(2.3)
38	6	G-2 (C)	II	-	縄文後期前 葉	深鉢	胴~底	無文、ミガキ	-
38	7	G-10 (L)	II	-	縄文後期前 葉	深鉢	底	無文、ミガキ	-
38	8	G-11 (C)	I~ II	-	縄文後期前 葉	深鉢	底	無文、ミガキ	-
38	9	G-15	II	-	縄文後期前 葉	深鉢	底	外面ミガキ、内面穿孔の痕跡あり。底外面網代痕	-
38	10	G-14	II	-	縄文後期前 葉	深鉢	胴~底	内外面ミガキ、底外面籐状文	底径5.8、器高(3.7)
38	11	G-19	II	-	縄文後期前 葉	深鉢	底	外面・底外面ミガキ	底径9.6、器高(1.4)
38	12	G-19	II	-	縄文後期十 腰内I群	鉢	胴	三条~五条沈線(横位・弧状)	38-12・13同一
38	13	G-17	II	-	縄文後期十 腰内I群	鉢	胴	三条~五条沈線(横位・弧状)	38-12・13同一、外面付 着物あり
38	14	G-2 (L)	I	-	縄文後期十 腰内I群	鉢	口縁	ハケメ状沈線(横位)	-
38	15	G-18	-	-	縄文後期十 腰内I群	浅鉢	口縁	沈線(横位)	-
38	16	G-12 (C)	I~ II	-	縄文後期十 腰内I群	壺	胴	沈線(円・弧状)	-
38	17	G-18	-	-	縄文後期十 腰内I群	台付	台	沈線(横位)	器高(2.8)
38	18	G-19	II	-	縄文後期十 腰内I群	台付	台	沈線(横位)	底径(7.6)、器高(2.1)
38	19	G-18	-	-	縄文後期十 腰内I群	浅鉢	底	沈線	-
38	20	G-8 (C)	II	-	縄文後期十 腰内I群	浅鉢	底	底外面高台状	底径6.5、器高(1.5)
38	21	G-15	I	-	縄文後期十 腰内I群	台付	台	内外面ミガキ	底径3.8、器高(2.6)
38	22	G-19	II	-	縄文後期十 腰内I群	台付	台	無文	-
38	23	G-3 (L)	II	-	縄文後期十 腰内II群	深鉢	口縁	波状、LR横回転→沈線	-
38	24	G-14 (C)	I~ II	-	縄文後期十 腰内II群	深鉢	口縁	LR横回転→沈線(横位・波状)、内面ミガキ	-
38	25	G-21	II	-	縄文後期十 腰内II群	深鉢	口縁	磨消縄文、LR横回転→沈線、内面ミガキ	-
38	26	G-9 (C)	III	-	縄文後期十 腰内II群	深鉢	口縁	磨消縄文、LR横回転→沈線	-
38	27	G-9 (C)	I~ II	-	縄文後期十 腰内II群	深鉢	胴	LR横回転→沈線、磨消縄文	-
38	28	G-10 (C)	II~ III	-	縄文後期十 腰内II群	深鉢	胴	磨消縄文、LR横回転→沈線	-
38	29	G-19	I	-	縄文後期中 葉	深鉢	口縁	波状、内外面ミガキ	縄文
38	30	G-14	IV	-	縄文後期中 葉	深鉢	口縁	無文、内外面ミガキ	-
38	31	G-16	II	-	縄文後期中 葉	深鉢	口縁	LRL横回転	38-31・33同一か

土器5

図版 番号	番号	出土地	層位	P番	時代・型式	器形	部位	文様・調整等	備考
38	32	G-11	II	-	縄文後期中葉	深鉢	口縁	口端ミガキ、内面折り返し口縁、LR横回転、内面ヨコミガキ	-
38	33	G-16	II	-	縄文後期中葉	深鉢	胴	LRL横回転	38-31・33同一か
39	1	G-14	II	-	縄文晩期大洞BC式	深鉢	口縁	口端 突起、LR・RL横回転→沈線、ミガキ、内面ミガキ	口径(15.8)、底径(6.6)、器高18.2
39	2	G-15	II	-	縄文晩期大洞BC式	鉢	胴	LR横・斜回転→沈線、ミガキ	-
39	3	G-13	II	-	縄文晩期大洞BC式	壺	肩	RL横回転→沈線、刺突(斜)	-
39	4	G-16	II	-	縄文晩期大洞BC式	鉢	口縁	口端 刻み、沈線(横位・三叉文)→ミガキ、内面ミガキ	外面スス状炭化物付着
39	5	G-14	II	-	縄文晩期大洞BC式	深鉢	口縁	口端 突起、LR横回転→沈線、ミガキ	-
39	6	G-14	II	-	縄文晩期大洞BC式	深鉢	口縁	口端 突起、LR横回転→沈線、ミガキ	-
39	7	G-16	IV	-	縄文晩期大洞C1式	浅鉢	胴	LR横・斜回転→沈線	-
39	8	G-19	II	-	縄文晩期大洞A式	鉢	口縁	口端 突起、一条沈線、沈線(横位)、内面 一条沈線(横位)	-
39	9	G-16	II	-	縄文晩期	鉢	口縁	口端 刻み、LR横回転→ナデ	外面 スス状炭化物付着、39-9・10同一
39	10	G-16	II	-	縄文晩期	鉢	口縁	口端 刻み、LR横回転→ナデ	外面 スス状炭化物付着、39-9・10同一
39	11	G-18	II	-	縄文晩期	深鉢	胴	LR横回転→沈線(横位)	-
39	12	G-16	II	-	縄文晩期	深鉢	胴	LR斜回転、ミガキ	外面 スス状炭化物付着
39	13	G-20	II	-	縄文晩期後半	壺	口縁	口端 一条沈線、頸部 浅い一条沈線、内面 一条沈線、内外面ミガキ	赤色付着物あり?口径(12.8)、器高(6.7)
39	14	G-18	-	-	縄文晩期大洞A式	台付	台	沈線(横位)、下から2段目の沈線上に四突起	底径7.9、器高(4.0)
39	15	G-16	I	-	縄文晩期	深鉢	底	RL斜回転	-
39	16	G-20	II	-	弥生	壺	肩	LR横回転→二条沈線(横位・楕円形状)、内面ミガキ	39-16~18同一
39	17	G-20	II	-	弥生	壺	肩	LR横回転→二条沈線(横位・楕円形状)、内面ミガキ	39-16~18同一
39	18	G-22	II	-	弥生	壺	肩	LR横回転	39-16~18同一
39	19	G-16	II	-	弥生	深鉢	底	LR斜回転	-
43	1	G-10(L)	II	-	奈良・土師器	坏	口縁~底	外面ケズリ・口縁部ナデ、沈線一条、内面ミガキ・黒色処理、底外面ケズリ	口径(17.4)、底径8.1、器高11.5
43	2	G-10(L)	II	-	奈良・土師器	坏	口縁~底	外面ケズリ・口縁部ナデ、内面ミガキ・黒色処理、底外面ミガキ	口径(15.7)、底径6.3、器高6.7
43	3	G-1(L)	II	-	奈良・土師器	坏	口縁~胴	段あり、外面ミガキ、内面ミガキ・黒色処理	-
43	4	G-18	-	-	奈良・土師器	坏	口縁~胴	外面ミガキ、内面ミガキ	-
43	5	G-11(C)	II~III	-	奈良・土師器	坏	口縁~胴	外面ミガキ、内面ミガキ・黒色処理	-
43	6	G-15	II下面	-	平安・土師器	坏	口縁~胴	外面ロクロナデ、内面ミガキ・黒色処理	-
43	7	G-16	II	-	奈良・土師器	坏	口縁~胴	外面ミガキ、内面ミガキ・黒色処理	-
43	8	G-16	II	-	奈良・土師器	坏	口縁~胴	外面ミガキ、内面ミガキ・黒色処理	-
43	9	G-16	II	-	奈良・土師器	坏	口縁~胴	外面ミガキ、内面ミガキ	-
43	10	G-19	II	-	平安・土師器	坏	胴~底	外面ロクロナデ、内面ミガキ・黒色処理、底外面回転糸切	底径(6.0)、器高(1.4)
43	11	G-16	II	-	平安・土師器	坏	底	外面ロクロナデ、内面ナデ?、底外面回転糸切	-
43	12	G-2(L)	I	-	奈良・土師器	高坏	台	外面ナデ、内面ナデ	-
43	13	G-1(L)	II	-	奈良・土師器	甕	口縁	外面ヨコナデ、内面ハケメ	-
43	14	G-11(L)	II	-	奈良・土師器	甕	口縁	外面ヨコナデ、内面ハケメ	-

土器6

図版 番号	番号	出土地	層位	P番	時代・型式	器形	部位	文様・調整等	備考
43	15	G-2 (L)	I	-	奈良・土師器	甕	口縁	外面ヘラナデ、内面ヨコナデ・ヘラナデ・ハケメの 痕跡あり	-
43	16	G-1 (L)	II	-	奈良・土師器	甕	口縁	外面ヨコナデ・ハケメの痕跡あり、内面ヨコナデ・ ヘラナデ	-
43	17	G-14	I	-	奈良・土師器	甕	口縁	外面ヨコナデ、内面ヨコナデ	-
43	18	G-16 (C)	I~ II	-	奈良・土師器	甕	口縁	外面ヨコナデ・ヘラナデ、内面ヨコナデ・ヘラナデ	-
43	19	G-1 (L)	II	-	奈良・土師器	甕	口縁	外面ヨコナデ・ヘラナデ、内面ヨコナデ・ヘラナデ	-
43	20	G-1 (L)	II	-	奈良・土師器	甕	口縁	外面ヨコナデ、内面ヘラナデ	-
43	21	G-1 (L)	II	-	奈良・土師器	甕	口縁	外面ヘラナデ・ヨコナデ、内面ヘラナデ・ヨコナデ	-
43	22	G-1 (L)	II	-	奈良・土師器	甕	口縁	外面ヨコナデ・ハケメの痕跡あり、内面ヘラナデ・ ヨコナデ	-
43	23	G-1 (C)	II	-	奈良・土師器	甕	口縁	外面ヘラナデ、内面ヨコナデ・ヘラナデ	-
43	24	G-1 (L)	II	-	奈良・土師器	甕	口縁	外面ヨコナデ、内面ヨコナデ	-
43	25	G-19	II	-	奈良・土師器	甕	口縁	外面ヨコナデ、内面ヨコナデ・ハケメの痕跡あり	-
43	26	G-1 (L)	II	-	奈良・土師器	甕	口縁	外面ヨコナデ、内面ヨコナデ	-
44	1	G-14 (C)	I~ II	-	奈良・土師器	甕	口縁 ~底	外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ・ヨコナデ・一部ヘ ラケズリ、底外面籐状文	口径(15.1)、底径(6.4)、 器高(10.3)
44	2	G-14	I	-	奈良・土師器	甕	胴	外面ハケメ・沈線状、内面ヘラナデ・ハケメ	-
44	3	G-1 (L)	II	-	奈良・土師器	甕	胴	外面ハケメ・一条沈線、内面ハケメ	内面 黒色付着物あり
44	4	G-1 (L)	II	-	奈良・土師器	甕	胴	外面二条沈線・ナデ・ハケメの痕跡あり、内面ヘラ ナデ	-
44	5	G-13 (L)	II	-	奈良・土師器	甕	胴	外面ヘラケズリ、内面ハケメ	-
44	6	G-20	II	-	奈良・土師器	甕	胴~底	外面ミガキ・ケズリ、内面ヘラケズリ	-
44	7	G-15	II	-	奈良・土師器	甕	胴~底	外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ、底外面ヘラケズリ	底径(8.6)、器高(4.3)
44	8	G-1 (L)	II	-	奈良・土師器	甕	胴~底	外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ、底外面ヘラケズ リ・ヘラナデ	底径7.4、器高(2.7)
44	9	G-1 (L)	I	-	奈良・土師器	甕	胴~底	外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ、底外面木葉痕	-
44	10	G-2 (L)	I	-	奈良・土師器	甕	胴~底	外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ、底外面ヘラケズリ	底径(8.7)、器高(2.8)
44	11	G-11 (C)	II~ III	-	須恵器	大甕	肩~ 頸部	外面自然釉、内面ロクロナデ	-
44	12	G-12 (L)	II	-	須恵器	大甕	胴	外面自然釉、内面ロクロナデ	-
44	13	G-14	IV	-	須恵器	大甕	胴	外面自然釉、内面ロクロナデ	-
44	14	G-15	I~ II	-	須恵器	大甕	胴	外面自然釉、内面ロクロナデ	-

剥片石器

図版番号	番号	種別	出土区	グリッド	層位	S番号	長さ(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重さ(g)	石質	備考
40	1	横型石匙	-	G-14	II	-	39.5	63.0	8.5	15.0	頁岩	両面周縁加工。
40	2	微小剥離痕のある剥片	-	G-16	IV	-	37.5	35.5	5.5	11.3	頁岩	削器。片面一側縁に刃部形成。
40	3	石製品?	-	G-27	III	-	40.0	43.0	11.5	8.3	頁岩	片面一側縁に刃部形成。欠損品。種別不明

礫石器

図版番号	番号	分類	出土区	グリッド	層位	S番号	長さ(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重さ(g)	石質	備考
31	25	打ち欠きのある礫	SI-1	G-19	2	S-1	11.6	8.3	3.7	438.6	チャート	欠損品
31	26	擦石類	SI-1	G-19	床面直上	S-3	9.6	9.8	4.8	687.1	輝緑岩	擦り痕
40	4	磨製石斧	-	G-4(L)	III	-	9.8	5.5	2.6	167.2	輝緑岩	基部欠損
40	5	擦石類	-	G-12	II	-	14.6	6.8	6.2	756.5	泥岩	敲き痕
40	6	擦石類	-	G-3	III	-	16.7	7.3	3.1	721.9	安山岩	敲き痕
40	7	擦石類	-	G-2	II	-	19.3	9.5	7.6	1880.4	安山岩	敲き痕
40	8	擦石類	-	G-15	I	-	9.6	7.9	5.5	383.2	砂岩	敲き痕、欠損品
40	9	擦石類	-	G-15	II	-	7.1	6.5	3.0	126.6	流紋岩	敲き痕
41	1	擦石類	-	G-19	II	-	8.7	5.9	5.0	305.1	安山岩	敲き痕
41	2	擦石類	-	G-20	II	-	13.4	8.9	7.0	839.3	安山岩	敲き痕
41	3	擦石類	-	G-18	II	-	8.4	5.9	5.8	296.9	泥岩	敲き痕
41	4	擦石類	-	G-22	II	-	9.2	8.1	2.7	296.9	砂岩	敲き痕
41	5	擦石類	-	G-21	II	-	6.7	7.6	2.8	153.9	凝灰岩	敲き痕、磨製石斧の再利用?
41	6	擦石類	-	G-16	II	-	10.2	6.8	6.3	546.4	安山岩	敲き痕
41	7	擦石類	-	G-18	II	-	14.3	7.6	5.8	759.4	砂岩	擦り痕
41	8	擦石類	-	G-2(L)	I	-	8.8	4.4	4.4	190.0	砂岩	擦り痕、欠損品
42	1	擦石類	-	G-15(C)	I~II	-	15.3	9.8	6.1	962.1	安山岩	擦り痕
42	2	擦石類	-	G-1(L)	II	-	13.4	9.6	5.9	1104.4	安山岩	擦り痕、全体的に被熱
42	3	石皿類	-	G-11(C)	V	-	8.4	8.5	11.4	858.9	安山岩	擦り痕、欠損品
42	4	擦石類	-	G-15	I	-	14.5	10.6	6.2	1155.0	安山岩	両面擦り痕(摩滅)、裏面に敲き痕
42	5	石皿類	-	G-1(L)	II	-	7.1	7.0	5.6	309.6	砂岩	擦り痕(摩滅)、欠損品

土製品

図版番号	番号	出土地	層位	番号	時代・型式	器種	部位	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	備考
39	20	G-21	I	-	縄文時代	キノコ形土製品	笠	(51)	55	(23)	22.2	石突欠損

鉄関連遺物

図版番号	番号	出土地	層位	番号	時代・型式	器種	部位	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	備考
44	15	G-21	I	-	時期不明	器種不明	-	43	18	2	4.4	
44	16	G-16	I	-	時期不明	器種不明	-	61	15	8	17.6	
44	17	G-2	I	-	時期不明	器種不明	-	68	8	6	6	17・18同一
44	18	G-2	I	-	時期不明	器種不明	-	90	4.5	4	4.3	17・18同一

古銭

図版番号	番号	出土地	層位	番号	時代・型式	種別	部位	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	備考
44	19	G-21	I	-	江戸時代	古銭	-	23	23	1	3.2	寛永通宝

山屋敷平遺跡



南区西側 完掘 N→



南区西側 完掘 S→



南区東側 完掘 N→



北区 完掘 NE→



南区基本層序 N→



北区基本層序 N→

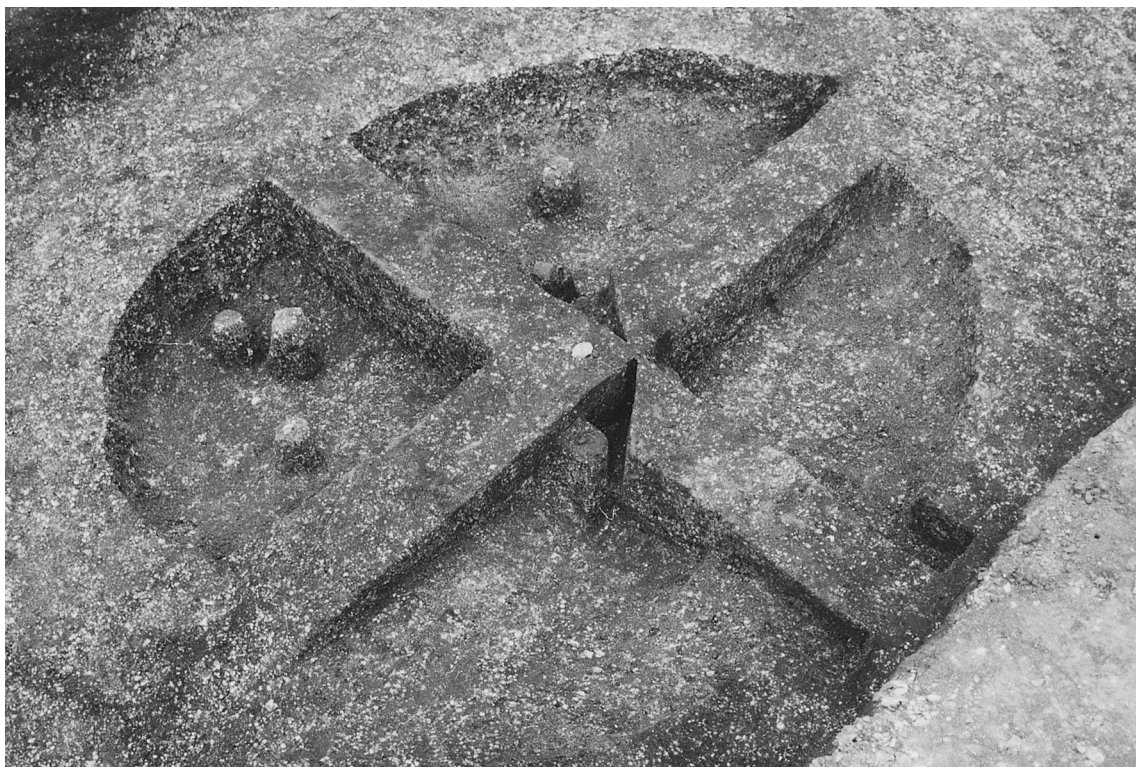
写真1 調査区・基本層序



完掘 N→



土層 W→



遺物出土状況 N→

写真2 第7号竪穴住居跡



完掘 E→



土層 S→



カマド土層 S→



旧カマド S→

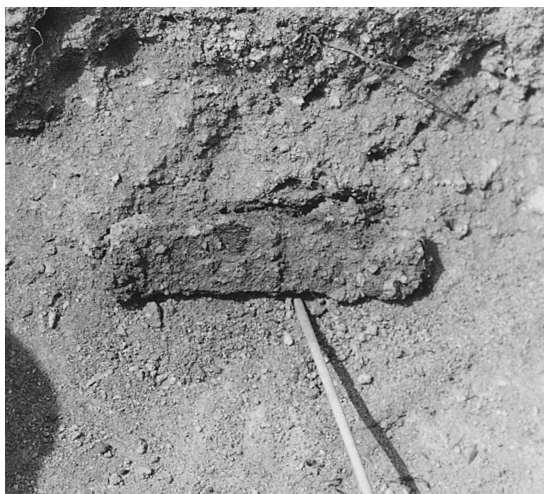


カマド完掘 E→

写真3 第1号竪穴住居跡(1)



第1号豎穴住居跡 遺物出土状況 NW→



第1号豎穴住居跡 鉄製品出土状況 E→



第1号豎穴住居跡 土師器出土状況 SE→



第2号豎穴住居跡 完掘 E→

写真4 第1号豎穴住居跡(2)・第2号豎穴住居跡(1)



完掘 N→



カマド完掘 E→



カマド土層 S→



カマド土層 S→



遺物出土状況 S→



遺物出土状況 E→



遺物出土状況 S→

写真5 第2号竪穴住居跡(2)



完掘 E→



土層 E→



カマド完掘 E→

写真6 第3号竪穴住居跡



完掘 E→



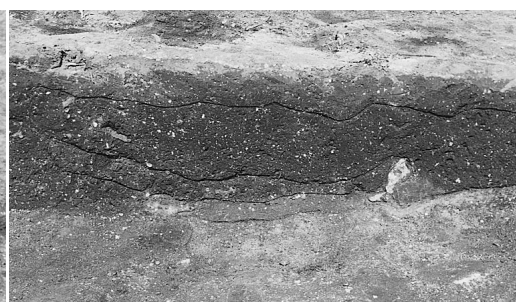
完掘 E→



土層 S→



遺物出土状況 N→



カマド土層 E→



ピット1粘土土層 S→

写真7 第4号竪穴住居跡



完掘 E→



完掘 W→



土層 E→



カマド完掘 E→



カマド土層 E→



炭化材出土状況 E→

写真8 第5号竪穴住居跡



第6号竖穴建物跡 完掘 N→



第6号竖穴建物跡 土層 S→



鉄製品出土状況 S→



第6号竖穴建物跡 土層 E→



第6号竖穴建物跡 完掘 N→



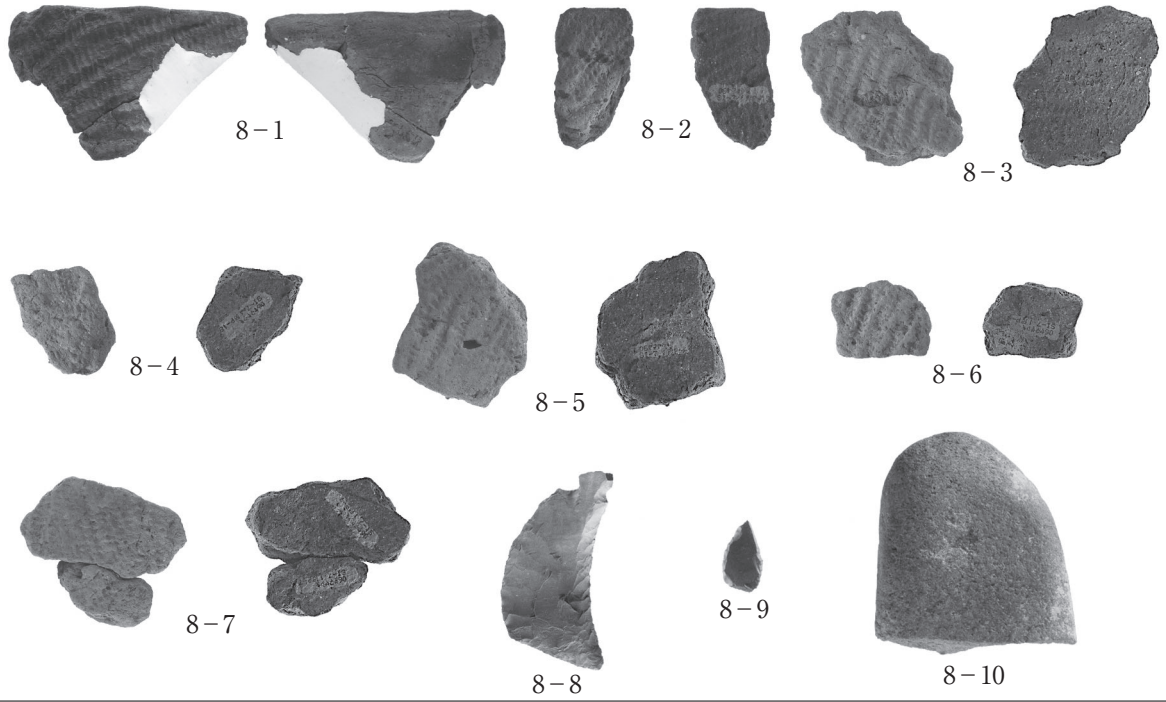
第1号土坑 完掘 W→



第2号土坑 完掘 N→

写真9 第6号竖穴建物跡・土坑

第7号豎穴住居跡



第1号豎穴住居跡

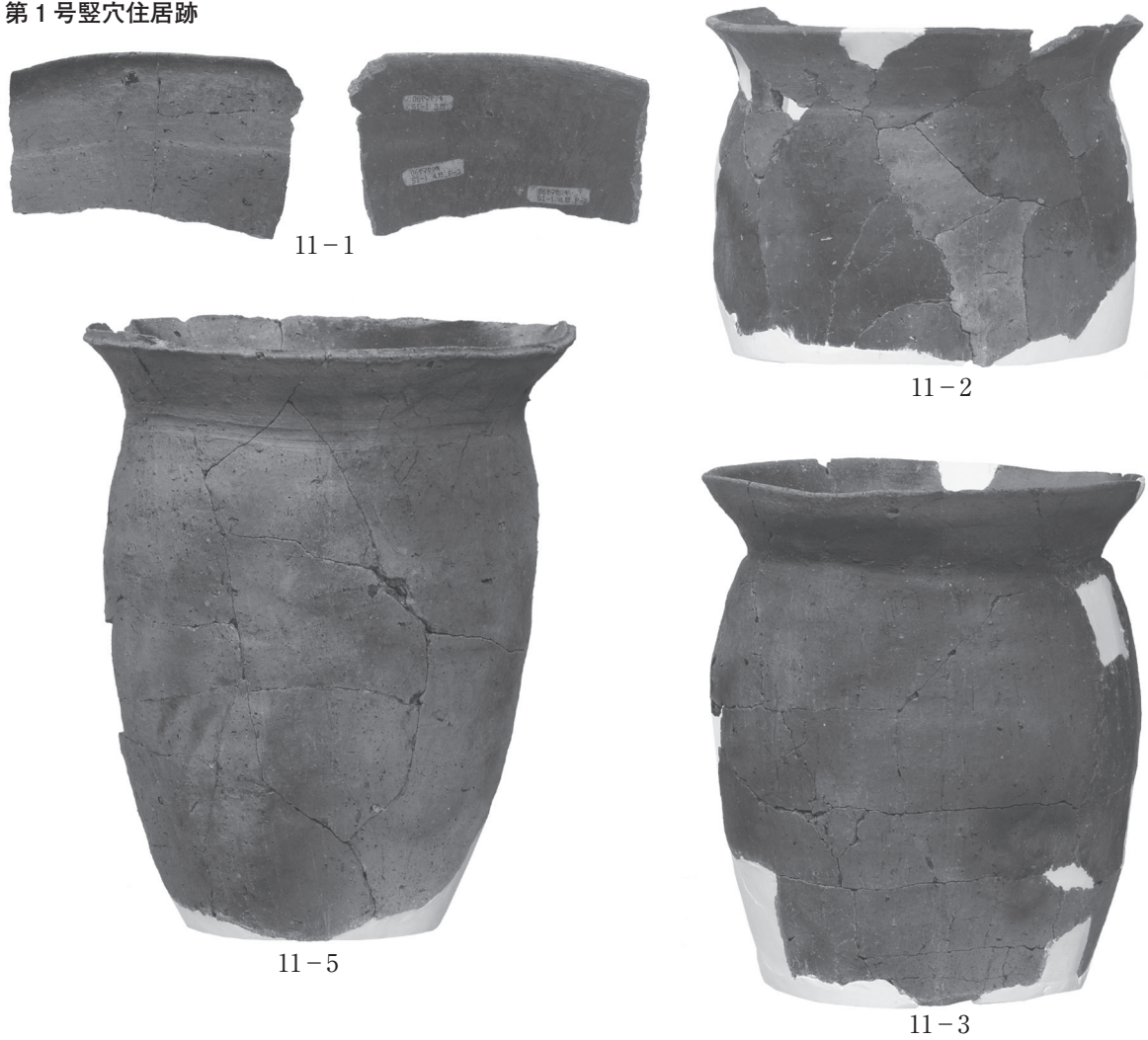


写真10 第7・1号豎穴住居跡出土遺物(1)

第1号竖穴住居跡

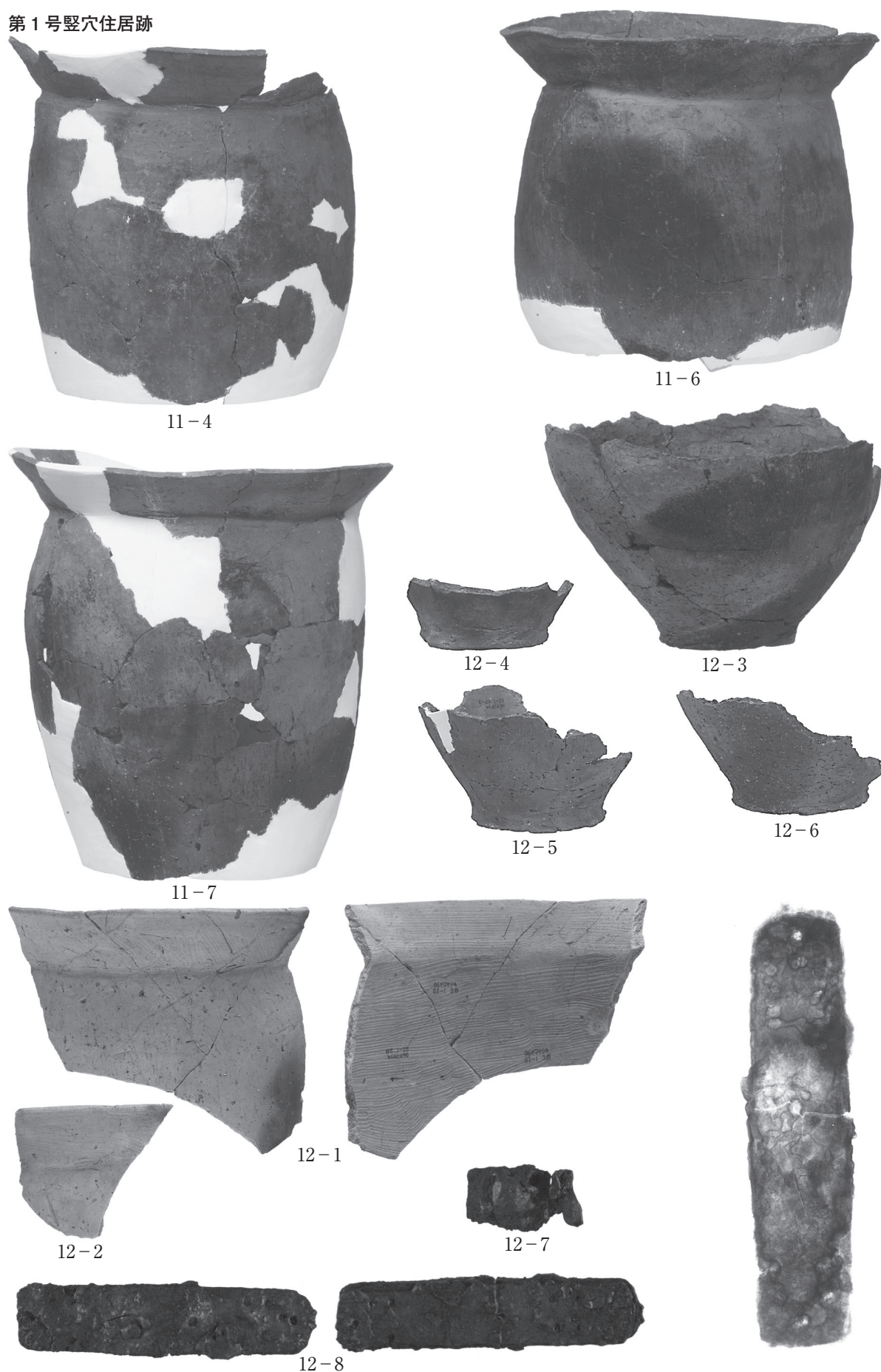


写真11 第1号竖穴住居跡出土遺物(2)



第2号豎穴住居跡



14-2



14-3

第3号豎穴住居跡



16-1



16-2



16-3

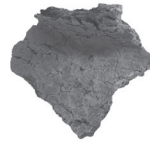
第4号豎穴住居跡



19-1



19-2



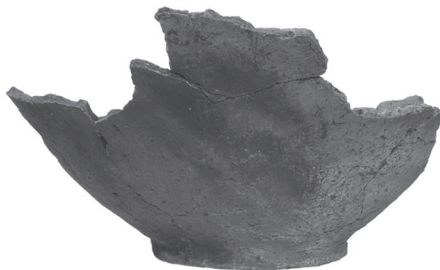
19-4



19-5



19-3



19-6



19-7



19-8



19-9

第5号豎穴住居跡



21-1



21-2

第6号豎穴建物跡



22-1

写真12 第2~5号豎穴住居跡、第6号豎穴建物跡出土遺物

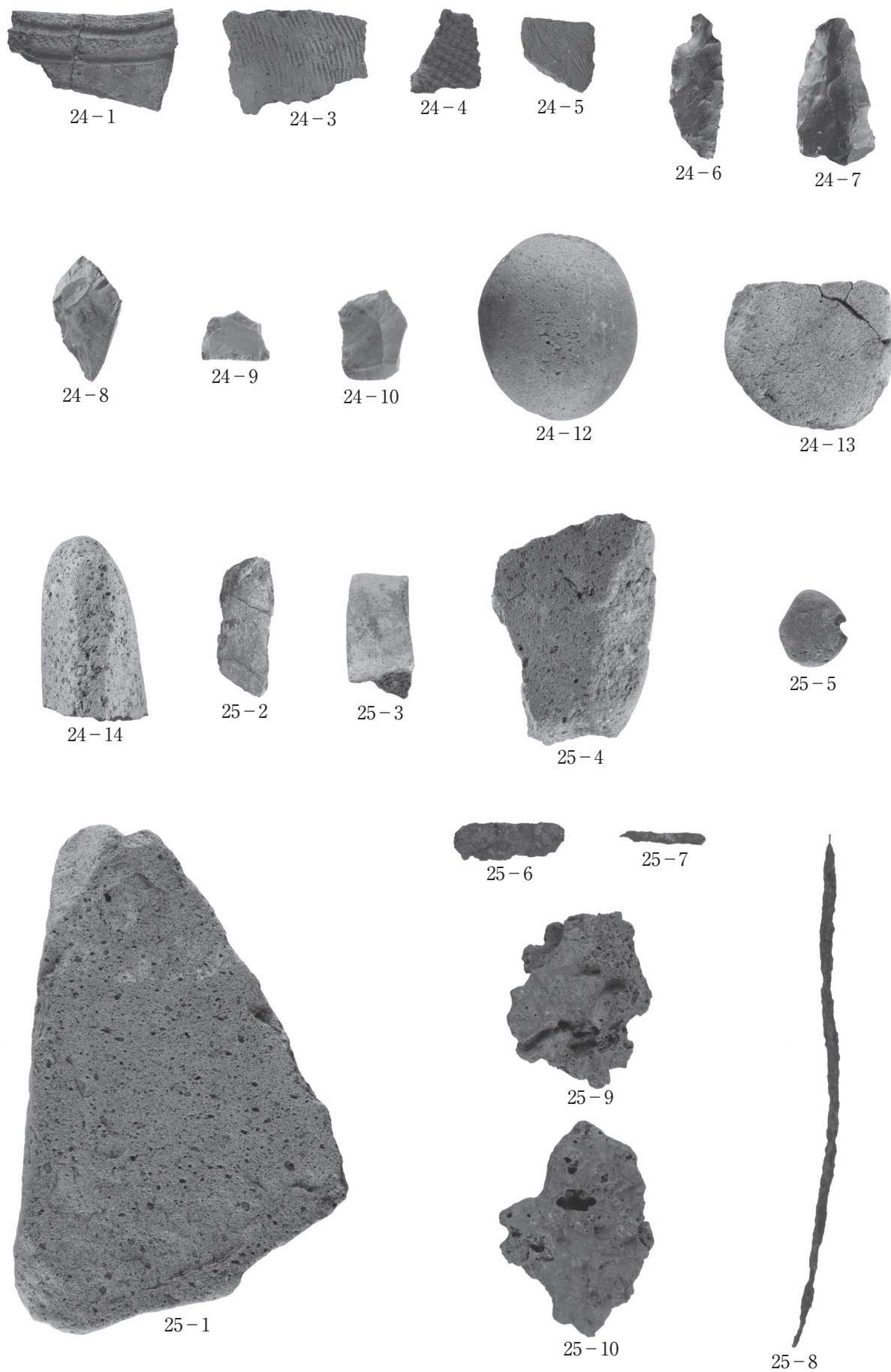


写真13 遺構外出土遺物

上平遺跡



調査区 SE→



調査区 E→



基本層序 S→

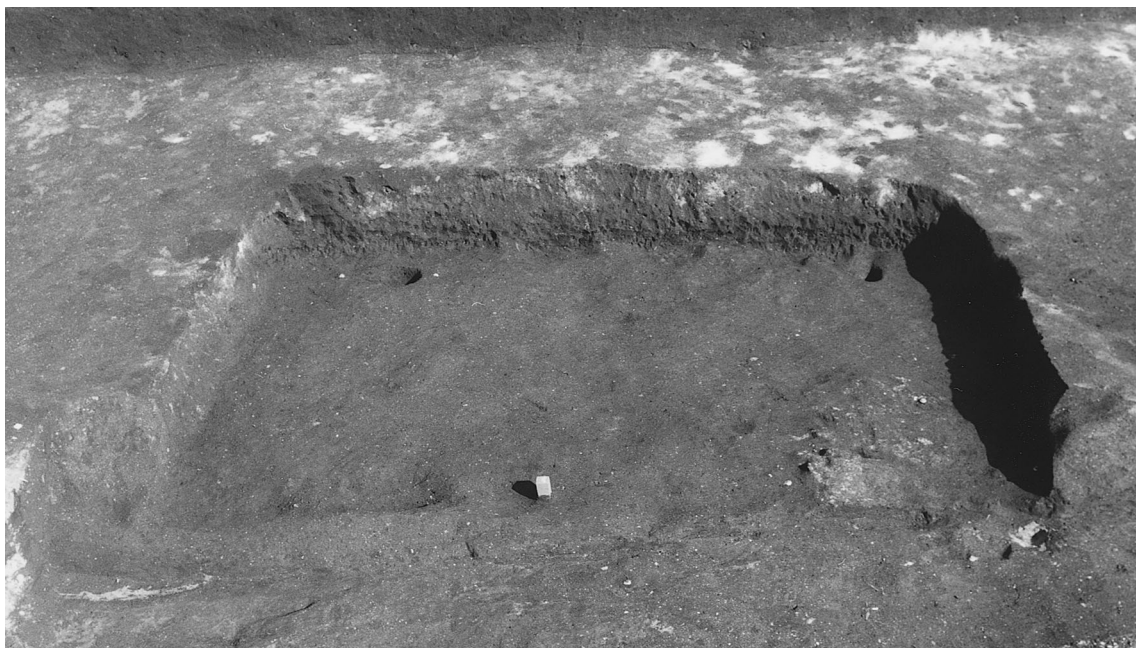


現況 S→

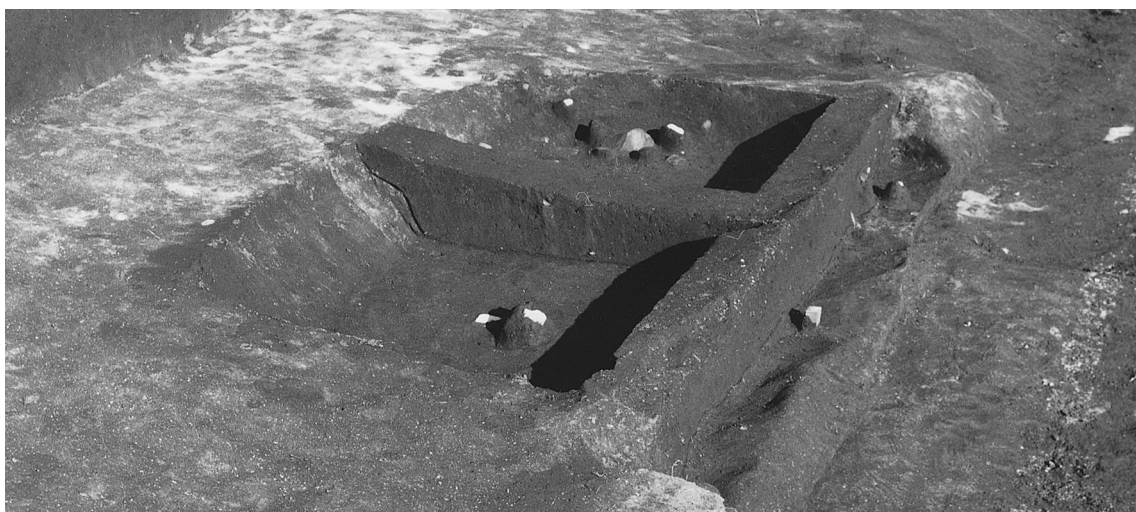


作業風景 NE→

写真14 調査区・基本層序・作業風景



完掘 S→



土層 W→



遺物出土状況 W→



火山灰検出状況 W→

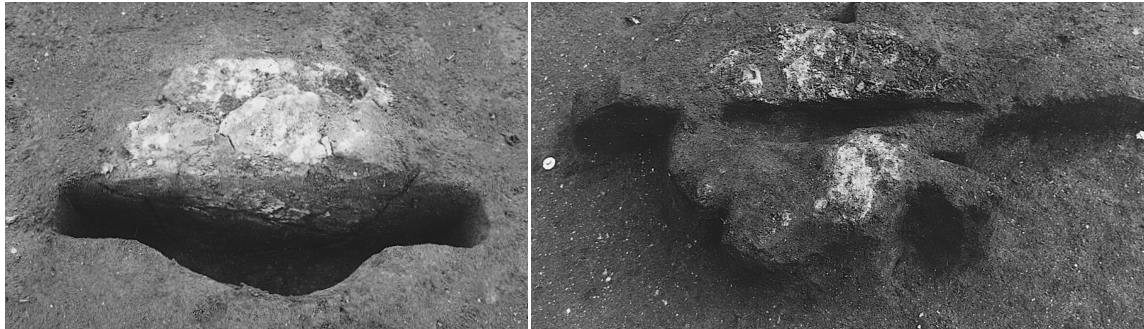
写真15 第1号竪穴住居跡



第1号粘土埋納遺構検出 E→

粘土埋納状況 S→

掘り方検出状況 S→



第2号粘土埋納遺構検出・土層 S→

第1号焼土遺構検出・土層 W→



G14~16遺物出土状況 W→



G19遺物出土状況 W→



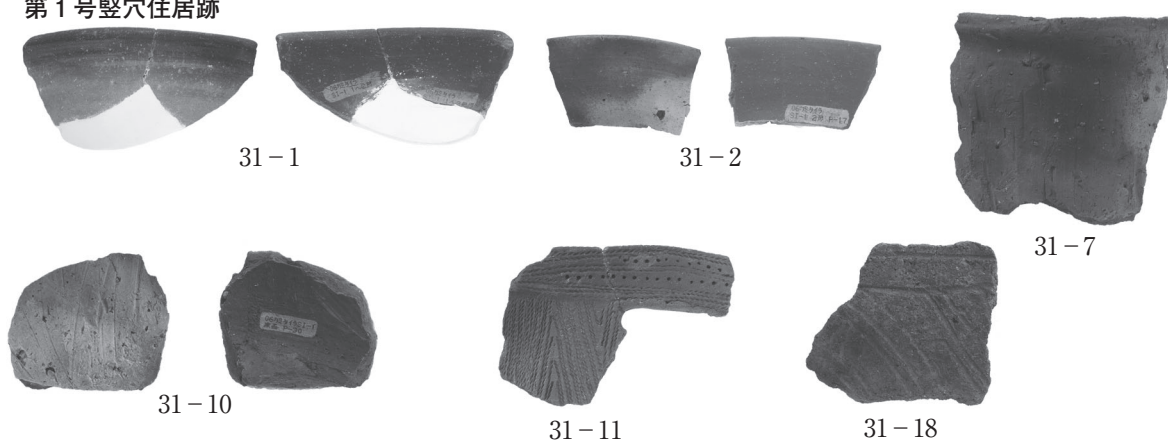
磨製石斧出土状況 W→



キノコ形土製品出土状況 W→

写真16 粘土埋納遺構・焼土遺構・遺物出土状況

第1号竖穴住居跡



第1号粘土埋納遺構



写真17 第1号竖穴住居跡・第1号粘土埋納遺構出土遺物

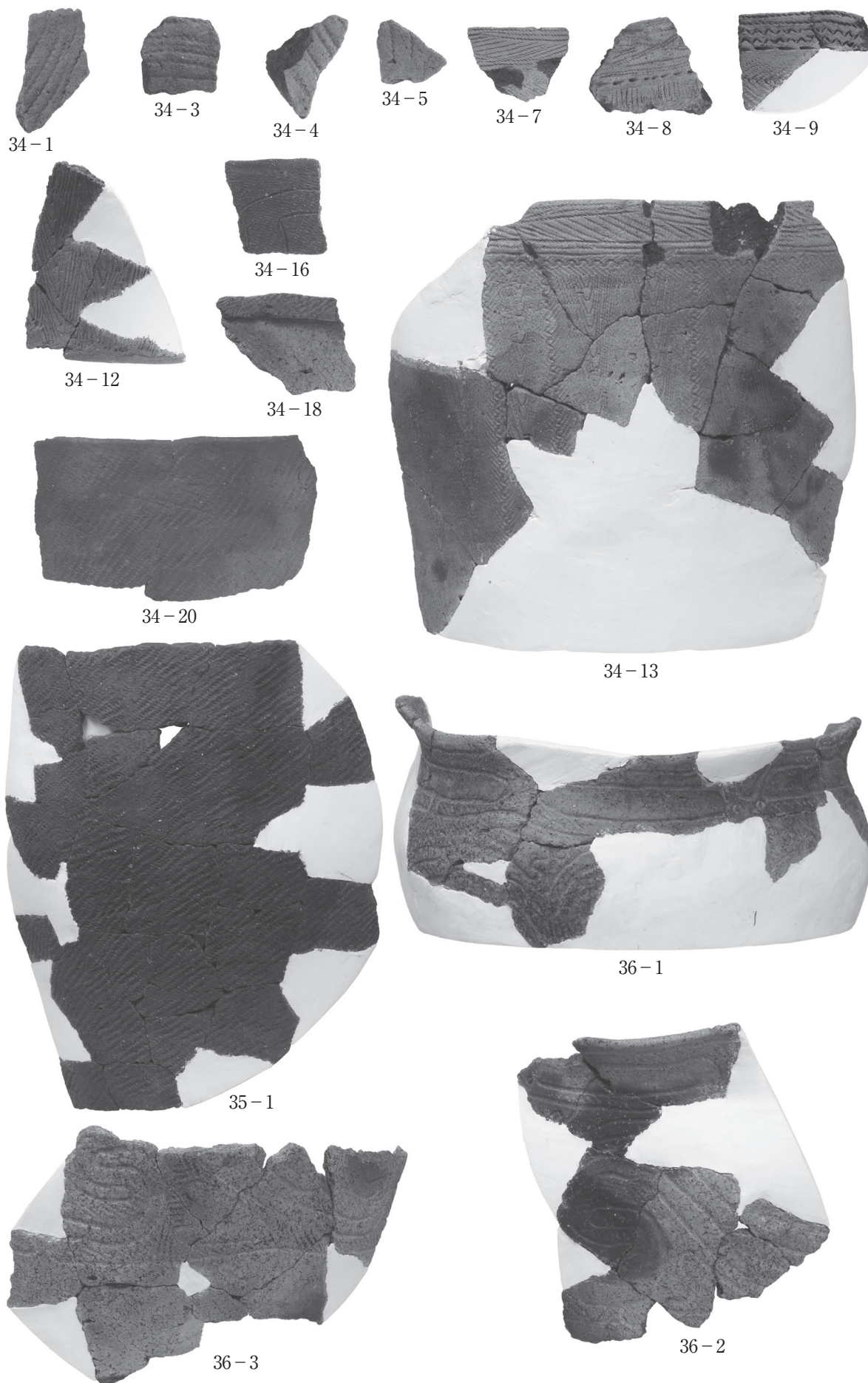


写真18 遺構外出土土器（1）

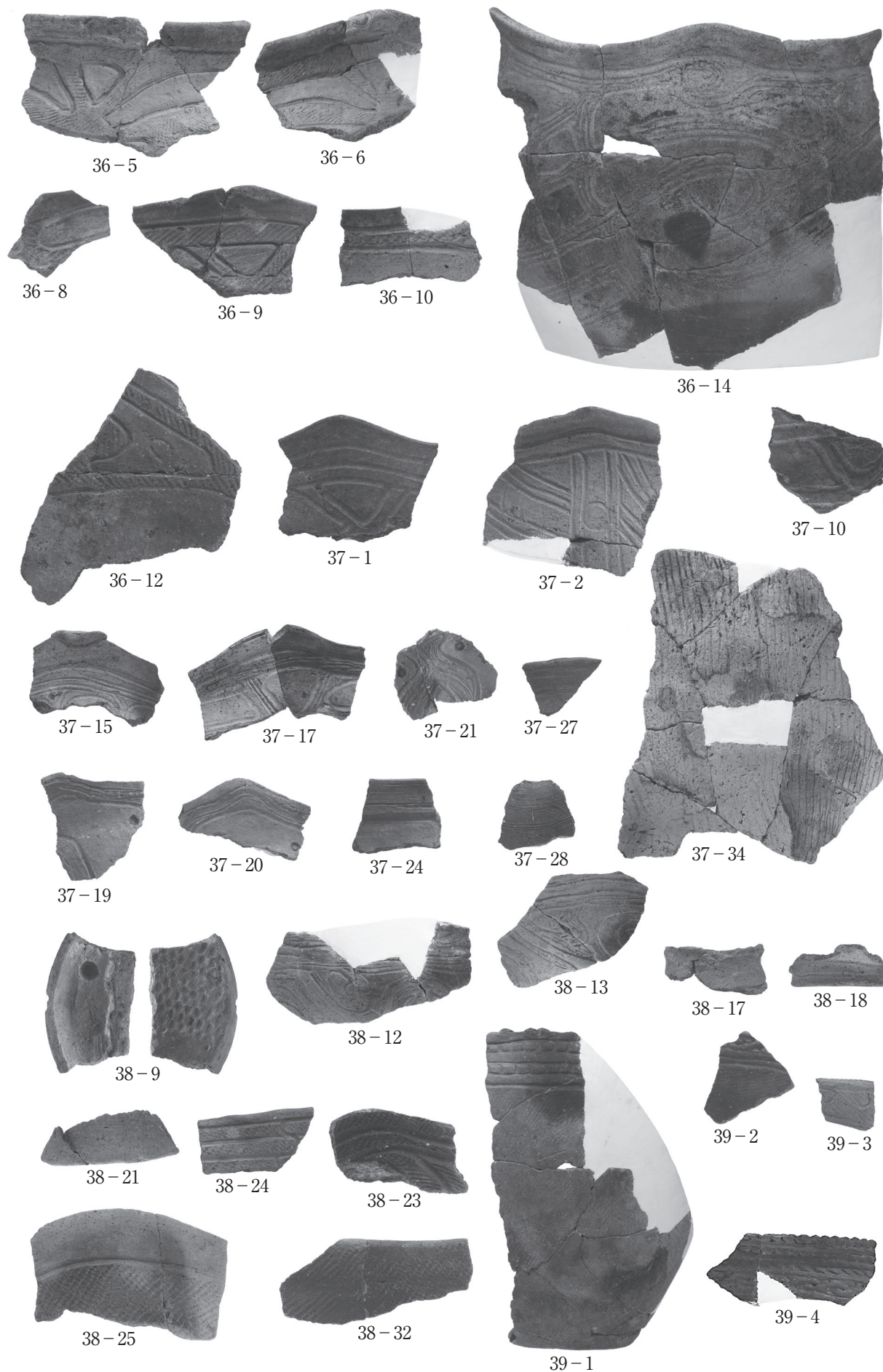


写真19 遺構外出土土器 (2)

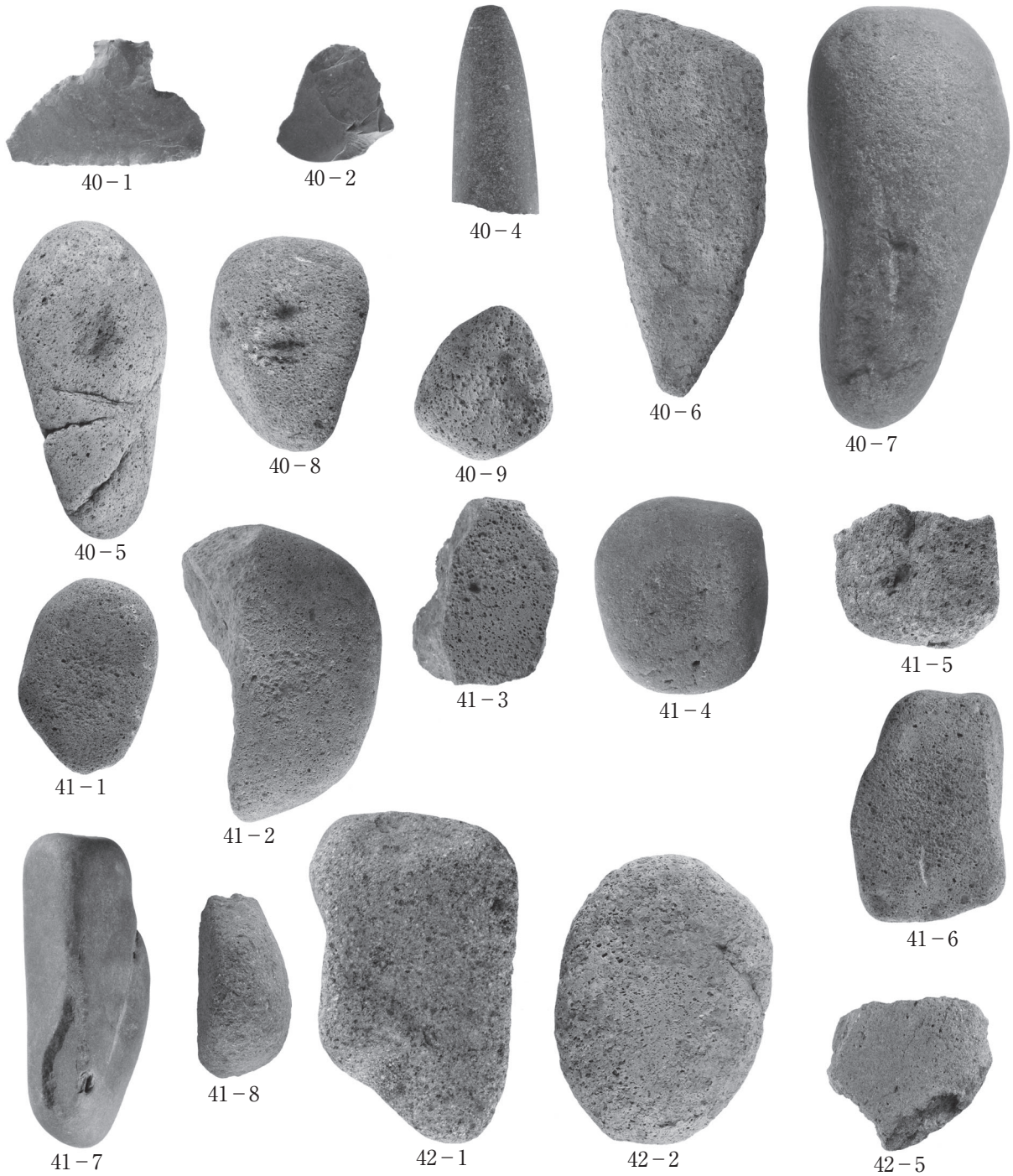
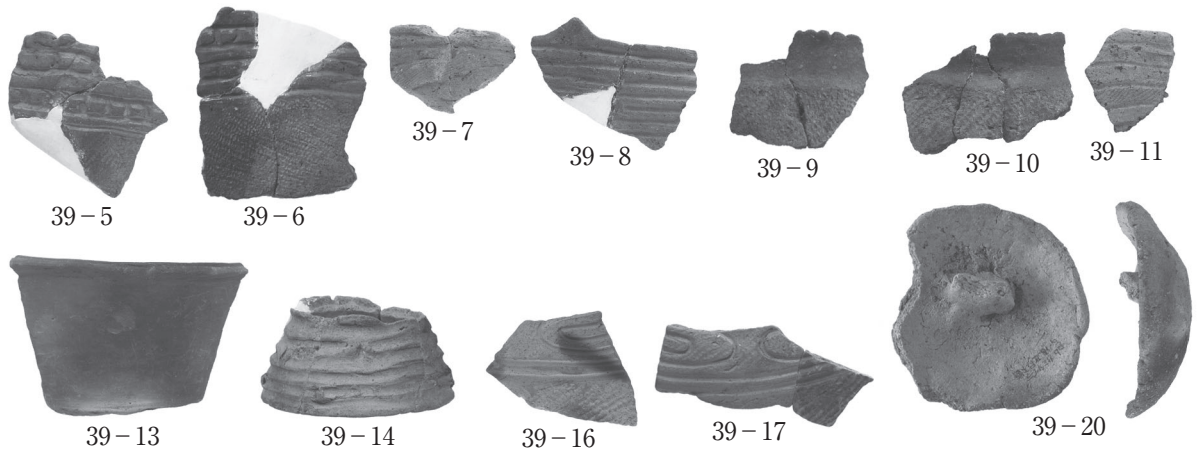


写真20 遺構外出土土器（3）、遺構外出土土製品・石器

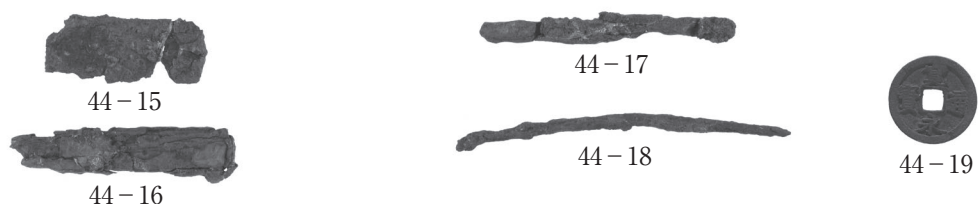
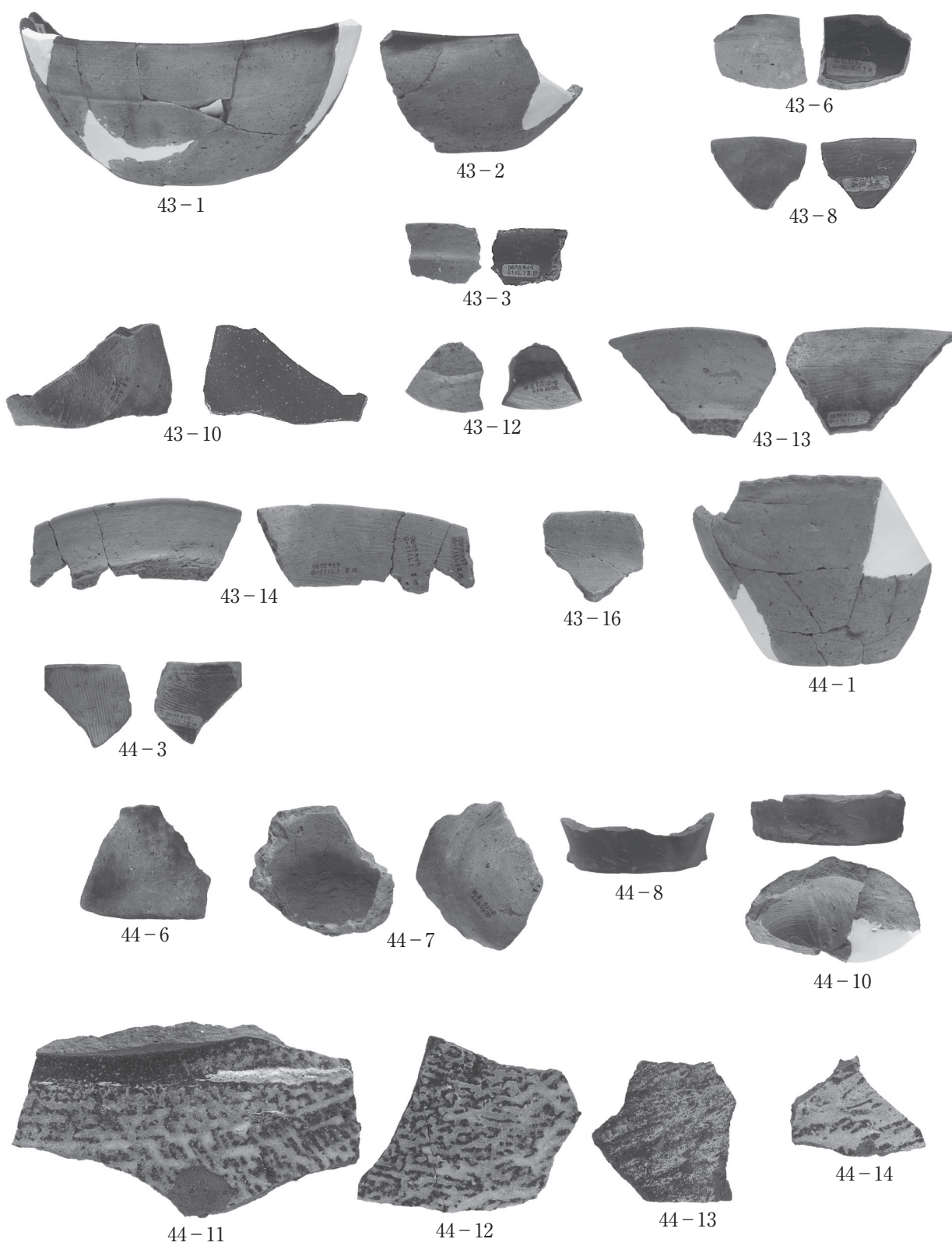


写真21 遺構外出土師器・須恵器・鉄関連遺物・古銭

ふりがな	やまやしきたいいせき・かみたいらいせき
書名	山屋敷平遺跡・上平遺跡
副書名	上名久井地区畑地帯総合整備事業に伴う遺跡発掘調査報告
シリーズ名	青森県埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第451集
編著者名	佐藤真弓・岡本 洋・大平哲世
編集機関	青森県埋蔵文化財調査センター
所在地	〒038-0042 青森県青森市大字新城字天田内152-15 TEL 017-788-5701
発行機関	青森県教育委員会
発行年月日	西暦 2008年3月25日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		世界測地系 (JGD2000)		調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡	北緯	東経			
やまやしきたいい 山屋敷平遺 せき	あおもりけんさんのへぐんなん ぶ ちょうおお 青森県三戸郡南部町大 あざたかせ あざやま やしきたい 字高瀬字山屋敷平23-1 外	02445	61060	40° 24′ 22″	141° 19′ 13″	20060822 ～ 20061102	900㎡	上名久井 地区畑地 帯総合整 備事業に 伴う事前 調査
かみたいらいせき 上平遺跡	あおもりけんさんのへぐんなん ぶ ちょうおお 青森県三戸郡南部町大 あざたいらあざかみたいら 字平字上平50-1外		61061	40° 24′ 39″	141° 20′ 14″		1,300㎡	

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
山屋敷平	集落跡	縄文時代早期	竪穴住居跡 1軒	土器・石器	奈良時代の集 落跡が並ぶ配 置。
	散布地	縄文時代中期・後期		土器・石器	
	集落跡	奈良時代	竪穴住居跡 5軒	土師器・小札・石製紡 錘車	
	集落跡	江戸時代初頭	竪穴建物跡 1軒	鉄製品	
	集落跡	時期不明	土坑 2基	鉄製品・鉄滓	
上平	散布地	縄文時代早期～中期		土器	縄文時代後期 前葉の遺物多 い。
	集落跡	縄文時代後期	粘土埋納遺構 1基	土器・石器・キノコ形 土製品	
	散布地	縄文時代晩期、弥 生・奈良時代		土器・土師器	
	集落跡	平安時代	竪穴住居跡 1軒	土師器・須恵器	
	散布地	江戸時代		寛永通宝	
集落跡	時期不明	粘土埋納遺構・焼土 遺構 各1基	鉄製品		

山屋敷平遺跡・上平遺跡は、青森県南部地方の名久井岳の山裾に広がる集落跡である。両遺跡とも馬淵川の支流如来堂川に合流する支谷近辺に立地する。

山屋敷平遺跡は、南区で奈良時代の竪穴住居跡5軒が検出された。竪穴住居跡の長軸方向はほぼ北西－南東方向を向き、一辺が4m前後の竪穴住居跡である。検出されたカマドは、地下式のものが多く、カマド袖の芯材に板状の粘土を用いる例が2例あった。出土遺物は土師器・石製紡錘車・小札・鉄滓・不明土製品である。北区では、縄文時代早期の赤御堂式期の竪穴住居跡が1軒、江戸時代初頭の竪穴建物跡が1軒検出された。

上平遺跡は、平安時代の竪穴住居跡1軒が検出された。床面に十和田a火山灰が硬化している範囲が確認された。このほか縄文時代後期初頭の土器内に白色粘土がつめられた粘土埋納遺構が検出された。また、調査区全体から縄文時代後期前葉の土器や、キノコ形土製品も出土した。

青森県埋蔵文化財調査報告書 第451集

山屋敷平遺跡・上平遺跡

－上名久井地区畑地帯総合整備事業に伴う遺跡発掘調査報告－

発行年月日 2008年3月25日
発行 青森県教育委員会
編集 青森県埋蔵文化財調査センター
〒038-0042 青森市大字新城字天田内152-15
TEL017-788-5701 FAX017-788-5702
印刷 長尾印刷株式会社
〒030-0931青森市平新田字森越17-1
TEL 017-726-7121 FAX017-726-9237
